

紫苑の書

un Roman de Langue Artificielle
Écrit par Seren Arbazard.
Bienvenue en Atolas.
"le Livre de Xion"



月と魔法とふしぎなことば。

おはなしの中の異世界はどこだって日本語が通じる。
でも、それって小説のご都合主義じゃない？
本物の異世界には独自の言語と文化があるに違いない。
アルファベットもなければ翻訳魔法もない。
——そんな世界がもし本当にあったとしたら？

初月 紫苑

Xion Hazki

どうして小説の中では当たり前
に起っていることが
私の人生には起らないのだろう。
どうしてこの世界には神も悪魔も魔法もないのだろう。
どうして誰も異世界から
私を迎えに来てくれないのだろう。
この世界はおかしい……。



jein yslir

レイン=ユティア



レインは相変わらず優しく親切で、
私に嫌な顔も見せたことがない。
恐らく彼女は誰に対してもこのようなだろう。
ひなたぼっこもしている子猫のような
のんびりした子で、無邪気で純粋だ。
一緒にいるとこっちまで
ほんやかした気分になる。
不思議な子だ。



『紫苑の書』

η . ~ . ~

z ψ

まぼろしがうつつになる世界で、みたび夢幻を描いてみた。

ひとつは朔夜の月。

もうひとつは一冊の魔導書。

そこにこんな少女も加えてみよう。

その少女は月並みな小説の出だしのよう、見知らぬ部屋で見知らぬ男に襲われていた。

ふわふわな髪の子を男から守るために、彼女は長い棒を剣代わりになって立っていた。

私は今宵、2 人の人間を我が世界に召喚した。

1 人はこの哀れな黒髪の乙女。

そしてもう 1 人はこの少女の瞳を通して、私と共に歴史の悪戯を見ることになるだろう。

Lees Sejlir

呼吸を整え、セーラー服の襟が上下動するのを必死に抑えながら、私は見知らぬ男と対峙していた。その小柄な男は手に持ったナイフを私に向け、犬のような唸り声を上げている。

部屋は薄暗く、ランプの小さな灯りが石の壁を仄かに照らす程度だ。

私の手には銀色の長い棒。一歩引いて間合いを取りながら、精一杯状況を把握しようとした。

いったい何がどうなってるの……？

自分に何が起こっているのかまるで分からない。ほんの 1 分前まで自分の部屋にいたにもかかわらず、いつのまにか見知らぬ場所に来ていた。しかも、目の前には揉み合う一組の男女。金髪の少女がナイフを持った男に襲われていたのだ。

私はその光景に驚かされたが、彼らのほうがむしろ突然光の中からやってきた私を見て驚いたようだ。

男は罵声を浴びせるとともに、私にナイフを向けた。

まったくもって何が何だか分からないものの、危険を察知した私は横の台に置いてあった紐で素早く自慢の黒髪を結うと、壁に立てかけてあった棒を咄嗟に掴んだのだ。

男はナイフを持って飛び込んでくるが、私は棒の長さを活かして男の頭を打った。女に抵抗されると思っていたのか、男は驚いた顔で取るもの取らずその場から逃げ去っていった。

残った私は一気に気が緩んでしまい、呆然とした表情で女の子と目を合わせた。それは映画に出てくるような可愛い白人の少女だった。年のころは 16, 7 といったところか。私と同じくらいだろう。

棒を置いて髪ゴムをほどくと、長いストレートが滝のように流れる。

「あの……大丈夫？」

恐る恐る問いかけるが、少女は腰を抜かしたまま後ずさりする。

"Are you OK? Do you speak English?"

しかし少女は怯えた子猫のように震えながら桃色の唇から吐息を洩らすだけだった。

「ねえ、ここは一体どこなの？ どうして私、こんなところに……」

7

遡ること数時間。

このとき私は学校にいた。

灰色の無機質な鐘の音から 2 分遅れて化学室に入った私は、自分が教室を間違えたことに気付くまでの 4 秒間、呆けたように立ち尽くしていた。

見慣れぬ教師の怪訝そうな顔を見て異変に気付くと、私は長い黒髪を揺らしながら言葉もなくお辞儀して部屋を出た。

さて、どういうことだろう。

首を傾げ、ひんやりした廊下を歩きだす。

世界が私の知らぬ間にすりかえられてしまっていないかぎり、次の時間は化学のはずだ。11 月の肌寒い校内を歩いてわざわざ教室からやってきたというのに、そこにいたのは別のクラスの生徒だった。

小脇に抱えるのは教科書にノート。それに、滅多に使わないカラーの資料集とたくさんのプリント。これらを抱えてまた教室に戻れというのか。まさに徒労というにふさわしい。腕が地面に引っ張られる思いだ。

私はメトロノームのようなつまらないリズムで足音を立てながら歩いた。

ふたつ隣の教室を通り過ぎたところでドアがガラッと開き、中年男性のやや高い声に呼び止められた。

「初月さん」

振り向くと、やや小柄で眼鏡をかけた細身の教師が立っていた。物理の池上先生だ。

「どうしたの？もう授業始まってるよ」

「え……？」

動揺した顔で唇に手を置く。すると彼は私の手元に目をやる。

「化学の国広先生から聞いてない？この時間、物理と交換になったって」

なるほど、そういうことか。

私は黙って首を振る。

「……まあ、いいや。じゃあ入って。今日はプリントだから、ノートと筆記用具があればいいよ」

「はい……」

中に入ると、視線が集まる。つい 1 分前にも味わったものだ。なんら変わらない。それはどのみちクラスメートの顔をほとんど覚えていないからだ。だからこそ、さっきも知らない教師の顔を見るまで異変に気付かなかったのだ。

男子の興味なさそうな顔と女子の苦笑いを受けながら、私は静かに席に着いた。すると、何事もなかったかのように授業が再開した。

一瞬、なぜ自分だけが授業変更を知らなかったのだろうと考えた。恐らく、さきほどの休み時間に先生が来て変更を伝えたのだろう。私はそのとき教室にいなかったが、ほかにも教室にいなかった生徒はいたはずだ。ならばなぜ。

答えは簡単。

私はずっとシャーペンで茶色い革のペン入れから取り出す。

——それは、私に教えてくれる人がいないから。

クラス委員の鈴木君も、きっと誰かが私に伝えると思って管理を怠ったのだろう。なかに、いつものことじゃないか。

授業後は教室へ戻って HR だ。担任の影山先生が来て、期末試験について話していた。

そういえばそろそろ期末のシーズンか。もう 12 月になるもんな。

HR が終わると部活の時間だが、帰宅部の私はやることがない。周りがどんどん教室から出て行く。私も早々に教室を出た。

つまらない 1 日がまた終わる。友達もいないし、受験も興味がない。私はなんのために学校に来ているのだろう。

こんな場所にはいたくない。もっと私にふさわしい世界があるはずだ。

どうして小説の中では当たり前で起こっていることが私の人生には起こらないのだろう。

どうしてこの世界には神も悪魔も魔法もないのだろう。

どうして誰も異世界から私を迎えに来てくれないのだろう。

この世界はおかしい……。

教室を出たところで男子の声に呼び止められた。ゆっくり振り向くと、そこには同じクラスとおぼしき長身の少年が立っていた。

整髪料で綺麗にセットした読者モデルみたいなヘアに、痩せマッチョな体格。すっとした顔で明るそうな少年。

松本君……だったかな。何度か見たことある。そういえば、クラスの女子がよく噂している。イケメンだから人気があるんだそうだ。

「初月……さん」

呼び捨てを一瞬ためらうところが進学校の生徒だなあと思いつつ頷く。

「あの、ちょっと話があるんだけど、いいかな」

「あ……はい」

ずっと黙っていたので思わず低い無愛想な声が出てしまい、慌てて喉を鳴らす。彼は人のいなくなった教室に目をやると、私を中へ誘導した。

はじめは世間話だった。といっても向こうが一方的に話すだけ。部活のこととか。バスケットだそうだ。

愛想良く返していると、彼はだんだん言いにくそうな雰囲気になってきた。

「その……初月ってさ」

いつのまにか呼び捨て……。

「わりと一人でいることが多いじゃん？」

「友達……いませんから」

「いや、その……。あの、それで……今誰か付き合ってるやつとか……」

私はゆっくり首を振る。

「いませんけど……」

「あ……そうなんだ。いや、俺も今いないんだよね……」

そういうことか……。私は心中で頭を抱えた。

どうしよう……困ったな……。

「もしよかったら……その」

「……でも、お話したのは今が初めてですよ」

やんわりと断る私に、彼は気まずそうな笑みを浮かべる。

「そうだけど、俺のほうはずっと初月を見てたんだよね……1年のときから」

ふうと鼻で静かにため息をつく私。

去年……ね。

「……私の何が良かったんでしょう」

「その……落ち着いたところとか。あと、見た目も可愛いし」

私は「そうですか……」と言って席に着いた。

「初月ってさ、何が趣味なの？」

椅子を引っ張って彼も席に着く。

「え……。そうですね、読書……でしょうか」

「いいじゃん。何読むの？」

「文学とかですかね。……特にファンタジーが」

「理系なのに凄いじゃん。でも意外だな。初月って勉強ばっかしてるのかと思ってた。ほら、いつもテストで一位だし」

「いえ……」

「顔も芸能人みたいだし、その上勉強もできるなんて凄いよな」

「そんなことないです……」

でも、褒められて少し嬉しい。

彼は見た目も良いし振舞いも明るいし、女子が噂するのも分かる気がする。

私は調子に乗って少しだけ——ほんの少しだけ自分を見せてもいいかなと思った。

「それに私、本当はファンタジー小説じゃなくてファンタジーそのものが好きなんです」

「え、どういう意味？」

「つまり異世界が本当にあって、行けたらいいなと思ってるんです」

「異世界って？指輪物語みたいな？」

「ええ。互いに言語も通じないような異世界です。それでファンタジーが好きなんです」

私にしてはけっこう勇気を出したつもりだった。ふだん人にはこんな話をしないから。

しかし彼は冗談だと思ったのか、「それウケる！」と言って笑った——声を立てて。

「え……」

予想外の反応に戸惑う私。彼は無邪気な顔で笑う。無邪気な笑いがいかに人を傷つけるかを知らない子供のように。

「てっきり初月って冗談言わない系かと思ってたよ」

「あ……」

私は急激に悲しくなると、俯いてしまった。

「やっぱり……笑うんですね」

「え、何が？」

失意を隠せず、私は青白い表情で立ち上がった。

「えっ……あ、いやいや、ちがうって！別に初月を笑ったんじゃないよ。今の異世界ってのが面白いから笑っただけだって」

「もう……いいです」

椅子を片付けようとする、彼は私の手を掴んできた。男の人に触られたことなどないので、私は赤くなって手が震えた。

「ちょ、待ってって」

「……ありません」

「え？」

彼は乾いた笑いのまま私を見上げる。

「冗談なんかじゃ……ありません」

「なに言ってるの……？」

彼の手を解くと、私はかばんを手取る。

「私のこと、テストで一位って言ってましたよね。あれだって同じなんです……」

「同じって……何が」

「私が勉強している理由です」

「勉強する理由って……そりゃ東大とか行きたいからだろ？」

私は小さくため息をついた。

——この人は、ちがう。

そして口を開く。

「もしも別の世界にいる魔法使いが、この世界に嫌気のさした私に気付いてくれたとき、新しい世界でも不自由なくやっていけるように、ですよ」

「え……？ごめん、言ってる意味がよく……」

私は悲しそうにくすつと笑った。

「こんなだから、友達がいないんです」

そう言い残すと、私はドアをくぐった。

「初月」

後ろから声が追いかけてくる。

「俺、まだ答え聞いてないんだけど」

しかし私の心は既に青く冷たいものになっていた。

少しでも期待した私が馬鹿だった。始めからこう答えていれば良かったのだ。

「……いくら人の顔を覚えるのが苦手な私でも、たまには覚えているものです」

「え……？」

「つい先日まで 2・B の窪園さんと付き合っていた男性が一年前から私のことを好きだったなどという嘘をつかなければ、違った結果が得られていたかもしれません」

静かになった後方を振り返ることなく、私はその場を去った。

下駄箱でこげ茶色のローファーに履き替えると、昇降口を出てまっすぐ歩く。左右に点在するスクールバスを素通りし、正門のアーチに向かって下を向いて歩く。いつもはバスに乗るが、今日は歩くことにした。

生徒のほとんどはバス通学なので、正門を出て左に折れた瞬間、人がほとんどいなくなる。

5分も歩かないうちに、私は地面にしゃがみこんだ。スカートが汚れないように手で押さえ、ひざに乗せたかばんに額を押し当てた。

「もう……」

喉がぎゅっとなる。

「も一つ」

なんだか頭の中が暑くてもわんもわんしてきた。

「なにやってんだろ……わたし」

誰もいない道なのに、それでも周りに聞こえない声で呟く。

「こんなんじゃ……だめだよ」

ごんごんと頭をかばんにぶつける。

「なんでだろう……。なんでいつも……。こうなっちゃうんだろう」

ふてくされた顔で立ち上がると、私はゆっくり首を振った。

「……こんなことしてる場合じゃない。『準備』しなくちゃ」

私にとって「準備」とは勉強を意味する暗号だ。それはある日突然魔法の国から使者がやってきたとき、すぐに活躍できるようにしておくことを意味する。

子供のころからずっと不思議だった。どうして私はこの世界になじめないのだろうと。友達もいないし、誰かと出会ってもすぐに人が去っていく。人間関係はもって1年だ。原因は心当たりがない。周りと同じように人並みに気を使っているつもりだ。なのにどうして私だけ疎外されるのだろう。

そしてあるとき気付いた。私はきっとこの世界の人間ではないのだと。私が間違っているのではなく、この世界が間違っているのだと。少なくとも、私はこの世界に在るべき人間ではないのだ。そして思った。いつかきっと誰かが私を正しい世界に導いてくれると。

それは魔法の世界かもしれない。それは剣の世界かもしれない。それは現代社会となんら変わらない世界かもしれない。でも、そこがきっと私の在るべき世界なのだ。

では、この間違っただけの世界で私がすべきことは何か。それは準備だ。私を異世界に召喚するからには、きっとその世界の人たちは私を救世主として必要としているに違いない。だから、彼らをはっきりさせることがないよう、私はありとあらゆる知識を身に付けようと思ったのだ。

駅に向かって歩いていく。人通りの少ない小道だ。たまにこの周辺に住んでいるウチの生徒が横を自転車で通り過ぎるだけで、車の往来も少ない。

さて、身に付けようと思ったのは知識だけではない。異世界でサバイバルしたり戦ったりするには武術も必要だ。それで剣道や合気道を習った。段位も持っている。163cm で 45kg という細身の体だが、柔軟でしなやかな筋肉のおかげで見た目よりはずっと強い。

知識と武術のほかに重視したのは健康だ。なるべく無添加のものを食べるし、甘いものは食べない。異世界に歯医者があるとは限らないので、虫歯になるわけにはいかないからだ。乳酸菌もしっかり摂っている。向こうが不衛生な場所かもしれないので、腸内環境を整えて免疫を強化しておかなければならないからだ。

橋を越えて大きな横断歩道を渡ると住宅街になり、人も増えてきた。駅に近付くと商店街があり、私は吸い寄せられるようにお店に入った。そこは文房具屋だった。私の行く店といえば、本屋と文房具屋それに無印良品と、大体相場が決まっているのだ。

店内は半分が本屋で半分が文房具屋という造りだった。店の左奥に進むと、一冊の本が目にとまった。

それは手に持つとしっかりとした重みを感じさせる本だった。本、といっても中は白紙で、至って簡素だ。装丁はわりとしっかりしていて、ハードカバーになっている。何度開いても壊れなさそうな、丈夫な本だ。

思わずそれを手に取る。誰にも買われなかったその本は、店主にさえ無視されていたかのように薄い埃を帯びていた。

中を開き、ぱらぱらとページを捲る。周りの客に気取られないように鼻を近づけ、紙の匂いを嗅ぐ。手垢や油の付いていない紙の独特な匂いが鼻をつく。

埃を手で払うと、レジへと歩いた。精算を済ませると、店員は紙袋に本を入れてくれた。店員の声に送り出されて店を出る。一度立ち止まって振り返り、店の看板を見る。ここは気に入ったので覚えておこう。

鞆を開けると、袋を中にしまう。ふう、と一息つく。外は少し寒い。それはそうだ、な

にせもう明日から 12 月なのだから。

私は道に迷った子供のようにきょろきょろと辺りを見回した。方向が逆転したので自分がどちらから来たのか一瞬分からなくなっていた。来た道を確認すると、右手に向かって歩いていった。

私の髪は肩より長く、ストレートに伸ばしている。歩くたびに制服のスカートや鞆が髪と一緒にゆったりとしたリズムで揺れる。

突然、胸ポケットのケータイが揺れだした。そうだ、学校にいたからマナーにしたままだった。電話かなと思いケータイを取り出すが、はたしてそれはメールだった。送信者は母親。内容は簡素なもので、「今日も遅くなるから夕飯お願いね」だ。

ため息をつく、即座に「分かった」と打つ。思い出したように「今朝、台所の床が濡れてたけど、どうしたの？」と付け加えて送信した。ケータイを胸ポケットにしまうと、ふたたび歩き出す。これから電車に乗るのでマナーのままでいい。するとまもなくメールが返ってきた。

「知らない。コップが倒れたのかな。紫苑の？拭いてくれた？」

いや、自分のコップではない。飲んだら必ず片付ける。それに、床もきちんと拭いておいた。そのままだとフローリングの床が大変なことになってしまう。

「うん、拭いたよ。で、お父さんも遅いの？夕飯、いる？」と返す。

駅に着く。いつもはバスで別の駅に行くが、徒歩だとこの駅が一番近い。何度か来たことがあるという程度で、普段は利用しない。

駅前にはファーストフードの店舗が立ち並ぶが、どれもあまり興味がない。料理は自分でするし、添加物はなるべく避けたいからだ。

エスカレーターで改札口へ上がる。後ろに男が立つが、スカートは十分に長いので何も気にならない。スカートの長さは規定というか買ったときのままで、少しも短くしていない。いまどき珍しいと大人には好意的に見られるが、同級生には揶揄される。

揶揄されても短くする気はない。世のおじさんたちは勘違いしているが、女子がスカートを短くしているのは可愛いからでも男に媚びているからでもなく、単に周りの女子から干されないためだ。だが、そんなことしてまで周りに合わせる必要はないというのが私の考えだ。

エスカレーターを降りると、券売機へ向かう。鞆から財布を出し、列に並ぶ。その間に

上を見上げて運賃を確認する。切符を買うと、改札に入って階段を下りていく。電光掲示板を見る。あと少しで電車が来るようだ。

反対側のホームに電車が来る。上りの電車を見送ると、母親からようやくメールが返ってきた。

「さあ、遅いんじゃない？」

一瞬、何のことか分からなかった。そういえば先ほど父の帰宅を問うたのだった。

私はふと、こうメールを返そうかと思ったが、やはり止めた。

「今日が何の日か覚えてる？」

喉まで、もとい、親指の第一関節まで出掛かった言葉だ。

11月30日。今日、私は17歳になった。

もとより友人などいないので、祝ってくれるとすれば親ぐらいのものだ。別に心の底から祝ってほしいわけではないが、忘れられれば悲しい。何か一言くらいあっても……早く帰ってきてくれてもいいのではないか。

私に兄弟はない。一人っ子だ。ふつう一人っ子はもっと愛されると聞いているのだが、どうもウチの場合、事情が違うらしい。

愛されていないとか虐待されていると感じたことはない。単に共働きの親が多忙なだけだ。多忙は人間から心を奪う。現に、心を亡くすと書いて忙しいではないか。しょうがない。そう、しょうがない。

ケータイを胸にしまった。タイミングよく電車が来る。椅子に座ってぼーっと窓の外を眺めているうちに、すぐ乗り換え駅に着いた。電車を乗り換え、また切符を買う。180円だ。一駅なのに随分初乗りが高い。さすがはJRだなと思う。

それにしても切符を買うのは面倒くさいな。pasmoにしようかな。持ってないの、私くらいだろうな……。でも、ここで買っちゃえば後は定期で帰れるからいいか。

何の気なしに定期を見る。額面を日数で割ったところ、ものすごく割安であることに気付いた。流石は学割だ。私立で授業料が高いので、せめてこれくらいは安くしてくれないかなと思う。

ウチはこの辺りでは有名な名門で、生徒の素行も悪くない。現在、偏差値は70を若干下回るが、特進クラスは確実に70に入っている。私はその特進クラスの間人だ。しかもその中でトップの座を常に占めている。事実上、2年で最も勉強ができる人間だ。

ウチは理系が優遇される学校だ。表立って口外はしていないが、内部では理系＞文系、国立＞私立の図式がしっかり行き渡っており、私は勝手に周りから国立理系狙いだという位置付けで評価されている。自分としては理系も文系も得意だし、将来何になりたいというものがないのでどちらでもいいのだが。

電車が来る。私は感傷に浸りながら窓の外を見つめた。せめて松本君も私のことが好きだというのなら、誕生日くらい調べておいてくれてよかったのではないか。それにしても親にすら忘れられているとは驚きだ。

帰宅部の私はいつもなら授業が終わるとバスで即座に帰るのだが、今日は違っていた。何となく、そう、何となく――歩きたくなかったのだ。ぶらっと。歩いたからといって何かに出会うわけではないと知っていたのに。

数駅でターミナル駅に着く。また乗り換えだ。いつもと違うルートで帰宅するせいか、乗り換えが無駄に多い。今度は定期を使う。家はここから 5 駅目だ。まだ 10 分以上かかる。席に座って窓の外を眺めていると、窓の外の景色が徐々に田舎になっていく。

私の住んでいるところは典型的なベットタウンで、ドーナツ化現象に貢献している。3 人きりの核家族で、2 階建ての一軒家だ。ベットタウンにありがちな分譲住宅で、周りの家は大体似たような建築様式をしている。

人口が多いにも関わらず大型店舗が少ない街で、案外不便だ。住宅ばかり増やしてないで大型店舗の誘致も行ってほしいところだ。だがそれも仕方がない。幹線道路が遠いため、商業が発展しなかったのが原因だ。しかしこのままでは過疎化が進んでしまうと小さな不安を抱いている。

15 年前、企業が行った分譲の抽選があり、それに見事当選したのがウチの両親だ。引越してきたときはまだ 2 歳ほどだから、こっちとしてはまるで記憶にないが。

当時は周りにスーパーがあり、他にはほとんど何もなく、一面のタンポポ畑が広がっていたそうだ。今ではそんな風景は見られなくなってしまった。

小さいころは随分大きな家だと思ったが、中学にもなるとすっかり慣れてしまった。それは体が成長したからかもしれない。兄弟がいないので手狭と感ずることもなく、快適な家だ。

電車が 2 番ホームに着くと、私はかばんを胸に抱えて席を立った。改札に定期を入れ、通り抜ける。去年できたばかりのエレベーターが見える。住宅街の小さな駅で、コインロ

ッカーがなかったりと、若干不便な点がある。

駅周りはケーキ屋や銀行の支店など、様々なものがある。特にこのケーキ屋は評判が良く、秋には安売りセールをする。母親は気に入っていて、毎年この時期になるとケーキを買ってくる。私は虫歯になりたくないので、甘いものは食べないが。

以前は駅前に本屋があったのだが、なくなってしまった。本好きの私にはちょっとしたダメージになっている。跡地に何が建つのかと思っていたら、スーパーが建つそう。新たに店舗が入るだけマシだ。

駅近くのニュータウンも空家が多い。店舗は一度つぶれてしまうと次のテナントが入らずに空いたままになりやすい。しかし、そうした空いたテナントがあるにもかかわらず、ロータリーにはメガネ屋が 2 軒もあるところが不思議だ。ここで競合してどうするのだろう。

東口を出ると直進し、十字路に出る。ここで信号を待つ。朝、時間がないときはこの信号でいらいらさせられる。そこを真っ直ぐ歩き、また十字路へ来る。右手に病院が見える。そこを左手に折れ、歩いていく。

そこから少し歩くと、家に着く。私はいわゆる鍵っ子だ。親が昔から共働きなので、小学生のころから「ただいま」という言葉に誰も返してくれない。

親はどちらも外資系の商社で働く正社員で、順風満帆にやっているようだ。それゆえ経済的な不安はまったくなかった。一人娘が県立ではなく私立の高校に行きたいといっても何ら金銭的な問題は浮上しなかった。

小中のころは公立に通った。私立に行く資質も財力もあったが、親が特にお受験に興味を示さなかったからだ。小学校は家の裏手で近かったから、体が小さい 6 年間の間は随分楽な思いをした。

しかし中学に進学すると学校は随分遠くなってしまった。中学の思い出はこれとっていない。真面目に勉強し、生活し、運動しただけだ。

これといった友人はいない。苛められているわけではないものの、特に深い付き合いの友人はない。会えば話すという浅い付き合いしかない。それは小学校のころからずっとそうだった。

ただ、その能力と人付き合いの悪さから陰口は随分叩かれたし、揶揄もされた。嫌味や嫌がらせを受けることも多々あった。

中学 3 年のとき、皆が高校受験に勤しんでいる間、私は塾にも行かずに悠々自適に生活し、それでも首席を維持していた。学校は県内一の公立校を薦めた。別に親に金を出させたいわけでもないし、そこに行ける生徒は限られているので承諾した。

中学校での人間関係を解消したかったというのもある。ウチの中学からこの高校に行ける生徒はまずいないので、それもいいだろうと考えた。

だが一応念のため、親の薦めで私立も受けることにした。学校は自分で探した。家から遠すぎず、近すぎない。地元の人間に会わずに済み、しかもそれほど遠くない。偏差値も十分届くレベルで、3 教科が得意な私は公立の滑り止めくらいに考えていた。

誰もが私が公立に受かると思っていた。実際、実力はあったと思う。ところが試験当日に体調を崩し、結果は不合格。

一方、私立の受験の際は、こういったトラブルはなく、すんなりテストは終わった。結果は合格で、家に帰ったら合格通知が書類とともに封筒に入って郵送されてきていた。そういう経緯で高校に入ってもう 2 年が経とうとしている。

後ろに誰もいないか確認してから玄関を開け、素早く中に入る。鍵っ子は家の中で襲われやすいと聞いていたからだ。いつも背後を確認してから鍵を開けることにしている。すばやく中に入ると、すぐに鍵をかける。

はあ、とため息をつきながら「ただいま」という。洗面所で手を洗い、うがいをする。異世界に行ったときに風邪を引いていたら困るので、風邪を引かないように注意している。イソジンを薄め、ぶくぶくと 15 秒してから吐き出す。次に天井を見て、ガラガラと盛大な音を立てて 15 秒。これを 2 回。おそよ 1 分強ですべてが終わる。これで風邪を引かないなら安上がりではないか。

居間に入り、台所へ行く。少し年を取った白い冷蔵庫を開けて牛乳を飲む。こうしておけば夕飯までの間に胃酸が出て空っぽな胃を痛めないで済む。牛乳をしまうとコップを流しに置き、水を入れておく。牛乳の飲みっぱなしは良くない。後が面倒だ。

自室は 2 階にある。階段を上ると左手に折れ、廊下の奥へ進む。広くも狭くもない 6 畳間。昔からここが私の部屋だ。窓は通りに面しているのでカーテンをかけている。

部屋の中は簡素だ。ドア向かいの壁に窓がひとつある。カーテンは薄い青だ。窓の前には机がある。小学校のときに買ってもらった学習机で、未だに使っている。引出し付きだ。椅子は回転式で、高さも調節できる。

机の上には本立てがあり、よく使う本を置いてある。その横には電気スタンド。また、電子辞書も置いてある。いつもは学校に持っていくのだが、今日は置き忘れていた。

机の左側にはパソコンが置いてある。ラック付きだ。ラックの天井にはプリンタとスキャナーが場所を取り合って乗っている。パソコンはデスクトップだ。

私はそんなにパソコンをやるほうではないが、ブリタニカのエンサイクロペディアを買ったとき、インストールしたら起動が異様に遅く、メモリ不足であることに気付いた。それでメモリを増設したことがある。ついでにワードやエクセルなども気持ち早くなって少し便利になった。

パソコンから見て対角線上には押入れがある。ここはクローゼットとして使っている。中には服の他に合気道着や剣道着が入っている。

ドアから見て左側は壁だ。壁を突き抜ければ階段があるはずだ。壁の前には鏡台が置かれている。化粧台だ。いい材質でできている。いいというのに中学に入ったときに母親が祝いしてくれた。着替えの際に役立っているが、化粧台としての役目を果たすのはいつのことだろうか。

ドアの対角線上にはベッドがある。ベッドの横には本棚がある。かなり膨大な量が入っているが、本はこれだけではない。使わない分は押入れにしまっている。合わせればかなりの数と額になるだろう。専門書も多いので、かなりの額だ。

電気を点け、部屋のドアを閉める。電灯は何年か前にシーリングライトにした。インテリアとして見栄えが良く、傘が邪魔にならない。

床はフローリングだ。以前はカーペットを敷いていたのだが、ハウスダストやアレルゲンという言葉が気になってからは外してしまった。中学ごろから花粉症を患っているのも、それを緩和する目的もある。フローリングなので冬は足が寒く、スリッパは欠かせない。

買ってきた本を鞆から出し、胸ポケットのケータイとともに窓際の机の上に置く。鞆を床に置くと、着替えようとした。が、買ってきた本が気になるので、先に机に座った。

サーッとカーテンを開ける。もう暗くなってしまった。通りの明かりが見える。時間は7時ごろだ。もうそろそろ夕飯の支度をしなければ。

袋から本を取り出し、袋をゴミ箱に捨てる。机の引き出しから古ぼけたコクヨのノートを取り出す。100ページの分厚いノートだが、糊付けなので装丁が脆く、長く使っているうちにバラバラになってしまった。どうにかセロテープで補強しているのだが、長くはもた

ないだろう。

内容は日記というか……毎日書いているわけではない文書だ。何かあったときに書く。気が向いたときに書くので「気記」と呼んでいる。

書き始めたのは小学生のとき、7歳だ。もう10年になる。もちろん、同じノートに書いているわけではない。いまでこそコクヨの100枚ノートだが、それこそ昔はかわいらしいキャラ物の薄いノートなどを使用していたこともある。

引き出しにはほとんどノートばかりが入っている。10年分の気記だ。そしてそれを書くのに使う専用の筆記用具が入っている。引き出しから筆記用具と最近の気記を取り出した。

実は最近のものはもうほとんどページがなくなっている。まだ書こうと思えば書けるのだが、今日が誕生日なので心機一転して新しいノートを使うことにした。そのために買ったのがこの本だ。糊付けのノートは脆いので、今回はしっかりした装丁のものを買った。

最近の気記をぱらぱらと捲る。その日あったことが主に書かれているが、それだけではない。そのころ考えていた思想などが所狭しと書き込まれている。中でも繰り返し書かれている目を引く言葉が、「異世界」だ。この言葉は7歳に気記を始めた時点から使われている。もっとも、そのころは「べつのせかい」と呼んでいたが。

7歳のころ、つまり小学校に入ってから、私は自分が周りと違う異質な存在だということに気付いていた。頭の良さはテストの点で分かったし、見た目が良いことも周りの大人の反応で知っていた。

目はくりっとした二重で、鼻はすっと通っている。口は絵の教科書にあるように上唇が下唇の半分ほどの厚さで、口角は瞳孔から下ろした垂直線上にある。歯並びは良く、虫歯もない。横から見ても上唇が突出していることはなく、すっと鼻筋からの素直な流れに沿ってゆるやかなカーブを描いている。肌は白く、黒子は少ない。唇は肌同様に薄く、綺麗な桜色をしている。

輪郭は好感を持たれやすい卵型に近いが、それほど完全な卵型ではない。かといってえらがはっているわけでもなく、すっきりしている。頬は痩せこけてもいないし、太ってもいない。白くて薄っすら桃色で、健康的だ。耳は白く、赤みを帯びやすい。寒かったり恥ずかしかったりすると、すぐ赤くなる。

趣味は芸術と学問。楽器はピアノだけ。聞くほうはもっぱらワールドミュージックかクラシック。色んな国の音楽を聴くのが好きだ。クラシックも手広く聴く。

チャイコフスキーなど、ちょっと不思議系な曲が好きだ。不思議系というのは抽象的だが、例えば「金平糖の精の踊り」などのことを言っている。一方、ワーグナーやベートーベンのような重厚なものはあまり好みではない。

一方、ワールドミュージックが好きなのは異言語と異文化が好きだからだ。聞くのは何語でも良い。できるだけ色んな国の言語と音楽を聴いている。アイルランドの曲やフィンランドの曲も持っている。ヨーロッパだけではない。韓国、中国なども持っている。

絵も好きだ。描くのはもっぱら鉛筆画。画材屋で見つけた LYRA の鉛筆がお気に入りだ。見るほうは新古典主義に傾倒している。

ほかに、写実主義のような描き方も好きだ。絵としてはミレーのほうが好きだが、思想としてはクールベのほうが肌に合う。ミレーのほうが絵的に好きなのは、黒を基調とするクールベより明るいからだ。

しかし、実際飾っておくならミレーでもクールベでもなく、コロアの「ヴィル・ダヴレー」だ。あれがあったらどんなに部屋が落ち着くだろうか。夕焼けにせよ朝焼けにせよ、空が赤く燃える時間は非常に短い。その貴重な瞬間がもし部屋の中であって、いつでも好きなきときに愛でられるとしたら？それはなかなか贅沢な話だろう。

新古典主義ではアングルが好きだ。「アンジェリカを救うルッジェーロ」が特に良い。ルーブル所蔵なので、一度行ってみたいものだ。オルセーに比べてルーブルは格調高い作品が置かれているので、鑑賞にも背景知識が必要だ。それゆえ奥が深く、ただの上手な絵に留まらない。

私が新古典主義に傾倒しているのは、恐らくそれが神を描いたものだからだろう。宗教という意味でなく、ファンタジーという意味において、私の趣向と通じるところがあるのだ。そう、「異世界」という私の渴望を示すその趣向と……。

手垢で汚れたノートにそっと目をやる。このノートに散見する「異世界」という言葉が私のすべての行動原理だ。

異世界といえばファンタジーの中ではお馴染みの概念だ。子供のころから様々な異世界物を読んできた。そして 7 歳のころには、いつか自分も異世界に行きたいと思うようになっていた。ここまでは子供にありがちなことだろう。

だが、私の場合はそれで終わらなかった。高学年になっても本当に、いつか自分は異世界から召喚され、異世界を救うために活躍するのだと思っていた。それは中学に入っても高校生になった今でも一向に変わらなかった。

異世界物を見るたびに異世界への憧憬を強めていったが、成長するにつれ、その商業性にあっさりと気付いてしまった。異世界物は小説にせよ漫画にせよ、しょせんは売り物なのだ。売り物であるからには売れないと困るので、エンターテインメント性が求められる。その結果、ご都合主義が生じてリアルな部分が削られる。

異世界物で一番おかしいのは言語だ。異世界で日本語や英語が通じるのはおかしい。作者の中には同じくおかしいと思う人もいるようで、現地の言語を作中に登場させる作品もある。だが、数ページもすると魔法だか魔法のアイテムだかで意思疎通ができるようになる。しかし私はこれを魔法ではなく、小説という商品を成立させるためのご都合主義だと見なした。

私はいつしか本当の異世界はこういうもののはずだという想像をするようになった。小説に書いてあるのは嘘っぱち。でも異世界は本当にあって、いつか自分を迎えにくる。じゃあもし私が無能だったらどうだろうか。きっと迎えにきてくれない。

とにかく頭が良くなくちゃダメ。向こうの科学力はこっちより下かもしれない。そしたら科学の知識がきっと役に立つ。もし行った先が中世ヨーロッパ程度の科学力だったら、科学者として生きていくことができる。だから理系の勉強をした。

最も役に立つのは現代医学の知識だろう。民衆を治療して名を上げれば、容易にパトロンを得ることができるはずだ。もっとも、あまりに出すぎた科学力だと魔女扱いされる恐れもあるので、そこは空気を読まねばなるまいが。

また、向こうの社会に慣れるため、公民も勉強した。向こうの歴史をいち早く把握できるように歴史も勉強した。向こうで旅をするかもしれないから地理の知識が役に立つだろうと考え、地理も勉強した。

さらに、向こうの言葉に慣れるために語学力を養った。それだけでは足りないと思った私は言語学にまで手を出した。これを語学に活かすことによってさらに語学力を高め、いつか来る当地での言語習得に備えた。

とにかく人間はコミュニケーションが大事。何より向こうの言語が話せなければ、何もできない。そう思い、語学に相当な力を入れた。

そんな毎日を送っていたので、正直言って塾に行く暇などなかったくらいだ。受験さえ

面倒なだけだった。

そこまで徹底して異世界に行きたい理由は何か。それは自分でも分からない。ただ、憧憬というのは掴みにくい感情で、把握できない分、無尽蔵の活力を人に与えるものだ。私は異世界への憧憬とひたむきな努力で、今の自分を作り上げた。

異世界に憧れるというのは子供にはよくあることだ。だが、すぐにそんな気持ちは忘れてしまうし、そんなことありえないと片付けてしまう。いるはずもないサンタクロースを信じ続けるほど、人は強くはない。

ところが私は強かった。偏屈なほど強かった。ドンキホーテといっても過言ではない。もっとも、女の私は自分から思い姫を求めて遍歴をせず、ひたすら待ち続けたわけだが。

自分が精進すれば、必要とされる人間になって、スカウトという形で異世界へ召喚されると信じていた。まんじりと待つのではない。積極的に自分を磨きながら待つのだ。そうすればドゥルシネア姫に当たる人がきっと私を迎えに来てくれると思っていた。

ここまで頑固に信じ続けたのは、恐らく親が忙しいことと、友達がいらないことに起因するだろう。一人っ子だし、誰も遊ぶ相手がいなかった。本と空想だけが友達。

別に嫌われることをしているわけでも自分から遠ざけているわけでもないのだが、皆に倦厭される。嫌われているというよりは、近付きがたい人間。言い換えれば別世界の人間なのだ。そう、奇しくも私は自分を異世界の人間にしていた。でもそういった後ろ向きな原因を受け入れようとはしなかった。

ノートには異世界への憧憬が書かれている。多岐に渡って。行った場合どうするかをフローチャートにして書いてある。ちょっとした精神病なのではないかと思うときがある。

さて、今日はそんな精進の日で最も悲しい日だ。

誕生日。そう、この日になるとまた今年もダメだったという思いを感じるからだ。誕生日はこの世界に留まった絶望の日。病な私の心が死に至らんとする因縁の日だ。

私は正直焦っていた。心のどこかでは異世界から召喚されるなんてことはないんじゃないかとか、あったとしても別のもっと有能な人間が召喚されているかもとか、戦いに不向きな女は用無しなのか、などと考えてしまう。

もう 17 だ。流石にハードなアドベンチャーは 20 までにしてほしい。異世界物の主人公の年齢がそのくらいの年であるということもあるが、単に体がついていかないというのも

ある。

「今年も……来なかったな」

買ってきた本を広げる。日付を書こうと思ったが、この言葉が代用になると知っていたから止めた。

「今年も来なかった。いつになったら異世界に召喚されるのか。」

手が少し震える。新しい本だから？それとも焦っているから？

「異世界に……行きたい。ここにはもう……いたくないの」

気付いたら泣いていた。

えっ？……なんでだろう。なんで？なんで泣いてるの？異世界に行けないから？誰も来てくれないから？誰も私の誕生日を祝ってくれないから？

……誰も私を必要としてくれないから？

涙で滲んで視界がぼやける。

背中を椅子の背もたれに預けると、ギッと音がして、私の顔は自然と涙を零さないよう天を向く。

「……恥の少ない生涯を送ってきました」

暖かい白い息を吐きながら、掠れた声で呟く。

「……恥をかくことすら恐れてきたからです」

ぎゅっと目を閉じると、涙が頬を伝う。

「だから私は表向きには合格しているのです……表向きには」

ふうと息をついて、首を下げる。一瞬、目の前が赤くぼんやりと光った気がした。手の甲で涙を拭う。はぁ、と息をついてティッシュを取ろうとするが、机の上にはない。ベッドに置きっぱなしかなと思って後ろを振り返ると……私の目の前に見知らぬ男がいた。

「……え？」

——と言おうとしたが、声が乾いて出ない。

繰り返す。振り向いたら、見知らぬ男が立っていた。

男は日本人ではないようだ。かといってどこの人ともつかない。ただ、白人のように見える。肌は白く、目は青く、髪は黄色い。金髪よりももっと黄色に近い感じだ。髪は長く、顔は中性的だ。背丈は 170cm 以上あるだろう。中肉中背という感じだ。

男は長いローブを着ていた。黒いローブだ。裾も袖も長く、かろうじて手が覗いている

程度だ。

男はじっとこちらを見つめている。変質者……には違いない。でも、性的な目的を持った変質者という感じではない。殺意も感じられない。穏やかであると同時に冷たい視線をこちらに注いでいる。

「……誰？」と聞いて答えるはずもないが、つい聞いてしまう。もちろん、男は答えない。すると男は右手をかざし、座っている私の額に近付ける。「ひっ」と小さな声をあげ、すくんでしまう。あまりのことに戦意が湧いてこない。

男は小さな声で何か囁いたが、聞き取ることはできなかった。次の瞬間、男の体から赤い光がぼんやりと炎のように発せられた。

眼前に男の右手が掲げられる。つい、見入ってしまう。男が右手を横にずらすと、私たちは目が合った。恐怖を感じた私は咄嗟に机の上の本を手にとって投げつけようとした。だが、その瞬間、急に意識が朦朧とした。

真っ暗な世界が近付いてきた。抗ってみても襲ってくる睡魔に似ている。眠くて仕方がないときのような気持ちになり、私の意識は遠のいていった。

暗い……暖かいような寒いような場所。

場所……そうだ、何か感じている以上、私はどこかの場所に存在しているんだ。ここは……暗い。でも……同時に「どこか」なのだ。

ハッと目を覚ました。眠くてぼーっとしていた意識が急に消し飛んで覚醒したような感じだ。その瞬間、私の周りを光が包んだ。大きくて明るい光。私は意識をそちらの光へ向けた。体が動いている気は少しもしない。でも、魂は動いているような気がする。

朝、どうしても起きられないとき、起きて自分はきちんと歯を磨きに歩いている筈を思い浮かべることがある。すぐにそれが現実でなく、自分はまだ寝ていることに気付く。だがその繰り返しを何度もして、あたかも自分が何度も起き上がったかのような錯覚を感じることがある。今はちょうどそんな感じだ。

ぼんやりとした意識の中で光の果てにたどり着いたとき、体がとても強い力で引っ張られるのを感じた。

眩しい光の中を出ると、まるで自分が卵から孵った雛のようだと感じた。しかし、その卵は逆だった。中が光で外が闇。まるでふつうの卵と逆だ。そう、光を出たら、またそこは真っ暗だった。

だが、今度は完全な闇ではない。そこは薄暗い部屋だった。どこかの部屋だ。目が慣れるより先に匂いの変化で場所が変わったと気付いた。徐々に目が慣れてくる。

そこには物が乱雑に置かれていた。どちらかというと倉庫に近いのだろうか。

咄嗟に自分の手と体を見た。よかった、五体満足。紛れもなく自分自身だ。胡蝶の夢のように蝶になってしまったらどうしようかと思った。あるいはカフカの変身だったらと思うと、さらに身震いがした。

だがそんなことを悠長に考えている余裕はなかった。ふと自分に注がれた薄暗い視線に気付き、目を上げる。

そこには男女がいた。「多分男女」というのが正確だろう。というのも、一人は少女なのだが、もう一人は覆面を被っているからだ。だだ、体格からして男だろう。

問題は、その男がナイフを持っているということだ。少女のほうはというと、まさに追い込まれた小動物のような立ち位置をしている。

状況は一切分からない。分からないが、とりあえずこの男が危険だということは分かる。
男が善か悪かは分からない。だが、危険なのは間違いなさそうだ。

男は——少女もそうだが——驚いた顔でこちらを見ている。覆面の上からでもよく分かる。そりゃそうだ、突然光の中から人が現われたんだから。けど、驚いてるのは私も同じ。
「ちょっと、何やってるんですか！」

勇気を振り絞って声を立てる。すると男はさらに驚く。不思議なことに少女もビクッと
する。2人は一瞬互いの顔を見る。

あれ？なぜそこで見つめあうのだ、君たちは。

なんだか私と彼らの間でラインが引かれている気がする。光の中から出てくるのって、
ナイフを持った男よりアウトなのだろうか。

男は何か訳の分からない罵声を浴びせてきた。よく分からないが、歓迎はされていない。
私の心臓がさらに高鳴る。

一見頭で冷静に分析しているようだが、実はかなり余裕がない。合気道などで鍛えている
といってもこれは組手ではない。まして相手はナイフを持っている。しかし、この場で
怯むと相手になめられてしまう。

「帰りなさい！」

こちらの言葉に男は一瞬たじろいだが、ナイフを向けてきた。

素人……ね。持ち方がおかしい。構えもなっていない。ナイフの心得はないようね。

恐らく戦闘も素人だろう。素人がナイフを持つと、必ずナイフに頼ろうとする。ナイフ
が強力だという先入観と、これを取られたら逆に殺されるかもしれないという恐怖感で、
手放せなくなる。まず間違いなくこの男はナイフを投げたりはしない。

私は構えを取る。案の定、構えを取った私に対して男は警戒を見せた。

実は構えを見せるのは玄人相手には手の内が読まれるので良くない。もちろん、お互い
「やるぞ」という雰囲気的时候は別だ。初手からオンガードでないと容易に喰らってしま
う。だが相手は素人。この構えからこちらの狙いは読めまい。それに、武術ができること
をアピールして、相手が引いてくれればそれが一番なのだ。

だが相手はそれほど思慮深くはなかった。男はナイフを手に、猪突猛進してきた。私は
とっさに回転した。自分が回っていると切り傷はできても刺さることはないからだ。その

まま入り身転換して小手返しに持っていく。左手で相手の右手の付け根を掴み、そこを支点にくるっと相手を一回転して投げ飛ばす技だ。相手が不用意に突進してきたときのほうが成功しやすい。

私のことをただのかよわい少女だと侮った男は、乾いた音を立てて床に叩きつけられ、うめき声を上げた。男はそのまま転がると、物に当たって大きな音を立てた。どうやらこの乱雑さからして、ここは倉庫か何かのようだ。

私はぶんと首を振った。髪が舞って邪魔だ。稽古のときはいつも結っている。少しでも大きな動きをするとこの長い髪が邪魔になる。まして髪を取られると厄介だ。男が倒れている間にとっさに辺りを見回した。

しめた、ゴムがある。

横の棚にガラクタがたくさんあり、そこには髪ゴムがあった。玉飾りが2個ついている。急いでひつつかむと髪を結った。

男が立ち上がり、ふたたびナイフを構える。何か罵倒してくるが、聞き取れない。覆面のせいかどうか知らないが。

こちらが強いと見て、男は警戒の色を示した。私はチラチラと辺りを見回す。他に何か使えそうなものはないか。

あった……棒だ。すぐ横に、銀の棒が立ててある。先っぽに装飾がついているが、棒には違いない。棒を手にとると、即座に剣道の構えに変えた。これで形勢は逆転だ。

男は間合いを取らない。やはり素人だ。剣の間合いの恐ろしさを知らないと見える。一歩も先ほどから動いていないにもかかわらず、今ではすっかり間合いの中だ。それに気付かない以上、間違いなく素人だ。

私は地面を蹴ると、勢いよく「ッテー！」と叫んだ。小手のことである。道場によって違いがあるが、私のところでは「こてー」と叫ぶことはなく、「ッテー」と叫ぶことが多い。

放った小手は見事男の右手を打った。素人は絶対とっていいほど有段者の小手を避けられない。面ならともかく、小手は素人が一番意識しない場所で、まず間違いなく死角となる。

男は小手を打たれてナイフを取り落とした。その刹那、小手の発声と被るように、「メンー！」と叫んだ。私は面を打つときには「めーん」ではなく、「メンー」のように叫ぶ。

小手から面というのはオーソドックスな攻撃だが、素人はまず避けられない。小手に意識がいった瞬間に額を打たれている。

男は刺し面を打たれると頭を押さえた。そして何か叫ぶと、走って逃げ出した。深追いはしない。退治できただけで良しとする。

一方、少女は固まったままこちらを見ている。私はできるだけ柔和な笑みを浮かべ、「大丈夫？」と聞いた。

「え？何言ってるの？大丈夫？」

日本人ではないようだった。少女は肩までの長さの亜麻色の髪に茶色の瞳をしていた。背は私より少し小さいくらいか。見たところ白人だが、そこまで彫りの深い顔ではなく、幼い感じがする。ハーフなのか、黄色人の血が混ざっているらしい。

しかし少女は首を傾げるばかり。

" Je m'appelle Chion. Comment vous appelez-vous?"

" Sind Sie nicht schwer verletzt? "

「请问，这儿是什么地方？」

ダメだ、言葉は返してくれたものの、まったく通じている気配がない。彼女の言葉にはまるで声調がない。中国語で返してくれたようではない。いま初めて彼女の言葉が聞き取れたが、少なくとも私の知っている言語ではない。

どうしよう……。ここは一体どこなの？

辺りを見回す。どうも家屋の中の倉庫という感じだ。物が乱雑していて、埃の匂いがする。

㊦lecAŋ

少女は自分の胸に手を当てて、何か言った。

「えっ？」

㊦lecAŋ lecAŋ

それは lein と聞こえた。カタカナにすればレイン。様子を見るに、彼女の名前だろうか。l の音だ。英語だったら lain とでも書くのか。しかしそんなの名前になるわけがない。rain の聞き間違いか？いや、彼女に英語は通じなかった。

レイン……っていうのが名前ってこと？

彼女は胸に手を当てている。これが自分を表わすボディランゲージなのだろう。日本人なら鼻の前に人差し指を持っていく。

彼女が何人かは分からないが、人間のコミュニケーションにおいて非言語がかなりの情報を相手に伝えるというのは確かだ。郷に入っては郷に従え。

レインと同じように胸に手を当て、「シオン」と言った。するとレインは一瞬驚いた顔をして、㊦ʌcɔŋ ʌl ʔa eŋ ɪ-ʌcɔŋ と言った。とにかく 2 回シオンと反復されたことは聞き取れた。

私は持ち前の耳でその発音を正確に聞き取り、即座に IPA の音声表記に置き換えた。日本語と違ってシの音は鋭く、シュに近いようだ。また、ンの音は舌を歯茎に付けない日本語の [N] ではなく、舌を歯茎に付ける英語などの [n] のようだ。

一度で正確に聞き取ると、今度はその発音で「シオン」と言ってみた。

㊦hh...ɾ ʌl, ʔa -ɸɔŋ cʌscʌ ʌeŋeɖ la-ʌcɔŋ

えっ、えっ？早すぎて何が何だか分からない。

「ちょ、ちょっと待って。私は貴方の言葉、喋れないの。分かるでしょ？」

㊦eɖ...eʌ ʔa ɸeʌʌ ʌe eɪ le ŋe -ɸɔŋ-, la-ɖ

彼女は何か問いかけて来たようだ。態度で分かる。そして文末のイントネーションが上がっている。どうやらこの言語は疑問のときに文末を上げるようだ。とはいえ、質問の内容は分からない。先ほどからやたら紫苑という名前を呼ばれているのは分かるのだが。

⑥>>....\cel, ʔʔa ʔeleʔ -ʔʔ- ʔeʔeʔ >cl ʔʔa ʔ-ʔ <c- -lʔ⑥

「えーと……そんなにまくし立てられてもなあ……。とにかく無事で良かったじゃないの」

私たちは互いに首を傾げる。この非言語が共通していて良かった。意味合いが細かいところで違っているかもしれないが。

⑥lccʌ, ʌʔʌ ʔeʌʔ ʔʔa >cl ʔʔa -lʔ-ʔ ʌʔʌ ʔccʌ-⑥

少女は微笑む。どうも好意を抱いてくれていることは確からしい。こちらにもこりと微笑む。人間の笑顔というものは凄い。言語や文化を越えるものがある。

⑥>cleev, ʌʔʌ l-l eʔeʔ <ccʌ- ʔʔa⑥

「え、何？」

レインはふふっと笑って私の手を取り、倉庫の外へ連れ出す。ここは素直に従おう。

倉庫を出たところに階段があった。上り階段だ。どうもここは地下倉庫だったらしい。階段を上ると1階に出た。窓の向こう庭が見えるので1階だと分かる。

そのまま居間らしきところに連れていかれた。居間にはテーブルがある。レインは椅子を指すと、⑥>ca <c-ʌʔ ʌ-ʌ⑥ と言う。座れということかなと思い、席についた。するとレインは台所らしきところへ引っ込んでいった。

ため息をつき、居間を見回す。どうやらビルなどではなく、民家らしい。家の材質は木のようだ。広くて綺麗な家だ。西洋化された日本家屋と大差ない。レインの顔を見る限り、ここは西洋のどこかだろうか。西洋には知らない言語がたくさんある。ふつうに考えればそのどこかだろう。

しかし、解せないことがある。私はいったい何でこんなところに？

——そうだ、あの金髪の男！あの謎の男の目を見た瞬間、意識が抜けて……。それで、気付いたらここにいた。

これっていわゆる、拉致……ですか？

でも待って。拉致ならなんでこの民家に？レインは私を見て驚いていたから、多分事情を知らないだろう。彼女はこの家の住人のようだ。となると、彼女も拉致されているとは

考えにくい。じゃあ何で……。

というか、あの男、誰？私をどこに連れてきたわけ？

窓の外は暗い。そうだ、時差はあるのだろうか。

時計を探すと部屋の隅に大きな柱時計があった。時間は7時半すぎ。

あれ……？最後に私の部屋で時計を見たときも7時半だった気が……。

もしかして時差があるのだろうか。胸ポケットに手を入れてケータイを探すが見つからない。

そうだ、机の上に置きっぱだったんだ……。

持っているものといえば、謎の男に投げつけようとしたノートだけ。今日買った日記用のノートだ。ほかに持ってきたものといえば、着ている制服くらいのものだ。

参ったなあ……これじゃ何もできない。時差を計ることも。

でも待って。そもそも私、どれだけ寝てたんだろう。寝てた時間によって時差が分かるんじゃないの？ああ、ウチの時計！あれがあればこの時計との時差でおおよその位置が掴めるのに！

恨めしそうに柱時計を見る。しかし、ふと妙なことに気付き、そろそろと立ち上がる。

「あれえ……？」

時計はふつうの柱時計だ。左回転というわけでもない。だがヘンなのだ。何がヘンかというと、文字盤だ。1と書いてあるべき場所には𐤀という文字が書いてある。ほかの11個の数字もすべてそう。すべてアラビア数字ではない。ローマ数字でもなんでもない。見たこともない字だ。

私はディヴィッド＝クリスタルの『言語学百科事典』を持っているし、三省堂の『言語学大辞典』も持っている。別巻の世界文字事典には古今東西の文字が約300種並んでいる。そのすべてに目を通したが、このような文字は記憶にない。

さらに部屋を見回してみると、壁に何かの表が貼ってあるのに気づいた。上段に"𐤁𐤀𐤁𐤀"と書いてあり、その下では𐤀という文字が若干緑色に光っている。

さらにその下には同じく1列7桁の囲みがあり、それが計5段ある。都合35の囲みがある。囲みの中には見たこともない字が書かれている。

これは……なんの表だろう。ちなみにここでも𐤀という字が光を放っている。紙が光っているように見えるけど、どうして紙が光るんだろう？

度にある韓国だと暖かさが重視される。風通しよりも暖を取る住宅設計だ。オンドルが歴史的に発達してきたことからそのことが伺える。

日本と韓国のようにほぼ同じ緯度でも、家屋に求めるものは湿度などの条件によって異なる。ここが暖かさ重視の住宅だからといっても、ここが必ず高緯度地方だということにはならない。

レインは胸に手を当てて “I love” と言う。

ん？何て言ったの？「いただきます」みたいな感じ？私もしたほうがいいの？

「あの……」

レインは目を開く。くりっとした二重だが、やや垂れ目というか、穏やかそうな目をしている。……男の子にモテそうだな。

「私もその……食前のお祈りみたいのしたほうがいいの？」と言いながら手を胸に当てる。だがレインは “.....no -I- Vcl elx (a-Λ, la- ucΛ,, (Ya MeΛ (oδ” と首を傾げる。

「紫苑って名前は理解してくれてるみたいだけど、自分の名前しか聞き取れないわ。ねえ、そういえばさっき紫苑って名乗ったとき驚かなかった？紫苑っていう知り合いがいるの？」

“>>δ ucΛδ”

「そう、紫苑よ。私の名前を聞いてやけに驚いてたよね」

胸に手を当てて「紫苑」と何度か繰り返す。ところがレインは苦笑いを浮かべて首を傾げ、 “(Ya (oμδ ΛoΛ Jeμ >o- eJc (a-Λ,, (a eC ucΛ, -c JeCeδ” と言うだけだ。

だめだ、伝わってない。とりあえず、ここでは分からないときは苦笑いする習慣があるということは分かったけど。

「んん、じゃあ良いわ。とりあえず食べましょう。っていつても、あなたが先に食べないと気まずいんだけど……」

レインは苦笑して紅茶を一啜りし、パンに手を伸ばす。

いま分かっているのはこの子の名前くらいか。「あー」とか「んー」みたいなフィラーを使うのは分かったし、非言語もいくつか獲得したけど、肝心の言語がねえ……。

思わずうーんと唸った。そしてふっと思い出して、持って来た本を手にとった。本にはお気に入りのボールペンが挟まっている。こないだ替えたばかりだからまだインクはたっぷりある。良かった、これも挟まってたんだ。よし……。

レインから見えないように、真面目な顔つきでぐしゃぐしゃ——スチールウールのような模様——を紙一面に書いた。そしてそれを自信有り気にレインに見せ付けた。レインはじっと見入った。

私はそっと耳をそばだてた。好機が来るのを待って。やがて怪訝そうな顔をして、レインはそっと言った。

ᵒᵒᵒᵒ ᵒᵒ ᵒᵒᵒᵒ

トゥウェット？トゥウェットって言ったの？

とっさに IPA で音声表記に直し、記憶する。

今度はパンの塊を手にとった。これが丁寧な持ち方とは思えないが、仕方がない。そして口ぶりや発音をできるだけ正確に真似て、パンを見せながら「トゥウェット？」と言った。

レインは「え？」という顔をした。ややあつて、おじおじしながら ᵒᵒᵒᵒᵒᵒ と行った。

よし、よし。行けそう。ポフね、ポフ。

パンを籠に戻し、パンを指差しながらポフ？と聞いた。するとレインは無言で頷く。

次にナイフを指差し、トゥウェット？と言った。彼女は何を指差されたか分からないようなので、脅かさないようにゆっくりナイフを持ち上げ、先端を自分の方に向けながらも一度聞いた。この時点でようやくレインはこちらの意図を理解したようで、ぱっと顔を明るくし、はっきり ᵒᵒᵒᵒᵒᵒᵒᵒ と答えた。

やった！意図が伝わった！ナイフはティプスね。ははは、伝わった。

私が始めに書いたスチールウールはまったく何の意味もない。あれは、さも意味ありげに見せることによって「何これ？」という言葉を引き出させるための道具だったのだ。この手法は言語学者の金田一京介がアイヌ語研究の際に現地人に使ったものだ。こうして彼は情報とインフォーマントを獲得していった。

そして私もいま、先哲のおかげで貴重な情報とインフォーマントを手に入れた。そう、トゥウェット？という貴重な情報と、レインというインフォーマントを。もっとも、インフォーマントという言葉は最近言語学では嫌われてきているが。

ともあれ、これでレインに学習意欲を示したことになる。レインは私が言葉を学びたいということを理解しただろう。

続けて、皿を指して同じことをした。皿はハットというらしい。同じく、パンに乗って

いたレタスはシャクンで、ハムはトックルというらしい。念のためスライスされたパンのほうを聞いてみたら、ポフと言われたが、その後続けてレインはコカと言った。

「コカ？」

㊦ㄣ, ㄥa eㄥ ㄗㄔㄣ- ㄥ-ㄏ ㄥㄥㄗㄣㄣㄣㄣ

面白い。夕飯にいきなりパンを持ってきたことからある程度予想はしていたが、やはりここはパン食のようだ。この家がというより、ここの文化がパン食のようだ。

日本ではスライспанにわざわざ単純語は設けない。米と稲は分けても、パンは切っても切らなくてもパンでしかない。逆に英語だと米食ではないのでriceは稲も米も同時に表わす。

つまり、その文化にとってその物がどれだけ重要かによって単純語の細かさが変わるということだ。スライспанが単純語を持つというなら、それはここがパン食であることの根拠のひとつになる。

となると……ここは小麦がよく生産されるわけね。よっぽど言葉が変わるくらい昔から輸入に頼って食文化が変わってない限りは。小麦がメインとなると……ある程度気候が限られてくるわね。

パンを常食すると仮定すると、米は常食ではないだろう。米は夏に大量の雨が降り、湿気と高い気温が保たれないと育たない。日本の東北地方では夏にやませが降りることがある。そうすると米は育たない。これがいわゆる冷害だ。このように、米は夏の暑さと雨が必要だ。

ということは、逆にこの地方の気候はそうではないという予想が立つ。まだ予想の範囲で早計でしかないが、当たらずとも遠からずだろう。

しかし、食卓ひとつ取っても様々な情報を見出すことができるようだ。何でもない日常の風景の中に、これだけたくさんの言語と文化が詰まっているとは。

次に机を指差して「トウェット」と問うたが、机は広すぎて何を指しているのか分からないようだ。机の端を握り、がたがたと軽く揺らしながらもう一度聞いた。

㊦ㄣ-ㄥㄣㄣㄣ-ㄥㄣㄣㄣ

机はラツツラツツなのね。机は基本語だろうに、意外と長いのね。

次に椅子を指差したが、レインは私がスカートか脚を指差したものだと思ったようで、何を言えば良いのやらという顔で迷っていた。しょうがないので立ち上がって椅子を持ち、

やはり軽く揺らして問うた。

Ⓜ-ㇿㇿㇿ-ㇿㇿⓂ

怪訝そうな顔で答えるレイン。

あれ？椅子もラッツラッツっていうの？椅子と机を区別しないの？だから語形が長いのかな。ん？ちょっと待って。彼女の怪訝そうな顔が気になる。もしかして意図が通じてないんじゃない？

試しに椅子から手を離してラッツラッツと言ってみるが、レインは首を傾げる。

ああ、やっぱり。じゃあ私が聞いたのは何？ラッツラッツって何なの？

机と椅子にした共通点を考えてみた。

あ——揺らした。私、どっちもガタガタ揺らした。もしかして今のは揺らすとかガタガタという言葉なの？

そう思って皿を持ち、同じく揺らしてみながらラッツラッツ？と聞いた。するとレインはハッキリ頷いた。その顔つきからして肯定のようだ。どうも肯定に対しては頷く文化のようだ。良かった、共通していて。

それにしても、やっぱり机の件は通じてなかった。参ったなあ。

今度は椅子を指し、揺らさずにもう一度「トゥウェット？」と聞いてみた。すると今度は ⓂㇿclⓂ と言った。

スキルね、スキル。なるほど。

この流れを崩さないうちに机を指し、再度問う。ようやくこちらの意図が伝わったようで、ⓂeleΛⓂ と答えた。

よし、机はエレンね。いや、しかしレインは頭が良いわ。余計なことを言わずに単語だけ教えてくれる。余計な語を挟まれたりセンテンスの中で使われたらどれがその語なのか分からないもの。

あと、気になることがある。スライスを 1 枚取り、指差してコカ？と聞いた。当然頷くレイン。今度はもう 1 枚追加して、2 枚同時に指差してコカ？と聞いた。するとレインは首を傾げながら頷いた。何がしたいのだろうという風な顔つきだ。

今したかったのは単数形・複数形の有無を確認することだ。どうも単複の違いはないらしい。スライスが不可算名詞ということは考えられない。なるほど、中国語なんかと同じで単複はないのね。

しかも冠詞もないし、中国語のような量詞もない。日本語によく似ている。ラッキーだ。いや、もしかしたらあるのかもしれない。単に単語を言うときには省いているだけかもしれない。だが、いまはそこまで判断できない。

次に、紅茶がエテックで、カップがテクスだと知った。うん、段々名詞が増えてきたな。まとめておかないとやはり不便だ。

食事をのろのろ取りながら、言葉の勉強をした。どちらも熱心だ。こちらは覚えるために必死だし、レインもそれによく応じてくれている。というか、レインは言葉を教えることが楽しいようだ。未知の不思議な人間との会話が楽しいだけかもしれないが、若干興奮しているように見える。

次は文字を知りたいものね。……よし。

「ねえ、レイン。あなたの文字を知りたいんだけど、書いてくれる？」

通じないと知りつつも、言葉にしながら動いたほうが自分としては非言語を出しやすい。本を開き、白紙のところに指を指し、持てとばかりにペンを差し出す。レインは分からぬままペンを受け取る。

試しにハットと言いながらペンで何かを書く素振りをした。ハットハットと何度も言ううちにレインに意図が伝わり、彼女は紙に h-ŋ と書いた。それを見た私は仰天した。耳で聞くのと目で見るのでは驚きの種類が違う。

彼女の桃色の唇から紡ぎ出されるハットという音はやや耳慣れないといった程度だが、文字は違う。平仮名とも片仮名とも違う。慣れ親しんだ漢字やアルファベットとも違う。ハングルやサンスクリットや世界の様々な文字とも違う。まったく見知らぬものだった。

「これは……。ハット？」

レインは頷く。私は指で文字をなぞり、凝視する。そこには h-ŋ という 3 文字があった。ハットという音を [hat] だと解すると、ちょうど数が合う。表意文字ではなく、表音文字のようだ。偶々かどうか知らないが、3 音に 3 文字がピッタリ合っている。

始めの文字は h に似ている。が、余計な装飾も何もなく、少し h と形が違う。似ているが、h とは少し違うという印象を受ける。一瞬アルファベットの改良かと期待したが、どうもその可能性は少なそうだ。まして後の 2 文字はまるで異なる。

ペンをレインから返してもらい、恐る恐る h-ŋ と書いてみる。そしてハット？と聞くと、レインはにこりとして ʘʘ, h-ŋ と言った。どうやら肯定はヤーというらしい。ドイツ語

のようだ。でも、ドイツ語のヤーよりは短く、歯切れが良い感じ。ヤーッという感じに聞こえる。

突然レインは *Mein V-9* と言ってどこかに行き、すぐに戻ってきた。手にはペンがある。ああ、やる気だなと思った。彼女は非常に協力的で助かる。良い人に助けられたというべきか、良い人を助けたというべきか。

そしてレインは紙一杯に文字を書いた。それは表になっていた。

Ɔ	ɔ	ɹ	ɹ	
Ɔeɹ	ɔeɹ	ɹ-l	ɹoɹ	
Λ	V	<	>	
Λc>	VcΛ	<oɹ	>cɹ	
ɹ	ɹ	ɹ	ɹ	
ɹaɹ	ɹ-ɹ	ɹ-ɹ	ɹeɹ	
h	ɣ	ɹ	ɹ	
h-ɹ	ɣaΛ	ɹaɹ	ɹaɹ	
Z	S	O	I	
Zo>	Soɹ	Ocɹ	Ieɹ	
-	c	ɔ	e	a
--	cc	ɔɔ	ee	aa

先ほどの字が入っているところからすると、これはアルファベット表のようなものなのだろうか。つまり、レインの言語における表音文字のリストなのだろうか。

レインは表の一番左上を指し、そう言った。どうやらこの言語は左から右に文字を進めるようだ。

6-1A-8 2a e1 2eJ6

分からないという反応を示すと、レインはうーんと悩んで左上の字だけを指差し、 $\mathcal{C}(\mathcal{C}J)$ 、 $\mathcal{C}(\mathcal{C}J)\mathcal{C}$ と何度も言った。

それに、よく見るとこの表の小さいほうの文字列はどれも見出しになってる大きい文字から始まってる。例えばcの文字ならceJのように、c音から始まっている。英語でBを[bi:]というのと同じで、ある文字の名前はそ音で始まるというわけだ。分かりやすい。

ひとつ右の文字を指して言う。なるほど、これがケット、と。

その右がシャルとソル。これで1 段目は終わりね。要するに一段目は t, k, sh, s って感じね。

ルックはイタリア語などの舌を何度も叩きつけるラ行みたいね。

IPA ではふるえ音というのだが、要するにべらんめえ口調のラ行だ。レインのような大人しそうな顔でこの音を発音されると少し面食らう。

次のルスは英語の r の音と同じようだ。じゃあ r と転写しておこう。

そして 5 段目に来た。ゾム、ジョック、ウィット。そして最後の文字は私が読んだ。

「レッシュュ？」

64-6

最後になってようやく前の状況から音を予想することができた。5 段目は z, j, w, l だ。

なるほど、これがこの言語の子音か。4×5 で 20 文字か。いきなり 20 文字も覚えられないから、転写法を作っておこう。

私はアルファベットで転写法を作ることにした。基本的に英語に合わせることにした。ヤ行を y と j のどちらにしようかと思ったが、ユンの文字が y に似ているので、y で転写した。そうすると j はジャ行になる。文字の形は S なのでむしろ s で転写したいが、そうも行くまい。

運の良いことに、アルファベットにいくつか似た字がある。しかも形が似ているだけでなく、英語と同じ音を持つものもある。

よく見るとこの字はすべて一筆書きだ。アルファベットでさえ 2 画のものがあるのに、これはすべて 1 画で書ける。合理的だ。

ただ、アルファベットでいうところの d と b のような鏡文字が多いようだ。もっとも、鏡文字が多いからといって慣れれば混乱することはなさそうだ。d と b も中学で英語を習いたてのころは間違えるが、そのうち間違えなくなる。それと同じだろう。

なお、鏡文字になっていても音との関連性はないようだ。ʒ と ʒ は引っくり返したただけだが、音は g と d なのでまるで異なる。g が k になるのなら分かりやすいのだが。

鏡文字は片方が清音で片方が濁音になってれば覚えやすいのになあ……。いや、待てよ……。似た形の文字が似た音を持っていたらそれこそ勘違いしやすいか。

見ていたら、どうもすべてが不对応というわけではないことに気付いた。ʒ, ʒ は p, b で、有声と無声の対立になっている。多くある文字の対の中でこれだけが音の上でも関係しているが、単なる偶然という感じだなと思った。

転写して困ったのはルックとシャルだ。シャ行を sh にすると 2 文字になって転写しづらい。どうしよう。

あ、そうだ、ポルトガル語だとシャ行は x だったわね。ちょうどいま x は残ってるわ。じゃあ x をシャ行にしましょう。

アルファベットで転写して文字が足りるかしら……？この言語は子音が 20 個でしょ。子音の下に書いてあるのは母音だろうから、合わせて 25 文字。アルファベットは 26 文字だから足りるわね。

a, i, u, o, e は母音に使うとして……残る子音字は c と q か。べらんめえのラ行をどちらに宛てるか……。まあ c でいいか。別に q でもいいけど、ルックのクってことで、c を使おっと。

自分の家から持ってきたノートに転写を書き、レインの描いた文字を模写しておく。でも、できるだけ転写に頼らず、この文字に慣れたほうがいいだろう。文字を持たない未開の文化に来たわけではないのだから。文字があるならそれを使うのが良い。

「ええと、上の表が子音なわけね。じゃあ下は母音ってことになるね。どの字がどの母音かっていうのは、子音の表の中で何度も出てきてるからもう分かるわ。順に……」ここで一拍置いて指で文字を追う「アー、イー、オー、エー、ウー？」

㊦ㄣ, ㄣㄣㄣ

良さそうだ。なるほど、これで文字は分かった。何より書きやすい文字で良かった。数も少ないし、形も複雑でない。

それにしても合理的な字だわ。金両基が中公新書の『ハングルの世界』で言ってたっけ。ハングルは「世界でもっとも合理的な文字」だって。でも、いま正にそれ以上に合理的な文字を見た気がするわ。

ハングルは子音＋母音＋子音の構造をしていて、密になりすぎる感がある。初学者には 1 文字 1 音のほうが分かりやすく、混雑した複合文字にはむしろ閉口する。読みづらいし覚えづらい。そして PC 入力もしづらい。まあ、時の王世宗（セジョン）も PC のことまでは考えられるはずもなかったわけだが。

ハングルは人工文字である以上、確かに合理的だ。しかし、それでもこちらのほうが合理的に見える。自然言語でここまで合理的な文字があるとは。

ん……待って。誰が自然言語って決めたの？そうよ、ハングルみたいに人工文字かもしれないじゃない。これだけ簡素な体系だもの。ありえるわ。

アジア・アフリカの未開言語やアイヌ語やキリル文字だってそうだったじゃないの。ハングルのように誰か言語学者なり為政者なりが作ったとしたら？そしたらこんな文字にもなるわよね。そう、その可能性もある。

しかし……言語学の色々な情報を見てきたが、こんな文字は見たことも聞いたこともない。異世界へ行きたいと願っている私からすれば、ここが異世界ではないかという期待は十二分にある。あるが、常識で考えればまだ地球である可能性を捨てきれない。だが、いまはそんな検証ができる状況ではない。

まずは文字に慣れなくっちゃ。

試しに、紙に $\text{uc}\alpha\Lambda$ と書いた。これでシオンという名前のはず。もしこの文字が書いたまま読むのだとしたら。つまり、英語のように綴りと読みが一致しないことがなければだが。

「シオン？」と尋ねると、レインはにっこり頷いて $\text{㊦ㄣ, \text{Ca} e\text{C} \text{uc}\alpha\Lambda\text{㊦}$ と言う。肯定したようだ。次に $\text{lec}\Lambda$ と書いて、「レイン？」と聞くと、 $\text{㊦ㄣ, \text{Ca} e\text{C} \text{lec}\Lambda, e\text{C} \text{Ao}-\Lambda\text{㊦}$ と肯定する。

よかった、とりあえず互いの名前は書けるようになった。次は文だ。文が書きたい。

ペンで書く身振りをしながら、レインに「トゥウェット」と言った。レインは $\text{㊦ㄣ-Z\text{㊦}$ と言う。違う。多分ペンのことを言ったのだろう。ペンのことを聞いているのではない。「トゥウェット」という文を書いてほしいのだ。

「あー、しょうがないな」と言って試しに $\text{CaOeC}\text{C}\alpha$ と書いてみた。そしてしきりに「トゥウェット？」と繰り返す。するとようやく理解してくれたようで、 $\text{㊦-}, \text{Cee}, \text{Cee}\text{㊦}$ と言い、 $\text{㊦Ca, eC, C}\alpha\text{㊦}$ と単語を区切って発音しながら書いてくれた。レインが書いたのは $\text{Ca} e\text{C} \text{C}\alpha\delta$ だ。最後の文字は「？」に当たるのだろう。

ああ、なるほど。これでトゥウェットなわけね。文字を忠実に読むとむしろトゥエットなのね。ウの後にエがあるから唇音化して聞こえてたわけか……なるほど。ともあれ、これで文がひとつ書けるようになったわ。よし。面白い。

ところで、この言語は何語というのだろうか。レイン語？いまのところはそうとしか呼べない。しかし、この言葉は何語かなんてどうやって聞けばいいのだろうか。まだまだ先の話だなあ。

$\text{㊦ㄣ\text{C}\text{㊦}$

「え？」

レインはポフポフと繰り返す。ペンを動かしている。書けというジェスチャーなのだろう。面白いことに、ペンを動かす点では日本と共通したジェスチャーだが、動かし方が違う。

日本人は 1 マス辺りの密度の濃い漢字を書くせいか、ペンをその場でごちゃごちゃと動かし、手を横にずらす速度は遅い。

それに比べてレインの場合、その場で動く量は少なく、横にずらす速度が速い。まるで手が「～」という文字の軌跡を描くように、すーっと横に動いていく。

なるほど、この文字を日常使っていると、書くというジェスチャーひとつ取ってもこれだけの違いが出てくるのか。そう思いながら ㊦ と書いた。どうも練習させたいらしい。

㊦, ㊦ e㊦ ㊦㊦

レインは肯定的に述べた。ただ、肝心のレインの言葉が分からないのでは、いくら単語が書いても仕方がない。試しに今レインが言った言葉を書いてみた。

音的にはヤッ、トゥウェットポフと聞こえた。どこで区切るのか分からないが、トゥウェットの部分は先と同じだとすると、こんな感じだろう。“㊦- ㊦ e㊦ ㊦㊦”。するとレインは ㊦- の後に, を入れた。なるほど、区切りはこれで表わすのか。カンマによく似ている。

しかし、“㊦ e㊦ ㊦㊦”が「これは何ですか」で、“㊦ e㊦ ㊦㊦”が「これはパンです」だとすると、少なくとも ㊦ というのが「何」に当たる語なのだろう。疑問文は英語のような倒置をしないということになる。

では、㊦ e㊦ とは何だろう。仮にこの文を This is what と考えると、前者が this で「これ」、後者が is で繫辞……ということになるが、そう簡単に考えて良いものか……。

仮にどちらかが繫辞としての動詞だとした場合、アラビア語の VS0 のような語順の言語だとしたら、前者が繫辞になるはずだ。語順が分からない以上、何ともいえない……。でも、どちらかが「これ」だとは思う。しかしそれをどう確認すれば良いものか。

……そうか、「これ」以外を引き出させればいいんだ。

にやっとして、サラッと書いてみせた。“㊦ e㊦ ㊦㊦”。そしてしきりに自分の胸に手を当てて、自分の名前を名乗っていると主張した。するとレインは ㊦- ㊦ ㊦-㊦ e㊦ -㊦, ㊦-㊦ ㊦㊦, ㊦㊦ ㊦㊦㊦ -㊦ ㊦㊦ e㊦ ㊦㊦㊦ と何か説明しながら、㊦ の下に ㊦㊦ と書き足した。

これはどういう意味だろう。㊦ より ㊦㊦ のほうが良いよということか、あるいはそちらでも良いよということか。いずれにせよ、光明が見えてきた。続けて“㊦㊦ e㊦ ㊦㊦”と書いてみる。

㊦㊦, ㊦㊦, ㊦㊦ ㊦㊦ e㊦ ㊦㊦, ㊦㊦ -㊦ h-㊦ e㊦ ㊦㊦ ㊦㊦ ㊦㊦ c> ㊦㊦

レインは ㊦㊦ に×印を付けると、㊦㊦ と書いた。これは何を意味しているのだろうか。しか

し、罰点がダメを意味する印であることは分かった。

状況から考えるに、紫苑だと $\Lambda\alpha\Lambda$ で、レインだと $\Gamma\psi_a$ で、パンだと Γ_a になるが、それ以外は変わっていない。e Γ というものは変わっていない。やはりこれが繫辞なのだろうか。

この文は私が書いたのだから、 $\Lambda\alpha\Lambda$ は「私」で、 $\Gamma\psi_a$ は「あなた」ということになるのだろうか。順当に考えればそうだ。だが確証はない。そもそも繫辞のない言語などいくらでもあるのだ。先に調べるべきは代名詞の類だろう。

そこで試しに自分を指してノンと言ってみた。レインは頷く。やはりノンで「私」らしい。次にレインを指差して、テュと言ってみた。レインは少し眉を顰めながら頷いた。

あ、しまった。指をさすのが悪いのかもしれない。じゃなくて、テュと呼びかけるのが無礼なのかも……。フランス語みたいに親しくないうちは vous で、親しくなってから tu と呼ぶような言語もあることだし。うーん、参ったな、どっちだろう。

わざと間違えて自分の胸に手を置き、テュ？と聞いた。するとレインは首を振って $\textcircled{\Gamma}ee$, $\Gamma ee\textcircled{\Gamma}$ と言う。このテーテーというのはさっきから聞くが、どうもダメとか違うとか、そういうニュアンスの言葉のようだ。

しかも首を振るのが否定を表わすらしい。よかった。日本と同じだ。ギリシャだと首の振りがおよそ日本と逆だが、こういう文化圏でなくて助かった。

レインは手の平を上にしてこちらへ差し出すと、 $\textcircled{\Gamma}\psi_a\textcircled{\Gamma}$ と言った。私が欲しかったのは非言語、つまり身振りのほうだ。なるほど、やはり $\Gamma\psi_a$ が「あなた」でいいのか。問題は人の指し方だったようだ。指差すのは良くないらしい。手の平を差し出すのが丁寧なのか。

今初めて理解したような顔でレインに手を向けて $\Gamma\psi_a$ と言ったら、彼女はにこりとした。

よし、人称代名詞が分かったわ。そうすると Γ_a は「これ」で間違いのないようね。

となると……確証はないけど e Γ っていうのは恐らく繫辞ね。be 動詞や etre 動詞や sein 動詞や「是」に当たるものみたい。一番近いのは「是」ね。いまのところ活用しないみたいだから。

レインは「んー」と呟きながら膝を伸ばし、虚空を見つめる。ふっと気付いた顔になると、ててっと階段のほうへ走っていった。

なんだろう……。

少しすると $\textcircled{\Gamma}c\alpha$, $c\alpha\textcircled{\Gamma}$ と言いながら降りてきた。手には写真を握っている。

$\textcircled{\Gamma}c\alpha\Lambda$, $c\Lambda\Gamma_a\textcircled{\Gamma}$

写真を見せてくるレイン。そこには一人の中年男性が写っていた。

「あら、かっこいい」

金髪で細く、背の高い男性だ。清潔そうで、やさしそうだ。頭もよさそうだ。へそ曲がりの私でも素直に好感のもてるタイプだ。

Ⓔla eŋ ʔ-ʔ- ʌoʌo,, V-ʃ>- Jeŋeδ ʌoʌ ʃeʌʌ ʌa eŋ eʌ <-ʃ> ŋeŋ V-ʃ>- ʌ-ʌŋ >-ʌ- ee

「これ、誰なの？レインのご家族？お父さんかしら……」

レインは男性を指差し ⒺVcŋⒺ という。

「ヴィックさんていうの？」

次に自分を指して Ⓔ>cʌⒺ という。

「ん？」

さらに私を指して Ⓔ>cʌⒺ という。

「私もレインもミン？ミンってなんのこと？若いって意味？」

次にレインは別の写真を見せてきた。街中の写真だ。中央に先ほどの男性とレインの子供時代と思われる幼女がいた。

「あ、やっぱお父さんだったのね。てゆうか、レイン……お人形みたい」

写真には道行く人々が写っている。レインは一人ひとり指さして、>cʌ だの Vcŋ だのと言っていく。数人過ぎたところで、私はそれが男女のことだと気付いた。どうやら >cʌ が女で、Vcŋ が男らしい。

Ⓔŋʌ ʌ-ŋʌŋ ŋaŋa eŋʌ ŋo Jeŋee

するとレインは紙に絵を書き出した。一人はスカートを履いている女の子。>cʌ と書いてあるので間違いないだろう。吹き出しに ʌoʌ と書いてある。

横に男性の絵を書いて、吹き出しに -ʌ と書く。こちらは Vcŋ と書いてあるので男性でいいだろう。

「……吹き出しは何の意味？自分を言うときに Vcŋ は -ʌ と言い、>cʌ は ʌoʌ と言うってこと？つまり、一人称の性差を説明したいのね？」

どうやらこの言語には男言葉と女言葉があるようだ。レインは女が男を指差す絵を描き、吹き出しに ŋʌ と書いた。逆に男が女を指す絵には ŋc と描いた。

「なるほど、二人称も男女によって異なるのね。私は女だから、ʌoʌ と ŋʌ を使えということね」

うん、人称代名詞は分かったわ。じゃあ、次は……。

私は座ったまま柱時計を指差した。

“la eŋ ɔδ”

“le eŋ ɤelŋ”

「ん？レエツトって言った？」

時計はメルクというらしい。しかし……、トゥでなくレと言った。トゥは指示詞ではなかったのか？いや、待って、もしかして遠近の違いかもしれない。

試しに壁にかかった光っている紙を指差し、 “la eŋ ɔδ le eŋ ɔδ la eŋ ɔδ le eŋ ɔδ”
ねえ、laδ leδ laδ leδ とまくし立てた。

“eŋ la, le, le,, ɥ-ŋ le eŋ ɟ-ɟ”

レインはレ！と強調した。なるほど、遠くのものは「あれ」で、「あれ」はレなのか。そしてあの光っている紙はパプシュというらしい。それが何かは分からないが。

さて次はと思っていたら、レインが席を立った。質問攻めにあって疲れたのだろう。食器を片付けだした。

「待って。私も手伝うよ」

“>>δ ɥa -lŋ ʌŋ ɔccŋ-δ”

「手伝うって言ってるの。任せきりじゃ悪いから。台所、そっちね」

台所は日本でいうシステムキッチンのような感じで、近代化されてる。少なくともここは現代なのだろう。どこの国かは知らないが。ふつうに蛇口があるし、流しもある。コンロもある。電子レンジのような機械もある。コンセントもあり、電気が通っていることが分かる。

ただ、炊飯器はない。やはり米は常食としないのだろう。かといってパン焼き機も見当たらない。買うのか、オーブンでも使って本格的に焼くのだろうか。見回すと冷蔵庫もある。どこの国でも基本は同じようなものだと思った。

レインはトレイに乗ったものを食器洗い機に入れると、機械に対応していない籠などをどけて、スイッチを入れた。簡単なものだ。これで食器洗いは終了。手伝う暇もなかった。

“leeV”

レインが手を引っ張る。レーヴというのは「来て」などに当たる言葉だろうか。付いていくとそこは洗面所だった。風呂と分離していて、トイレとも分離している。ユニットバ

洗面所の棚は開閉式で、開くと中にはコップと歯ブラシがあった。レインは新しいコップと歯ブラシを下ろすと、渡してくれた。

「あの、これ……借りていいの？」

まだ会ってから数時間だというのに、レインは随分打ち解けてくれている。口調も随分緊張がほぐれている。良かった。

歯を磨く。互いに目が合うと、何となくおかしくなって笑ってしまう。良かった、良い友達になれそうだ。

それにしても、レインの家族はどこにいるのだろう。人の気配が感じられない。それにさっきの男……誰だったんだろう。

そもそもここは本当にレインの家なんだろうか。まあ、それは間違いないだろう。立ち居振る舞いが明らかにこの住人だ。

もしかしてあの覆面が私をここに？うん、あいつは私に驚いてたから違うわね。多分……ワープっていうの？光を通してどこかにワープしたのかな、私。あの金髪に連れられて。意識はなかったけど、長く寝ていた気配はない。

恐らく意識が飛んでいたのは数分から数十分程度のことだろう。ここに来たときに、口の中がミルクの味がした。金髪に連れてこられる前に飲んだばかりだわ。長く寝てたら口の中が籠るはず。金髪に連れられてすぐここに来たと見て間違いない。それに、お腹も減ってなかった。

時差が分からないから何ともいえないけど、数分で連れてこられる場所なんてどんなに急いだってたかが知れている。

口を濯ぐと居間に戻り、玄関へ向かった。玄関を開けようとするレインが飛んできた。

よく分からないが、外へ出てはいけないと言っているようだ。仕方ないので諦める。

そのまま 2 階へ連れて行かれる。階段を上って廊下を渡り、左手の部屋へ通される。そこは人が住んでいる気配のある部屋だった。誰の部屋だろう。

書類がたくさんあり、デスクがあり、ベッドがある。クローゼットもある。カーテンは灰色で、シックな感じがする。全体的にカラーが黒系で、男性の部屋という感じだ。どう見てもレインの印象には合わない。やはりレインには家族がいるようだ。

レインはベッドに寄るとシーツを剥いで、クローゼットから新しいシーツを出して敷いた。まさか……この部屋を貸してくれるというのか。じゃあこの住人はどうするの？

「あの……レイン、ご家族は？」

レインという言葉にだけかろうじて反応してこちらを向く。

“Cya Uclc- <lel -Ca >cl loA l-< Ca eZ - Cya <ceA, UclA>, Ca -C eZ e ?--A lo-A”

「ここ、誰かの部屋なんじゃないの？いまどこかに行ってるの？」

レインは分からないという顔で首を振り、ベッドをぱんぱんと叩いて誘導した。誘われるがままにベッドに座る。

“Cya Ybl <leA Ca >oC”

「え、寝ろってこと？でもまだ少し早くないかなあ」

しかし、とりあえず言われたままに横になってみる。

“eYd Cya Uclc- >-Yd <ceA Ca’ eC lcC <eAZel CcJ”

「え、何？違うの？寝ちゃまずいの？」

起き上がる私を制するレイン。

“Y-Jo, Y-Jo,, Cya Uclc- <leA c> Ca’ ol l-U,, Cya laA-J c <c- -lC JeCeY loA A- Cya A- -Ac CcACcA”

「ええと……おやすみなさい、とりあえず」

するとレインはにこりとしてベッドから立ち上がり、Uclc- と言った。何度か聞いた単語だが、今のがおやすみなのだろうか。Uclc- と試しに言ってみたら、彼女はにこりとした。

多分……合ってる。

レインはドアに寄ると、ノブのところの鍵を指差し、 “Cya -’ JeA gaC -Ca” と言った。どうやら物を指すときは指で差してもいいようだ。どうも鍵を指しているらしい。

“Ca eC CoY le eC CoY CaY leY”

“co eC Y-Jo.... --.... Cya Je’ l-A VeCYob> A-,, Y-, JoA Ca, c> Ca’, Ca”

レインはトゥと強調した。レかトゥか聞いたのだが、レインはトゥが良いと言った……のだと思う。なるほど、レは遠称を表わすが、このように話し相手がその対象の近くにいと、近称のトゥを使うようだ。ふむふむ。

㊦で……えっと……。㊦a e㊦ ㊦o㊦

㊦㊦a㊦c㊦

㊦㊦a e㊦ ㊦a㊦c㊦㊦

㊦㊦c-㊦

あれ？ヤーではなく、ティアと言ったぞ。そういえばさっきも何度か聞いた覚えがある。肯定しているムードだからヤーと同じかな。そうよ、肯定の語が 1 語しかない訳がないもんね。中国語だって肯定は「是」でもいいし、「沒錯」でもいいわけだし。ニュアンスが違うだけだよ、きっと。

で、鍵はクキと。……あれ？でも「鍵」って日本語おかしいよね。鍵はキーのことをいうんであって、レインが指してるのはむしろ錠のほうじゃないの？日本人はどっちも鍵っていうけど、本来錠と鍵は別物よね。もしかしてクキって錠なのかも。

もう一度㊦c㊦c- と言ってレインは去った。

……とりあえず寝よう。

だがその前に、起き上がって鍵を閉める。摘みを捻るタイプの簡素な鍵だ。

ドアの横には電気のスイッチがある。ウチと同じシーリングライトだ。電気のスイッチはオンオフ式でなく、レベルゲージになっている。DJ が使うサンプラーのつまみのようなもので、上下に摘みをスライドさせることによって照度が変わる仕組みだ。つまみを上にするほど明るくなる。この辺の感覚は日本と同じようだ。

電気を消す前に部屋を見回した。書類が山のようにあり、あまり綺麗ではない。掃除も行き届いていない。以前は人がいたが今はいないという感じだ。書類を見ると、先ほどの謎文字がプリンタで刷られて整然と並んでいた。表音文字で書いたまま読むので、読めるといえは読めるが、意味は分からない。それにまだ知らない記号がいくつか見える。

なんだろう、この国は……。

時計が壁にかかっているが、やはり居間のと同じ文字盤だ。先ほどの光る表もある。デスクの近くにあるが、これは何なのだろう。

ふと窓を見ると、その向こうにはベランダがある。カラカラと窓を開け、外に出てみる。

目下はこの家の庭だった。照明があり、かろうじて様子が見える。庭は結構な広さだ。その向こうに門があり、門を越えると道路なのだが……そこは人でごったがえしていた。

「……うそ」

そういえば何やら音がするなと思っていたが、こんなに人が集まっていたとは。

通りの照明は明るく、たくさんの人が見える。彼らは歩いていた。どこに向かうというわけでもなく、行ったり来たりをしていた。統率も取れていないし、来ている服も人それぞれだ。これはまるで……お祭り？

そう、それは怒れる群集の行進ではなく、むしろお祭りだった。よく見ると屋台らしきものまで出ている。

そうか、それでレインは外へ出すのを嫌がったのか。もし私が出ていったら必ず道に迷う。そのとき、ここの言葉が話せなかったらどうなる？夜道で言葉も知らない少女が外国で……。ロクな目には合わないだろう。

街並みが明らかに日本ではない。まず電柱がない。電気が通ってる以上、電柱は必要だ。電柱はないけど電気は通っている。なら地下ケーブルがあるということになる。地下ケーブルは地震の多い日本には基本的に適さない。つまり――

「ここは……少なくとも日本ではない、か」

見える家々も明らかに日本のものではないし、アジアのものでもない。一番近いのは西洋だ。

だが、時差もなくどうやって西洋に？部屋の時計は10時前。自分の意識としても多分それくらいだろうと思っている。金髪に連れてこられたのが一瞬のことで時差がないとしたら……ここはどこだ？

西洋っぽくて時差がない。……オーストラリア？コリオリの力で南半球かどうか試してみる？ほら、お風呂場で渦でも作って。でも無理。渦の巻き方を見れば分かるっていっても、蛇口の渦くらいじゃコリオリの力は有効には働かない。あれは海にできた大きな渦とか台風とか、そういうレベルで効果が出てくるものだから。なので、ここでやってもしかたがない。となると……。

空を見る。月は……ない。だが、今日は月齢28だったはずだから、どうせ見えないか。

じゃあ星は？私は世界中のどこに行っても位置を把握できるよう、星座を88天すべて覚えている。

星は見える……。今は 11 月の終わりの午後 10 時ごろだから、天頂にペルセウス、南東にシリウス、東にプロキオン、北東に北斗七星ね。

「窓からだと……シリウスが見えないなあ。ここ、緯度が 36 より上なのかしら。……あ、カペラみつけ！」

窓から身を乗り出すと、東の高い方にカペラが見えた。

カペラはぎょしゃ座だから……うーん、北半球で間違いないようね。

「あれ……アルデバランかな。ちょっと南東の……。この窓、南向きっぽいな。カペラは見づらいわ……。ベテルギウスは……って、星の観察してる場合じゃないわ。もう十分」

なるほど、明らかに北半球だ。でも、逆に言えばここは地球。だってこの星が見えてるんだから。

でも待って。時差がなく、北半球で日本じゃない。中国か韓国？あるいはロシアの東端？いや、そんなに寒くないし、中国や韓国の街並みではない。どうなってるの？

地球……に似た星。それがもう 1 個あるってこと……。そしたら確実に異世界ね。万々歳。でもどうなんだろう。宇宙にある地球に似た別の星とか？でもそれはないか。地球の環境じゃなければ私が生きてられるはずがない。地球じゃなきゃ温度も違うし、何もかも環境が異なる。じゃあ、ここは別の世界の地球っぽい星ってことになるわね。でも……。

「もしかしてふつうに日本にこういう場所があるのかもしれない。確かめないと」

どうにかレインから聞き出さねばなるまい。

「ちょっと……寒いかな」

中へ戻る。窓に鍵をかけて照明を落とし、ベッドに入る。

「Ucllc-……とか言ってたっけな……」

Ｒ　Ｒ

朝日が眩しい。おかしいな、ベッドがこんなに眩しいなんて。

私のベッドには窓からの光はこんなに差し込まない。そう、私のベッドには。

——そうだ！

バツと跳ね起きた。

そうだ、ここは私の家じゃなかったんだ。気付いたら知らないとこにいて、レインっていう女の子に会って。言葉が通じなくて……。それで……。レインの家に泊めてもらったんだ。

とりあえず伸びをして欠伸をする。髪に手櫛を入れる。直毛なのであまり寝癖は付かない。手櫛で大抵は事足りる。

……初めて外泊しちゃったな。

うわ、忘れてた。そういえばお母さんたち、昨日どうしたんだろ。帰ったら私がいなくてビックリしただろうな。警察には行ってないといいけど……。いや、行くかな。

あらかじめ異世界に行ったときのことを考えて、毎年毎年書置きを机の中に残していたから、今頃それを見ているかもしれない。今年の方はこれから作るつもりだったが、内容が高校に入って以降のことなので、去年のものでも話の辻褄は合うだろう。書置きにはこう書いてある。無論、自筆だ。

「私が突然いなくなって驚いていることと思います。挨拶もなく、ごめんなさい。ちょっと出かける用事ができたの。悩みがあって家出したんじゃないのよ。

でも安心して。悪いことしたり、自分を傷つけるようなことはしないから。お母さんたちには黙っていたけど、遠くに女の子の友達がいるの。その子に会いに行きます。そこで勉強したいことがあるの。どうしてもここじゃできないのよ。

大丈夫、お金の心配も無いし。いつ帰るかは分からないけど、遅ければ遅いほど居心地が良いってことだから安心して。安心してって言っても無理なのは分かるけど、勉強が終わったら無事戻ってくるから。

学校は休学したい。退学にするって言われても甘受します。事件性は無いので警察に届けなくてね。帰ってから恥ずかしいから。部屋はそのままにしておいてね。お説教はあとで聞くから。

奇しくも本当に女の子と出会うことになったか……。

置手紙があっても親はまず間違いなく警察へ届出を出すだろう。警察に行く前に親は部屋を荒らし、荷物を探すだろう。だが、親は私がどれだけ服を持っているのかを管理していない。父親はもちろんのこと、母親も知らない。

問題は制服がないことだ。制服のまま出て行ったのは不自然だ。しかし鞆が部屋にある以上、途中で誘拐されたのではなく、自分から出て行ったと分かるだろう。

それでも親の立場で見れば警察に届出を出すだろう。まずは駅前の交番に行き、事情を説明するだろうな。かといってあそこは交番だからちゃんとした手続きはできまい。次に警官の指示で行くのはあそこを管轄してる警察署。そこで家出人搜索願を出すだろう。

でも私は異世界にいるんだから、いくら探しても見つかるはずがない。……本当にここが異世界だったらけど。そうだ、今日はそれを確認するんだった。

ベランダに出る。昨日の群集はすっかり撤収して静かだ。あれはいったい何だったのだろう。

さわやかな朝の空気を胸いっぱい吸い込んで吐く。空気は澄んでいて、空は青い。昨日より景色が遠くまで見える。ただ、山らしきものが見えない。白んでいて分からないだけだろうか。日本の場合、大抵遠くには何かしらの山が見えるものだが……。

家屋の屋根が見渡せるが、やはり日本のどこかには思えない。長崎のハウステンボスとも違う。西洋造りな建物ではあるが、何かが違う。うーん……。

部屋に入ると空気が籠っているのに気付く、換気するために網戸を閉めようとした。ところが網戸がない。昨日は気付かなかったが、ここには網戸がないようだ。

窓を開けたままにしておいてもかまわないだろうか。いや、昨日の男のこともあるし、それは少し心配だ。やはり閉めておこう。窓を閉め、鍵をかける。

ドアの鍵を開けて廊下に出る、できるだけ静かに。

するとちょうど向かいの部屋のドアが開いて、レインが出てきた。お互いまだ若干寝ぼけ眼だ。

「あ、おはよう」

Ⓔ ⒶⒶⒶⒶⒶⒶ, ⒶⒶⒶⒶ

ん？今の朝の挨拶？真似してみよう。

⑥Jɔɔʌɔʧaʌ, leʌʌδ⑥

自信がないので文末が尻上がりになってしまう。だがレインはにこりと微笑んだ。

洗面所で手と顔を洗って歯を磨くと、私たちは台所へ行った。朝の習慣はここでも同じなのだなあ。レインは私を居間の椅子に座らせようとしたが、手伝おうと思って台所に付いていった。

⑥ɔa, ʧa -lʌ ʌɔʌ Jccʌ-δ⑥

オウというのは感動詞だとして、テュは「あなた」だから私、つまり紫苑になるのね。ノンは「私」なので、レインから見たレイン自身ね。で、アルクっていうのとシーナっていうのが分からない……。

さて、どう答えたものかしら。まあ、沈黙は金。余計なことは言うまい。で、笑顔も金。とりあえず好意が伝われば良いとしよう。

レインは籠から昨日のパンを出し、ナイフやらを食器洗い機から取り出す。

⑥ʌeʌ <-ʌʌ ʌ-ʌc ɔ ʧelʌ....--⑥

レインは何か指示したようで冷蔵庫を指したが、言葉が通じないことを思い出したようで、言葉を途中で止めた。

「何？何か取ってほしいの？」

するとレインは冷蔵庫に手を当て、⑥lccʌʌe>ʌ⑥と言った。なるほど、それが冷蔵庫ね。

レインは中から卵とベーコンと玉ねぎとレタスを取り出すと、順に指差してʌ-ʌc, <-ʌ, ʧelʌ, ʌ-ʌʌと説明した。

彼女はフライパンを暖め、ベーコンを乗せる。油がフライパンに染み渡る。油はベーコンの脂で十分なようだ。次に卵を落とす。それを尻目に私は野菜を取る。

「切って良い？サンドイッチでしょ？」

⑥>clʌ ʧa ʌeʌʌ ʌeʌ -ʌʌ-, h-c ʧa ʌe ʌa- ʌcɔʌ ʌeʌe,, ʌɔʌ ʌ-ʌʌ-ʌ ʌɔ- ʌc ʌɔʌ leeʌ ʧa⑥

「え、ええと、今のは切り方の説明だよね？ジェスチャー入れてくれないと分からないよ」

まあ良いか。ダメなら止めるだろう。私は勝手に野菜を切りだした。

⑥ʌeʌ ʌa eʌ clɔʌ-Jʌ,, -ʌc, ʌɔʌ ʌeʌʌ ʧa ʌccʌ- ɔʌʌ- ʧa ʌe ʌa- ʌcɔʌ >cl ʧa -ʌʌ-ʌ ʌɔʌ Jccʌ-⑥

「ん？野菜の切り方はスライスでいいの？そういえば、玉ねぎのスライスもコカっていうの？っていうか今シオンって言った？」

レイン。

私は本を開くと -ㄱ, 4--> と書いてみて、綴りの正しさを問うた。レインはマルを付ける。

うわ、マルで正解を表すのは日本と同じなんだ。バツもここではバツと書くんだっけ。似てるなあ。

ところで、アチュは形容詞なのだろうか。だとしたら活用はあるのだろうか。それと、修飾形態は前置だろうか後置だろうか。

「レイン」パンを持つ ㄱ-ㄱ ㄱ<ㄱ ㄱ< -ㄱㄱ

ㄱㄱ< -ㄱ,, ㄱ< -ㄱ eㄱ ㄱc-ㄱ

あ、分かった。いま初めて長めの文が理解できた。「おいしいパン、おいしいパンで当たりよ」って言ったんだ。確か、ティアは肯定の言葉だったよね。

形容詞は後置のようね。日本語や英語とは逆か。フランス語みたいに基本語以外は後置なのかしら。確かめてみないと。

パンを大きく千切り、もうひとつは小さく千切った。これで伝わるかな……。

「これ、大きいでしょ。大きいって何ていうの？」

ㄱㄱa ㄱㄱ ㄱ-ㄱ ㄱㄱㄱ

大きい方を持ち、「大きい」。小さい方を持ち、「小さい」。これを何度か繰り返した。が、通じない。今度は席を立てて万歳して飛び跳ね、「大きい」と言った。次にしゃがんで「小さい」と言った。

ㄱ-ㄱ...eㄱㄱ ㄱeㄱㄱ

レインは首を捻る。伝わっていないようだ。

無理！形のないものは無理よ！……いや、無理なはずはない。先哲は異言語から逃げなかったわ。

大きなレタスの葉を取り、小さな破片を取る。交互に指差す。

ㄱ-ㄱa 大きい。ㄱ-ㄱa 小さいㄱ

次に先ほどのパンを指す。

ㄱㄱ< 大きい。ㄱ< 小さいㄱ

形容詞の入るべき部分に日本語を入れてみる。これで、意図が通じればいいのだが。

ㄱ--ㄱ -ㄱa-ㄱㄱ

幸いなことにレインは意図が分かったようで、両手を顎の前 10cm ほどのところで合わせた。これが理解したときのジェスチャーのようだ。

“Ca eŋ ʔoŋ ʔ-c,, ʔ-l ʔa eŋ ʔoŋ lcJ” そしてレタスを指差し、 “ʔoŋ ʔaʔa, ʔa eŋ ʔ-l ʔ-c,, ʔ-l ʔa eŋ ʔ-l lcJ” と言った。

繰り返しの中で大きいのがカイで小さいのがリスだと理解した。紙に書いて確認してもらう。

形容詞はやはり後置のようだ。大きいのが基本語なのは疑いないが、これでも後置ということは、フランス語とは違って純粋に形容詞は後置のようだ。また、今のところ形容詞は活用していない。名詞に性別はないのだろうか。

食べ終わると、昨日と同じ要領で片付ける。歯を磨いて居間に戻るとふたたび席に着く。時計を見ると——この時計が日本のものと同じならの話だが——7 時過ぎだ。健康的な時間だ。

レインはこの後どうするつもりだろう。見たところ家族はないが、年は私と同じくらいだ。学生か、そうでなくば働いているはずだ。いずれにせよ、今日が休みでなければ出かけるのではないか。だが、急ぐ気配は見られない。

「あの……学校とか……ないの？」

“>>ŋ”

「あ……ううん。なんでもない。いや、あるけど」

“-....”

何か言おうとしてレインは止めた。食事も終わったので座っていても黙っていると気まずい。気まずいという感覚は彼女にあるのだろうか。当然あるだろうな、人間だもん。

そうだ、今日はここが日本かどうか、そもそも地球かどうか調べるんだった。

私は自分のノートを開き、日本地図を描いて見せた。しかしレインは首を傾げる。これだけでは地図だということが理解できないのだろう。韓国、中国と続けて描き、モンゴルや東南アジアを描き、南アジア……と続き、中東、ロシア、東欧、西欧、グレートブリテン島などを加え、さらにはアイルランドやアイスランド、丁寧に南にはシチリア島なども加えて描いた。半島もすべて描いた。イベリア、イタリア、スカンジナビアはもちろんだ。

とりあえずユーラシアを書き終わったところでレインはそれが地図であることに気付いたらしく、 “ʔ-l-, ʔ-l-ŋ” と聞いてきた。正しく伝わっているなら、カシャが地図という

ことになる。

気になるのはレインの表情だ。レインは驚いたような顔で見ている。まるでそんな地図見たことないぞとばかりに。

私は日本を指しながら「ジャパン」と繰り返した。多分、これが一番国際的な名だ。他の言語での読み方も知っているが、昨日通じなかった言語で読んでも仕方がないだろう。

「>>...fa ef 7-l- e <c- fa-l JeCeδ Jee Cya laA-J c fa 7-l cA,, leA Cya laA-J c <c- -lCε
「ねえレインは？レインはどこから来たの？ていうかここはどこなの？指差して」

レインの手を引き、人差し指を持ち、地図の上を周遊させる。するとレインは Cee, -fa Ce <c- Aa-Aε と行って私の手から逃げる。そしてレインは奥に引っ込んでしまった。怒らせたかなと思ったころ、レインは大きな紙を持ってきた。それは世界地図だった。

——この世界の。

それは地球に似た、しかし地球とは異なる世界だった。ユーラシア大陸めいたものがあったり、北半球に大陸が多いことなどは類似しているものの、ところどころ形が違ったり、大きさも異なる。

「恐らく異世界があってもそこが私と同じような身体性を持った人間の世界であれば、そこは極めて地球と酷似した世界だろう」という私の持論が奇しくも証明されたことになる。

この瞬間、私は自分が異世界に来たことを確信した。恐らくそうだろうとは思っていたものの、これで確信できた。

仮に同じ夜空の星が見えようとも、私が生存できる空気や温度や湿度や食物があろうとも、ここは少なくとも地球ではないのだ。太陽が同じくらい眩しくても、ここは日本でも地球でもないのだ。

「来た……んだ。本当に。来てたんだ。あは、あはは……。凄い、叶っちゃった。10 年目にしようやく」

半ば呆然とする私を心配そうに覗き込むレイン。久しぶりに——いや、もしかしたら初めて——胸が高鳴った。足元から天に向かってふわっと浮き上がるくらい多幸福感に包まれた。

しばし感動を味わった後、私は徐々に冷静さを取り戻していった。私の脳に長い間刻み込まれてきた熟考の習慣がふたたび活動を始める。

何のためにあの金髪は私をここに連れてきたのだろう。

異世界に行ったらもっと混沌とした剣と魔法の生活が待ってると思ってたのに、今のところ私がしたのは食っちゃ寝だけ。

それに、帰るにはどうすればいいんだろう。異世界に来たいとは思っていたし、帰れない覚悟もある程度はあった。だが、召喚した人間とコンタクトが取れないとは思っていなかった。用があつて召喚する以上、召喚士が傍にいたと思っていた。

「ねえ、レインはあの金髪のことなんか知らないわよね」

⑥>>⑧⑥

「知ってるわけないか。あなたは襲われてただけだもんね。それにしてもあの男誰なの？警察に言わなくていいの？警察くらいあるでしょ」

レインは首を傾げる。私はため息ついて、「今いる所を教えて」とまた手を取る。レインは今度は素直に応じ、地図の中心より上の部分を指した。

ふうん、大陸の国か。島国でも半島でもないみたいね。しかもレインが指差してるのは国境線の範囲の中で考えるとだいぶ上の方ね。ってことはこの辺りは内陸になるわね。東は地続きで、西は何か国か挟んで海か。

それにしても、この国の地図なのにこの国が地図の真ん中にないのね。もしかして地球と違ってこの世界では地図を描く際の中心が国際的に決まっているのかもしれない。

地図の中央部が赤道だとしたら、北緯はわりと高いわね。地球でいうとイタリアかフランスくらいかな。うん、そういえば西洋によく似てる。

この国がある大陸が一番大きいみたい。ユーラシアに当たるわけね。この国はその大陸の西端だから、やっぱりイタリアかフランスに当たりそうね。この指の位置からすると内陸だから、恐らくここは南仏辺りね。

この地図を見る限り、確かに小麦がメインでもおかしくないわね。さっきのオレンジジュースはパルプと種が入ってた。それに、新鮮だった。果樹栽培が盛んなのかもしれない。バターも上等だった。酪農も盛んか。どうやら一次産業の商品が新鮮なうちに入ってくる環境にあるようね。

家の中に悪臭はないし、汚れてもいない。洗面所も近代化されている。トイレも昨日見たが、日本と同じく洋式の水洗だった。流石に TOTO とは書いてないが。ともあれ、剣と魔法の世界でないことは確かだ。意外と現代の日本に近いのかもしれない。

「で、この国の名前は何ていうの？」

レインの指を地図に軽く押し付ける。

「国、国」

Ⓔ--.....>δ -ℓαδ -ℓα eℓ -ℓℓ-Z-ℓℓⒺ

「ごめん、何？っていうか、ト？ト？ここ、この国、ト？ト？」

Ⓔ-ℓℓ-Z-ℓℓ, -ℓℓ-Z-ℓℓⒺ

「アルバザード？」

レインは頷く。それ、国名なの？それともこの県？あるいは町？ていうか県なんてあるのかな……。するとレインは国境線をなぞり、Ⓔ-ℓℓ-Z-ℓℓⒺ と言い、その後国境線付近に書かれたアルバザードの文字を指差す。

本当だ、アルバザードって書いてある。つまり、この国はアルバザード。そしてレインの指している地名は……-ℓℓ-。アルナ、これが地名ね。

「アルナ？」

レインは頷く。そして奥に引っ込み、地図帳を持ってくる。あるページを開いて見せてくる。それはアルバザードの拡大地図だった。そこにはアルナも載っていた。県名か町名かは分からないが、とにかくここはアルナというらしい。

私は床を指しながら Ⓔ-ℓℓ-δⒺ と聞く。するとレインは Ⓔℓ-, -ℓα eℓ -ℓℓ-Ⓔ といった。さしずめ「そう、ここはアルナよ」といったところだろうか。そうすると「ここ」はアトゥということになる。試してみよう。

私はカテゴリーと書かれたところを指差し、Ⓔ-ℓα eℓ ℓ-ℓeeδδⒺ と聞く。すると Ⓔℓc-Ⓔ と言う。多分、アトゥは「ここ」でいい気がしてきた。もっとも、アトゥは「この国は」という意味かもしれないし、別の機能語の類かもしれないが。

もう少し試してみよう。世界地図全体を指でくるくる指し、Ⓔ-ℓα eℓ ℓαδⒺ と聞いた。すると Ⓔ-ℓol-ℓⒺ という。アトラス……それは世界という意味か、あるいはこの星という意味か……。

しかし、アトゥは本当に場所を指すのだろうか。自分の本を指差し、Ⓔ-ℓα eℓ ℓαδⒺ と聞いた。すると Ⓔℓee, ℓee, eℓ -ℓα,, ℓα eℓ lecⒺ という。さしずめ「ちがうちがう、エン・アトゥ。これはレイ」といったところか。

恐らく本はレイだろう。否定されてエン・アトゥと言われた。何のことか分からないが、やはり場所でない本にアトゥは使えないようだ。逆に言えばアトゥはやはり場所を指すの

アトゥは国だけでなく街にも世界全体にも使えた。では海は？一番の大洋を指し、[㊦]_aeC Cɔδ[㊧] というと、[㊦]V-ʌ[㊧] という。ヴァルクというらしい。うん、やはりアトゥと言えるようだ。多分……多分だが、アトゥは「ここ」なのではないか。

$$\mathbb{G}_a \text{ est } \mathbb{C}^* - \text{invariant}$$

၆၃-၂၂၁၄ ဇာ eဇ် <ဇ- လ၅-လ, -ဇ၅-၂,, -ဇ်ဇ၅-၂, <ဇ- လ၅-လ၆

$$64-, \langle c- \wedge \varphi- \wedge e \vee - \vee \varphi- \vee \rangle, \vee e \vee \langle c- \vee \varphi- \wedge e \vee \vee \varphi- \delta_6$$

「あ、いや、人称代名詞に置き換えないでほしいのよね……。lec ʌcoʌδ lec lecʌδ」

ⒺⒶ-, 7lel <ccΛ- ㄱᄇᄆ

「え、何コレ？」

分厚いハードカバーの本だ。中を見るとぎっしり文字が詰まっている。それはまるで辞書のようなだった。

なるほど、これは辞典ね。アルバザードの国語辞典か。

背表紙を見ると、">el 799, -ㄹᄆ-Z-ㄹᄆ"と書いてある。見たことない3文字はあの壁の表にも書いてある。

ところで、背表紙にアルバザードと書いてあるのはどういうことだろう。ふつうここには出版社の名前や辞書の名前が書かれるはずではないか。

レインはもう1冊の辞書を手渡した。少し埃を帯びている。背表紙には同じように書いてあるが、"7alc7lel"という文字が際立っていた。中を見ると、先のものより字が大きく、絵が多い。説明も短く、見やすい。

これは……ラーナーズ用の国語辞典？あるいは……子供用？

レインはページを捲り、私に差し出した。そこには人体の絵が載っていた。そしてページ毎に名前が付いていた。なるほど、これを教材にしろということか。これはいい。

なるほど、目は cΛ7 で耳は ㄹe> で……。

見入っていると、レインは Ⓔㄹᄆ cΛᄆ と行って絵の人体の指を指した。

「ん？レン・インって何？ㄹᄆ cΛ eㄹ ㄹᄆᄆ」

するとレインは人差し指を目のところに持っていった。そして本に向かって指を動かし、目線を描いた。どうもレン・インで「見る」とかそういう意味らしい。目がインスなので、近い感じがする。となると、「見る」はインのほうだろう。ではレンは何を意味する？

Ⓔㄹᄆ eㄹ ㄹᄆᄆ

ⒺΛᄆㄹ ㄹᄆㄹ - ㄱᄇᄆ 7al ㄱᄇᄆ cΛ ㄱᄇᄆ...ㄴc< 7ᄆㄹᄆᄆᄆᄆ

レインはうーんと唸って、立ち上がる。てくてくと歩き出し、ⒺΛᄆㄹ la7ᄆ と行う。ルック？歩くとかいう意味だろうか。

次にその場走りをして、ⒺΛᄆㄹ le<ᄆ と行う。レフは走るだろう。

続いてレインはお笑いの一人二役のコントのように、自分に向かって Ⓔㄹᄆ le<ㄹᄆ と行なった。そして言われた側の役になり、今度は Ⓔ-ㄴ, -Λ le<ㄹᄆ と言い、一生懸命走っているフリをした。

えーと……ㄹᄆ というのは、どうもこのコントから察するに、命令なのだろう。ㄹᄆᄆ とい

うのを聞いて μe が出てきたわけだが、 μe と $\mu e\Lambda$ の違いは何なのだろうか。

試しに言ってみよう。

⑥ $lec\Lambda, \mu e\ le<\textcircled{\scriptsize\text{e}}$

するとレインはふたたび走り出した。

「ああ、なるほど、命令のようね」

⑥ $uc\alpha\Lambda, \textcircled{\scriptsize\text{e}}\mu e\Lambda\cup -\cup e\Lambda\ \mu e\ \textcircled{\scriptsize\text{e}}\mu e\Lambda,, \mu e\Lambda\ le<, \mu e\Lambda\ le<\textcircled{\scriptsize\text{e}}$

「レン・レフ？そっちのほうがいいのね？ $\mu e\Lambda\ le<$ 」

するとレインはまた走り出す。小さな子供が公園で遊んでいるみたいな感じだ。

うーん、ごめんね、食後に走らせて。

さて、歩くは $la\textcircled{\scriptsize\text{e}}$ だったわね。

⑥ $lec\Lambda, \mu e\Lambda\ la\textcircled{\scriptsize\text{e}}$

するとレインは歩き出した。やはり $\mu e\Lambda$ は命令か。

⑥ $h_{33}, \Lambda- -\Lambda c,, <c-\Lambda\cup -,, \textcircled{\scriptsize\text{e}}\mu e\cup, \Lambda\alpha\Lambda\ \cup-\cup -\cup \textcircled{\scriptsize\text{e}}\mu e\textcircled{\scriptsize\text{e}}$

レインはペンを取ると、書く真似をして $-\cup\textcircled{\scriptsize\text{e}}$ と言った。どうやら「書く」はアシュトというらしい。

次にレインはペンを机に置き、 $\textcircled{\scriptsize\text{e}}-\cup\textcircled{\scriptsize\text{e}}\cup-\textcircled{\scriptsize\text{e}}, -\cup\textcircled{\scriptsize\text{e}}\cup-\textcircled{\scriptsize\text{e}}\textcircled{\scriptsize\text{e}}$ と何度も繰り返しながらペンを取ろうとした。

そしてペンを握り、紙にペン先を付けると、今度は何度も $\textcircled{\scriptsize\text{e}}-\cup\textcircled{\scriptsize\text{e}}\ \textcircled{\scriptsize\text{e}}\textcircled{\scriptsize\text{e}}$ と言った。

次に書きながら $\textcircled{\scriptsize\text{e}}-\cup\textcircled{\scriptsize\text{e}}\mu\textcircled{\scriptsize\text{e}}$ と繰り返した。

どうもアシュトのバリエーションのようだが、動作との兼ね合いを考えると、主語に応じて活用しているというより、むしろ動作の段階に応じている。これはさしずめアスペクトの説明だろうか？

レインは書き終わってペンを離すと $\textcircled{\scriptsize\text{e}}-\cup\textcircled{\scriptsize\text{e}}\textcircled{\scriptsize\text{e}}$ と言った。つまりこれが完了？

そして書き終わった $lec\Lambda$ という単語を指差し、 $\textcircled{\scriptsize\text{e}}-\cup\textcircled{\scriptsize\text{e}}\mu\textcircled{\scriptsize\text{e}}$ と言った。

今までの「書く」に対する5つのアスペクトということだろうか。間の3つは分かる。

開始とその過程の経過と完了だ。だが最初と最後の2つは何だろう。

書く前ということは、書こうとすること……日本語学でいうところの将前相か。

では最後のは？書き終わったものを指差して $-\cup\textcircled{\scriptsize\text{e}}\mu$ とは何か。完了後ということは、その動作の結果が継続していることを指すということだろうか。段階としてはそれしか可能

性がない。つまり、継続相とでもいうべきものか。

私はレインがやった言葉と動きをすべて再現してみた。すると 5 つの相についてすべてレインは頷いて肯定した。やはりこれは相——アスペクトのようだ。言語学をやっていないければ、そして異世界に行くことを想定して生きてこなかったら、こうまでスムーズには理解できなかっただろう。勉強しておいて良かった。

いま、アスペクトを 5 つ教わったが、実際によく使うのは $-u\alpha\mu$, $-u\alpha c$, $-u\alpha e$ の 3 つだろう。もっとも $-u\alpha$ （書く）の場合は $-u\alpha e$ （書く）はあまり使いそうもないが、座るなどの場合は「座っている」という意味でよく使いそうな気がする。

ふむ、しかもよく使いそうな相だけ動詞語尾で示し、ほかの相は副詞で示すのね。そのことを見ても、やはりこの 3 相をよく使うということが想像されるわ。

満足した顔のレインは時計の絵を書いた。柱時計はいま 8 時。絵も 8 時を指している。レインは $\alpha\mu\alpha$ とやった。時計はメルクだから、トゥルは時計ではない。さしずめ「今」と言いたいのだろうか。レインはしきりに柱時計と時計の絵を見比べているので、恐らくそうだろう。

次に 6 時と 10 時を書いて、 $\alpha\mu e$, $\mu\alpha c$ と繰り返した。 $\alpha\mu$ が現在だとするなら、 μe が過去で、 $\mu\alpha c$ が未来ではないか。

レインは立ち上がってパンを一切れ取ってくると、口に入れて $\alpha\mu e\alpha\alpha\mu\alpha$ とやった。なるほど、それが食べるね。私は面白がって席を立ち、レインを引っ張る。台所でコップを取って蛇口から水を取り、飲む。 $\alpha\mu e\alpha\alpha\mu\alpha\delta\alpha$

$\alpha\mu\alpha$, $\mu\alpha\alpha$

ふむ、食べると飲むは同じ単語なのね。不思議な言語だわ。

ところで、お水はまずくなかったな。むしろ、おいしい。お腹を壊すということはない……と期待する。

レインは私を居間へ連れ戻す。そして先ほどの 8 時の絵を指して $\alpha\mu e\alpha\alpha\mu\alpha$ とやる。次に 6 時の絵を指して $\alpha\mu e\alpha\mu e\mu\alpha$ 、最後に 10 時の絵を指して $\alpha\mu e\alpha\mu\alpha c$ とやる。

うーん、過去・現在・未来と時間が進んでいて、それらが順に $\mu e\mu$, $\alpha\mu$, $\mu\alpha c$ ……そしていまこの時計に準えた「食べる」のバリエーションが $\alpha\mu e\mu\alpha$, $\alpha\mu e\alpha\mu$, $\alpha\mu e\mu\alpha c$ 。つまり、これらはテンスを表わすということになるわね。順に食べた、食べる、食べるだろう……みたいな感じなんだろうな。

未来形も独立した時制なのね。英語や日本語だと未来形は未来形として独立していないから、アルバザード語はフランス語の単純未来に近いものがあるわね。

レインは紙に $\text{ue}\Lambda \text{ JeJ} = \text{ue}\Lambda\text{-}\text{C}$ と書いた。

「これは……イコールの記号かな。地球のに似てるけど、上の棒がちょっと短いみたい」

ふむ、過去形は動詞語尾の -C を使って表してもよいということか。確かに過去形はよく使うから、短く表せたほうがよさそうね。

あと、現在形は $\text{Ca}\mu$ のようだが、先ほどの歩くや走るの例を見ていると、どうも $\text{Ca}\mu$ をいちいちつけなくても現在の意味になるようだ。

「うん、テンスとアスペクトは分かったよ。わりと簡単な仕組みで助かったわ」

レインが何か言おうと息を吸い込んだとき、玄関のドアがコンコンとノックされた。私たちがいる居間は玄関のドアを開けた目の前だから、ノックの音はよく聞こえる。ずっと立ち上がると、レインは玄関に近付く。

$\text{Ca} \text{ eC } \text{-}\Lambda, \text{lec}\Lambda\text{C}$

$\text{CeC}\text{C}\text{C}\text{C}\text{C}$

意外そうな声で玄関を開けるレイン。すると 20 代半ばと思しき男性が、木で編んだ籠を手にして入ってきた。

$\text{C}\text{lc-}\text{C-}, \text{lc}\text{C}\text{el}, \text{Ca} \text{ eC } \text{Ccc}\Lambda\text{-} \text{C}\text{C}$

男性は果物のいっぱい入った籠をレインに渡すと、ドアを閉める。10cm くらいありそうなツンツンしたこげ茶色の髪に手櫛を入れると、彼はベージュのトレンチコートを脱ぎだした。

$\text{C}\text{lc-}\text{C-}, \text{Jee } \text{Je}\Lambda\text{C-}\Lambda\text{C } \text{C}\Lambda \text{ Ca } \text{V-}\Lambda\text{C}$

ほう、この世界にもトレンチコートがあるのね。あれは第一次世界大戦のたまものだと思っていたけど、地球と異なる歴史がある世界でも結局人類は似たような服を開発するのねえ。

男性が肩口までコートを脱ぐと、レインはそっと肩に手をやって脱がしてやり、手元のポールハンガーにかけてやった。私はそれを見て、恐らくこの人はレインの彼氏なのではないかと思った。

$\text{C}\Lambda\text{C}\Lambda \text{ }\Lambda\text{-}\text{C } \text{C}\text{Ca} \text{ -}\mu\text{C}\mu \text{ Ccl}\Lambda\text{C-}\Lambda \text{ C-} \text{C } \text{C-}\text{C} \text{C} \text{C}\text{C}\text{C}$

$\text{C}\text{C}\text{C}\Lambda \text{ -}\Lambda\text{C}\text{C } \text{-}, \text{C-}\text{C } \text{Ca } \text{J-}\text{C}, \text{-}\Lambda \text{ C-}\text{C } \text{-}\text{Ca } \text{Ccc}\Lambda\text{-} \text{C}\text{C}, \text{-}\text{C}\text{C} \text{C} \text{C} \text{C}\text{C}\text{C}\text{C } \text{C-}\text{C}$

⑥....⑥

⑥hec, -ΛΛ ㇏e—⑥

言いながら、男の人は居間に目をやり、私の存在に気付いた。そして私が視界に入った瞬間、⑥ᵛᵃᵛ とやや驚いた声を上げた。

⑥ᵃᵉΛᶜ-Λᶜ ᵕᵃΛᶜ, -Λ ᵉΛ ᵗ-ᶜᶜ-ᶜ ᶜᶜ ᵗ- -ᶜᵃ,, >ᶜᶜ ᵗᶜᶜhc -Λ -ᶜ ᵗᶜᶜle⑥

突然、彼は執事がやりそうな格好で胸に手を当ててお辞儀をした。なんだかよく分からないが、友好的な感じには違いない。

私はどう返事をしたらいいものか分からず困った。恐らく、私が異世界人であるということは悪戯に周りに知らせるべきではない。余計な混乱を招くからだ。それに、今のところこの世界の人はレインしか知らない。異世界人に寛容なのはもしかしたら彼女だけかもしれない。

「あむ……」

私はレインがやるように口ごもって見せた。男性が気付かない程度に目を動かしてレインを見ると、勘の良い彼女は気付かれないように助け舟を出してくれた。レインは彼の後ろでスカートをちょいと上に持ち上げて膝を軽く曲げるポーズをしていた。英語でいうカーツィのポーズだ。洋画で貴婦人がよくやるポーズだ。

立ち上がってカーツィをすると、男性は⑥-ᶜᵉ, -ᶜᵉ -ᶜᵉᵉ>ᵗ,, ᵉᶜᶜᵗle⑥ と言った。私は微笑をたたえながらも、頭の中では脳を高速回転させて慣れない言語の文を理解していた。

恐らく彼はアルシェ＝アルテームスというのだろう。最後のエストルは恐らく「よろしく」という意味に違いない。

⑥ΛᵗΛ ᵉᶜ ᵗᶜᵗΛ, ᵉᶜᶜᵗle⑥

私の言い方があまりに自然だったのだろう、レインは目をまんまるにして私を見てきた。まるで「あなた本当は喋れたの？」と言いたげな顔だ。

なんのことはない。ただ彼の発音を正確に真似し、恐らく「よろしく」であろう単語を彼のイントネーション通りに返しただけだ。

⑥ᶜᵃ ᵉᶜ ᶜ>ᵕᵃ ᵗᵉᶜ ᶜᵉᶜΛ >ᵉᶜᶜ ᵕᵉ>-ᶜ> - ᶜ-,, ᵗᶜᶜΛᶜ, -Λ ᶜᵃΛ-ᶜ -ᶜᵃ ᶜ-Λ- ᵗᶜᶜᶜ ᶜᵃ - ᵗᵉᶜᶜ,, ᵗᶜ ᶜᶜ ᶜᶜᶜ
ᵉᶜᶜ ᶜᵃ, ᵕᵗΛ -ΛΛ ㇏e ᶜᶜ-ᵕᶜ ᵗᶜᶜᶜᶜ⑥

困った、何一つ分からない。男性はまったく手加減ない速度で話しかけてくる。レインが今までいかにゆっくり話していたくれたかが分かる。

チラとレインを見ると、彼女は小さく頷いていた。私は日本人お得意の曖昧スマイルを

浮かべつつ、おしとやかで無口な女性を装ってゆったりと頷いた。

“*ḡcΛ e(ṽ, leΛ- ṽcμ >el leΛ ṽ-ṽ,, ṽ> ṽḡa >ca Λ- ē-Λ ṽ- leΛ-,, Λ>Λ ṽ ṽa >ṽṽ ṽcṽṽ*

レインが何か男性に言うと、男性は笑顔で “*ḡḡ-, ṽcḡa,, ṽ>Λ μeΛ <cṽ ṽ-ḡ*” と言い、コートを再び羽織って出て行った。

ドアに鍵をかけると、レインは居間の椅子に戻る。

「あの……今のアルシェって人は誰？あと、どうして出て行っちゃったの？」

“*h--,, Λ>Λ Λ-ṽ Λcṽ >cl ṽḡa Ocṽ ṽe μ-Λ - ṽ-,, leΛ ṽḡa e(leṽe ṽeμ,, h-c, ṽ- e(-μṽe, ṽ-ṽ-Λ Λ>-Λ ṽcṽṽe, <ceΛ ṽḡa -ṽ- ṽcl ṽa*

「えーと……ごめん、レイン。あなた早口に戻ってるよ。それじゃ聞き取れないって」

“*ḡcΛ-, Λ>Λ ḡcΛ-ṽ leΛ- ṽelṽ ṽ>ṽṽ e(ṽ,, Λ>Λ ṽ ṽ- ṽṽ ṽcl ṽḡa ṽe -μē-Λ, ṽeṽ ṽa e(ḡ-ṽṽ >cl ṽ- ṽccΛ- ṽ>- ṽaṽ Λ-,, ḡccΛ Λ>Λ ṽ-ṽ <-Λ -μṽ- ḡa <ecΛ ṽ-ṽ ṽa,, ṽeṽ, Λ>Λ ṽ-ṽ <-Λ <μeḡa*

互いに少しも通じていない気がする。通じているとすれば偶々同じことを考えているときだけだ。前途多難だなあ。

レインはまたアルカを教えることにしたらしい。突如寸劇を始めた。確かテンスとアスペクトまで教わったんだった。次は何だろう。

彼女は右を向いて “*ḡleΛ cΛ*” と言う。左を向いて、地図を見ようとして、 “*-ṽ, -ṽ eΛ cΛ*” と言って顔を手で覆った。

なるほど、読めてきた。これは「見るな」の芝居だろう。禁止は *leΛ* を動詞の前につけるようだ。

“*ḡaμ Λ>Λ μ-Λṽcṽ ḡeΛ, ṽ>Λ ṽeṽ, ṽ eḡṽ*

レインは私の本を取り、昨日書いた文字の表を指し、*ṽeṽ, ṽeṽ, ṽ-ṽ, ṽ>ṽ* という文字を歌詞にした歌を歌いだした。どうもこれは文字の覚え歌のようだ。面白い。

聞いてみたところ、音域が狭く、1 オクターブ以内で収めてある。また、4 文字ごとに 1 小節を取っており、計 5 小節で終わっている。綺麗にできた歌だ。これは面白いものを聞いた。

“*ḡaμ Λ>Λ >cṽṽcṽ*

「いま、私はミクスしたって言いたい？つまり、*>cṽṽ* が「歌う」ね。うん、分かった」

レインはこちらに手のひらを向け、 “*ḡμeΛ >cṽṽ*” という。え、いまのを？ムリムリ、いま聞いたばかりだし。

「テー、テー。むり」

㊦㇔㇗, ㇑㇗ >c㇗㇗ Vcl㊦

「ソンって何？何か接続詞的なもの？そういえば何度も文頭で出てるよね。残りは……「あなたは歌うヴィル」……分かんないよ」

㊦㇗㇗ >c㇗㇗ ㇗e㇗, ㇑-ㄱ㊦

「いやあ、やっ？って言われても」

㊦㇑-l, ㇑㇗ >c㇗㇗ Vcl㊦

どうということ？私がミクス・ヴィルで、レインがミクス・セン。テンスやアスペクトと同じ位置にヴィルとかが来ている。文法的には動詞にかかっているはずだから、アルバザード語のテンスやアスペクトは副詞なのだろう。ヴィルはテンスなどと同じ位置に来ているので、やはりこれも副詞と見るべきだろうか。

もうテンスやアスペクトは習ったし、肯定か否定の問題でもなさそう。そうだとしたら、他のモダリティになるわけだけど。私はミクス・ヴィルで、レインはミクス・セン。

そもそも、モダリティになるようなものは何がある？「歌いたい」と「歌いたくない」とか？そうか、希望か。

「なるほど、ヤーヤー。希望ね。私は歌いたくないけど、あなたは歌いたいといいたいのね」

㊦-lㄱ-ㄱ ㇗㇗㇗, >c㇗㇗ ㇗cc㇑㊦

「シートって何？」

㊦㇗㇗ >c㇗㇗, ㇑-l ㇑㇗ ㇗e㇗ >c㇗㇗㊦

「レインが歌って、ヤン……これも文頭で多く出るわね……何かの順接かな。で、私に歌ってくれ、と。つまり、一緒に歌いましょうってこと？」

でも歌えない。歌を知らないから。しょうがない、こうしよう。私は立ち上がり、㊦㇗㇗ ㇗cc㇑㊦ と言って歩くと、レインも歩く。よし、㇗cc㇑㊦ は「～しましょう」で間違いない。

ふうとため息をついたレインはきよろきよろして、パンを台所から千切って持ってきた。そして ㊦㇗㇗ e㇑ -㇑㇗㊦ と言う。私は頷く。レインはそれを地面に落とす。㊦㇗㇗ -㇑ -㇑㇗㊦

なるほど、このパンは通時的に美味しいが、落としたせいで今現在はまずくなったから、前はおいしかったと言いたいのか。-㇑ というのは動詞の過去形の語尾のようだが、単独で使うと繫辞——be 動詞の過去形にもなるようだ。

となると、繫辞と目されていた eC は間違いなく繫辞か。繫辞は動詞の中では特別な存在で、eC-C のようにはならず、単に -C になるのね。

⑥h-c, C_a ㊦< eC 4-->㊦

トゥ・ポフ？どういう意味だろう。直訳すると「これパン」だけど……。もしかして、代名詞の「これ」は形容詞にもなって、前置して「この」になるのかもしれない。そしたら、「このパンはもうまずい」という意味か。OK、OK。

⑥J㊦Λ, Λ㊦Λ ㊦eΛ ㊦cΛ C_a

ソンが「だから」か「そして」か何かだとすると……。 「だから私はこれをシェン・リン」。

レインは落としてないパンのひとかけを出し、 ⑥C-I C_a eC -C_㊦ と言った。

タルっていうのも接続詞かな？ まずいパンとおいしいパンの対比。 ってことは逆接かな。 C-I の意味は「しかし」が妥当。 ……でも「一方」かもしれない。

⑥J㊦Λ, Λ㊦Λ ㊦eΛ I-Λ C_a

ん、どういうこと？ 「だから私はこれをシェン・ラン」？

落としたまずいパンは「食べる+リン」で、落ちてないおいしいパンは「食べる+ラン」。
いずれにせよモダリティっぽいよねえ。

なんだろう……。希望、かな？ でも希望はさっき出てきた JeΛ じゃなかったかしら。じゃあ意思？ 意思かもしれない。ほら、「食べよう」とか。 多分そうね。

⑥C_a㊦, C_㊦a <elc> ㊦ <㊦e㊦a C_ea JeΛ/Vcl/I-Λ/㊦cΛ㊦

レインは辞書の背表紙の"㊦㊦"という字を指して ⑥C_㊦a c㊦㊦ Vcl,, Λ㊦Λ c㊦㊦ JeΛ㊦ と言った。
イスクとはどういう意味だろう。

⑥lecΛ, c㊦㊦ eC C_㊦㊦

⑥--, Λ㊦Λ ㊦-㊦ -㊦ C_eelVeC Λ-㊦

レインは文字の表を書き出した。

C ㊦

㊦ J

Λ >

V ㊦

< ㊦

㊦ ㊦

4 0

h l

μ l

Z S

- c

o e

「これは……何の表？」

レインは ⑥-----, llllllllllllllll, dddddddddddd⑦ と書いた。あえて日本語にすると「あ——、しゅ——（息だけ）、つつつ」という感じ。

レインは表の左列の - の字とし の字と ⑦ の字を順番に指差しながら、-⑦ という単語を一文字ずつ読む。そしていま指差した 3 つの文字を、今度は右の列を使って同じように順番に指差していく。

- が左列の場合、右列は c になっている。し が左のときは J が右で、⑦ が左のときは ⑨ が右になっている。目を追っていくと、それは c⑦ という 3 つの文字だった。しかし、だから何なのだろう。彼女はパズルをしたいのだろうか。

「や、私はイスクの意味を聞いてるんだけど」

と言ったところで、ふと気付いた。

「ん？イスクはこの表ではアシュトに置き換わるわけよね。で、アシュトは書く。じゃあ、イスクは……」

レインは頭を振って、⑥①② c⑦⑧ と言いながら、本を取ってぱらぱらページをめくって読む振りをした。

「まさか……イスクは読むなの？えっ……この表ってそういう意味なの？左列の単語を右列で置き換えると意味が反対になるってこと？」

⑥④② -①①- e⑦⑧ ⑦c⑦⑧ -Z ⑦② ⑦c⑦ ⑦⑧- <ec① -⑧⑥

レインは部屋に入っていく人の絵を描いた。

⑥② e⑦ ①-⑦⑥

次に出て行く人の絵を描く。

⑥④-① ② e⑦ ⑦c⑦⑥

そして表で ①-⑦ が ⑦c⑦ に変換できることを指で示した。

「入るが1-0で、出るが1-0ってことなのね。この表を使えば反対語が作れるんだ。すごい！」

ただ、この変換テーブルはすべての概念に適応しているわけじゃないわね。大きいのは $7-c$ でしょう？この表で変換すると、小さいは $9-c$ になるはず。でも小さいは $10-c$ って言ったもの。

あれ？でも JeA が希望だとしたら「あなたは読みたくない。私は読みたい」になるな…
…。変だな。違うぞ。何か違和感がある。

そうするとI-A, μ CAは「希望」と「希望しない」、という可能性も出てくるわね。落ちたまづいパンを食べたくない……意味が通る。無理はない。恐らくこれらは希望ね。なるほど、間違えてたわ。いや、その確証もないけれど。

私は単語を細切れに話す。レインも聞き取らせるために区切って話してくる。そうでないと言えない。いまだってギリギリようやくという感じだ。

⑥-....4-⑥ 本当は食べたくないが、授業だ。多分向こうは肯定を求めている。合わせよう。

食べたいなら、「じゃあこれをシェン・フレン」ってとこかな？これは……可能かな。JeA が能力可能で、<leA が状況可能かもしれない。中国語にこの区別があるようにね。どちらか確かめてみよう。

……もしかしたら $\leq$ は可能じゃないかもしれない。許可でもこの文だと意味が通る。そうだ。許可かもしれない。いったん許可のほうで保留にしておこう。

許可があるということは不許可もあるのではないか。わざと許可されないことをやってみよう。

落ちたパンを取り、⁶la eŋ ɔɔŋe と言いながら地面に落とした。行為のことをトゥと言えるか甚だ不安だが、いまは動詞の話をしているので通じるはずだ。

レインは察しよく「Yeah, maybe」と答えてくれた。よし、落とすはメットね。じゃあ…

台所に行き、皿を取ってくる。そして少し怒られるかもしれない不安とともに、⁶ΛαΛ>eC
 <leΛ h-∅86 と聞いた。首を振りながら、これは演技だと伝えつつ。

気持ちはレインに届いたようだ。レインは苦笑しながら“See, h-o, ya >e! ucl h-cl”と言った。ハオというのは分からないが、状況からするに「馬鹿ね」とか「しょうがないなあ」とか「何言ってるの」とか「当たり前じゃない」とか「当然よ」とか、そういった意味合いだろうか。絞込みはできない。

いずれにせよ皿を落としてはいけないと言われたようだ。なら不許可を意味する単語は ua ということになる。 ua が不可能を意味する可能性も残っているが、皿を落としてはいけないという例から考えると不許可のほうがふさわしい。

^၆h--, ငှာ့ eၣ် လဲလဲ, လဲလဲ

突然、感心したような声でレインがにこやかに語りかけてくる。褒められたのだろうか。レインは窓を開けに行った。風が入ってきて寒い。

၆၇၄၃ ၊-၂၁၂၇၈၆

「あなたはソルトをナしますか」と言ったのかな？

၆၂၁၂၇ ခု ဇန်နဝါရီလ

私が聞くと、レインは冷蔵庫からオレンジジュース、冷凍庫から氷を取ってきた。

⑥-*le, lɔcɔ-le*⑥ と言ってオレンジジュースを指す。語形と物から想像するに、「ジュース、オレンジジュース」と言ったのではないか。私は冷蔵庫に行き、チラとレインを見る。勝手に開けていいものか迷う。

$$64-, 1eeV, \langle Y_2 \text{ h} \rangle \langle 1e\Lambda \text{ lcc} \rangle 26$$

多分、冷蔵庫を開けていいよといったのだろう。やはり leA は許可のようだ。となると、

hɔ> が開けるか。

冷蔵庫を開け、ジュースを探す。あった、グレープジュースがあった。

㊦-Λeδ㊦

㊦ɥ-, -Λe....μeε-Λe㊦

なるほど、複合語の造りは簡単なようね。要はオレンジがリシックで、ブドウがレブ。
で、ジュースがアネか。

㊦h-c, ʀaʀa -Λe eʀ ʌccʀ., ʌccʀ㊦

んー、「ジュースはディート」って言いたいのかな。

㊦ɥ-Λ, Veʌʀ eʀ ʌɔμʀ㊦

氷を差し出すレイン。「そして氷はソルト」と言ったのね。

「ジュースはちょこ冷たくて、氷は冷たい」……と言いたいのかな？ディートはちょこ
冷たいで、ソルトは冷たい、かな。

あ、そうか、もしかしたら冷蔵庫のディートテムクのディートもそうかもしれない。っ
てことは……。

私は冷凍庫を指し、㊦ʌμʀʀe>ʀδ㊦と聞いた。するとレインは喜んでヤーヤーと言った。

なるほど、恐らく ʌccʀ は涼しいで ʌɔμʀ は冷たいという意味だろう。

待って、じゃあ「熱い」は何？

私はコンロに近付き、火を付ける。火を遠巻きに指差して何かと聞くと、<-c だと言う。
なるほど、火はファイか。ファイアに似てると覚えておこう。

㊦<-c eʀ ʌɔμʀδ㊦と首を振りながら聞く。この動作は私たちの中で「本当は答えを知って
て違うと思うってるけど、あえて聞くのよ」という意味で使われだしている。

㊦h-ɔ, ʀee, <-c eʀ h-μʀ㊦

ここでもまたハオだ。このような当たり前のことを聞いたシーンで出てくる。となると、
ハオは「当然」とかそういう意味になるのだろう。そして熱いはh-μʀ というようね。じゃ
あ、暖かいはなんだろう。

辺りを見回してポットからお湯を出し、カップに入れる。

㊦h-μʀδ㊦

㊦ɥ-㊦

そして水を少し足し、㊦ʀɔδ㊦と聞くと、笑顔で㊦>elʀ㊦と言う。

なるほど、これで温度の表現は覚えたぞ。それにしても、レインはなんて頭が良いのか

しら。

居間に戻ると、レインはふたたび質問をしてくる。

㊦㊦㊦㊦ ㊦- ㊦㊦㊦㊦

どうも「あなたは寒いをナしますか」と言いたいのではないか。㊦㊦㊦㊦ は冷たいのことだと思ったが、寒いと冷たいの違いはないのだろうか。

ところで、ナという動詞は何だろうか。思う、感じるなど、いくつか候補は挙がる。でも語形が短いから基本語だろう。繫辞ではないから動詞だというのは分かる。やはり思うや感じるの類か。あるいは好きか嫌いかといっているのかもしれない。

好きだとしたらこう試してみよう。私はジュースを取って、㊦㊦㊦㊦ ㊦- ㊦㊦㊦㊦ と聞いた。レインは「は？」という顔をした。どうもナは好悪には関係ないらしい。じゃあ、やはり思うとや感じるの類か。

㊦㊦㊦㊦ ㊦- ㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦

㊦㊦-, ㊦㊦㊦㊦ ㊦-㊦ ㊦- ㊦㊦㊦㊦

タンというのはなんだろう。構文も同じで内容も同じ。主語が入れ替わっただけ。となると、「～も」という意味だろうか。それとも強調とか反復を表わすのだろうか。

㊦㊦-, ㊦㊦㊦ ㊦- ㊦㊦㊦㊦

㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦- ㊦㊦㊦㊦㊦㊦

ん？デュ・ディアというのとは何か。あ、デュに副詞が付いているのか。窓が空いてて寒いので、「閉めたらどう？」的なことを言っているのだろう。おそらくデュは「閉める」で、ディアはなんというか……提案的な意味合いだろうか。

窓を閉めた。レインは何も言わない。問題なかったようだ。恐らく ㊦㊦- は why don't you の類なのだろう。では主語を ㊦㊦㊦㊦ にしたら shall I になるのだろうか。私はまた窓を開ける。レインは寒そうな顔をする。

㊦㊦㊦㊦, ㊦㊦㊦ ㊦- ㊦㊦㊦㊦

㊦㊦-㊦

㊦㊦㊦㊦, でいいのかな……まあ、あなたに合わせて使ってみるよ。㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦㊦ ㊦㊦- ㊦㊦㊦㊦㊦㊦

㊦㊦-, ㊦㊦㊦㊦

どうも良いようだ。窓を閉める。うん、ノン～ディアで shall I にもなるらしい。

㊦㊦㊦㊦㊦㊦

「セント？それがお礼の言葉なの？お礼の言葉はぜひ知りたいわね。さて、次は何かしら」

レインは台所に行き、コップを取ると ㊦-㊦ と書いた。そして水を流し、水流に向けて eㄥ
と言ひ、コップに水を汲んでその水を差し、また eㄥ と書いた。なるほど、水流でも留まっ
ていても同じくエルが水なのね。お湯はどうなんだろう。

ポットを開けて中のお湯を指し、エル？と聞いたらレインは頷いた。どうもお湯と水の
区別はないらしい。

㊦ㄥㄥ, eㄥ し- ㊦-㊦㊦

「ええと、「いま、水はコップをシャします」？シャって何？」

レインは居間に移り、机の上の本を指し、 ㊦lec し- eleㄥ㊦ と書く。もしかして、シャは
「ある」という意味の動詞なのか。ああ、なるほど、シャは目的語にそのまま場所を取れ
るのか。便利だ。

「ヤーヤー、分かったよ」

するとレインは台所に戻り、水を捨てる。

㊦eㄥ ㄥc ㊦-㊦㊦

なるほどね、ミが「ない」で、「水がコップにない」という意味、か。

レインは再度居間に戻り、私の本に絵を描く。水の入っていないコップといまの時刻、9時
だ。そして人間の絵をデフォルメして描く。棒人間のようないい加減な絵だ。でも胴体が
棒でなく縦長の細い丸になっていて、手足も丸でできているから、日本のものとは少し異
なる。

続けてレインは時計をいくつも描き、時間を進めていった。そして順に絵の人間をよた
よたさせていき、手で喉を押さえさせ、吹き出しの中に ㊦eㄥㄥ㊦ と書いた。未だに絵の中の
コップは空だ。

㊦lecㄥ, ㄥㄥ しㄥㄥ ㄥㄥ eㄥㄥㄥ㊦

㊦ㄥㄥ, eㄥㄥ ㄥㄥ, ㄥㄥ㊦

ん？「エンこれ」って何だ。あ、前にもこんなことあったな。いまテーって言われたか
ら……否定か？

私はパンを手取る。 ㊦lecㄥ, ㄥㄥ eㄥㄥ eㄥㄥㄥㄥ㊦

㊦ㄥ-, ㄥㄥ ㄥㄥ eㄥㄥㄥㄥ eㄥㄥㄥㄥ㊦

その後、レインは表を描いた。これまでの復習内容だった。私はレインの表を元に、日本語を交えつつ、独自の表をノートに作った。

・テンス

過去	現在	未来	通時
-ㄱ/ㄴeㄴ	ㄴaㄴ	ㄴcl	無標

・アスペクト

将前相	開始相	経過相	完了相	継続相
ㄴ-ㄱ	ㄴcㄱ	ㅇㄴ	cㄴ	eㄴ

将前相	～しようとしている	行為の開始時点よりも前の時点
開始相	～し始める	行為の開始時点
経過相	～している	行為の開始時点と終了時点の間
完了相	～し終わった	行為の終了時点
継続相	～した後	行為の終了時点よりも後の時点

・法副詞

勧誘 ～しましょう	提案 ～したらどうですか	許可 ～してもよい	不許可 ～してはいけません
ℓccʹ	ℓc-	<leΛ	ℓcΛ

希望 ～したい	反希望 ～したくない	可能 ～できる	不可能 ～できない
l-Λ	ʹcΛ	ʹeΛ	Vcl

命令 ～しろ	禁止 ～するな
ʹeΛ	ℓeΛ

ここで習った副詞は助動詞的に使われ、モダリティを示すものだったので、法副詞と呼ぶことにした。

レインはくりくりした目を大きく開いて私の書いた文字を見てきた。

そりゃ1画の表音文字を使ってる人間からすれば、「何てごちゃごちゃした非合理的な文字を使うものかしら」と映るでしょうねえ……。でも、漢字は漢字で凄いのよ。横長じゃないから省エネなのよ。なんて言っても分からないでしょうけど。

Ⓢlee, ℓccΛ,, ʹaʹa eʹ h-rΛ ʹ'eℓ ʹa-ΛδⓈ

文字を指差すレイン。不思議そうな顔で見ている。

「ん？ああ、これは私の国の文字よ。日本語っていうの。ʹa eʹ ΛchoΛʹɔ, ʹa eʹ ʹ-Λδc……わかるかな？」

Ⓢɔ>....かんじδ ʹa eʹ >ʹal - h-r> e ʹcℓ-ʹʹ- cΛ, <ceΛ ʹa-Λ eʹ cʹ-l <ecΛⓈ

顎に手を置くレイン。何かを考えているようだ。私は微笑むと、ひらがなで「しおん」と書いてみせる。

「lee, これが紫苑よ。ʹa eʹ ℓccΛ。ほら、最初のが「し」」

レインの手を取って「し」の上に指を持ってくる。

“Uc...δ Ca h-d 7c> 4aΛ U-l eC "Uc" e4bδ ΛcΛ b...Ca h-d e7J Veel 7c7 (c7Λθcl e,, 7c>.... Ca h-d l'eC 7cθ e hc7/Pecl/cΛC e7J cc >c-Λδ

「で、こっちが「お」ね。最後のが「ん」よ」

“h3>>, Ca h-d eC 7eθ cl -7C,, cC -> el -7C -7 Caδ

レインは私に何か聞いてくるが、私は分からないので苦笑して首を傾げるだけ。レインは両手を軽く前に出しておへそより少し高い位置で横に開いた。腕を回転させ、手の甲が見えていた状態から手の平が見える状態にした。欧米人が「やれやれ」というときにやる動作に少し似ている。

彼女はペンを紙に走らせると、私の書き順を真似て「しおん」と書いた。へたっぴだけど、初めてにしては上出来だ。

「すごいじゃない、レイン」

褒められたのが分かったのか、レインは照れくさそうに笑った。

続けて漢字とカタカナも教えようかと思ったが、混乱するだろうし、止めておいた。と同時に、日本語の表記体系が複雑であることに気付かされた。

外国語をやることで自国語がよく見えるようになるというが、まさに今それを実感した。たった 25 文字ですべてを表すこの言語は合理的といえる。それが優れているかは別として。

合理的といえば、活用や曲用がほとんどないところもそう。過去形に接尾辞の -C を付けるといった現象も、あくまで頻度の高い時制にしか現れない。フランス語みたいに代名詞ごとに動詞の活用形が変わることもないし、とても楽だ。活用は意味を伝える上で必要なものしかない。かなりコンパクトな言語だ。

なんにせよ学習しやすくてよかったわ。でも、異世界の言語ってこうなのかしら。ここはアルバザードっていうらしいから恐らくこの言語はアルバザード語というのだろうけど、ほかの国の言語もこんなに簡単なんだろうか。

「ねえ、レイン。アルバザード人ってほかの言葉も喋れるの？」

“Cδδ

「アルバザード語のほかにはどんなのがあるの？」

もちろんレインには通じない。「言葉」とは何と云えば良いのか。どうやって言葉という言葉教えてもらおうか。

「ねえ、レイン。「言う」とか「喋る」ってなんていうの？」

口の前で手をパクパクさせるが、レインは首を傾げるだけ。

「あー、あー。㇏㇏, ㇏㇏....㇏㇏」

㇏㇏, ㇏㇏, ㇏㇏, ㇏㇏ ㇏㇏㇏㇏

通じた……。どうもトは「何をするのか？」という疑問の代動詞になれるようだ。合理的な言語バンザイ。I am whating と言えれば英語はどんなに楽だろう。

とりあえず何か喋ることはレンスだと分かった。しかしこれは単に声を出すという意味かもしれない。私は文字の表を指でなぞった。

㇏㇏㇏, ㇏㇏, ㇏㇏, ㇏㇏, ㇏㇏...., ㇏㇏, ㇏㇏ ㇏㇏㇏

㇏㇏㇏ ㇏㇏㇏㇏ ㇏㇏㇏

どうやら音声だけでなく言葉を言ったときもレンスでいいらしい。speak, talk, say などの違いはないのだろうか。

また、思いがけず面白いことが分かった。この言語の文字はハルムというらしい。

㇏㇏㇏, ㇏㇏ ㇏㇏㇏ ㇏㇏ ㇏㇏㇏

これでいいかな？と思いつつ、>を指す。

㇏>㇏㇏, ㇏㇏ ㇏> ㇏㇏

やった。通じた。凄いぞ、私。簡単だぞ、この言葉。

私は耳に手を当てて、㇏㇏㇏ ㇏㇏㇏ と書いた。レインはこちらが知覚動詞を集めたいと分かったのだろう、苦笑して ㇏㇏㇏, ㇏㇏㇏, ㇏㇏ >㇏㇏ ㇏㇏ ㇏㇏ ㇏㇏ - ㇏> ㇏㇏ ㇏㇏ >㇏㇏ ㇏㇏ ㇏㇏ "㇏㇏ ㇏㇏ V㇏㇏ ㇏㇏", ㇏㇏ ㇏㇏ ㇏㇏ <㇏㇏ ㇏㇏ ㇏㇏ - ㇏> ㇏㇏ ㇏㇏ ㇏㇏㇏ といい、両手を両耳に当てた。聞くというジェスチャーはこうだと言いたげだ。私はすぐに真似をする。

㇏㇏㇏ ㇏㇏㇏

なるほど、聞くはテルか。耳がテムだから似ているな。

よし、流れを崩しちゃいけない。レインがこちらの意図を汲んでいる間に聞こう。

私はパンをくくん嗅ぎ、これは何という動作か聞いた。すると嗅ぐはトアンだという。鼻がトアだから似ている。

次に右手で左手を触る。すると触るはオジュだと教えてくれた。

レインはパンを口に入れ、舌を口の中で動かし、ショイトだと言った。味わうという意味だろう。

最後にレインはじっと黙って、急にハッとして ㇏㇏-V㇏㇏㇏ と書いた。何か思いついたのか。しかし何も言わず、その寸劇を繰り返す。このハッとする行為がナヴンだということは分

かった。だが、5 感には関係ない。いきなり話が飛んだなと思った。

結局何度説明されてもナヴンの意味が分からなかった。もしかして 5 感というのは日本人の数え方であって、アルバザードでは 6 感まであるのかもしれない。でも、何の知覚器官を使った表現なんだろう。分からない……。

まあいい、労力の無駄だ。これは放っておこう。

地球の地図を指す。そこに人を描き、レインがやったような吹き出しを作り、その中に「おはよう」と書いた。

ⓈlecΛ, la MeΛ ∪ ∪δⓈ

ⓈeΛ Jeμ,, la MeΛ ∪ ell ∪a-Λ JeCe,, -d, Ce ∪ ∪a h-d e ∪ ∪ "oo" eδⓈ

エン・セルというのは聞いた覚えがある。セルという動詞の否定形か。というと、この状況からするに、知らないとか分からないとか「さあ」とかそういう類だろう。

最後のセテはよくレインが言う言葉だ。多分モダリティを表わしているのだろう。

問題は ell ∪a-Λ だ。「あなたのエルド」だが、今の訳はおよそ「さあ、彼はあなたのエルドを喋っている」だろう。となると、エルドが「言語」なのではないか。「文字」という解釈もありえるが、「文字」はハルムだと既に分かっている。

私はアルバザードの地図の上にペンを持っていき、Ⓢ-∪ ∪leΛδⓈ と聞いた。レインは頷く。良かった。協力惜しみないようだ。そして人を描いて、吹き出しに Ⓢ∪oo∪o∪aΛⓈ と書く。今朝聞いた言葉だ。

Ⓢla MeΛ ∪ ell ∪a-ΛδⓈ

Ⓢq-, la MeΛ ∪ ell leΛ-ΛⓈ

「レナンって何？ leΛ-Λ e ∪ ∪δ」

ⓈleΛ-Λ....--, ∪V-....Ⓢ

レインは紙に人を描き、∪oΛ と描いた。そして横にもう一人描いて ∪∪a と描いた。そしてその 2 人を丸で囲んで leΛ- と描いた。なるほど、we のことか。

で、レナが「私たち」だというのは分かった。今問うたのはレナンだが、彼女はレナを代わりに答えた。恐らくレナンは「私たちの」に相当するのだろう。語形も似ているし。

Ⓢ∪oΛ....lecΛ, ell ∪a-Λ e ∪ ∪δ -Me-Z-MlelδⓈ

Ⓢ∪a ∪-Λ e ∪ ∪c-,, ∪-∪ ∪a e ∪ -μ∪-Ⓢ

ええと、「それも肯定」……と言ったのかな。ティアは正しいと訳したほうがいいよね。

「それも正しい……けど、それはアルカ」と言ったのね。で、この言語の名前はアルカっていうのか。-ル-δ」

㊦ㄥ-㊦

㊦elλ ㊦a-λ e㊦ -ル-δ㊦

㊦ㄥ-, -ル-㊦

やはりアルバザード語はアルカというらしい。では他の国はどうか。私はアルバザードの上にある ㊦ee㊦ㄥ- という国を指した。

㊦elλ e ㊦ee㊦ㄥ- e㊦ ㊦ㄥ㊦㊦

㊦-ル-㊦

㊦え、そうなんだ。じゃあ、elλ e --....hㄥaa㊦ㄥ e㊦ ㊦ㄥ㊦㊦

㊦-ル-., cl ㄥㄥㄥ -ル-㊦

㊦ん、じゃあねえ、もっと遠く行こうかな。elλ e >e㊦e e㊦ ㊦ㄥ㊦㊦

㊦ㄥㄥ, -ル-㊦

「え……？どの国もアルカなの？アルカってアルバザードの言葉って意味なのよね？」

その後、どの国を指してもレインはアルカとしか言わなかった。

そんなバカな……。世界中でアルカを使っているの？そんな……ありえない。エルドって本当に言語って意味よね？まさか……ありえない。ありえない。

英語だっていまは隆盛してるけど、世界のすみずみで使われているわけじゃない。いくら英語がワールドワイドになったっていっても、山奥の村まで行き届くわけがない。

仮にしたとしても恐ろしいほど方言が生まれ、もはや英語でなくなる可能性がある。日本人には冠詞や数詞は理解されにくいから、日本人が英語を話すようになれば恐らく冠詞や数詞の用法はいい加減になり、徐々になくなっていくだろう。

事実、英語は普及に伴ってドイツ語の持っているような格を失った。言語の合理化はピジン・クレオールには必然だ。

待って……もし、ある国がアルカを喋っていて、ローマ帝国やモンゴル帝国以上の大きさ、すなわち世界中に広がるほどの大きさを持っていたとしたら？それならアルカが全世界に普及しているのも分かる。

それに、もしそうならアルカが合理的な言語だというのも納得が行く。言語は普及するごとに簡略化され、体系化されるものだから。

もっとも、いくら簡略化されようと -ㄥ と cㄥ、すなわち書くと読むのような例は生ま

もしかしてアルカは人工言語なのではないか。エスペラントのような。そうだ、その手もあった。仮に世界が人工言語を採択したのだとしたら？

また、マイナーな言語を話す人がお金にも商売にもならない人工言語を勉強するだろうか。特に貧乏な国の人は生活がかかっているから、すぐにでもお金になる言葉を覚えようとするはずだ。観光地の英語のように。

もしアルカが人工言語だとしたら、世界に広まるはずがない。しかし、この合理性は自然言語ではありえない。どうということだろう。

でも、それを世界規模で広めるにはかなりの技術力が必要よ。地球では少なくとも無理。いまだに第三国では電話線さえ引かれていないし、日本とてインターネットが山奥にまで有線で届いているわけではない。

なのに、この世界では既に人工言語の普及が実現されているというの？いやいや、まだこれが人工言語と決まったわけではない。頭を冷やそう。

၆-၊ ၇၁၈၆

[illegible]

レインは私の本に何やら表を書き出した。そこには -A, C, la, Ca, le, Co などを書いてあった。

cʌc	-ʌ>	cl>	V-cʌ	ʌeʌ	<cʌ	Scʌ	ʌaa	-ʌc-
ʌa>	ʌe	cll-ʌ	Vel-ʌ	ʌel-ʌ	<cl-ʌ	0el-ʌ	ʌaaʌ-ʌ	>cl
ʌaʌc	ʌc	clʌʌ	Veʌʌ	ʌeʌʌ	<cʌʌ	0eʌʌ	ʌaaʌʌ	>cl

-ʌc-cʌc		-ʌ-ʌc-	ʌc-ʌc-	ʌa-ʌc-	el-ʌc-
	ʌa>	-ʌ	ʌc	<ʌe>:ʌa	el
				<ʌaʌ:ʌ-	
	ʌaʌc			<ʌe>:ʌa	
				<ʌaʌ:ʌe	

「これは……代名詞の表？」

私はじっくり分析した。まずは下の表だ。こちらのほうが知っている語が多い。アンが 1 人称でティが 2 人称なのは分かっている。彼がルウなので 3 人称。ということは、エルは 4 人称になる。アルカには 4 人称までであるのか。その意味は察せないが。

ルニは 3 人称から出てくる。トゥが「これ」で、レが「あれ」だ。となるとクムは「有生」でルニは「無生」ということだろう。

また、トゥにフレムと書いてあり、レにフロンと書いてある。-ʌc と cʌc のように、音が変換関係にあるようだ。ただし、語頭の く を除いてだが。となるとこれらは反対語なのだろう。

意味は……「これ」と「あれ」なので、フレムが「近い」でフロンが「遠い」だろうか。それはハッキリしないが。

彼はルーだと思っていたが、よく見るとラーもあるようだ。フロンが「遠い」だとするのなら、ラーは「遠くにいる彼」ということになる。恐らくルーは「近くにいる彼」の意味だろう。実験してみよう。

私は本に棒人間を描いて、ʌaʌ と言った。そして近くに棒人間をもう一人書いて、「ルウ？」と聞く。レインは肯う。今度は遠くに棒人間を描き、今度は「ラー？」と聞く。するとレ

アルカには「こ」「そ」「あ」ではなく、近いか遠いかの 2 つしかないのね。私にとってはややこしいな。物理的な指示ならともかく、代名詞は文脈指示や心理的な距離まで表すので、語法を覚えるのは難しそうだ。まあ、何語をやっても日本語と違うかぎり常に起こる問題だから我慢するか。

上の右端に -ᄃc- って書いてあるわね。指示代名詞だけ数が多いから別記ってことかしら。
ᄃol は「別記」とか「下記」を意味するのかもしれない。となると、恐らく -ᄃc- が「指示」
で、cʌʃc が「代名詞」に当たるのではないか。

じゃあ下の表は「指示代詞」と訳しましょう。問題は上ねえ。トが無生で「何？」だから……アスムっていうのは「疑問」か。そうすると、有生で疑問のネは「誰？」を意味するわけね。ちょっとネを実用してみるか。

「へえ、レインってユティアって苗字だったんだ？」

いや待てよ。もしかしてレインが苗字かもしれないじゃん。さっきのアルシェって人もアルシェが苗字だったのかもしれない。

しばし考えたが、私はやはりレインが名前でユティアが苗字だと判断した。

人名の配列はSVOなどの基本語順や、「～の～」という言い方の語順で大方決まる。日本語や中国語のように「AのB」、「A的B」という語順の言語の場合、ふつう苗字が先に来る。「A家のBさん」という意味が根底にあるからだ。

事実、上代の日本人はそのような名前を持っていたのではないか。山上憶良然り、柿本人麻呂然り。

逆に英語のような「B of A」の言語はJohn Smithのような語順を取る。スミス家のジョンという論理が根底にあるからだ。そしてアルカの場合、英語と同じ語順なので、レインはファーストネームだと十分予想ができる。

ただ、そもそも彼らが姓名を持てばの話だ。サダム＝フセインは名前と苗字ではない。フセインは彼の父の名だ。名に名を重ねているだけだ。だから厳密に言えばフセイン大統領というのはおかしい。そしてユティアというのがそうでないとは言い切れない。

Ⓔlee, ʔa ʔ-ʌ ʔcl ʔ-ʊʔ ʊeʔeʔ ʃ-leʔ ʔa ʔe ->-ʌZe ʌʊʌʊʔe

「え、何？一気に言われても分からないよ」

するとレインは紙に"lecʌ ʔaʔc-"と書き、並行するように一段下に「しおん ʔʔʔʔ」と書いた。"ʔ"はクエスチョンマークだろうか、あるいは伏字マークだろうか。どうやら私の苗字を知りたいらしい。

「初月よ、はづき。ʌʊʌ eʔ ʃcʊʌ h-Zʔc」

紙に「h-Zʔc (はづき)」と書いてあげると、へえという顔で頷いていた。レインは少しはしゃいだ顔で平仮名を写すと、5歳児みたいな字を得意げに見せてきた。

「しおん！しおん はづぎ！」

「いや、はづき……ね」

「はづぎ！」

「……」

放っておいて代詞に戻ろう。私はもう一度表を見た。

アルカの代詞は随分体系的ね。ʔa> が「有生」を意味するなら、ʌ-ʌ というのは「人」や「動物」を表すんでしょうね。ʌʌc が「無生」なら、ʔaʌ は「物事」という意味かしら。

レインは cl を指し、本に 5 人の人間を描いた。それらをすべて囲み、cl と言った。なるほど、cl は「全員」という意味か。そして 2 人だけ囲って Ve といった。これは「一部」という意味だろう。なるほど。つまり、全体と部分ね。

次は しe か。レインは一人だけ指差した。しe は「一人」を表わす代詞ってこと？ありえるわね。

そしてレインは他の人間にバツを付けた。つまり……しe は「特定の一人」ってこと？

私はやや首を傾けながらも頷いた。次はフィ。レインは目を瞑り、適当な一人を指差した。何が言いたいんだろう。任意の誰かであって特定ではないということかな？一応頷いておく。

次に、レインは台所からオレンジジュースとブドウジュースを持ってきた。

⑥しccΛ, ㄱᄇᄇ ᄇeΛ ㅈ-Λ 0elδ⑥

勘が鋭くなってきた。これは分かる。どちらが飲みたいと言いたいのだろう。つまり、0el はどちらかという選択を指すのだ。

ところで between と among の違いはあるのだろうか。私は冷蔵庫を開け、飲み物を探した。おあつらえ向きにリンゴジュースらしき黄身がかった白いジュースを見つけた。それを取り出し、机に先のと合わせて 3 本乗せた。

⑥lecΛ, ㄱᄇᄇ ᄇeΛ ㅈ-Λ 0elδ⑥

⑥ㅈ--., ㄴccΛ ㅈ-ㅈ ㅈccㅈ-Λe⑥

通じた。どうやら 3 つ以上でもいいらしい。0el は「どれ」で決定だ。

ところで、ラッシュというのは何だろう。

⑥ㅈ-ㅈ eㄱ ㄱccδ⑥

⑥--.....>>....ㄱᄇᄇ ᄇeΛ ㅈ-Λ ㄱcc., ㅈccΛ ㄱᄇᄇ ㅈ-ㅈ ㄱcc., ㅈ-Λ, ㄱᄇᄇ ᄇeΛ ㅈ-Λ -Λe., ㅈccΛ ㄱᄇᄇ ㅈ-ㅈ -Λe., ㅈ-Λ, ㄱᄇᄇ ccㅈ ㅈ-Λ lec., ㅈccΛ ㄱᄇᄇ ㅈ-ㅈ lec⑥

「つまり……「望む」とか「欲しい」ってこと？ㄴccΛ ㅈ-ㅈ le >elㄱ....ㄱc-δ」

⑥ㅈ-, ㄱc-, el ㅈeΛㅈ ㅈeΛ ㅈc-⑥

なるほど、ㅈ-ㅈ は「望む」でいいようだ。

ところで、今レインは「そう、正しい。あなたはそう言える」のように言ったと思われるが、このとき主語が ㄱᄇᄇ でなく el だった。「そう言える」のは私だけでなくこの世の誰でもだから、ㄱᄇᄇ を主語にしなかったのだろう。

4 人称の el というのはどうやら総称の you や they のような使い方をするのかもしれない。
フランス語の on に最も近いようだ。もっとも、on は 3 人称だが。

ᑭh--, ᑭᑭa -lΛ- Je V-l, ᑭcᑭΛᑭ

レインは代詞の表に戻ると、ᑭᑭa を指差した。

ᑭ-, ᑭee, ᑭcᑭ ᑭᑭΛ ᑭ-ᑭ ᑭ-ᑭ Je ᑭ-lᑭᑭ

何やら思いついた表情で代詞の表から目を離すと、レインは私の本に文字を書き出す。

0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9

これは……何？あ、辞書の表紙で見た字だ。

レインは手を握り、ユーと言った。次に指を 1 本立てて ᑭᑭ と言い、2 本立てて ᑭ- と言った。

そうか、これは数だ。ここでは人差し指から立てていくらしい。始めのがゼロで、次が 1 か。0 と 1 はアラビア数字と字の形が同じではないか。もっとも、後の字形は似ても似つかないが。

これらが数だとは分かったが、読みが分からないのでレインの吐息に耳を傾けた。それによると 0~9 は ᑭᑭa, ᑭᑭ, ᑭ-, ᑭc, ᑭ-l, ᑭcΛ, ᑭcᑭ, ᑭᑭl, ᑭeΛ, ᑭᑭᑭ というらしい。4 以降は順繰りに l, Λ, ᑭの子音が語末に付いている。

10 は ᑭΛ で、11 は ᑭΛᑭᑭ。100 は ᑭ-l で、1,000 は ᑭᑭc だそうだ。ややこしいことに 10,000 は JeΛ というらしい。日本語と違い、一万というとき ᑭᑭJeΛ とは言わず、単に JeΛ というようだ。

位取りは 4 桁ずつなので、日本語と同じようだ。桁区切りには'記号を使っている。例えば 12,345 なら 1'2345 と書いて JeΛ ᑭ-ᑭᑭc ᑭcᑭ-l ᑭ-lᑭΛ ᑭcΛ と読むようだ。

「数に関しては日本語と同じ数え方だから、私にはやさしいみたいね」

さて、そうになると代詞の ᑭᑭa というのは「ゼロ」すなわち「誰もいない」ということになるわね。英語の nobody みたいなものか。

よし、これで代詞と数については覚えたわ。もう何でもござれね。

さて、時間は……10 時か。それにしても、あの時計の字はなんなんだろう。

「ねえレイン」

ᑭᑭᑭΛ, ᑭeᑭ eᑭ -ᑭa--,, ᑭ- ᑭa....le,, ᑭ-, ᑭcᑭΛ, cΛᑭ

レインは本に男の人を 2 人描く。一人は筋肉モリモリでいかにも強そうだ。もう一人は背は同じだが貧弱そうだ。

“la eŋ VceΛ,, ʧ-Λ la eŋ cVΛ”

「ええと、これは強弱の話？強いがヴィエンで弱いがイーヴンってこと？」

レインは頭が良いので、きっと必要なものから教えてくれるに違いない。アルカに「マッチョな」という形容詞があるかどうか知らないが、それは基本語ではないから今は教えないはずだ。だからヴィエンは単に「強い」という意味だろう。

私は “ʧa eŋ VceΛδ” と予告してから、バンと机を叩いてみた。予告があったのでレインは驚かず、 “ʧ-, VceΛ” と言った。どうもヴィエンは「強い」で確からしい。精神的な強さのほうは例示しにくいので止めておこう。

“ʧa eŋ ʌelK,, ʧaʃ, ʧa ʔ-ʌcʔ eleΛ ʌe VceΛ”

「え？」

聞き取れず、私は首を傾げた。レインは机を叩くと “ʌoΛ ʔ-ʌcʔ eleΛ” と言った。

「叩くはバッドというのね、了解」

“ʧ-Λ, ʧa ʔ-ʌ-ŋ eleΛ ʌe VceΛ”

「あなたは机を叩いた、セ・ヴィエン」と言ったようね。ヴィエンは「強い」だけど、セって何かしら。多分「あなたは強く机を叩いた」と言いたいのだろうから、セ・ヴィエンで「強く」という副詞を作るのかもしれない。じゃあ、弱く叩いた場合はどうなるのだろう。

私は軽く机を叩くと、 “ʌoΛ ʔ-ʌcʔ eleΛ ʌe cVΛδ” と聞いた。レインは一瞬眉をひそめたが、 “eΛ eVcŋ” と言った。

彼女は私の本に “ʌoΛ ʔ-ʌcʔ eleΛ ʌe cVΛ” と書くと、 “ʌe cVΛ = ʌ'cVΛ” と書き加えた。

「ああ、なるほど。母音が連続する場合は ʌe の e が落ちてエリジョンするのね？」

“ʌe ʔcʌl Veʃʔo ol ʧa ʌ-ʌe Veŋ l'eŋ ʔcŋ c Veʃʔo....ŋeŋ ʧa eŋ ʌeʃ ʔccΛ- ʌel ʌoΛ ʌ-ʌ ʧa - ʧa ʔoʔʔo -ʃʔ- ʌʧ-....”

悩めるレイン。真面目な顔で考え込んでいる姿はなんだか愛らしかった。

「大丈夫よ、レイン。だいたい想像つくから。副詞は ʌe か ʌ を使うんでしょう？それより、ほかの副詞を教えて」

私は歩き出し、 “ʌoΛ laʔoʃ” と言った。

私はレインが頷くのを待ってから早足で歩き、⁶ΛαΛ Γαα-μδ₆ と聞いた。

Λολ Γου!ではなく Λολ Γου!だと言いたいようだ。

$\textcircled{0}\mu$ でなく $\textcircled{0}\mu$ になっているのが不思議だ。経過相には μ を付けるのではないのか？ $\textcircled{0}\mu$ だと $\textcircled{0}$ に μ が付いていることになる。

もしかして ㄆ のように母音で終わってる単語、つまり開音節の場合、 $\sigma\mu$ でなく μ を付けるのではないか。母音連続を防ぐのは日本語にはあまりなじみがないが、言語一般には広く見られる性質なので、きっとそういうことだろう。そういえば μe もそうだった。

私は早歩きをしながら改めて「*Λαλ ρομδ*」と聞いた。今まで副詞の話題をしていたので、レインはこちらの意図を汲んでくれたようで、「*ρყა la? Je ρ-ღ*」と軽快に答えてくれた。なるほど、速いは*タッシュ*ね。*ダッシュ*みたいと覚えとこ。

レインはすぐに書いてくれた。しかし、よく見るとレインが書いたのは"la la le l-e-l"だった。la la l ではない。そういえば今も la la l って言ったとき、ちょっと渋々な反応だったわね。l は経過相でいいのよね……？

呻きながらペンを回す。

「カズ？……あ、ペンのことかな。セフって何？」

レインはペンをくれと手を伸ばしている。あ、「渡せ」ってことね。MeA がなくても命令形になるんだ？ 英語と同じみたいね。

「ねえ、ア・ノンって何？ - ΛσΛ eℓ ℓσδ」

レインはペンを持つと、私のほうから自分のほうへ手で矢印を作りながらペンを移動させていく。

ああ、つまりア・ノンは「私に」という意味ね。「渡す」という動詞が取る目的語はペンで、その着点はアで表わされるのね。アは英語の前置詞 to みたいなものか。

⑥ΛαΛ Je< Γa - ΓΨa, eΓ, ΓΨa >cΛ Γa c ΛαΛε

「私があなたにこれを渡す」は「あなたはこれを私イ、ミシュする」と言ったのね？ミシュは渡すの反対語かな。「受け取る」みたいな。

じゃあいとはどんな意味？eΓの左辺と右辺が同じ内容を指してるんだから、「私はこれを貴方から受け取る」というのが自然な解釈ね。となると、イは奪格を表わす前置詞か。英語でいうと from ね。

「ほかに前置詞はどんなのがあるの？」

⑥>>...?eΛ, ΛαΛ Λ-Λ Λ-Λ Γα eΨα,, Ψ-, Γaε

レインは紙に"eΛΓ Λα-Λ eΓ lecΛ ΨaΓc-"と書いた。「私の名前はレイン=ユティアです」といったところだろう。名前はエストらしい。

そして"ΛαΛ eΛΓ Λα-Λ eΓ ΨaΓ lecΛ ΨaΓc-"と書いた。ΛαΛ, ΨaΓ とは何だろう。私が分からないという顔を見ると、レインはもっと文を簡単にした。

"ΛαΛ eΓ lecΛ,, ΛαΛ ΛαΛ eΓ ΨaΓ lecΛ,, ΨaΓ lecΛ eΓ ΛαΛ ΛαΛ"

いまは前置詞の話をしているのだから、探すべきは前置詞か。となると恐らくこのソルというのが前置詞で、主語を表わすのだろう。同じくユルも前置詞で、目的語を表わすのだろう。この例文を見る限り、ソルとユルは普段は省略されるが、文が倒置されると復活するようだ。

⑥lecΛ, ΛαΛ ΛαΛ Γ-Γ-Γ ΨaΓ eleΛ, Γc-δε

⑥Γc-, ΓΨa ΓeΛΛ JeΛ Γaε

「そう、そう言っているのよ」……ね。なるほど。やはりソルやユルは主格や対格を表わすと見てよい。英語にはない前置詞だ。今は倒置をしなかったが、それでもソルやユルを使うことができるようだ。

ところで、ソル格に節を取ることはできるのだろうか。

⑥ΛαΛ ΛαΛ eΓ lecΛ eΓ ΨaΓ Γc-δε

こういう言い方はできるのだろうか。レインは肯った。不承不承という感じではなくさも当たり前のように。良かった。

ΛαΛ は「私がレインであるということ」という節を取れるようだ。節を取れる以上、ΛαΛ は英語の前置詞とは性質が異なる。むしろ接続詞に近い。とはいえ接続詞と同一でもない。この品詞は別途名前を付けたほうがいいように思える。

私は-, c, ʝol, ʝal をまとめて4指で差しながら、⁶ʝa eʃ ʃoδ⁶ と聞いた。しかしレインは⁶ʝee, ʝee, ʝa ʝeΛʝ <-l ʝaʝa eʃ ʃoδ⁶ と修正した。ʝa の複数形はʝaʝa というようだ。

レインは思い出したように紙に書き足した。まず -Λ, ʝaaʝ と書いた。そして次の行にはΛoΛ, ʝaʝa と。

なるほど、ʝa の複数形は女言葉ではʝaʝa で、男言葉ではʝaaʝ なのね。うわあ……無生の代名詞にまで位相差があるのね。

私は再び-, c, ʝol, ʝal をまとめて4指で差しながら、⁶ʝaʝa eʃ ʃoδ⁶ と聞いた。

⁶ʝaʝa eʃ ʝe-⁶

「ペア？ペアっていうのね」

ペアは動詞の格を表し、節も取れる。となると、前置詞ではなく「格詞」とでも呼ぶべきものだろう。よし、ペアは格詞と訳そう。

⁶ʃcoΛ, cΛ⁶

レインは絵を描いた。自分と私の絵のようだ。それぞれの名前が書いてある。

ほう、絵が巧いのね。しかもデフォルメの仕方が日本の漫画みたい。こういうデフォルメ法があるということは、この国にも発達した漫画文化があるってことなんでしょうね。

絵の中の私たちは机に座って、家の中にいる。家には矢印が引っ張ってあり、ʝ- と書いてある。柱時計は10時を指している。

そして"lecΛ ʝeΛʝ -ʝʝ- oʝ ʃcoΛ ʝoΛ ʝel ʝ- ʝ- c> <eΛZel"と書いた。いまは格詞を教えたいのだろう。

⁶Oel eʃ ʝe-δ lecΛ⁶ と聞くと、レインはoʝ, ʝoΛ, ʝ-, c> を指した。

「意味はだいたい予想できるわ。『レインは紫苑と……辞書を使って……家で』……最後が分からないけど」

指で最後の"c> <eΛZel"を指す。するとレインはその下に"c> >cV 10"と書いた。ああ、時間のことか。10 といえばここでは時間しかない。フェンゼルというのは10時のことらしい。>cV というのはhourのことだろう。ということは、c> というのは時点を表わすのだろう。

まとめると、oʝ は随伴格、ʝoΛ は具格で、随伴者と道具は区別されているようだ。英語の前置詞より細かいな。数が多いのかもしれない……。ʝ- は場所格で、c> が時点格だろう。多分日常的によく使う格詞を挙げたに違いない。流石はレイン。

そのとき、レインの左手が淡い緑色の光を放った。どうやら腕時計が光ったようだ。や

おら左手を開くと、彼女は時計ではなく自分の手を見つめた。

何……やってんだろう。手相占い？……なわけないよね。

⑥--, cʌ eʌʌʌ ʌ-ʌ, hel, leʌ- leeʌ -ʌ c> ʌʌʌ

「ねえ、何見てるの？」

ところがレインの手を覗き込んだ私は「えっ！？」と言って口を手で覆ってしまった。彼女の左手にはアルカでびっしり文字が書かれていたからだ。一瞬の戸惑いの後に、私はそれがペンで書いたものでないことに気付いた。どうやら手首の腕時計から光が出て、それが手の平に照射されているようだ。

「何これ……腕時計じゃないの？」

彼女の手首に触れる。それは時計ではなかった。文字盤があるべきところは小さな画面になっていて、まるで超小型のケータイのようだった。そう、それは腕時計型携帯電話というべきものだった。

恐らく彼女が見ていたのはメールだろう。メールが入ってきたので読んだといったところだろう。どうやらこの国の科学技術は地球の上を行っているようだ。

「ねえ、ʌ eʌ ʌʌʌ」

⑥ʌ eʌ -ʌʌe ʌʌʌʌʌ

その機械はアンセというらしい。レインはぼちぼちと画面をいじると、手を閉じる。

⑥ʌʌʌ, ʌʌʌ ʌ-ʌ ʌʌ eʌ -ʌʌ- ʌʌ eʌ ʌʌ, ʌʌ leʌ- ʌʌʌ <-ʌ ʌ-dʌe ʌ-ʌ- -ʌʌ -ʌʌʌ

「え、アルシェ？それってさっきの男の人？彼がどうかしたの？」

レインは立ち上がると、私の手を引いて玄関へ行く。もしかして外に行くのだろうか。私はとっさに私の本とレインの辞書を掴んだ。お、重いです……。

玄関は日本家屋のように一段低くなっている。靴を履き替える場所があるようだ。そういえばレインは室内履きを履いている。スリッパのようなサンダルのような、そんな靴だ。

玄関には外履きらしき靴が置いてある。日本ともアメリカとも違う。日本では家の中で靴を履かない。アメリカでは家の中でも靴なので、ふつう玄関に靴を置かない。アメリカでは靴は服と似たような扱いだ。

アルバザードはその折衷というか、どちらでもない。室内で履く靴と屋外で履く靴を分けているのだろう。その結果、玄関に下駄箱があるのだろう。

⑥eʌ, hel, ʌʌ ʌʌʌ ʌ-ʌʌ

レインは私の足を見に来る。こっちは靴下しか履いていない。

⑥-ᄁeΛ, ΛoΛ,, >>....(e((ʔa (cl la0- l'e(>ʔa| - Λo-Λ oΛ (aJ,, ʔo> (ʔa ʔeΛ ʔol lc-lJ Λo-Λe

レインはサンダルを出してきた。これを履けということらしい。まあ、レインとはそんなに体格が変わらないし、足の大きさもみたところ同じくらいだ。サンダルなら大丈夫だろう。

サンダルを履いてみる。サイズは問題ない。ただ、サンダルでなければ入らなかっただろう。

レインは玄関を開けた。外は庭だった。花壇には多少花が植えてある。

レインは左手をドアにかざす。いま何をしたのだろうか。鍵はかけないのだろうか。そういえば、ドアに鍵穴がない。先ほどのアンセをかざしていたが、もしやあれが鍵なのだろうか。インテリジェントキーのようなものだと思えばよいのだろうか。

玄関を出て左手には椅子とテーブルがあった。庭で本でも読みながら腰掛けたいものだ。テーブルの上には透明なボウルがあり、表面がキラキラ光っている。中には水が入っているようだが、なぜか鏡が沈めてあって、それが光を反射している。あれは何だろう。

門までは数十歩。日本の住宅よりも広い。門は立派な造りで、アーチまで付いていた。アーチは私の背丈よりも高いところにある。

門を出て少し歩くとそこは通りに面していた。昨日の夜とは違って人っ子一人いない。ただ道路があるだけ。民家もあるが、人通りは皆無だ。まるで死んだ街のようだ。

空を見ると天気は良く、冬だというのに暖かい。時間がずれていなければ今は12月のはずで、寒いはずだ。ましてレインの地図からすると日本より緯度が高いはずなのだが暖かい。恐らく偏西風の影響だろう。西側は大きな海があったし、ここは内陸で大陸の西側だ。

しばらく歩くと大きな公園らしきところに着いた。ようやくちらほらと人影が見える。入ったところのベンチに誰かが座っており、こちらに気付くと立ち上がって手を振ってきた。

「あ、アルシェさんだ」

なるほど、彼に会うために来たのか。

「ねえレイン、私がいたら邪魔じゃない？デートなんでしょ？それに、私が地球人だってバレたらまずくないの？」

アルシェさんはコンパスの長い脚で颯爽と歩み寄ると、私とレインに笑顔をくれた。多

分 25 歳くらいだと思うけど、随分カッコイイ人だ。テレビに出ているイケメンよりもずっとイケメンだ。ウチのクラスの松本君よりもずっとイケメンだ。

見たところ、白人と黄色人種の混血児といったところだろうか。派手な顔ではないから、日本人の私から見てもそんなに違和感がない。

茶色い綺麗な髪が光に映え、薄い色の瞳が優しい視線をレインに送っている。スタイルも良いし、身なりも清潔だ。

うーん、こんな素敵な彼氏がいるなんて、レインもなかなかやるわね。

③>...⑥

彼は私の服をチラっと見ると、不思議そうな顔をした。

⑥c 7e Jcl <el7- <cΛ (a eC >elJelΛc-Λδ⑥

うむ、さっぱり分かんね。

「ごめん、レイン。もうごまかし効かないみたい」

両手を合わせてレインの前でお辞儀をすると、彼は少し驚いた顔をして目を開いた。レインは苦笑してアルシェさんに目をやると、ベンチに彼を誘導した。私もついていく。

⑥hec, la laΛ-J c 0el 7-lδ c laC-c-δ⑥

⑥CeL lecΛJ laaCδ Cee⑥

⑥h3>, >α elL laaC le laC-c-elL Ceμ,, C-l -Λ eΛ Λ- la eC c 7-CeeS CeL elL laaC,, <cΛ -Λ eC elL4al<-Λ, -Λ eΛ Jeμ elL laaC,, J--, >-Λ -Λ >-cJeJ elL eΛ lc CcJ αV- laC-c-elL, JαΛ -Λ L-μ la laΛ-J c Le 7-l e >-leC⑥

⑥-lCα, ΛαΛ -J eΛ Jeμ >eJ- 7clJ,, c> Cαlel, la laΛ-C Je μ> Y--VeZ 7α77α <-μ⑥

⑥h3θδ⑥

アルシェさんは素っ頓狂な声を上げたが、私の目を気にしてか、咳払いをして冷静な顔を装った。この辺りの仕草は日本人と変わらないのだな。

⑥ucΛ7, Le Vc7 Vell-C - μ- Λα-Λ c> Cαlel⑥

⑥Cαθ -l- la eC Aeθ⑥

⑥ΛαΛ eΛ Jeμ,, c> ΛαΛ V-Λlαμ 4a, la laΛ-C c <c- -lC 7α77α <-μ, -l7-C ΛαΛ,, Λα> ΛαΛ L--J <-Λ la l-Λ- f-lC LclcaJ⑥

⑥0ec0ec0ec, Cc 7a7 (a c> (aμ leL "<c- -lC"θ⑥

⑥4-, la μeΛJ Vcl -μ7- Je >eμ, lecJ-C Le 7-L- le ΛαΛ eΛ Jeμ,, c> 7cC, ΛαΛ Λ-C la eC la- ΛcαΛ

->-ΛZe, CeC la Ce Jo- Λ-ε

εh3>....ε

εΛoΛ lo la laΛ-Γ ΛoΛ I-Λ- V-Λo ΛoΛ c I- VcΓε

ε-IΓ<c-Λ....Λ-ε

アルシェさんは顎に手を当てる。神妙な顔つきを見るに、私の正体を知ったようだ。

εJcl> la laΛ-V-Γ, ΓcΓ, la loΓc JeΛ leJ -ΛJ ΛooΓoμδε

εΛoΛ Λ-Λ-(oμ -μΓ)- c 4aa,, Λo> la -IΛ- JeΛ la Γ-IcJ ΓcJ e,, λcΛ-, la -IΛ- Vcl ΛooΓ leΛ-Λ >cl
Ca eC Γ-Λ μ-Γ Λ-IΓ laε

εθ-JJo,, JoΛ -Λ Λ-l el< ΛoJ e> Λclle,, SclΓ, Jcl> la laΛ-Γ -Ca I-Λ- V-Λo Γc, JoΛ eJ la ΓoΓ
el< <c- e ΛoJδε

εeΛ Jeμ,, JoΛ la Γ-Λ Λ- θelJ oΛ Λe θcoΓ la - Ca <c- cΛ,, λccΛ, Ca eC Λ-Λ Λel la -IΓ-Γ IcVμo
Λo-Λ JccΛ-, Λo> ΛoΛ ε-IΓ I-Λ ΛclcaJε

εh3>>....>oΛ Ca eC <-IcJ Λel Γc -IΓ μecZ....ε

εΛoΛ Λ-Λ I-Λ <ecΛ - la, Λo> Γoμ <leΛ -I -Λe<δε

アルシェさんは ε4-ε と言うと、すっと立ち上がって歩き出した。レインは私の手を取ると、にっこり微笑んで歩き出した。どうやら話はまとまったようだ。何がどうまとまったのかは分からないが。

その公園はとても広く、中にはトイレやお店まであった。喫茶店があり、外にはテラスがあった。レインたちに連れられ、テラスの席に座る。前掛けを着たお兄さんがやってきて、注文を取る。また生アルバザード人だ。私はわくわくしながら観察した。

どうもこの国のウェイターも日本とそんなに変わらないようだ。汚れてもいいように前掛けを付けるという発想は異世界でも同じなようだ。日本だと注文を書き入れるための伝票や機械を持っているが、彼は手ぶらだ。注文は頭で覚えるらしい。

テーブルにはメニューがなく、ウェイターが小脇に抱えている。必要なら見せてもらうという仕組みのようだ。

私は最初ウェイターの態度に違和感を覚えた。どう違和感を覚えたのか自分なりに分析したところ、どうも私は彼がウェイターではなくアルシェさんの知り合いだと思ったようだ。メニューや前掛けでウェイターであることが分かった。

なぜ彼がウェイターに見えなかったかということ、恐らくその口調のせいだろう。日本人

の場合、客に対して地声では接しない。女性は高く、男性も高く喋る。また、態度も従順で、言葉遣いだけでなく口調も変える。喫茶店などは比較的態度が変わらないが、スーパーのやかましい「いらっしゃいませ」やコンビニの機械的な「ありがとうございました」やファーストフードのいやに慇懃無礼な態度は特に地の態度との差が激しい。

一方、アルバザード人は素なのだ。ウェイターはふつうの街中の人のようにアルシェさんに話しかけてきた。その言い方は丁寧だが、口調はアルシェさんと変わらない。彼らの態度は自然である。

意外なことに、アルシェさんはウェイターと 2, 3 言世間話らしき口調で何か言うと、それから注文らしき言葉を伝えた。

そうか、この国の人は気さくで自然なんだ。ウェイターも「忙しいんだから話しかけるな」という顔をしない。むしろ楽しそうにしている。こういう文化の違いを見ると外国に来たなという感じがする。

ウェイターが引っ込むと、レインは私の本をくいくいと引っ張り、勉強の再開を暗示した。

「え、ここでやるの？いいけど、デートの途中なんじゃないの？」

“C4a -lA-C Je (aV-l 9e- cA,, uc> 7eJ eC -M7c e6

レインは“lecA し- M-,, uc>A C-l し- M-,, JoA lecA/uc>A し- M-”と書いた。タンは「も」という意味のようだ。ここでの新出は「/」なので、レインはこれの説明をしたいのだろう。

「/」の意味は明白で、アンドだろう。つまり連言だ。読みはっというらしい。

また、レインはオレンジジュースとリンゴジュースを持ってきて、“C4a l-uc 0el8 lcJc7-Z >cc7”と書く。ミークというのがリンゴのようだ。「どっちが欲しい？」は分かるが、アズが不明だ。レインはオレンジとリンゴを交互に上げ下げし、“0el86”と聞いてくる。どうやらアズというのは選言らしい。or にあたるものだろう。

「ヤーヤー」

そろそろ「分かった」という語がほしい。ヤーしか言えないのは微妙だ。

レインは/と-Zを指し、“C(aC2 eC -M7c6”と言った。接続詞のことをアルキというのか。なるほど。

「ヤーヤー……。C2M, JoA MeAJ C>8 eA 4-」

6-, C4a MeAJ -uc -lA- c> C2M6

分かったときはアルナというのか。

紅茶が運ばれてきた。ここではコーヒーは飲まないのか。そういえば喫茶店なのにコーヒーの香りがしない。

アルシェさんは興味津々といった顔で私たちを見ている。

Ⓔ Je μal la eΛ Jeμ -μγ- cΛⒺ

Ⓔ leΛδⒺ

Ⓔ ϑa eϑ -しγ - し-し ϑeμ, lecΛⒺ

Ⓔ Jo- eδ ehehⒺ

はにかむレイン。しかし私は蚊帳の外。

Ⓔ 3θ, ΛoΛ し-し -し le ϑ-Λ eϑoⒺ

思い出したように言うレイン。彼女はスカートを履いた髪の長い人を描いた。女だということを強調しているようだ。そして猫の絵を描き、γeϑ と書いた。猫はケットというようだ。さらにレインは"ΛoΛ Jeμ >cΛ,, la JccΛ- γeϑ" と書いた。

シーナ……？ さっきも出てきた気がするわね。

Ⓔ JccΛ- eϑ ϑδⒺ

Ⓔ -....oV- ΛoΛ JccΛ- >ccγⒺ と言ってリンゴの絵を見て明るい顔をする。

次に虫の絵を描いて、嫌そうな顔をして Ⓔ ϑeϑ ΛoΛ JcΛ VelcZⒺ と言う。虫はヴェリーズというようだ。もしかして「虫が嫌い」と言いたいのか？ とすると、シンが「嫌う」で、シーナが「好き」という意味か。

Ⓔ lecΛ, ϑa JccΛ- lcJcγδⒺ

Ⓔ ϑ-Ⓔ

ちょっと好き嫌いのなさそうな語で試してみよう。

Ⓔ JoΛ, ϑa JccΛ--....lccϑe>γδⒺ

レインはうーんと首を捻って Ⓔ ScΛJ VclⒺ と言った。

「ジンス？」

Ⓔ ΛoΛ eΛ Jeμ Λ-Λ JccΛ- lccϑe>γ -ZⒺ

「エン・セル？ ああ、『知らない』 ってことね」

そりゃそうよね。冷蔵庫が好きかなんて聞かれても判断しようがないわ。となると、やはりこの語は好き嫌いを表わすみたいね。

⑥ ㄅㄆㄇ, ㄈㄍㄆ ㄅㄆㄇ- ㄆㄆㄇㄋ

⑥ ㄈ-, ㄆㄆㄇ ㄅㄆㄇ- ㄈㄍㄆ, ㄆㄆㄇㄋ

えへへ、と照れる。レインは穏やかな顔で照れもせず見てくる。好きという意味におおよそ当たっているとしても、意味合いが違うのかもしれない。語法の違いが一語一答式の翻訳に壁を作る。

⑥ ㄆㄆㄇㄋ と言ってレインは先ほど書いた"ㄆㄆㄇ ㄅㄆㄇ >ㄆㄇ, ㄆㄆㄇ ㄅㄆㄇ- ㄈㄍㄆ"という文の下に、"ㄆㄆㄇ ㄅㄆㄇ >ㄆㄇ ㄆㄆㄇ- ㄈㄍㄆ"と書く。上のとイコールだと言いたいようだ。

ということは.....I know a woman と She likes cats を言い換えたものだから、I know a woman who likes cats って言いたいのかな。日本語からじゃ分からないけど、英語からなら分かりやすい。というか構文がまったく同じね。つまりこの le というのは関係詞か。le は主格の関係詞なのね。先行詞が物の場合はどうなるのかな。

私は"ㄆㄆㄇ ㄆㄇ ㄆㄆㄇ le ㄆㄆ- eleㄇ"と書いた。⑥ ㄈㄍㄆㄋ と聞くとレインは肯う。先行詞の有生無生に関わらず、主格は le で良いようだ。

レインは"ㄆㄆㄇ ㄅㄆㄇ >ㄆㄇ, ㄆㄆㄇ ㄅㄆㄇ- ㄆㄆ >ㄆㄇ"と書き、"ㄆㄆㄇ ㄅㄆㄇ >ㄆㄇ ㄆㄆㄇ ㄅㄆㄇ-ㄆㄆㄇ"と書いた。

ははあ、これは対格の関係詞を説明したいのだろう。だが待て。主格も対格も le ではないか。もしかして格に関係なく le を使うのだろうか。だとしたらそれはもはや関係詞ではない。中国語の「的」と同じだ。どうもアルカには関係詞はないのではないか。文法的に見ると、この le は接続詞と呼ぶべきだろう。

次にレインは"ㄆㄆㄇ ㄆㄇ-ㄈ >ㄆㄇ, ㄆㄆㄇ <ㄆㄆ-ㄈ >ㄆㄇㄇ - ㄆㄆ"と書き、"ㄆㄆㄇ ㄆㄇ-ㄈ >ㄆㄇ ㄆㄆㄇ <ㄆㄆ >ㄆㄇㄇ -ㄆㄆ"と書いた。

「私は女を見た。私は彼女にリンゴを与えた」を「私はリンゴを与えた女を見た」にしたってことね。-ㄆㄆ というのは与格か。与格は - だと思っていたけど、ここでは -ㄆㄆ になっているわね。

今回は与格 -ㄆㄆ の目的語である >ㄆㄇ が先行詞に来ている。le は与格の関係詞の役目を果たしている。だが、主格や対格のときと同じく、le のままだ。やはりアルカに関係詞はないようだ。

面白いのは関係詞節中の動詞の時制が過去から現在になっている点だ。そこを指して念を押すように発音するとレインはティアと肯った。どうも書き間違いではないらしい。

アルカでは従属節の時制は主節の時制との対比で行われるようだ。リンゴをあげたとき

と女を見たときが同時な場合、従属節は現在形になるようだ。

では、もしリンゴをあげたのが女を見たときより前だったら？大過去はどう表現するの
だろう。

「レイン、『今日』って何ていうの？」

㊦㇗㇧

「ええと……確か過去は JeJ とか言ってたわよね。「過去」を名詞として使えるかわからな
いけど……」

私は " $\Lambda\sigma\Lambda\ c\Lambda\ \>c\Lambda\ c\>\ \text{㇗㇗}, \Lambda\sigma\Lambda\ \<c\text{㇗}-\text{㇗}\ \>cc\text{㇗} - \text{㇗}\ c\>\ JeJ$ " と " $\Lambda\sigma\Lambda\ c\Lambda\ \>c\Lambda\ le\ \Lambda\sigma\Lambda\ \<c\text{㇗}-\text{㇗}\ \>cc\text{㇗}$ "
を本に書いた。

㊦㇗㇧-㇧

㊦㇗㇧-㇧

なるほど、いまのところ仮説は正しそうだ。

レインは " $\text{㇗}\ e\text{㇗}\ \>c\Lambda,, \Lambda\sigma\Lambda\ \>c\text{㇗}-\text{㇗}\ \>cc\text{㇗}\ c\ \text{㇗}\ e\text{㇗}\ \>c\Lambda\ le\ \Lambda\sigma\Lambda\ \>c\text{㇗}-\text{㇗}\ \>cc\text{㇗}\ c\text{㇗}$ " と書いた。

なるほど、「彼女は私がリンゴを受け取った女だ」か。奪格にも le は使えるようだ。ただ、
 c が $c\text{㇗}$ に変わっているのが気になるところだ。先ほどは $-$ も $-I$ に変わっていた。もしかし
て、 c の原形が $c\text{㇗}$ で、 $-$ の原形が $-I$ なのかもしれない。

私は試しに " $\text{㇗}\ e\text{㇗}\ I-J\ \Lambda\sigma-\Lambda\ le\ \Lambda\sigma\Lambda\ \text{㇗}-\text{㇗}\ c\text{㇗}\ e\text{㇗}\ e\Lambda\ \text{㇗}\sigma\Lambda$ " と書いて、バンと机を叩いた。レイン
は ㊦㇗-, ㇗㇗-, ㇗㇗ $e\text{㇗}\ le\text{㇗}\ e\text{㇗}$ と言った。どうも褒められたような空気だ。

さて、関係詞に当たる接続詞も分かったことだし、あとは何かな。あといくつか品詞があ
るのか分からないけど、まあ大詰めに近いよね。

ところで、けっこう時間が経ったな。そろそろ疲れてきた。アルシェさんは面白そうに
見ているが、せっかくのデートを潰されて内心つまらないだろう。これ以上は気が引ける。
紅茶もなくなったことだし、そろそろ席を立ったほうがいいんじゃないか。そういえば、
今は何時なのだろう。

肩を揉みながら時計を探す。ガラス越しに店内の時計が見えた。ちょっと距離があった
が、視力 2.0 の私には問題ない。その時計にはレインの家の時計と同じような不思議な文
字が書かれている。そういえば、あの文字盤の文字は一体何なのだろう。私はずっと立ち
上がると時計に近寄って、文字を指す。レインたちも付いてくる。

㊦㇗-㇗> $e\text{㇗}\ \text{㇗㇗}\ e\text{㇗}$

ふるえ音には慣れていないため、ハルムのルの部分を大げさに発音してしまう。

レインは ⑥h-d> eC 3cC e h-d....-, C4a -J>cC "Ca h-d> eC C3δ" JeCe,, Jee CaCa h-d> eC -J>cV-⑥ と答えた。

「アルミ ヴァ？」

⑥CaCa h-d> eC -J>cV-⑥

意外なことにレインの c の発音は日本語のラ行のように弱いものだった。文字と音を教えてくれたときはふるえ音だったのに、実際の彼女の発話を聞いているとはじき音を使っている。

それはさておき、CaCa h-d> で「これらの文字」という意味か。やはりコソアドのような指示詞は前置されるらしい。

ところでアルミ ヴァってなんだろう？一時間を意味する単語は >cV だったから、少しそれに似ている気がするけど。

⑥la-Λ eC 1/ >cJ3>⑥

「るあん？」

⑥la 3 la,, J3Λ la-Λ⑥

『彼と彼でルアン』？……つまり、la-Λ は la の複数形ね？で、『彼らは12人のミロク』？え、時計の文字盤に人名を使うの？数じゃなくて？」

でもまあ、ありえるか。英語でも月の名前には人名が含まれているし。July 然り、August 然り。

⑥-J>cV- eC >cJ3> le V-J-C Cee>J c> d-V-J⑥

えと、「アルミ ヴァはラヴァスのときテーマスをヴァスしたミロクである」……か。ああ分からない。

ヴァスとは何かと聞くと、レインは 2 人の人間が剣を持って戦っている絵を描いた。多分、「戦う」という意味だろう。

⑥Cee>J eC C3δ.....あ、違うか。戦ったんなら Ae か。ネーネー？⑥

⑥la eC....J-ΛJ Vcl Je J3<....l-cZ e lee>....Ca eC Cc< Λ-⑥

レインは自信なさげに首を振る。しかしすぐにハッとして私がレインの家からはるばる持ってきた辞書を引き、テーマスの項を見せる。

そこには絵が出ていた。それは……何かの塊だった。おぞましい絵だった。角の生えた動物と人間のキメラのような生き物や、裸の女や、筋骨隆々な男やらがひとつの塊の中に

身を半分埋めながら、犇めき合っていた。

「ルゥって……言ったよね」

これ、生きてるの？え、この塊がテームス？何かを吸収してるの？この人たち、出ようとしてるように見える。でも逃げようというよりは、出発しようという感じがする。この禍々しい塊と彼らは同化し、そしてなお分離しようとしている。それは出発を思わせた。これは……逃げようではなく、どこかへ向かおうという感じではないか。

これがテームス……。これと戦ったのがアルミヴァ？そうか、これは架空……神話なんだ。——ってことは。

私はアルミヴァを辞書で引く。するとやはり絵が出ていた。きっちり数は12人。皆様々な姿をして描かれている。新古典主義を思わせる描き口だ。私の口に合う。誰が書いたのだろう。この世界の巨匠はどんな人たちなのだろう。俄然、興味が湧く。

恐らく、この時計の文字は彼らを表わすシンボルマークなのね。そして彼らは神話上の神なんだわ。こちらはテームスと違って神聖に描かれているから恐らく神。そうか、ミロクというのは神のことなのね。

で、テームスというこの悪そうな塊が悪、と。正邪のハッキリした対立があるのね。アフラマズダとアーリマンの対立を持つゾロアスター教を髣髴させるわ。

ⓄlecΛ, eJc la-Λ eC cδⓄ

ⓄeJc la-ΛC cJJeⓄ

「ん？la-Λの所有格はla-ΛCっていうのね？「彼ら」がルアンで、「彼らの」がルアント。うーん、規則性に乏しいなあ……」

レインは咳払いをし、指差しながら順に答えた。1時からだった。

ⓄJecAelJ, ccCel, δoeΛ, AeJ>eJ, JleeVel, J-lZ-J, V-J<-ΛC, V-JZoΛ, cCJΛo, <eΛZel, AeεJ-, JcΛooCⓄ

なるほど、12時ではなく1時から始めたわけが分かった。アルミヴァの12神は12人で、当然1人目から数えていく。そうすると0番目のアルミヴァというのは存在しない。だから1時から始めたのだ。最後のコノーテという神は0時でもあるが、それ以前に12時なのだ。

私は時計の文字をもう一度見た。そして本に書き写す。なんだろう、もはやこれは異世界に行きたい日記ではなくなっている。アルカの学習書、そして異世界の記録。私だけの異世界体験記録。そうだ、これはもう体験記なんだ、ひとつの書物なのだ。

「決めた。いまからこの本のタイトルは『紫苑の書』。私だけのアルバザード旅行記」

☞>>δ☞

☞ℓa, ℓa eℓ lec e ℓccΛ☞

レインは黙ってこくんと頷いた。私は紫苑の書にアルミヴァをまとめて書いた。

⊥	⋈	ℓ	ℓ
ℓecΛelℓ	ℓccℓel	ℓceΛ	Λeℓ>eℓ
⋈	ℓ	⋈	ℓ
ℓleeVel	ℓ-lZ-ℓ	V-ℓ<-Λℓ	V-ℓZcΛ
ℓ	ℓ	ℓ	?
ℓcℓΛc	<eΛZel	Λeℓℓ-	ℓcΛccℓe

☞lecΛ, ℓa ℓcℓℓcℓ -ℓℓ- ℓe ℓaV-lδ☞

☞cΛ VeZ, ℓ-☞

☞ℓcΛ -Λℓ ℓcΛℓ -ℓ ℓcℓcℓ cΛeΛ ℓa ℓ-ℓ,, el ℓcΛ VeZ ℓcℓ >-Λ ℓa eℓ ℓaaΛ-☞

☞ℓ-> ℓℓa, -ℓe,, >cΛ VeZ eℓ ℓaaΛ-, ℓee ℓa eℓ Vcℓ ℓccΛ- ℓ-Λ- ℓℓ- ℓeℓ ℓeΛ- ℓccℓ☞

話しながらカフェを出ていく彼らの後ろを黙って歩く。話せないというのはもどかしいなあ。

☞ℓcΛ -Λℓ ℓe -> ℓec,, <ℓ-l -ℓe eℓ ℓeℓa c> <cℓ >cℓ ℓc-ℓeℓ,, ℓcΛ <elℓ- eℓ -ℓδ☞

☞ℓeℓ, ℓa ℓc -Λℓe ℓcℓℓe☞

☞--, hel,,,,, el cℓΛ Vcℓ ℓeℓ -Λℓe ℓ- ℓa ℓ-ℓ,, ℓ-ℓℓc,, -Λ ℓeℓ V-Λ -Λℓe ℓ'-ℓ - ℓ--Λ ℓc ℓcℓ☞

☞eℓδ ℓa....eℓ ℓ-ℓℓcδ☞

☞h-c ℓa ℓel ℓ-ℓa, ℓ-l ℓa h--ℓ ℓeℓℓ >-Λ ℓa -ℓℓ-ℓ ->el -Λℓ ℓccΛ-☞

レインは頬を薄く染めて嬉しそうに微笑んだ。何か彼に色っぽいことでも言われたのだろうか。それにしてもこんな優しくてかっこいい年上が彼氏だなんて、羨ましいな……。

☞lee, ℓac> ℓccΛcℓaΛ eℓ ℓc cΛ elℓ ℓaaℓ☞

☞>>δ ℓac> cΛ ℓa, ℓcΛ eΛ ℓeℓ -, ℓccΛ☞

急に呼ばれてびっくりして、「あ、はい!？」と思わず日本語で返してしまった。

⑥Jɔɔʌɔʧaʌ eʃ ʃɔ ɔʌ eɪʌ ʃa-ʌʃ⑥

ええと、『ソーノユン』はあなたの言語でなんですか」と言いたいのかな。ソーノユンって「おはよう」のことだよね……?あれ、でもこの時間にそれを聞いてくるってヘンな気がするな。今の時間なら「こんにちは」を聞いてくるほうが自然よね。

もしかしてソーノユンは時間に関係なく使えるのかもしれない。ハローみたいな感じで。だとすると「こんにちは」を覚えておくのが無難だろう。

⑥えーと、ʃa eʃ ʃɔʌʌʃʌʌʌʌʌ-⑥

⑥ʃɔʌ...ʌʃʌʌʌʌʌʌʌʌ-ʃ⑥

⑥ʧ- ʧ-⑥

⑥ʃa eʃʌ ʃɔʃ⑥

今アルシェさんの台詞が聞き取れた。しかし eʃʌ の意味がよく分からない。前に何度かレインが言っていたと思うのだが。

⑥eʃʌ eʃ ʃɔʃ⑥

すると彼は困った顔をした。彼は私の横に立つと、紫苑の書を開いた。ものすごく距離が近い。肩と肩が接する。彼が首を下に向けると、シャンプーの清潔な香りが微かにした。私は赤くなって口元を手で隠しながらも、アルバザード人は体臭のない民族だなどと冷静な分析を続けていた。

彼は細長い指で l の文字を指差した。

⑥ʃɔ ʃʌʌʌ ʃeʌ ʃa h-ʌʃ⑥

これは分かった。「この文字を読めるか?」と聞いたのだ。

⑥ʧ-, ʃa eʃ leʌ⑥

⑥Jɔʌ "l" eʃʌ leʌ,, leʌ eʃʌ "l",, leʌ eʃʌ ʃa h-ʌʃ⑥

……ということは、eʃʌ は「〜と等しい」とか、「〜を意味する」という意味の定義動詞なのだろう。恐らく先ほど彼は『こんにちは』はどういう意味ですか」と聞いていたのだ。

⑥なるほどね。ʃɔʌʌʌʌʌʌʌʌ- eʃʌ <ʃʌ ʃ⑥

⑥hɜ>ʃ <ʃʌʃ -l- ʃa e> ʃeʌ 0ʃʌʃ⑥

彼は意外そうな顔でレインを見たが、彼女は首を振るだけだ。どうしたんだろう。もしかして通じなかったのだろうか。

⑥ʌʃeɪ, ʃa eʃ ʌʃʌ ʃ ʌe ʋɔʌ ɔʋ- ">ʃʌʌ ʌ-ʌ> <ʃʌ ʃe ʌʃl"⑥

“4- 4-, 101 1-7 Je1 14a, e1106

そのとき、アルシェさんのアンセが光った。またメールだろうか。彼はこめかみに左手の指を置くと “101-11e16 と話し出した。

はじめはレインに向かって喋っているのだと思ったが、レインがずっと私のほうに寄ってきたので違うと分かった。もしかしてあれは電話なのだろうか。どうして指先をこめかみに当てるだけで通話ができるのだろうか。ここには地球にはない技術が多すぎる。

アルシェさんは電話を終えると、渋い顔でレインに何かを言った。

“1e11, -1 leeV <-1 c> 1a >-1 1e11- 1e11 -16

“h3>, 1a e1 h-0 1el 1-1e1 0c1 - h-11 10110 10c c> >el1el1c-1 -6

そして私を見て何か言う。

“1e11-11, 1001 1a-,, -1 1-11 V-1 -11e c> 1e11,, 101 100V-6

「え〜と、レインさん？彼はなんと？」

彼女に助け舟を求めるが、彼女も説明に困っているようだ。昨日アルカを始めたばかりの私が分かるように説明するのは難しいだろうな。

と思っているうちにアルシェさんは帰ってしまった。

「あ、あれ？帰っちゃったよ。いいの？デートは？もしかして私のせい？」

しかしレインは何も言わず、私の手を引いて家に帰った。別に怒っている様子はないが、何も問題なかったのだろうか……。

家に着くと、ふたたび居間の机に座った。少し歩いて気分が良くなった。私は脚を伸ばして部屋をぐるっと見回す。

壁に貼ってある光る紙に目をやると、 “1e e1 1016 と聞いた。

“1-11, h--1 101 1e11-16

「ぱふしゅ？」

“4-, 1-11 e1 1e1 -1c- 1el-1 0 1-11,, -, 1ee, 1a e1 1c< 1-11 14a6

“>>16 とレインの口真似を試みる。

“<c1, 1-1101 <c1 e1 >el1e1,, 1c1 e....1ee, 1c< >e,, --, 1e11 -1 10 e4016

レインは時計に寄った。今はお昼の 12 時。レインは針を回しながら “<c1, <c16 と繰り返した。そして 23 時を越えてさらに回し、24 時になったとき “1e116 と聞いた。1e11 は「1 日」という意味だろうか？いや、違う。それなら 1 日の範囲内、つまり 23 時で針を止

めないとおかしい。24 時を境にしているということは、 7eJ は「明日」という意味ではないか。

今度は私が時計の針を回す。23 時に戻して <cJ と言い、1 周戻して 11 時にしてまた <cJ と言う。そのまま左回転で 0 時まで戻し、そこからさらに前日の 23 時に戻し、レインを見る。するとレインは 6C55el6 と答えた。なるほど、「昨日」は C55el か。

レインは 3-9 の光を指して <cJ という。 <cJ は「今日」だから、 3-9 というのはカレンダーのことなのだろう。この光る紙はカレンダーだったということになる。

表は 1 段が 7 マスでできており、5 段で計 35 マスになっている。マスの中には謎の文字が書かれている。そのうちの一番左上が淡く光っている。一見紙に書かれた文字のようだが、その文字だけが蛍光色を放っている。不思議な紙だ。

しかし、これがカレンダーだとするなら、ここではグレゴリオ暦が通用しないことになるわね。この暦、1 週は 7 日ね。そして段が 5 段あるから、1 月は 7×5 で 35 日。

……いや、違うか。一番上の段は色がほかと違う。多分これは曜日の文字だ。日付のマスは 7 マス $\times$ 4 段で 28 マス。つまり、1 月は 28 日間か。

レインは色違いの赤い文字を指し、 $\text{6la-1 eC J55>,, 3cC e lee>6}$ と言う。曜日はソームというらしい。

$\text{6C 1-17, Vel>, eJV-, J-Ccc, CeeVe, feeZel, cIV-, 3-JC6}$

うんうんと頷いて覚える。なるほどそれがソームとやらの名前か。忘れないうちに紫苑の書に書き留めておく。

						
Vel>	eJV-	J-Ccc	CeeVe	feeZel	cIV-	3-JC6

6J55> eC Ae86

6lee>6

6lee> eC Ae86

64alc-1 e Cee>J6

$\text{6>>...4alc-1 eC Ae86}$

$\text{6e1 Ae CeeC C5,, 4alc-1 eC leJ el IcVl,, -...V-C6}$

レインは ucfe という項を辞書で引く。そこには家系図が書いてあった。どうも家族という意味の語のようだ。中心が自分になっているようだ。その中にユリアンはあった。2 対になっている。図を見る限り、ユリアンというのは娘息子のことのようだ。つまりは子供。私はほかの親族名詞も覚えておいた。

ということはデームはデームスの子供ということか。あの絵に描かれた、禍々しい塊に同化しかけた者たちのことを指すんだ……。

では、ソームの下にある 28 の字は誰を指すのだろうか。

$\text{J}\omega\Lambda, \text{la}-\Lambda \text{ e}\text{f} \text{ le}\delta\text{e}$

$\text{la}-\Lambda \text{ e}\text{f} \text{ l}-\Lambda\text{c}\omega, \text{l}-\Lambda\text{c}\omega \text{ e}\text{f} \text{ >ec } \text{f}'-\text{ue}\text{f}\text{e}$

$\text{>ec } \text{e}\text{f} \text{ f}\omega\delta \text{ le}\delta\text{e}$

$\text{f}\omega, \text{e}\text{f} \text{ f}\omega-, \text{J}-, \text{>ec } \text{e}\text{f} \text{ ---} \text{---e}$

レインは家系図を指し、 $\text{f}\omega \text{ e}\text{f} \text{ ucfe}, \text{f}\omega\text{f} \text{ e } \text{Jec}\text{>}$ と言う。

$\text{f}\omega\text{f} \text{ e}\text{f} \text{ f}\omega\delta\text{e}$

$\text{---}, \text{>cc}\text{f} \text{ e}\text{f} \text{ V}-\Lambda\text{f}, \text{f}\omega\text{e}\text{f} \text{ f}-\Lambda \text{ e}\text{f} \text{ V}-\Lambda\text{f}\text{e}$

$\text{f}\omega-, \text{f}-\text{e}$

$\text{J}\omega\Lambda, \text{>cc}\text{f} \text{ e}\text{f} \text{ f}\omega\text{f} \text{ e } \text{V}-\Lambda\text{f}\text{e}$

つまり $\text{f}\omega\text{f}$ は「種類」ってことね。じゃあ「家族」は $\text{Jec}\text{>}$ の一種だと。

レインはソームのエルヴァを指す。

$\text{e}\text{f}\text{f}\omega- \text{e}\text{f} \text{ >ec } \text{e } \text{J}\omega\omega\text{>}, \text{f}-\Lambda \text{ J}\omega\omega\text{> } \text{e}\text{f} \text{ f}\omega\text{f} \text{ e } \text{Jec}\text{>}\text{e}$

「ソームもセイムの一種で、エルヴァはそのソームのメイだ」ということね。つまり、セイムとメイは「上位概念」とか「下位概念」みたいな感じ？でもそれはピットか。すると、さしずめメンバーとチームといった対立になるのだろうか。セイムがチームでメイがメンバー。一応いまのところはそうしておこう。矛盾はない。

$\text{>>}, \text{J}\omega\Lambda \text{ l}-\Lambda\text{c}\omega \text{ e}\text{f} \text{ >ec } \text{e } -\text{ue}\text{f}\text{e}$

$\text{f}\omega-, \text{f}-\text{l } \text{f}\omega\omega \text{ f}\omega\Lambda\text{f} -\text{u } \text{>ec } \text{f}'-\text{ue}\text{f}\text{e}$

「メイ・エ・アシェットじゃなくて、メイ・タシェット？何が違うの？」

$\text{f}\omega\text{l } \text{Ve}\text{f} \text{ c}\text{f}\omega\text{e}\Lambda \text{ Ve}\text{J}\text{f}\omega, \text{e}\text{l } \text{f}\omega\text{l } \text{e}\Lambda \text{ ee } \text{f}-\text{l } \text{f}\omega\text{J}, \text{f}\omega\text{V}-\text{---}\text{z}\text{>}\text{---}\text{f}-\text{l } \text{f}'-\text{ue}\text{f} \text{ f } \text{f}-\text{l } \text{e } \text{f}\omega\text{e}-\text{e}$

「ん？」

$\text{f}\omega\text{z}\text{>}\text{---}\text{le}\Lambda- \text{e}\Lambda \text{ f}\omega\text{f} \text{ e}\text{J}\text{f} \text{ l}'\text{e}\text{f} \text{ f}\omega\text{f} \text{ c } \text{Ve}\text{J}\text{f}\omega \text{ f}\omega- \text{---}, \text{f}\omega\text{V}-\text{---}\text{f}\omega\text{V}-\text{---}\text{ele}\Lambda\text{e}$

レインは机を指差す。

「エレン、机ね」

次に机の脚を指し、^⑥Z->^⑥ と言う。

「机の脚はザムというのね」

^⑥q-Λ (a eΛ Z-> (‘eleΛ^⑥

「ザム・テレン？机の脚と言いたいのか？」

次にレインはスカートの裾を少しだけ上げ、自分の脚を指してやや恥ずかしそうに

^⑥Z->^⑥ と言った。

「人の脚もザムなのね。てゆうか、脚きれいね、レイン。背ちいさいのに、脚長っ！」

^⑥(a eΛ Z-> e lecΛ,, Z-> eeeee lecΛ^⑥

エの部分を強調する。「レインの脚」と言いたいようだ。一方、机の脚の場合はザム・テレンになっている。

「了解。『の』にあたる言葉が、有生の場合はeで、無生の場合はrなのね」

私の顔を見てレインはほっとした顔をする。そして椅子の脚を指して、^⑥Jee (a eΛ Z-> e Jcl^⑥ といった。

「あれ？無生なのにエを使うのか？あれ……もしかして私……間違ってる？アニメシーの問題じゃないのか？」

となるとほかの選択肢は……なんだろう。エレンはrで、レインとスキーはeになる。

これらの共通点は？

「……そうか、音だ。エレンのように母音で始まる単語にはrを使うのだ」

私はにこっとして頷いた。レインに伝わったらしい。

「で、もともとアシェットの話だったよね。Jol -leeΛ eΛ (oδ」

^⑥-lee le V-J-((ee>J c> -Jlc-^⑥

「ふむ、アルディアのときにチームスと戦った人たちなのね。じゃあこの人たちも神話のキャラなのね。なるほど、全部神話でできてるわけか」

レインは28人の名を読んでいった。頻繁に使うのか、略名らしきものまで教えてくれた。

私は紫苑の書にそれを書いてまとめた。

℞	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
μcλc-	oVc	γlccZ	γcl	<aλ>cc-	μγaa	>el
λc-	Vco	lcJ	γcl	<aλ	λγa	>el
へ	⊕	⊕	♯	☆	⊕	ㄣ
μ-lλaμ-	Z-Λ-	ㄣ--l	>cλ<	<--V-	μaaS	JeμeΛ
μ-l	Z-Λ	ㄣ-l	>cγ	<-V	μaS	Jeμ
ト	ㄣ	ㄣ	⊕	ㄣ	ㄣ	ㄣ
μ-V-	a>λcΛ-	lccλe	μeleZcΛ-	Sccl	lcΛ-	eγeλcλe
μ-V	λ-Λ	lcΛ	μeZ	Scl	λcΛ	γeλ
↑	eλ	ㄣ	ㄣ	B	⊕	ㄣ
eΛΛ-	-λλ	λeeλe	ㄣcλeΛ-	>-λ	γaλcλ	γ>ccμ
leΛ	l-λ	λeΛ	ㄣcλ	>-λ	γaλ	>cμ

表の一番上の段はソームの段だが、そのさらに上の中央部では℞の文字が光っている。
位置的に見て、どうやらこれが月を指すようだ。

グレゴリオ暦だと一月は約 30 日だから、曜日と日付が毎月ズレる。例えば 1 月 1 日が月曜の場合、2 月 1 日は月曜日にはならない。

一方、この暦は一月が 7 の倍数の 28 なので、曜日と日付にズレがない。リディアの日はヴェルムの曜日と決まっている。

一年は 365 日で 13 カ月。従って、同じ表が 13 回続く。だから月ごとのカレンダーはいらない。毎月異なるのは月を表わす文字だけ。℞の月から⊕の月まで同じものが続く。

では最後の 1 日はどうするのか。365 日目のことだ。そう思っていたらレインはルージュの月の次にㄣという月を作った。そしてそこには曜日を書かず、⊕, ∞という 2 文字を書いた。読みは>γaλeλ, -λeλ, λee>Jだそう。

これは……曜日無しの特異月か。1 年に 2 日だけ曜日のない日があるのか。ということは

何年経ってもリディアの日は常にヴェルムの曜日ということになる。面白い。合理的だ。

レンタルビデオで1週間借りたら年末だけ2日長く借りれることになるわね。まあその辺は年末サービスなんだろうね。

レインは一年すべてを手で囲み、 $\textcircled{\text{Ca eC J-IC}}$ と言った。これが一年と言いたいのだろう。次に一月だけ指して、 $\textcircled{\text{Y-A Ca eC selC}}$ といった。なるほど、月がシェルトか。

同じ要領で、日はセルというらしい。次にレインは2週間だけ指して $\textcircled{\text{Jol Ca eC -lc-}}$ と言う。月を半分で割ってそれをアディアというらしい。半月、すなわち2週間のことだろう。

「ところで、チームスの日は毎年あるの？ $\text{lecA, Jol Ca Jel eC} \dots - \dots \text{cl J-IC}$ 」

$\textcircled{\text{e}^{\text{3}}\delta - , \text{Ca MeA J I-A C}^{\text{3}}\text{C-I J-IC Ccl Jel e Cee}^{\text{3}}\text{J JeCe}\delta \text{ ol Jol- , Jol eVcC}}$

「え、ええと……」

レインはチームスの日に $\text{"1 Jel C-C \emptyset J-IC"}$ と書いた。「1日タット4年」……。これは閏年という意味だろう。やはりチームスの日は4年に一度。その点はグレゴリオと同じようだ。タットというのは文脈で考えると「～につき」という意味だろうから、ここは「4年につき1日」と訳すべきだろう。

「へえ、面白い暦を使ってるんだねえ。あんまり曜日の意味がない気がするけど、それでも曜日がある以上、なんらか意味があるんでしょうね」

時計は12時を過ぎていた。随分勉強したものだ。はあっと大きく息を吐いた。つられてレインもする。目が合って、あははと笑う。

$\textcircled{\text{C}^{\text{3}}\text{ol, Ca cl I-A C-AC}\delta}$

$\textcircled{\text{C-AC}\delta}$

レインは箱の絵を描いて、中に $\text{\textcircled{\text{3}}}$ 、外に C-AC と書いた。なるほど、家の外を見てみたかということか。また散歩するのもリフレッシュになっていいかもしれない。

$\textcircled{\text{Y-}}$

$\textcircled{\text{C}^{\text{3}}\text{> , Jol selC}}$

外に出ると、先ほどとは違う道を歩く。なるべく早く私に道を覚えさせたいのだろう。

レインが道を指して $\textcircled{\text{C}^{\text{3}}\text{AC}}$ と言う。恐らく「道路」のことだろう。

$\textcircled{\text{Jol, leA- laJol C}^{\text{3}}\text{AC, C-}\delta}$

$\textcircled{\text{Y- , C-}}$

あれ……今回は laʔɔɰ でも難色を示さなかったな。前に laʔɔɰ と言ったときは一瞬間があったのに。

理由を考えてみた。先ほどと何が異なるだろうか。先ほどは家の中でその場歩きだった。今回はどこかへ向かっている。しいていうならそこが違いだ。

前は laʔ が「歩行」を意味していた。今回はどうだ。laʔ が「歩いて移動すること」を意味している。運動の動詞としての「歩行」と移動動詞としての「歩いて行く」という違いがあるのではないか。そしてその違いが何らかの形で経過相 ɔɰ を取る取らないに影響を与えているのではないだろうか。

仮にそうだとするなら、今回は移動動詞としての歩くだ。移動なのでゴールがある。ゴールがあるならその過程もある。だから経過相の ɔɰ が使えた……？先ほど ɔɰ が使えなかったのは、ただのゴールのない歩行だったから？

だめだ、推測の域を出ない。だが、自分の勘が外れているようにも思えない。聞きたいが、今のアルカ力では問うことができない。

ⓄleΛ- laʔɔɰ - ʔɔδⓄ

Ⓞʔee ʔee, eΛ ʔɔ ʔeʔ ->, leΛ- ʔɔɰɔɰ ->δ eʔ ʔc-Ⓞ

Ⓞʔ-Ⓞ

Ⓞ-lΛ-Ⓞ

「うん、-lΛ-。了解したらアルナね。わかったわ。で、「どこに行っている」はコロル・アム、と」

ʔcʔʔ Ⓞh>....la -lΛ-ʔ ʔe ʔ-Λ eʔɔ....Ⓞ

ⓄʔɔΛ, ʔɔɰɔɰ ->δⓄ

Ⓞ>>....<cʔ, <ʔ-l -ʔe eʔ cʔ >cl >elʔel,, ʔɔΛ ʔelʔ <ʔe> -ʔaⓄ

「またさっきの公園に行くの？」

ⓄʔɔδⓄ

「公園よ、公園。ええと、なんていえばいいかな。あ、そうだ。レイン、地図持ってない？地図で指せば通じるでしょ。ʔ-ʔ- よ、ʔ-ʔ-」

Ⓞʔ-ʔ-δ ʔʔa cΛ l-Λ ʔaδⓄ

するとレインはアンセをこちょこちょといじり、壁にアルナの地図を投影させた。うわ、すごい。こんなこともできるんだ。

⑥ えーと、 $\Lambda\alpha\Lambda$ e ζ $\rightarrow\delta$ ⑥

⑥ $le\Lambda-$ $\zeta-$ $-\zeta_a$,, $c\Lambda$, ζ_a e ζ $\mu-$ $le\Lambda-\Lambda$ ⑥

レインは私のアルカを直しながら地図を指差した。

「レナン？私も家の仲間扱いなの？ありがとう」

私はそのすぐ西にある大きな公園を指した。

「えーと、ここよ。この大きな公園」

⑥ ζ_a e ζ $\gamma-d\zeta e$ le $le\Lambda-$ $\gamma\alpha\mu-\zeta$ ⑥

カルテっていいのか、あそこは。しかし、カルテという名の公園なのか、単にカルテが「公園」という意味なのか……。

⑥ $\gamma-d\zeta e$ e ζ $\zeta\delta$ ⑥

⑥ $\gamma\alpha\gamma\Gamma$ $\gamma-c$ $-l\gamma-$ e $\zeta c-l$ ⑥

「カルテはシアルのアルカで大きいソクルなのね。 $-l\gamma-$ e ζ $\zeta\delta$ 」

レインは立ち止まると紫苑の書に 3 人の絵を描いた。背が順に高くなっている。一番高いのを指して ⑥ la e ζ $\gamma\alpha\mu$ $-l\gamma-$ ⑥ と言う。なるほど、「背が高い」は $\gamma\alpha\mu$ で、 $-l\gamma-$ は恐らく「最高」という意味ね。じゃあ……。

一番低い人を指してみる。

⑥ $\gamma\alpha\Lambda$ la e ζ $\gamma\alpha\mu$ $e\Lambda$ $-l\gamma-$, $\gamma-\delta$ ⑥

⑥ $h--\Lambda$, $\zeta\gamma_a$ $\gamma e\mu$ $l-\Lambda$ $-Ve\Lambda$ $\gamma e\zeta e$,, la e ζ $\gamma\alpha\mu$ $-Ve\Lambda$ ⑥

なるほど、最低は $-Ve\Lambda$ というようだ。

⑥ $\gamma\alpha\Lambda$, $\zeta c-l$ e ζ $\zeta\delta$ ⑥

⑥ $\zeta c-l$ e ζ $\alpha V-$ $-\mu\Lambda-$ ⑥

⑥ $\alpha V-\delta$ ⑥

⑥ $-....\alpha V-$ e $V-\Lambda\gamma$ e ζ $\gamma cc\gamma$ α $lc\gamma c\gamma$ α $\mu e\zeta$ ⑥

「ああ、オヴァは「例」のことね。つまりアルナみたいなところをシアルという、と。シアルは首都や街みたいなものかな。 $\gamma\alpha\gamma\Gamma$ e ζ $\zeta\delta$ 」

⑥ $\alpha V-$ $\gamma-d\zeta e$ ⑥

なるほど、ソクルの一例がカルテということは、恐らくソクルが「公園」で間違いないだろう。そしてカルテは公園の一種なのだ。

レインは ⑥ $\gamma e-$ ⑥ と言いながら地図の南のほうを指した。家のすぐ南だ。どうやらここに行くらしい。

彼女に連れられて異世界ののどかな通りを歩く。人通りが少ない。今日はカレンダーでいうと元旦のようだから、日本と同じく皆家に籠ってるのかもしれない。

セアという場所に着くと、どうやらそこはショッピングモールのようなようだった。アーケードのように細長く、天井はドーム型の天井が張り巡らされている。雨の日でも安心というわけだ。

モールの左右には店が立ち並んでいるが、今日はどこも閉まっている。しかし日本の正月とは随分違うものだ。日本では外で凧揚げをしたりして遊ぶ。この国の正月はまるで廃墟だ。

途中にはトイレがあった。日本と違って大きくて清潔感があるので一目では分らない。が、なぜか中には入れないようになっていた。今日はトイレまでお休みなのか？変なの。

私たちはモールのベンチに座る。のどかだ。ここが異世界だということを忘れてしまう。だが紛れもなくここは異世界なのだ。

ふと、私をここに連れてきた金髪の男を思い出す。彼はどうして私をここに連れてきたんだろう。私はなぜここにいるんだろう。

「ねえ、どうして私はここに来たのかな？……『なんで』って何ていうんだろ」

どうやって「なぜ」という単語を聞き出そうか。かなり難しそう。むしろこういう場合、相手に「なぜ」という言葉を出させる方法を考えて、それっぽいのが出たら検証するというやり方がいいだろう。

⑥ΛαΛ ∫ccΛ- >ccγ⑥

⑥-, 4-δ ΛαΛ Γ-Λ ∫α⑥

あれ、終わっちゃった。ソというのは代動詞だろうか。まあ文脈的にそうだろうな。でなきや賛成するとか、そういう感じだろう。

⑥lecΛ, ΛαΛ >cγ∫ Γ-Λ⑥

⑥-, 4-δ >cγ∫ Γαδ ΛαΛ Γeμ Γ-Λ Γa,, ∫α> leeV⑥

⑥-, Γee Γee, ΛαΛ ∫eμ Γ-Λ -μγ)-⑥

⑥>>....Γ4a ∫eμ Γ-Λ Γα VeΓδ⑥

ヴェットとは何だ？単語？文法？分らない。「なぜ」なんて言葉、いつ出すんだろう。ああ、ショッキングな言葉のほうが出るかも。突拍子もない意外な言葉だと咄嗟になんて言うかも。よし……インフォーマントとの関係は重要でも、しょうがない。レインを

信じよう。

ⒺΛ...ΛαΛ eΛ JccΛ- -μγ-Ⓔ

Ⓔeθθ l-l- eJδⒺ

Ⓔl-l- eJδ ρa eℓ ρθ ρa eℓ ρθ ΛαΛ l-l-ℓ ρa,, ΛαΛ JccΛ- -μγ-,, ΛαΛ JccΛ- -μγ-ℓⒺ

するとレインはこちらの意思を汲み取ってくれた。

Ⓔ-, ρYa JαJ-ℓ l-Λ ΛαΛ μeΛJ "eJ" cS "l-l-" Jeℓe,, l-l- cS eJδⒺ

Ⓔ>>δ cS eℓ ρδ θcℓ e -Zδ……あ、ちがった、θcℓ ρ'-ZδⒺ

レインはリンゴとオレンジの絵を描いた。次に -Z と書き、どちらか片方を選ぶ絵を描いた。一方、cS と書いて片方かあるいは両方選ぶ絵を描いた。

なるほど、強選言と弱選言の違いか。-Z が「どちらか片方」で、cS が「どちらか片方、もしくは両方」を意味するようだ。論理的な言葉だ。地球だとフィンランド語がそういう言語だった気がする。

つまり、今レインはララとエスのどちらが云々と言っていたのだろう。ララというのは何度か文頭で聞いたことがある。どうも、語気が荒いときに使うようだ。では、「なぜ」の候補としてはむしろエスのほうか。

ⒺeJ eℓ ρδⒺ

Ⓔel YaJ eJ c> el Jeμ l-Λ >-ΛⒺ

マンを知りたいときに使うもの。……エスが why だとするならマンは「理由」……かな。よし、試してみよう。

ⒺlecΛ, eJ ρYa JccΛ- >ccγδⒺ

Ⓔ>-Λ ρa eℓ -ℓⒺ

どうもその予測で良いらしい。実に異言語話者に優しい言葉だ。

でも本当にこれが「なぜ」でいいのだろうか。逆になぜか答えづらいものを聞いて試してみるか。

ⒺeJ....--....ρYa eℓ >cΛδⒺ

Ⓔ>>....Ⓔ

レインは一瞬眉をひそめ、腕を組んで虚空を見つめた。

Ⓔ3>....>-Λ γ--Λ Λα-Λ <cℓ-ℓ - ΛαΛ YaJ -μ>e ℓ'eℓ γα γα eμγ -l -μ>e ℓe l--l Λα-Λ <cℓ-ℓ - ΛαΛ,,

JαΛ ΛαΛ <c-J-ℓ γαℓ eΛVc ℓeΛ ℓcVI Yaℓc-Λ,, -lJαΛ ΛαΛ eℓ >cΛⒺ

なんだか……激しく答えが返ってきたけど……。eJ って本当に「なぜ」でいいのかなあ。

私なら、なんで女なのって聞かれてこんなに長くは答えられないな。もしかして文化の違いかもしれないな。アルバザード人って日本人より「なぜ」に対して真剣に回答するのも……。

「レイン、ごめん、レイン。よく分からないわ。とにかく『なんで』はね。あれ……

でも私、どうしてねを聞こうとしたんだっけ……？まあいいや」

それにしても天気がいい。ここでウトウトしていると気分が安らぐ。そもそも念願の異世界に来て興奮冷めやらぬところだが。

しかし、それとは裏腹に悩みもある。着替えだ。いきなり制服のまま連れてこられたので、着替えがない。異世界用に準備していた鞆も持ってきていないので使える荷物が無い。

困ったわ……。歯ブラシだ食事だトイレだは運良くどうにかあったけど、着替えがないもの。制服は丈夫だから毎日着ても大丈夫だけど、シャツとかがないと……。けどまあ、レインは靴のことも気遣ってくれたから、その辺は多分気遣ってくれるんじゃないかなあ。

「レイン、立ち上がるレイン。」

立ち上がるレイン。

「ん？もう帰るの？」

レインに従い、てくてく歩いていく。モールから家はそんなに遠くないので、すぐ家に着いた。レインは玄関で左手の腕輪をかざすと、中に入る。やはりあれが鍵のようだ。

帰った私はさっそくうがいをすることにした。異世界で風邪を引いたら保険証がなくて病院も行けないから大変なことになりそうだ。

「洗面所借りるね」と言って奥に引っ込んだが、まだこの家に慣れてないせいか、トイレを開けてしまった。トイレは洋式で、日本と同じく紙が備え付けてある。ウォッシュレットもある。ウォッシュレットは日本くらいにしか普及していないと思っていた。

もらったコップでうがいをする。水が鏡に撥ねてしまった。そのままではレインに悪いので拭こうとするが、タオルがない。ティッシュを探すが、ティッシュもない。

一旦外へ出て、ティッシュを探す。しかし無い。うろろろしているとレインが近付いてくる。私は鼻をかむしぐさをした。するとレインはああと言って2階に行き、ティッシュを持ってきた。木の箱に入ったもので、あまり使われた形跡がない。

「レイン」

時間をずらして ⑥ $\lambda e\mu>e\cup Vc-\textcircled{\text{G}}$ と言った。過去にしても未来にしてもどちらも $Vc-$ 。つまり、**about** とか「およそ」に当たる語なのだろう。時間だけでなく基数にも $Vc-$ は使えるのだろうか。

ということは、夕飯は4時ごろなのね。——えっ、早くない！？

⑥ $c> \lambda e\mu>e\cup \textcircled{\text{G}}$

⑥ $>\delta -, h--\lambda, \textcircled{\text{C}}_a \text{ } \textcircled{\text{I}}_b \text{ } \textcircled{\text{I}}_{aa}\cup e\textcircled{\text{C}} \text{ } \textcircled{\text{V}}ee\mu \text{ } \textcircled{\text{J}}e\textcircled{\text{C}}e\delta \text{ } \textcircled{\text{C}}ee, \textcircled{\text{U}}c \text{ } \textcircled{\text{I}}_{aa}\cup, e\textcircled{\text{I}} \text{ } \textcircled{\text{U}}e\lambda \text{ } \textcircled{\text{I}}_a\textcircled{\text{I}}e\cup c> \textcircled{\text{V}}-\mu\textcircled{\text{Z}}\textcircled{\text{O}}\lambda\textcircled{\text{G}}$

「え、何？」

⑥ $\textcircled{\text{I}}e\lambda- \textcircled{\text{U}}e\lambda \text{ } \textcircled{\text{I}}_a\textcircled{\text{I}}e\cup c> \textcircled{\text{V}}-\mu\textcircled{\text{Z}}\textcircled{\text{O}}\lambda \textcircled{\text{V}}c-\textcircled{\text{G}}$

あ、はあ！そうか、そうか。ルーシュが最後じゃないんだ。ルーシュが文字通り「夕飯」だというなら、ドゥネッシュが「夜ご飯」に当たるのね。どうもここは1日4食のようだ。3食という先入観のせいで誤解してしまった。

⑥ $<c\cup, \textcircled{\text{I}}e\lambda- \textcircled{\text{U}}e\lambda \text{ } \textcircled{\text{U}}cc\textcircled{\text{C}} \text{ } h-\mu\cup \textcircled{\text{J}}e \textcircled{\text{C}}_b\textcircled{\text{Y}} >\textcircled{\text{C}}\textcircled{\text{I}} >\textcircled{\text{e}}\textcircled{\text{I}}\textcircled{\text{J}}e\textcircled{\text{I}}\textcircled{\text{G}}$

レインは手を洗って料理を始める。私は何をすればいいのか分からないまま、手を洗い、できるだけ手伝った。冷蔵庫を開けて一々これは何だと説明してくれるので名詞ばかりが増えていく。

オレガノやマジョラムといった香辛料の類まで一々教えてくれた。 $\textcircled{\text{I}}-\textcircled{\text{e}}\textcircled{\text{I}}, ->\textcircled{\text{e}}\textcircled{\text{I}}c-$ というらしい。マジョラムを知っていても、まだ「良い」とか「悪い」という単語さえ知らない。

形のないものは基本的なものでも分からず、形のあるものは頻度が低くても入ってくる。机の上で学んできた語学とは余りにも違う。そりゃそうよね、フィールドワークなんだから。

当然私は異世界に来ることを考慮してフィールドワークにも目を向けていた。フィールドワークに必要なのは何か。机上の言語学とは少し違う。まず、健康な体。特に胃腸。当地の食べ物で一々おなかを壊したり倒れたりしてはいられない。

もっとも、私は鉄の胃腸を持ってはいないのが難点だが。胃が痛いとかそういうことはないが、緊張すると腹痛がするので、繊細なタイプなんだと思う。

あとは強靱な精神力。異世界などまったく情報ゼロの状態で行くのだから、どんな目に合うか分からない。地球でのフィールドワークの場合は事前情報があるが、それでもストレスに耐えうる強靱な精神力がなければやっていられない。留学くらいの気持ちでいると痛い目を見る。

夏目漱石がおおよそ 100 年前にロンドンに留学したとき、彼も憂き目にあったという。物価が高いので安アパートを借りて、本代に充当した。完璧主義の傾向があった彼は英語の個人レッスンを取っていたにもかかわらず、自分の英語力のなさ、特にリスニングとスピーキングを憂えた。実際の能力は人が羨むくらいなのになのだ。

さらに漱石はストレスのため、精神状態も崩れていた。滞在の最後のほうは世間との接触よりも個室での読書に耽っていたわけだから、あまり留学の意味をなさなかったのではないかと思う。

無論、この留学経験が後の彼の文学に大きな影響を与えたことは間違いない。が、それでも本人が後にイギリスでの 2 年は人生で最も辛い 2 年だったと語っていることを考慮すれば、彼がどれだけの憂き目にあっていただかが分かる。

留学でこの有様だ。正直フィールドワークはもっとキツイ。特に未開の地に行くにはかなりの覚悟がいる。自分で幸運だったと思うのは、ここが現代的だという点だ。その上、いまのところ言語を覚えるのにかなり理想的な環境が整っている。

フィールドワークで重要なもののうち、見逃しやすいものは歯だ。特に上顎門歯、つまりは上の前歯が重要だ。この歯が言語音の発音にかなり関与してくる。

特に歯音にとっては命ともいえる。もしここが折れたりしていれば義歯を入れることになるが、義歯は数年しかもたないので、いずれ入れ替えねばならない。

しかし前の義歯と同じ具合というようにはいかないから、どうしても歯音の発音がしづらくなる。個人差はあるが、慣れるまでに時間がかかる。

耳も重要だ。私は IPA に記載されている音声をほとんど聞き分け、発音することができる。おかげで語学は得意だ。だが、単音の聞き取りさえできれば文も聞き取れるほど言語は甘くない。レインがゆっくり話してくれる分には付いていける。だが、速くなると何語でもそうだが、脱落や同化などが起こって分からなくなる。

ᄒᄒᄒᄒ, Meᄒ ᄒᄒ ᄒᄒ-ᄒ

ジャガイモを洗わせるレイン。オルシュは「洗う」のようだ。

次にレインは ᄒᄒᄒᄒ, Meᄒ ᄒᄒ ᄒᄒ- ᄒᄒᄒᄒ といい、ジャガイモを途中まで剥く。セド・ユカで皮を剥くという意味のようだ。このようにしながら動詞も少しずつ覚えていった。

アルカを学びながらなので、作るのに時間がかかった。苦心して出来上がったのはじゃがいもやら野菜やらを煮込んだ具沢山のスープと、ヒラメのムニエル。

昼から豪華だなあ。そうか、今日は正月だからか。でも、内陸地なのに魚介類を食べるのね。きっと南端のカテージュって街から運んでくるんだ。

ヒラメは eelc というそうで、切り身でなく丸々1匹保管されていた。レインはうろこを取って頭を落としてから下ろした。身を取ったら塩胡椒をし、玉ねぎを刻む。慣れた手つきでバターを鍋に引き、玉ねぎを先に炒める。ローリエやら赤ワインやらを入れて煮込んだ。

10分ほどしてから、レインはできたものを濾す。とろみを付けてからヒラメに小麦粉をまぶし、油を引いてフライパンで焼く。鍋は ℓelc で、フライパンは ℓc>ℓelc だという。同じ鍋の仲間らしい。

深鍋が ℓ-ℓℓelc というので、恐らく ℓc> は浅いとかそういう意味だろう。文字変換表を使えば理解でできる。

出来上がったらローリエを乗せ、赤ワインソースをかけて出来上がり。香ばしい。

そしてお決まりのパン。よく飽きないなあ。ジュースは好きなものを選んだ。この料理の間に私は料理に関する名詞や動詞を覚えた。だが、形容詞が欠けている。難しいなあ。

皿を持っていき、居間で昼食を取る。

「あ、おいしい。凄いな、レイン。ℓa eℓ -ℓ」

Ⓜℓ-ℓ-aⓂ と笑う。嬉しいと言ったのだろうか。良かったと言ったのだろうか。何かを感じると言ったらしい。

Ⓜ-, hel,, ℓa-, ℓa eℓ <ccℓ- ℓ'ℓa,, ℓ'ℓa >-ℓ ℓc- Veℓ ℓ'-ℓ'ℓ- ℓcℓℓc ℓaⓂ

レインが差し出してきたのは開いた辞書。そこには単語のリストが載っている。

「何これ？」

Ⓜℓa eℓ ℓleℓ

私が何度も「何これ？」と言ってきたせいか、レインは自然と「何これ？」を覚えたようだ。

「クレールは辞書よね。それは知ってるけど……。まあいいわ。これ、私にくれるの？ありがとう」

Ⓜℓa eℓ Veℓℓℓ- ℓcℓ,, ℓ'ℓa >-ℓ ℓc- -ℓ'ℓ- ℓcℓℓc ℓaⓂ

Ⓜ>-ℓδ >-ℓ eℓ ℓcδⓂ

レインは紙に人の顔を書いた。頭の中に脳を書き、矢印を書いて Veℓ という語を脳の中に入れる。そしてそこに >-ℓ と書く。次に脳内から Veℓ が出ていく絵を描き、ℓel と書く。

なるほど、>-I が「覚える」で、?el が「忘れる」か。つまり、これ使ってアルカ覚えてってことね。

ところで、ソフとは何だろう。文法からして形容詞のようだが。名詞や動詞は形や動作が伴うことが多いので分かりやすいが、形容詞は性質や状態なので難しい。

⑥JeΛC, lecΛ,, ΛoΛ >-I Jcl CαCα VeC⑥

⑥eΛ >-I Jcl CεC >-I <-Λ⑥

⑥>-I <-Λ。うん、ΛoΛ >-I <-Λ CαCα VeC⑥

⑥y-, -CεC⑥

通じている……。おや、われながら今のはわりと難しい文じゃないの？ただの第 3 文型といえばそれまでだけど、でも凄い。今朝までは全然喋れなかった言語なのに。机の上とはかどり方が全然違うわ。フィールドワーク万歳。

昼食を終え、食器を片付け、歯を磨く。その後、もらった辞書を使って単語の勉強になった。挿絵付きで文字も大きく、簡単そうだ。多分子供向けに作られたものだろう。

いや、もしかしたら外国人のために作られたものかもしれない。世界中がアルカを使うというのは分かったが、それでも異言語がすべて消滅しているとは考えにくい。政治的・経済的な理由でアルカを世界中が使うというのならまだ理解の範疇だ。

だが、仮にそれをしたとしてもメディアの届かない孤立した山村や、経済力のない第三国や、資源に乏しい土地などは放っておかれ、当地の言語が生き残るだろう。いや、先進国とて、家庭内や地方では当地の言語が残るはずだ。

日本で想像してみるといい。アメリカが超強行的な手段を取り、生きるか英語を学ぶかというような選択肢を迫ったとしよう。何だかんだいって日本人は従うだろうが、まず能力的な問題で中年以降には厳しい。

ピジン的に話せるようになったとしても、監視の行き届かない家庭内や山村部ではどうか。都市部の企業内では英語が喋られるかもしれないが、家庭や地方では日本語が残るだろう。

仮にその事情が何世代も続けば徐々に日本語は駆逐されるだろう。しかし山村部では日本語だけでの生活でも困らないため、日本語は残るだろう。日本でさえそうなのだから、第三国ではいわんやだ。

となるとアトラスだって世界にアルカしか言語がないわけがない。だからきっとこれは

異言語話者のための辞書なんだろうな。

辞書本文を見てみる。こちらは英英辞典みたいな構成だ。しかし、この辞書は英語の辞書と違い、可算不可算といった情報や名詞動詞といった品詞情報が書かれていない。それらしき略記号が見当たらないのだ。フランス語のような性別マークも書かれていない。文法が単純だから、辞書に文法タグがあまり必要ないのかもしれない。

可算だ不可算だというのは書いてないが、その代わり OED のように単語に初出やら造語者やら語源やらが書かれてある。もちろん読めるわけではないが、年号らしき数字や全体的な書式が OED などに似通っているの、そうだと推測できる。

巻末には単語リストがついていた。恐らく頻出する単語だろう。これをまず覚えておくとういことか。単語リストには語源欄などはないものの、学習者が理解しやすいように絵などが描かれている。

Ⓢⓐ ⓔⓈ ⓂⓔⓁ <ⓐⓐ- >ⓐⓂⓈⓔⓁ-ⓐⓈ

「ん？」

ⓈⓐⓂ--....Ⓢⓐ -ⓐ- ⓓⓐ ⓐⓐⓈ

単語はハルムの表と同じ文字の順番で載っている。最初の単語は Ⓢ だ。母音が辞書の終わりに来ているのは馴染めない。日本語の辞典はアから始まるからだ。だが子音から始まるといえば韓国語もそうだから、そんなに珍しくもない。

私は指で 1 ページ分の単語数を数え、ページ数をかけて総数を概算した。1 ページ当たりの単語数は例文や説明や絵によって変わるが、概算すると少なく見積もっても全体で 3000 語はある。

Ⓢⓐ >-Ⓛ ⓂⓔⓁ ⓐⓈ....-- Ⓜ000 ⓓⓔⓈ ⓓⓐ- ⓐⓈ

Ⓢ>>Ⓢ -, Ⓢ-

Ⓢh--., Ⓜⓐ Ⓢ >ⓐⓂ Ⓢⓐ-Ⓛ., Ⓢⓐ ⓐⓈ

Ⓢⓐⓐ ⓔⓐ -ⓐ- ⓈⓐⓈ

ようやくアルカで分からないと言えた。-ⓐ- が目的語に人を取れるのかは知らないが。だがレインはふつうに会話を進めたので、間違っていないようだ。

Ⓢⓐⓐ ⓐ Ⓢ >ⓐⓂ Ⓜⓐ ⓓⓔⓈ ⓐⓈ- -ⓓⓔⓈ

レインはカレンダーを指し、1 カ月全部をぐるっと囲んで ⓈⓂ000 ⓓⓔⓈ と書いた。

3000 語って ⓓⓐⓂⓈ ⓓⓔⓈ というのね。基数は前置されるということか。

アルカの文法はだいぶ分かってきた。語順は SV0 で修飾は後置。メジャーな西洋語には見られないわね。フランス語でも **grand** なんかは前置だし……。

格詞に当たる前置詞があり、後置詞はない。両者が混在するフィンランド語などとは違う特徴ね。

近いといえばインドネシア語かしら。名詞や形容詞に格変化がないのも似ているわね。もっとも、インドネシア語と違ってアルカは過去形などが活用するから、細かい点では異なるけど。

アルカでは修飾は基本的に後置なのに、基数は前置するようね。そういえばインドネシア語は基数を前置するわね。で……確か序数になると後置だった。そうよ、統語情報で基数か序数か区別できる言語だった。英語みたいに **th** を付けなくてもいいんだわ。ってことはもしかして……。

“Aee, lecA, Ca UelC eC UelC ʔo e ʔ-ICδ Cc-δe

“q-, Cc-e

やはりそうだ。「この月は一年の 1 番目の月か」と聞いてみたのだが、「1 番目の月」は“UelC ʔo”というらしい。どうやら序数は後置するようだ。やはり文法はインドネシア語に近いようだ。街並みは南仏に見えるので、違和感があるが。

よし、折角レインが辞書を貸してくれたんだ。覚えなくっちゃ。

よく見ると 3000 語のうち、最初の 1000 語は超基本語で、残りの 2000 語が基本語のようだ。CeJ から始まっていったん aa で終わり、また CeJ から始まっているのでそのことに気付いた。

ということは、最初の 1000 語をまず覚えればよいということね。レインの予想だと 3000 語で 1 カ月らしいけど、もっと早く覚えたい。私はカレンダーを指すと、4 日後の 4 を指し、

“1000 VeCRe”と言った。

“Ca eʔJ Cʔa >-I <-A 1000 VeC elUelAc-Aδ h3>, Ca eC ʔcA A-e

「難しいかな？でも、がんばるよ」

私は机に戻ると、辞書に見入った。

レインはしばらくじっと見ていたが、やがて白紙の紙を差し出してきた。

“Uo> AʔA >-I <-A h-d Ca-A,, MeA -Uc Caau -Cae

「え？」

「もしかして、平仮名を知りたいの？」

「とにかく、日本語を覚えたいのね？じゃあとりあえず文字を書いてあげるね。これは平仮名っていうのよ。CaCa eC hc|-X-Λ-|

レインは 64-, JeeMe6 と行ってちょこちょと鉛筆で文字を書き出した。私はにこりと
して単語リストに目を落とした。

日本語で「犬」という言葉を覚えたとき、親が犬の定義を教えてくれたわけではない。街やテレビや本で見る犬を犬と聞かされ、例示されただけだ。そして次に犬を見たときには自分から犬と言う。前に得たデータと照合し、類推した結果だ。

犬の定義を聞かなくとも、あるいは dog などと間接的に置き換えられなくとも、犬という語を獲得することができる。人間はこうして母語を覚える。これは凄い能力だと思う。だからできるだけ私はその方法を使って外国語を覚えるようにしている。

理解できない単語はレインに意味を聞いた。それ以外はその単語のまま覚えることにした。例えば ʔe- がそうだ。ʔe- という語はよっぽど基本語らしく、説明を読んでも分からない。説明のほうが難しい語を使っているように思える。だがこの辞書の賢い点は、そういう語は素直に絵や例文に任せている点だ。

ただ、それでも ㇏e- はよく分からない。読んでいると形容詞の類のようだが、例文やコロケーションがたくさん載っているのもそのまま暗記し、コロケーションしている名詞に傾向を見つけ、どのような語かを考えることにした。

どうも、プラスの意味で使っていて、有生無生を問わず使えるようだ。時計が動いていればケアで、止まったりするとアヴィッシュだそうだ。

他にも色々用例が出ている。それを見るに、どうもケアというのは、誰かや何かが「あるべき状態にあること」を指すのではないかと考えた。

日本語にはしっくり来る日常的な形容詞がない。赤いとか熱いなどはどちらの言語にもあるだろうし、意味の範囲もそんなに変わらない。だが、特殊な意味の形容詞はそもそも片方の言語にしか存在しないことがある。

1 時間ほどして、レインが平仮名のテストをしてほしいと言ってきた。

「もう覚えたっていうの？ 早いわね。㇏e㇏ -㇏㇏ -㇏a」

するとレインはすらすらと淀みなく 50 音図を書いて見せた。几帳面な小さい字でびっしり書いてある。「ふぁ」や「が」なども入れてあるので実際は 100 近い文字数に上るというのに。

「なかなかやるわね。私が 25 文字で苦労してるっていうのに」

随分早いと思った。確か福沢諭吉が蘭学を学んだときにアルファベットを覚えるのに 3 日かかったという。その倍以上ある平仮名をこんな短時間で覚えるとは……。

㇏㇏㇏㇏ e㇏ cl h-㇏㇏㇏

「㇏ee, ほかにもあるわ。じゃあ、カタカナと簡単な漢字も覚えてみる？」

とりあえずカタカナを書いてあげた。音は同じだと伝えた。

㇏h3>, l-l- e㇏ laa㇏ (cl h-㇏ e㇏) l'-㇏c- lc> ㇏㇏ e㇏㇏, ㇏cel hcl-㇏-㇏- <cc㇏- >c㇏ ㇏㇏㇏ ㇏-㇏-㇏-㇏- <cc㇏- Vc㇏㇏ >cl hcl-㇏-㇏- e㇏ ㇏cc㇏ <ec㇏....., ㇏ee, ol ㇏㇏-, ㇏㇏㇏ le㇏㇏ ㇏-㇏ e㇏㇏ ㇏-㇏-㇏-㇏-㇏- - ㇏㇏㇏ >cl ㇏㇏㇏ ㇏-㇏ ㇏-㇏-㇏-㇏-㇏-, ㇏㇏>.....㇏V- h-㇏ le㇏ -㇏㇏ Ve㇏ --l ㇏ea.....>e㇏㇏Ve㇏.....㇏㇏

ぶつぶつ言いながら、レインは 30 分ほど表を書き写した。そしてすぐにまたテストしてくれと言う。試してみたところ、レインはカタカナも完全に覚えていた。

㇏㇏> ㇏㇏㇏ ㇏e㇏ e㇏㇏㇏㇏ ㇏㇏㇏ Ve㇏ - ㇏ch㇏㇏㇏㇏㇏

レインは私の読んでいる単語リストを指差した。個々の単語を指しながら「にほんご、にほんご、なにこれ、なにこれ？」と言う。

ㄱㄱㅏ は女言葉で「これら」という意味だった。男は確か ㄱㅏㅏ だったかな。単語をすべて覚えるのかと聞いているようだ。

「シャンって何？」と言って辞書を見る。このリストにも載っている。無形の語の説明文は ㅅㅏ という語で始まる文を持つことが多い。意味的に「もし」のようだ。

面白いことに従属節が主節に先行すると、時制が主節との対照でなくなるようだ。対照すべき主節がまだないから対照のしようがなく、発話時と対照するということだろう。面白いが、少し複雑だ。

「もし」で始まる説明が多いので、この辞書は COBUILD 英英辞典に似ているといえる。あれと書き口がよく似ている。

あの方法は適切に利用すればかなり力を発揮する。私のようにアルカの基本語さえ知らない場合、意味を定義されても分かるはずがない。だから絵を使うのだが、無形物の場合はどうしようもない。そこで、COBUILD 式の出番となる。

シャンというのはどうも真実のことを述べているようだ。"ㅅㅏ ㄱㅏ ㅅㅏ >ㅏㅏ, ㄱㅏ ㅏㅏㅏ ㅅㅏ >ㅏㅏ, ㅏㅏㅏ ㄱㅏ ㄱㅏ ㅏ-ㅏ"などと書いてある。

ㅏㅏㅏ というのは調べたところによると「自分」を指すらしい。つまり、「もしあなたが女で、自分は女だと言え、あなたはシャンを言うことになる」という意味だ。

この状況から考えて、シャンは真実とか事実とか本当という意味だろう。そして本当ではなくむしろ真実なのだろうと思うのは次の例文による。

"ㅅㅏ ㅏ-ㅏ ㅅㅏ ㅏㅏㅏㅏ, ㅏㅏㅏ "ㅏ-ㅏ ㅅㅏ ㅏㅏㅏㅏ" ㅅㅏ ㅏ-ㅏ". ㅏ-ㅏ を調べると、絵が出ていて、空のようだ。また、ㅏㅏㅏㅏ は「青」。つまり「もし空が青いとき、「空が青い」はシャンだ」と言っている。これは客観的事実なので本当か嘘かではない。従ってシャンは本当ではなく真実と訳すべきだろう。

また、色が出てきたので調べてみたら、色は ㅏㅏ> というらしい。基本色が載っており、全部で 10 色のような。<ㅏㅏ, ㅏㅏㅏ が白黒の 2 対で、ㅏ-ㅏㅏ, ㅏㅏㅏㅏ, ㅏㅏㅏ-, ㅏ>ㅏㅏ が赤青緑黄の 4 対。そして ㅏㅏㅏㅏ, ㅏ--<, ㅏㅏ<, ㅏㅏㅏ>>ㅏ が茶桃灰紫の 4 対。英語の基本色と比べるとオレンジが抜けている。日本語より基本色は多い。

ㄹㅏㅏㅏ, ㅏㅏ ㅅㅏ ㅏㅏ ㅏㅏ>ㅏㅏ &ㅏㅏ と言って机を指す。すると ㄹㅏㅏㅏㅏ &ㅏㅏ と答えてくる。うん、机は茶色か、確かに。

ㄹㅏㅏㅏ, ㅏㅏ ㅅㅏ ㅏㅏ ㅏㅏ>ㅏㅏ &ㅏㅏ と紅茶を指す。すると意外にも ㄹㅏㅏㅏㅏ &ㅏㅏ と答えた。

え、赤じゃないの？いや、そうか。紅茶っていう字を考えるからダメなんだ。確かに紅

茶は茶色い。

そうか、日本語は基本色が 4 色しかないもんね。日本語は黒・白・赤・青の 4 色の中に色を収めようとする傾向がある。

赤松だって赤くはない。青黴だって青くはない。青空は青いけど、青蛙は青くない。白味噌は白くない。赤味噌も赤くない。4 色の中のどれにしていえば近いかという評価でしかない。そこに押し込めようというのが日本語のやり方だ。

アルカもそのやり方を採用していると思う。それが自然で合理的だからだ。一々細かい色名で語るのは不便だ。

ただ、アルカの場合、基本色が 10 もあるというのが違いだ。レインが紅茶を茶色と呼んだのは細かく表現したわけではなく、日本人が紅茶と 4 色の中に押し込めたように、10 色の中に押し込めたに過ぎないだろう。しかし、そのことをどう検証すればよいだろうか。

よし、背理法で試してみよう。もしこれが間違ってるんだとしたら……。

私はオレンジジュースを出して、 $\textcircled{C}a\ e\ \textcircled{C}\ \wedge c>\delta\textcircled{C}$ と聞いた。するとレインは $\textcircled{C}c>el\textcircled{C}$ と言った。

やはりな。オレンジという基本色はない。そこでオレンジを見せると黄色という。面白いものだ。

続けてレインは $\textcircled{C}-,\ lc\wedge c\wedge\wedge c>\ \textcircled{C}-\wedge\ e\ \textcircled{C}\ \textcircled{C}-\wedge\wedge\wedge\textcircled{C}$ と言う。

パッソというのは何度も聞いたが、多分「大丈夫」的な意味だろう。つまり「オレンジ色でも大丈夫よ」という意味だろう。うんうん、こちらが厳密な色の指定だな。

面白い。ここの人たちは何でも 10 色で捉えるのだろう。日本人の場合、基本色が少ないので、4 色の範囲を超えて色名を指定することが日常的には多い。しかし 10 色もあればふつうは不自由しないだろうから、10 色の中だけに収めようとするのが可能だし簡単だ。基本色が多いため、かえってふだんは細かい色の表現をしないのかもしれない。

随分ブランクを開けてしまった後、レインは再度 $\textcircled{C}\wedge--,\ \textcircled{C}a\ >-|\ <-\wedge\ \textcircled{C}a\ \textcircled{C}a\ cl\ \wedge e\ \textcircled{C}-\wedge\delta\textcircled{C}$ と聞いてくる。私は $\textcircled{C}y-\textcircled{C}$ と答えて食事を終え、片付ける。そしてまた辞書に集中した。

次にレインに呼ばれたときはもう日が暮れていて、いつの間にか部屋の明かりがついていた。時計を見るともう 7 時。そろそろ夕飯の支度をすべきだろうか。

「ねえ しおん これ」

再びレインに呼ばれて振り返る。彼女の日本語の発音はアルカ式だが、一応日本語にな

っている。

⑥Cɔδ lecΛ⑥

⑥ΛɔΛ Λ- Cʏa ʌcʏ Cʌ⑥

それは袋に入った着替えだった。新品のようだ。レインはこれを使えと言っているようで、ずっと差し出してきた。

⑥JeΛC, JeΛCʀ⑥

助かった。さすがレイン。気が利くなあ。

レインは私の手を引き、洗濯機のところへ案内する。日本と同じで風呂の近くにある。水物は水物でまとめているのだろうか。台所などと近い。レインは口頭と身振りで洗濯機の使い方を教えてくれた。

私は部屋に戻って着替えると、下に戻る。練習を兼ねてレインの洗濯物と一緒に洗ってみた。洗濯機には乾燥機が付いているようだが、干す必要はないのだろうか。この時間に洗濯するくらいだ、恐らくその必要はないのだろう。

2人で夜ご飯の支度をした。メルセルというのは正月で、やはり豪華なのだろうか。冷蔵庫にはかなり高価そうな食材がある。

レインの指揮でできあがったのはローストビーフの野菜盛り合わせ。そして具沢山のミネストローネ。日本と違ってベーコンではなく生ハムを入れていたのが特徴的だった。

さらに鮪を出したかと思うとカルパッチョまで作りだした。私はそこまで作ったことはない。そしてバゲットを1本出し、バターを持ってきた。結構夜は豪勢なようだ。いや、昨日はあんまり豪華じゃなかったから今日が特別なかもしれない。

8時ごろに夕飯となった。正直、レインのほうが料理が巧い。私は敗北感を感じつつも、レインを素直に褒めた。言葉がろくに通じなくともレインは嬉しそうだった。

私は料理を毎日のようにするが、メニューは簡単なもので、栄養のバランスを第一としている。簡単で安く栄養がある。これだけ。とっとと作って勉強したいからだ。食べるのもさっさと食べてしまう。

だが今日は違った。ゆっくり味わって食べた。この味にはその価値がある。

食後は少し体を休ませるために歓談をした。といってもアルカができない以上、授業になる。私は読んでいて疑問に思ったことを色々ぶつけた。レインは丁寧に対処してくれた。そしてまた辞書を使って勉強した。

夜というのは時間が早く経つもので、あっという間に寝る時間となってしまった。11 時くらいだろうか。レインは「Λαλ ελ ρ>α,, υ> υclc- υccρ」と言った。寝たいようだ。賛成して2階に行き、部屋に入った。

今日一日でずいぶんアルカができるようになったなあ。進歩だ。

カーテンを開ける。通りは嘘みたいに静かだ。窓を開けて外へ出る。肌寒いが、空気が綺麗だ。胸いっぱい吸い込む。

どうも田舎ではないみたいね。田園は見えないし……それに家畜の強烈な匂いもしない。家畜が数キロ以内にいれば空気が臭くなるから分かる。ここは都会なのだろうか。

「んー、それにしても、今日はよく勉強したなあ」

部屋に入り、鍵をかけて照明を落とし、ベッドにもぐりこんだ。不思議なもので、レインといると寂しくないが、こうして1人になって暗い天井を見上げた瞬間、寂しくなる。

お母さん……どうしてるかな。心配でどうにかなっちゃってないかな。お父さんも。仕事休んだり辞めたりしてないかな。そしたら困るな。あの2人、折角がんばって今の会社で築いた地位を失っちゃう、私のわがままのせいで。それはダメ。だから、私の書置きに忠実に動いてほしい。

でも……本当にそうされると私はあまり大事じゃないってことで、それはそれで寂しい。あの2人が取り乱すのを見てみたい一方で、迷惑をかけたくない自分がいる。

まいったな、だんだん鬱になってきた。頭の使いすぎかな。甘いものが足りないのかも。もしかしたらグルタミン酸不足かもね。醤油だっけ？海外出張のノイローゼの日本人に醤油を与えたら快方に向かうことがあるのかなんとか。どこまで本当か分からないけど、醤油中毒になってるってことは確かだと思う。

レインの料理はおいしい。でも2日目にしてもう和食が恋しい。お米……食べてないな。パンはお腹がすぐすくよ、お母さん……。だからこの人たちは4食なのかな。

くすん、と、いつのまにか泣いていた。帰りたいわけではない。異世界は自分で望んだことだ。この上なく良い待遇だし、レインのことも好きだ。外人どころか異世界人なのに、初めてまともに友達になれそうだ。

でも、寂しいのも事実。私はえんえんと声を出して泣いた。わざと派手に泣いた。でも、レインに聞こえないように。なんでもない、これは誰でもかかる不安とホームシックだ。このストレスは速やかに発散すべきだ。だからわざと大げさに泣いて発散した。5分も泣く

と疲れて眠ってしまった。

朝日というのは不思議だ。夜、鬱になっていても朝日のおかげで希望と活力が戻る。鬱病は朝悪化するものが多いが、私の場合は夜に寂しさから鬱になるため、朝日は至上の薬だ。

目覚ましもないのに不思議と早く起きてしまう。時間は……6時だ。ベランダでストレッチをして外へ出て下へ行く。レインはもう起きていた。ちょうど歯を磨いていた。挨拶して入れ替わりで歯を磨く。

レインは少しくせ毛だ。朝は寝癖がついている。ふつうの寝癖だけでなく、静電気を帯びた下敷きを上から当てられたように髪が何本か上に立っているのが不思議だ。日本人にはまず見られない。レインは霧吹きで水らしきものをかけ、整髪する。年頃の女の子なのに整髪料すら使わないようだ。

朝起きでもレインは可愛い。化粧をしていないから常にすっぴんだが、それでも可愛い。せいぜい寝起きで顔がむくんでいるくらいか。羨ましい。

朝食は簡単で、シリアルだった。ようやくパン以外の穀物を食べた気がした。食後は一休みした。

ㄹee, lecㄹ, ㄹㄱa ㄹe <el-ㄹㄱㄹ

<el は「学ぶ」という意味。-ㄹ は「人」なので、<el-ㄹ で「学生」だ。私は覚えたての単語を使ってみたくて聞いてみた。発音にも少し慣れてきた。

ㄹ>...ㄹㄱa ㄹeㄹㄹ Jeㄹㄹ Jeㄹㄹㄹ -ㄹㄹ- ㄹeㄹ, ㄹcㄹㄹ-, Jeㄹ ㄹee, ㄹㄹㄹ eㄹ <el-ㄹㄱㄹ

eㄹㄹㄹ というのが分からないので、すかさず辞書を引く。どうやら「流暢」とか、そういう感じの意味らしい。私は分からない単語が出るたびに辞書を引くようにした。

ㄹㄱ-, ㄹㄹㄹ -ㄹㄹ-ㄹ Ve, ㄹㄱa eㄹ <el-ㄹ Jeㄹe, Jeㄹㄹ eㄹ ㄹㄱa eㄹ Jeㄹㄹ <elㄹ-ㄱㄹ

ㄹ>-ㄹ >elJeㄹㄹc-ㄹㄱㄹ

ㄹ--...cㄹ >ㄹㄱa Jeㄹㄹ Jeㄹㄹ <elㄹ-ㄱㄹ

ㄹㄹee, ㄹㄱa e-ㄹ "cㄹ"ㄹ

ㄹㄱ-, Jeㄹㄹ >ㄹㄱa Jeㄹㄹ <elㄹ-ㄱㄹ

ㄹJeㄹ e ㄹㄱa, ㄹeㄹ ㄹㄹㄹ Jeㄹㄹ eㄹ <elㄹ- Jeㄹ <ㄹa Jeㄹ >ㄹㄹ ㄹㄹㄹ Jeㄹㄹ -ㄹㄹ- - ㄹㄱaㄹ

ㄹeㄹㄹ ㄹa ㄹe Jeㄹㄹㄹ

ㄹㄹ-Jㄹㄹ, ㄹㄹㄹ ㄹㄹㄹ ㄹㄹㄹㄹ ㄹㄹ-, Jeㄹㄹ ㄹㄹㄹ Jeㄹㄹ e-ㄹ Jeㄹaㄹ

するとレインは目を丸くして首を振った。

$$6-11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 84$$

6>>...8-...4-, -99-6

するとレインは微笑んだ。私は安心して単語勉強に戻った。レインも横に来て日本語を覚える。

私たちは一日中、言葉の勉強をした。

時間が来れば人間はおなかですく。私たちは昼食を済ませた。

夕方ごろ、アルシェさんがまた遊びに来た。私が昨日よりアルカができるようになっていたので、彼は少し驚いたようだ。

なんと彼は私にアンセを持ってきてくれたのだ。アンセというのはレインたちが手首にはめている携帯電話のことだが、実はお財布ケータイにもなっているそうだ。アルバザードは電子マネーが進んでいるようで、現金は一切存在しないのだという。

お金はすべてアンセを通じて銀行の口座から落ちるらしい。クレジットは借金とみなされ、借金を嫌うこの国では存在しないそうだ。原則としてすべての支払いはデビット式で行われるとのこと。

電子マネーが発達しているため、恐喝や窃盗や強盗が極端に少ないそうだ。アンセでの買い物は本人の静脈データなどを用いて認証を行っているため、アンセを盗んでもなんら意味がないそうだ。

また、日本と違ってアルバザードでは引っ越す人がほとんどおらず、同じ街に何世代も住み続けるらしい。経済は非常に安定しており、ひとつのお店が長い間続くという。その結果、店の人は客がどこの誰かを把握しているため、泥棒がアンセを盗んでさらに静脈データを偽造したとしても通用しないのだという。

そんな便利なアンセは個人認証の ID にもなっているので、日本でいえば免許証と保険証とお財布と銀行と電話、それに時計や PC やインターネットまでもが合わさったものに等しい。極めてハイテクな道具で、これさえあればほかに持ち物はいらないうらいだ。

アルシェさんのお父さんはなにやら国の偉い人だそうで、特別に私にアンセを発行して

くれたらしい。ただ、私はまだ彼らの言葉をよく理解できないので、詳しいことは今度聞くつもりだ。

お礼を言うと、アルシェさんは紳士的な優しい笑顔で何か言ったかと思うと、お茶も飲まずに去っていった。

私はレインを横目でチラと見る。

「ごめんね、レイン。デートの邪魔して……」

しかしレインは白くて細長い脚をぷらぷらさせながら、ただ私が書いた日本語の単語をぶつぶつ呟いていた。

しばらくするとレインは立ち上がって風呂場に行った。私も付いていき、風呂の入れ方を教わった。どうもアルバザード人は風呂を好むらしい。シャワーもあるが、あまり使わないようだ。

風呂は日本のと比べて広いが、やけに浅い。明らかに全身漬かることはできない。漬かるとすれば半分寝そべるような形になる。丸まってしゃがんで入る日本の風呂とは明らかに違う。

一番風呂というのはここでどのような意味を持つのか分らない。風呂を穢れを落とす場所と考えていけば、家主であるレインに譲るべきだ。だが、客を先に入れるのが向こうの礼儀だとしたら状況は逆だ。

てゆうか、一緒に入るという文化だったらどうしよう……。風邪引いたふりしようかな。

レインをじっと見ていると、レインはさっさと先に一人で入ってしまった。こちらを気にしている様子もない。多分、入りたい人間が勝手に入れということなのだろうか。特に順序など気にしないようだ。

レインが上がるのを待ち、私も入る。私は音を注意深く聞いていた。どのように風呂に入るのか分らないので、音で学ぼうとした。音からすると、レインはシャワーを使っていなかった。ざあっと流す音がしたので体を洗って桶でお湯をかけて流したのだろう。当然というか、先に洗ってから入るようだ。

出てきたレインは服が変わっていた。薄いピンクのブラウスと、白いフリルの付いた上着を羽織っている。下は相変わらずスカートだが、左右非対称になっている。リボンのついた白い靴下が愛らしい。

昨日の服にしてもこれにしてもデザインが派手でない。そして制服のように丈夫そうだ。

1 着を長く着る文化なのだろうか。

私は交代で風呂に入った。脱ぐ前にレインが来て、シャンプーやリンスや石鹸などを説明した。そして手ぬぐいをくれた。脱衣所には鍵が付いていた。日本では考えられない。鍵をかけ、服を脱いで中へ入る。なぜか知らないが、自分の家以外で裸になるのは凄く不安だ。

借りた手ぬぐいを濡らして石鹸をつけ、体を洗う。髪も洗って桶で流す。風呂に入り、温まる。浅いかわりに足を伸ばしてくつろげる。自然と半身浴になる。かえってこれは健康に良さそうだ。お湯は日本のものより遥かにぬるい。

レインは 30 分ほど入っていた。恐らく湯船には 20 分ほど漬かっていただろうから、半身浴をしていたと考えられる。半身浴はぬるめで 20 分ほどが効果的だからだ。私もそれに倣い、外へ出た。

バスタオルを借りて拭き、使ったものは洗濯籠に入れておく。洗濯機があれば籠が近くにあるというのはどこでも同じなのだろうか。

まあ、道具が同じならその周辺の道具の使い方も似てくるのは当然のことでしょうね。

レインから借りた服に着替える。

風呂から上がるとまた勉強し、その後、夜ご飯を作って食べた。メルセルの祝いは終わったようで、昨日のような豪華さはなくなった。

異世界アトラスに来てから 5 日経った。私はこの世界で出会った少女レインと 2 人きりの同棲を続けながら、アルカを勉強していた。

今日はレインにもらった辞書の巻末にある単語リスト 1000 を覚える締め切り日だ。朝食後、私はレインにテストをしてもらった。1000 語もあるのでテストは長時間に及んだ。

結果、私は宣言どおり、5 日間で 1000 語すべてを覚えていた。我ながらかなり努力をしたものだ。

レインのほうも日本語の対訳をきちんと覚えていた。すばらしい出来だ。5 日間見てきて感じたのだが、レインはかなり頭が良いのではないかと。短い付き合いだが、直感できる。見た目は可愛くておっとりして見えるが、実はかなり切れ者なのではないかと思う。

器に関してはむしろ私よりも大きいかもしれない。私がどんなにしつこく聞いても少しも面倒そうな顔をしないし、いつも協力的だ。怪しいくらいにこにこしているわけでもなく、かといって無愛想でもない。自然体で朗らかだ。羨ましいとともに、私はレインという人間に強く惹かれていくのを感じた。

レインには単語だけでなく、日本語の文法も教えておいた——私なりのやり方で。

そもそもレインが日本語を学ぶのは、私に簡易翻訳をするためだという。ここで暮らす私とは立場が違う。彼女の日本語は私一人に通じればよいのだ。

そこで私は考えた。レインに文法的に正しい日本語を教える必要はない。レインの言っていることを私が理解できればよい。なら簡略化した日本語を即興で拵えて教えればよいではないか。

例えば「は」と「が」の違いは教えない。動詞の活用も教えない。アルカと同じように「動詞＋副詞相当句」の形で表現できるようにする。「食べたい」は「食べるしたい」と言わせればよい。「食べた」は「食べるた」と言わせればよい。とにかく彼女が早く覚えられ、私が問題なく理解できることが第一だ。

こうしたアポステリオリな人工言語を作ると、レインに教えた。仕組みが簡単なので、彼女はすぐに習得した。

単語テストが終わると、もうお昼の時間になっていた。

昼食後、レインは外へ行こうと言い出した。今日のレインは面白い服を着ている。ワイ

シャツの上にベルのような形をしたケープを着ている。特にスカートが面白い。前後 2 枚を紐で結び付けている。だが、2 枚は重なり合っているので歩いてスリットができて下着が見えない構造だ。順に $\text{J-}\Psi_a, \text{I--J-}, \text{la}\langle c$ というらしい。

どこに行くのと聞いたらまたカルテだという。メルセル休暇の影響でまだほとんどの店がやっていないようだ。

サンダルを借りて外へ出る。そういえば玄関は日本と違って押し戸なんだと初めて気付いた。

⑥-....lecΛ, cl....Λ- Jcl ΛoΛ eC Z-I >cl ΛoΛ lecΛeJ Cαδ⑥

lecΛeJ は動詞 lecΛ の継続相だ。lecΛ は「着る」という女言葉で、ふつうは $\text{J-}\epsilon$ と言うらしい。

実はこの単語、レインと同じスペルなのだ。気になって辞書で調べたところ、lecΛ というのは一般名詞で「儀式に使う神の道具」という意味らしい。それが彼女の名前の語源のようだ。

儀式に使う装身具を身に付けるという意味から、lecΛ が「着る」という意味になり、雅語として女言葉になったようだ。レインがくれた辞書は語源が細かく書いてあり、面白い。

⑥>δ cl Λ- Jcl CΨa laΛ-J c le J-l <μe>eΛ laC-c-⑥

ふうん、私の制服はルティア国周辺の学生っぽいのか。

⑥h--Λ⑥

私はこのハーンというのに慣れてきた。なるほどという深いゆっくりとした理解を得たときの言葉のようだ。私は語法を身に付ける際、レインが言った文脈に近い場面で単語を用いることにしている。だからレインがたくさん喋ってくれないとデータがなくて困る。

レインは……どっちかというとおしゃべりではないよね。どっちかというとなんか大人しい感じ。てゆうか全体的に猫っぽい。

カルテに着くと、こないだのベンチを通り過ぎ、中心部へ進んでいく。本当に大きい公園だ。中にいると公園にいるという事実を忘れる。なのに人の気配がほとんどないのが奇妙だ。

中心部に着くと、大きな建物があつた。盛大な造りだが、ビルのように無機質ではなく、教会のように派手でもない。だが、住居ではない。教会よりは堅牢な感じがするし、装飾もそこまで派手ではない。なんだろう。

レインに連れられ、中に入る。壁に沿ってぐるっと長椅子が配置されていた。人が数人

座って何かを待っている。だが受付などは一切ない。天井は派手というほどではない装飾がほどこされている。特殊な文化だ。

見回すと、奥へ通じるドアがある。人が順番にそこに入出入りする。ドアから出てきた人は入り口を通して外へ出て行く。

⑥lecΛ, -cα eC ->δ⑥

小声で尋ねる。ここは静かだ。皆、沈黙を保っている。待っているのは老若男女を問わず、色々な人だ。別に病気には見えないし、共通点もない。……いや、ある。服だ。服が皆変わっている。いまレインが着ているような服だ。

もしかしてこれは宗教服だろうか。ここはこの国の宗教の教会なのではないか。確か辞書によればアトラス全土に普及しているのはアルティス教という宗教だそうだ。他に宗教は認められていないという。そしてアルティス教の教会はカルテの中心にあり、名をカルテンというそうだ。カルテンの中にはサリュという石の祭壇があるらしく、そこで祈りを捧げるという。

⑥-cα eC γ-dCεΛδ⑥

⑥γ-, ΛαΛ laΛ-γ -cα l-Λ- leμC⑥

なるほど、お祈りに来たのね。

⑥ΛαΛ C-Λ γα し-<δ⑥

⑥αl Cγα e> l-Λ -μCαC⑥

⑥-μCαC....-lC, し-μ-Λ C'-μCαCδ⑥

⑥-し,, Cγα し-μ-C <c >cμγ γ- <c- e Λ-Λδ⑥

⑥Cee⑥

⑥γαΛ Cγα e> -し -μCαC⑥

じゃあ私もここにいる間はアルティス教徒になっておこうかな。

⑥....clθ-γγα⑥

⑥Ce μeΛγ Cα CεC Λ-γγ⑥

⑥γ-, Λ-γγ⑥

そうこうしているうちにレインの番が回ってきた。レインは私を連れて入る。一瞬周りがざわめく。2人で入るのは奇妙なようだ。

中は狭かった。せいぜい10畳くらいだ。奥にひんやりした灰色の祭壇がある。背は低い。

レインは膝をついて肘を祭壇に乗せ、祈りだした。

“lecΛ, ΛoΛ μeΛJ -し Cδδ

“Cco, “ΛoΛ leμC Λ-Λ -I -μC“e”

祈りの言葉は「アルテ神に祈りをささげます」……か。単純ね。洗礼の儀式はいらないのかな。

“eδδ el eΛ ucμ δelCδδ

“δelC....lalα Cμa Jeμ Cα VeC -J,, 4-, Cμa eΛ ucμ δelC I-Λ- e> -μCcJC,, olC- -I?- , Jol Cα leμC eC δelC

「最高でも」？それって「しいていえば」みたいな感じかな。

私は言われたとおりに祈った。洗礼がいらないなんて、なんだか簡単だなあ。

けどこれで私もアルティス教徒か。レインを見てる限りそんな戒律が厳しそうじゃないし、まあ良いか。

そんなことより、どんな宗教が全世界に普及されたのかというのが気になる。アルティス教、研究意欲が湧くわー。

しばらくするとレインは祈りを終えて外に出る。私も後に続いてカルテンを出た。カルテンの中は光がよく通って眩しかった。あと、少し寒かった。それでも人がいた分、外よりは暖かかったが。

“-δ, ΛoΛ eΛ JcoJ le Je 7elδ

“eδδ μal Cδδδ

“--....ucαΛ, Cμa μeΛ 7olC μ- J- ΛoΛ,, ΛoΛ uc7e <-Λ Je C-し Cμaδ

何かお祈りしわすれたことでもあるのだろうか。

“>>, δ-JJδδ

レインは中に戻り、私は一人歩いて帰る。

それにしても、段々アルカができるようになってきたなあ。レインはありがたい。ふっうインフォーマントは間違いを直すのが面倒で、伝われば良しとしてしまいがち。だけどレインは細かいミスも直してくれる。助かるわ。

家の門が見えてきた。だが私はふと立ち止まった。門前に誰かがいるのだ。

男がいる……。アルシェさんじゃない。ただの通行人とも違う。家の前を行ったり来たりと怪しい。誰だろう。知り合いならこそこそする必要はないはずだ。

「>.....<c.....れいんは しおんを まもるしたい けいさつから です.. -l-δ」

なるほど、どうやら警察に見つかり異世界人の私は不審人物として警察に連れて行かれる恐れがあるため、私を匿うために警察に男のことを相談しなかったらしい。

「cya jo <-lδ jeΛc-Λc, lecΛ,, cya leγc-c ΛoΛ jccΛ-」

「>>.....c c c e c Z-l,, l- l- c c e c, <ceΛ leΛ- jc μ-ll」

「μ-ll.....」

辞書を引く。「大切に価値のあるもの、しばしば高価。例えば金やダイヤモンド」。つまりは宝や財宝の類か。

「cel, l- l-Λ-c cya, lecΛ」

「ΛoΛδ eδδ」

「>-Λ.....ΛoΛ eΛ jeμ.....c c, >cl cya e c -Λγ/l-Λc,, (c) cya μ- -c c c- c c <c」

「Oe-cΛ, ccoΛ, c e ve> ΛoΛ」

「jeΛc, c-l c c e c jeΛΛ-Λ」

「c-....., co> leΛ- Λ->c <-l,, θ-jcoδ eΛ ΛoΛ c c leΛ- >cl cya c-Λ e c -Λγ/l-Λc, ccoΛ」

「cya.....r」

頬を薄桃色に染めてはにかむレインに私は思わず言葉を失ってしまった。

その後、2人で手分けして部屋中の鍵を確認し、それからまたアルカを勉強した。

夕食を取ってまたアルカ。夜ご飯の後もアルカ。今日は風呂に入らないようだ。毎日に入らないみたい。レインはルフィを脱がない。儀式的な服ではなく、日常でも着るようだ。

気が付くともう 11 時になっていた。肩が痛いし腰も痛い。集中しすぎだわ。

私たちは別れ別れになって寝た。今日は頭を使いすぎたせいか、精神的な疲労が大きかった。1000 語覚えてテストに合格したのはいいが、レインにもらった単語リストはまだあと 2000 語もある。今日の後半で少し取り崩したけどまだ先は長い。明日もがんばろう。

そういえば合気道と剣道の訓練を怠っているな。そろそろやらないと……。剣道はムリかな。竹刀があれば素振りだけでもできるんだけど……。

まだ 1 週間経たないが、私は徐々にこの国に慣れてきた。とはいえ、慣れたのはこの家の中だけだ。でも、家事がこなせるようになったのは居候として大きな進歩だ。レインの手伝いをしてあげられるようになって嬉しい。

私の胃もそろそろパン食に馴染んできて、おなかがすぐに減らなくなってきた。

レインは相変わらず優しく親切で、私に嫌な顔を見せたことがない。恐らく彼女は誰に対してもこんなのだろう。ひなたぼっこをしている子猫のようなのんびりした子で、無邪気で純粹だ。一緒にいるとこっちまでほんわかした気分になる。不思議な子だ。

それにしても、彼女は学校に行かないのだろうか。確か今日辺りからのはず……。

朝食後、私は不思議に思ってレインに聞いた。

“> cl ʔɔɹ ʔɔɹ <elʔ-δ”

“<cʊ”

やはり今日か。

“ʊɔɐ ɾʏa ʔɔɹ <-l ʊe ʋ-l”

“ə-ʊʊ,, ʌɔɐ ɱeʌʊ >ɔ- ɾa - ɾʏa leʊ ʌɔɐ ʔɔɹ eɿ <elʔ- <ɔɐ <ɔa ʊel >cl ʌɔɐ ʊ-ʊ ɪ-ʌ -ɱʔ- - ɾʏa”

私にアルカを教えるためっていうのは嬉しいけど、それで学校を休ませるのは気が引けるな……。でも、どうしてレインはこんなに親切にしてくれるんだろう。

“eʊ ɾʏa eɾ ɹ-δ ʊɔ- - ʌɔɐδ”

“ʔɔɹ, >cl ɾʏa -ɪʔ-ɾ ʌɔɐ ʊccʌ-,, ʊɔ> ʌɔɐ ʌ-ɾ ʌ-ʌ -ɪʔ <-l ɾʏa leʊ -ɾ<c-ʌ,, ɾ-ɪ ɾaɱ, ʌɔɐ ʌ- ʌ-ʌ ʊɔ ɪ-ʌ >cl ʌ-ʌ ʊccʌ- ɾʏa, ʊccʌ,, ʌɔɐ ʌ- ɛ-ʌ/ɔɐ -, ɾee, ʔɔʔʊɔ ɾʏa”

“h--ʌ, ʊ-ʌδ ʌɔɐ ʌ- ʌ-a ɾccʌ-,, ʌɔɐ ɾ-ʌ ʊccʌ- ɾcʌ ɾʏa, lecʌ”

彼女は恥ずかしそうに微笑む。

「でもね、レイン。私のために学校を休むのはやめてほしいの」

“>ʏa....ɱeʌ ɱeʌʊ ɾa ʔɔʔʊɔ ʌchoʌʃɔ ʊɔ< <ecʌ”

「レインは 学校を 行くべき です」

日本語のコロケーションでは「学校に行く」だが、アルカの“ʔe <elʔ-”に合わせて「学校を」にしておいた。このほうがレインには誤解なく通じるだろう。これも私なりの人工言語だ。

⑥ 3>,....CeC じゃあ しおんは なにを このいえで する ですか。れいんと いっしょ
がっこうを いく ですか⑥

私はこくこくと頷いた。

結局レインと一緒に学校へ行くことにした。レインの通っているのは「アルナ大学」というところだそう。大学といってもここは日本と学年制が違う。日本でいうとレインは高校2年生らしい。つまり私と同じ学年だ。

アルバザードの学校は2歳から始まる3, 4, 5, 6年制だそう。レインや自分の年だともう大学生だ。

そうそう、レインに年を聞いたところ、17歳だという。私と同年だったようだ。ふつう白人は日本人より年上に見えるが、レインは白人の血がそこまで濃くないので若く見える。それに、レイン自身がやや童顔だということもある。

大学は>-A-?- というが、6年間は長いのでJ->-A- とc>-A- に分かれている。訳すと「前期大学」と「後期大学」になる。レインはこのJ->-A- の最終学年であるA-Me という学年に当たる。つまり彼女は受験生ということになる。

レインは今A-Me という学年だが、去年は-Mh-A という学年だったそう。学年ごとに数字ではなく固有の名前がついているのが面白い。実はこれは組み数字というものだそう。では組み数字とは一体何か。

何かの番号を述べる際、単に1番2番といったら何番中の1番か分からない。もし2対の中の1番、3対の中の1番という語がそれぞれ異なっていれば、何番中の何番かということがすぐに分かる。

例えば3番中の1番はJle- というが、4番中の1番は-cCe という。これによってグループ全体の総数が分かるとともに、それがその中で何番目かということが分かる。文章を読んでいて章番号に-cCe と書いてあれば、その文章が4章仕立てであることがすぐに分かる。

組み数字は数が多く、なんと28まで存在する。私は以下の表を紫苑の書に作成した。

<組み数字のリスト>

1:組が成立しないので無し

/:J-Me:elC,J--I

?:-M?-A-J:Jle-,e/de-,CMe-

0: - μ cel: - $\cup$ ce, <le-, -lc $\cup$, $\cup$ ce μ
 1: lcc<-: >c μ xc, h- $\wedge$ e $\cup$, γ - $\cup$ - $\wedge$, -- $\cup$ e, -l $\cup$ o $\wedge$
 2: V- $\wedge$ o $\wedge$: $\cap$ O- μ , - μ h- $\wedge$, $\wedge$ - μ ce, $\cup$ - μ c, l $\wedge$ o $\cup$ $\wedge$, >c μ
 3: $\cup$ o>: Vel>, e μ V-, $\cup$ - $\cap$ cc, $\cap$ eeVe, $\cap$ eeZel, clV-, ∂ - μ c
 4: $\cup$ el $\cap$: > μ al-, -l $\mathcal{S}$, l $\wedge$ a μ xc-, $\cap$ aV- $\wedge$, $\cup$ - $\wedge$ ce, leeVe, Vcc $\wedge$ e, c $\wedge$ S $\cap$
 5: c<- $\wedge$: <-c<-, ∂ - μ $\wedge$ -, - $\cap$ o $\cap$ - $\cup$, $\cup$ -Vel, γ -c $\wedge$, >el>o, le $\wedge$ ce, $\cap$ c $\wedge$ ce, e μ c $\wedge$ $\cap$
 10: $\cup$ c $\mathcal{L}$ -l: <a-, μ o $\wedge$, Vco, V $\cup$ $\wedge$, $\cap$ co, -V $\cup$, Z- $\wedge$, he $\wedge$, l $\cup$ $\wedge$, $\cap$ o $\wedge$
 11: -l $\cup$ c-: Vel $\cap$ c $\cup$, e μ c $\wedge$, $\cap$ eeZe $\wedge$, $\cap$ a $\wedge$ - $\cup$, <-cl-, cc μ e $\cup$, ∂ -l $\cap$ c $\cup$, l->c $\mathcal{L}$, l- $\wedge$ Ve>, ∂ μ o $\cap$ c $\cup$, leVc $\wedge$
 12: - μ >cV-: $\cup$ ec $\wedge$ el $\cup$, $\cap$ cc $\cap$ el, ∂ oe $\wedge$, $\wedge$ e μ >e $\cup$, γ leeVel, γ -lZ- $\cup$, V- μ <- $\wedge$ c, V- μ Z $\cup$ $\wedge$, $\cap$ c γ $\wedge$ o, <e $\wedge$ Zel, $\wedge$ e $\cap$ e μ
 -, γ o $\wedge$ o $\cap$ ce
 13: - $\wedge$ o $\cap$: - $\wedge$ o, o> $\cap$ o, c $\mathcal{L}$ μ e, μ -ce $\wedge$, S $\wedge$ le $\cap$, $\cup$ elcc, Ve γ $\cap$ o $\wedge$, <el $\wedge$ o-, $\cup$ - $\cup$, $\wedge$ eo, el ∂ c $\wedge$ -, >a $\cap$ o $\wedge$, γ - $\wedge$ - $\wedge$
 10: lccZ-l: μ a $\wedge$ -, $\wedge$ -l>, eleVc, $\mathcal{L}$ eeO $\cap$ c $\cup$, $\wedge$ -l $\cap$ γ - μ -, $\cup$ -l $\cup$ -, e>c $\cup$, cc $\mathcal{L}$ el, - $\wedge$ ce, ->l, >-l γ -, $\cap$ ce, -lV- $\wedge$ o, lcc
 Z-
 14: >e $\cap$ el: μ a $\mathcal{L}$ c-, Vcc<-, lccZ, <-l<-, c $\wedge$ e-, h μ a $\wedge$ Oe, c>a $\cap$, μ -l $\wedge$ a μ - (μ -l $\mathcal{L}$), $\mathcal{L}$ e $\wedge$ o $\cap$ ∂ e, ccl $\wedge$ a, el<, O-l>-, o
 γ c $\wedge$ c $\cup$, >e $\cap$ e, - μ ce
 15: e $\cup$ $\cap$:-e μ e $\cup$, γ - μ <- $\wedge$, $\cap$ μ o>e γ c-, ∂ - μ ce, $\cup$ c $\wedge$ γ e, <- $\mathcal{H}$ e $\cap$, γ μ a γ , le $\cap$ c $\cap$, μ eVe μ , γ - ∂ , S<> $\wedge$,
 μ a $\cap$ e γ , γ o $\cap$ el, l $\cap$ c $\cap$ el, μ eeVel, $\cap$ O- μ Zel
 10: γ - $\wedge$:- μ γ -l $\cap$, γ -l $\cap$ c $\cup$, h- μ l $\cap$ - $\wedge$, hc μ Vel, he $\cup$ $\cap$ c-, $\cap$ -l $\cap$ c μ , $\cap$ c-le $\cap$, $\cap$ o μ c, $\mathcal{L}$ clV- $\wedge$, $\mathcal{L}$ ac μ a, $\mathcal{L}$ eel,
 $\wedge$ -l>c, $\wedge$ o $\cap$ ce, $\wedge$ ee $\mathcal{S}$, >- $\cap$ c $\cup$, >c $\mathcal{L}$ e $\wedge$, >e $\wedge$ $\cap$, Oe $\cap$ $\cap$ -, OccZ, Oo $\cap$
 14: l- $\wedge$ $\cap$ c $\cup$: μ c $\mathcal{L}$ c-, oVc, γ lccZ, $\mathcal{L}$ cl, <a $\mathcal{L}$ >cc-, μ μ a $\wedge$, >el, μ -l $\wedge$ a μ -, Z- $\wedge$ -, ∂ --l, >c $\mathcal{L}$ <, <--V-, μ a $\mathcal{S}$, μ e μ e $\wedge$,
 μ -V-, a> $\cap$ o $\wedge$ -, lcc $\wedge$ e, μ e $\mathcal{L}$ eZ $\cup$ $\wedge$ -, Scc $\mathcal{L}$, l $\cap$ $\wedge$ -, e γ e $\cap$ o $\wedge$ e, e $\wedge$ $\wedge$ -, - $\cup$, $\wedge$ ee $\wedge$ e, ∂ c $\wedge$ e $\wedge$ -, >- $\cap$, γ a $\wedge$ o $\wedge$, γ >cc μ

組み数字として使われる語は人や神や悪魔の名前が多いようだ。例えば 7 の組み数字は曜日を表わす悪魔ソームを使い、12 の組み数字は時計にも使うアルミ ヴァ神を使っている。

28 までであるといってもすべて揃っているわけではなく、数が多くなるほど抜けが見られる。それにしても、これらを足すとかなりの単語数になるので、アルバザードの子供は覚えるのがさぞ大変なことだろう。

たた、慣れてしまえばかえって便利だ。何学校の何年生と言わなくても、スレアといえ
 ばアルバザードでは小学校の 1 年生だということが分かる。

素っ頓狂な声をあげてしまう。神様じゃなくて悪魔なの？

“Ucel, la eC >elC-”

メルティアって……確か時間を司る悪魔だったわね。

“>elC-, la eC VcJ le >elJ-C ΛoΛ -I -Coi-J, Jo- C4a MeΛJcJδ ol....ol I- VcJ eC lee>....”

“4-....>>....el Λ-JJ Vcl Ca Je Jo<,, h-c, >elC- >elJ-C C4a I-Λ- Co e4o”

私を連れてきたのは悪魔メルティアだっていうの……？

“ΛoΛ Io I- U-ΛC-C ΛoΛ -I -Coi-J I-Λ- JoJ ΛoΛ Jo Ue”

“4-, U-> C4a,, la JoJ-J-C I-Λ C4a Jo Ue,, 4-, >oΛ C4a JoC Ue <ccΛ- ΛoΛ Voi V-Λo ΛoΛ,, U-leC

la JoJ-J-C C4a V-Λo ΛoΛ ΛoΛΛoδ”

“I-Λ- V-Λo C4aδ”

レインを守らせるためにメルティアは私をアトラスに召喚した……？私は懐疑的だが、レインは自説にすっかり魅入られてしまったようだ。

“4-, Cc- Cc-,, ΛoΛ U-μ Ca”

“C-I, JoJ lee>δ”

“lee> C-Λ eC >cμo)r UcoΛ”

悪魔も神の一種……か。なるほどね。

“lee, lecΛ,, Caμ, ΛoΛ -J> I-Λ Ue - C4a, θ-JJoδ”

Caμ や <cJ などは格を失って独立して文頭に來れる。一方、JccΛ- などは独立して文末に來て、事象に対する肯定的な気持ちなどを表わす。こういうのは独立した品詞のようで、私は純詞と呼んでいる。

“4-, leeV”

“eJ C4a μ- -Ca JoJJJo 4aaδ θcΛ, CcU ΛoΛ”

“>cl....UcCe Λo-Λ leeVeJ -Coi-J”

「レーヴェス・アトラス？この星を去っている？あっ……」

私は口を押さえた。そうか……やはり……。

“o>δ”

気の毒な表情で問う。

“>->-, c> ΛoΛ -C IcS,, 4-Λ θ-θ-, laaμθ-, J- Jo UelC cCeΛ I->-JC leΛ-Λ”

お母さんが小さいときで、お父さんがつい先月……。かわいそうに。お父さんなんて、

つい最近のことじゃないの……。ウチのは二人とも元気でよかった。

⑥>>...㊄eΛ㊄⑥

⑥㊄eΛ㊄㊄ ㊄>...㊄㊄㊄e e㊄ <ecΛ⑥

⑥㊄㊄㊄e, lecΛ⑥

⑥㊄eΛ㊄,, ㊄㊄㊄㊄㊄- -㊄ ㊄㊄㊄<-Λ ㊄'-㊄㊄⑥

ユルフアン・タルト……。

間の㊄は「～の」という意味だから、アルトのユルフアンという意味だよね。-㊄㊄……ん？

私は辞書を引いた。

「ねえ、レイン……-㊄㊄ って……魔法だよね……？」

⑥>㊄⑥

⑥㊄㊄㊄ ㊄eΛ㊄㊄㊄ -㊄㊄ ㊄e㊄e㊄㊄⑥

⑥㊄-,, ㊄㊄㊄㊄㊄- -㊄ ㊄㊄㊄<-Λ ㊄'-㊄㊄⑥

私は二重に驚いた。まず、娘のレインが父親を呼び捨てにしたこと。仲が悪そうには聞こえなかったが……。そしてもうひとつは、彼が魔法の研究者だということ。

⑥-㊄㊄㊄⑥

⑥㊄-....., ㊄-㊄ e㊄ ㊄㊄㊄ Λ- Λ㊄㊄ -㊄㊄ ㊄㊄-㊄㊄ ㊄cel, <㊄- ㊄㊄-Λ ㊄㊄ -㊄㊄㊄㊄⑥

「き……っ」

⑥㊄㊄㊄㊄⑥

キ、キター(° ▽ °)――!!

魔法の世界、キター！

「え、あなたの世界に魔法はないの？」

――だって！

⑥㊄㊄, ㊄㊄㊄ h-㊄㊄ -㊄㊄ ㊄- -㊄㊄㊄㊄ ㊄- -㊄㊄㊄-㊄ ㊄e㊄e㊄㊄㊄⑥

本当に魔法があるのね、この世界には！

⑥㊄, ㊄ee, -, -㊄.....>>.....⑥

口ごもるレイン。ええい、まどろっこしい。

⑥㊄eΛ c㊄Λ ㊄e ㊄-Λ㊄㊄⑥

「>>, 4-, -μc し- -ccl- 7c7 >cμc7,, c-l leλ- -μ Vcl Caε

「パッソ！一般人は魔法を使えないとか、なお燃え要素！それで、Λe Jo Jeλ 7 --Λ Ca-λ 7」

「4-....ucel, >ccl l- -c 4aK-λ,, h-c ucclλ, c4a μeλJ-c -c eλ 7--Λ Ca-λ cec λ4aJJoα λaaμλ- >-Λ c4a Jeμ >c- eJc l--c,, 4-JJoδ Veccl Ca ec ucclleε

名前を知っているなら名前を使うべきで、「あなたのお父さん」という言い方はこの場合失礼なようだ。不思議な文化だ。

そんなことはどうでもいいとして、ドゥルガさんなら魔法が使えたかもしれないらしい。

「h-c λcl lα J-cl-λ c'-μce- -μ Jeλ し-l -μcε

聞くや否やアルテアというのを調べる。アルテアというのはどうも国の省庁のようで、その昔神々を呼び出した省庁のことらしい。そこで働く人間の幹部が c-leJ で、それを束ねるのが -μc-leJ というそう。

つまり、アルテアというのは召喚省とでも呼ぶべきものか。そしてその役人、僧侶たちがタレスで、そのリーダーがアルタレス。なるほどね。この人たちは魔法を使えるわけか。

魔法については色々聞きたいところだが、亡くなったばかりという父親のことを思い出させるのは良くないと思い、私は泣く泣くその話題を終わらせた。

この世界に魔法があるかもしれないというだけでも、希望が持てる。

「まほう、きたー。まほう、きたー♪」

「しおん、まほうは き した ですか？ きは なに ですか？」

レインの通うアルナ大学は電車ですぐのところらしい。カルテまで徒歩で行くと、そこから電車で7駅だ。7駅といっても1駅がとても短いので近いそう。

首都アルナは円形都市になっており、同心円状に28本の幹線道路が走っている。中心にはカルテがあり、カルテに近いほど一等地だそう。レインの家は一番内側にあるので、いわば銀座の真ん中にあるようなものだ。つまり、彼女は超お嬢様ということになる。

円の中心から円周に向かって東西南北12の方位に道が伸びている。時計に使うアルミヴァの12神を取って、アルミヴァ通りというらしい。レインの家は4時の位置にあるネブラ通り上にあり、28本のうち一番内側のリディア通りにある。つまり住所はネブラ＝リディアとなる。

街は 12 本のアルミ ヴァ通りで区切られているが、おおまかに分けると東西南北のそれぞれの街区に分かれる。北区は学校や官公庁などが集まっており、南区は商業地区になっている。西区は集合住宅街で、いわゆる庶民の街。そして東区が一戸建てのある街で、いわゆる高級住宅街。

アルナの直径は約 10 キロといったところで、大きな街ではない。街の端から端まで行っても徒歩で 2 時間、自転車で 30 分という狭い街だ。

アルナの周りには北アルナや東南アルナなど、8 つの街がある。それゆえ、私たちのいるこの街を特に中央アルナと呼ぶそう。東西アルナなど、ほかのアルナも造りはここ中央アルナと同じだ。

行政上は中央アルナを h-c> という単位で呼んでいるらしいが、これは恐らく日本の市に当たるものだろう。従ってここは中央アルナ市が正式な名前ということになる。大きさからしても直径 10 キロの円でできているので、市と訳すのにふさわしいだろう。

日本と異なるのは、ひとつの市の中で何でもできてしまう点だ。通勤するのに毎日大都市まで通う必要はなく、自分の市の中で学んで働いて食べていくことができる。

狭い街なので、移動は主に自転車か徒歩だ。車は歩道と隔絶されており、人がいるところを走れない。12 本のアルミ ヴァ通りのうち、4 本しか車道として使うことができない。ほかに車道は街の外周道路か地下道しかない。地震のない国なのか、やたら地下に交通網が多い。この街には電車も地下鉄しかない。

私たちは中央カルテン駅からコノーテ線に乗ることにした。地下鉄の入り口はカルテン付近にあり、日本と同じように階段を下りていく仕組みになっている。

「アルシェさんのアンセのおかげで、私も地下鉄に乗れるよ」

階段を下りようとした際、エレベーターが置いてあるのに気付いた。しかし誰も使おうという気配がない。

「レイン、あれ使わないの？」

「え？」

「みんなは しC-MeZ 使う ない ですか？」

「あれは <ccA- ふるい ひと」

ははあ、お年寄りが使えるように若者は遠慮してるってことね。福祉と道徳がしっかりしてるなあ。

アルバザードの人々を見ていて思ったのだが、彼らは総じて倫理的だ。道も汚れていないし、店員も親切だし、客も偉そうにしない。恐らくそれはアルティス教という宗教による道德教育がしっかりなされているからだろう。この点はずいぶん日本と異なる。

新渡戸は日本に宗教的な道德教育がないことをベルギーの法学者に指摘されたとき、大きな衝撃を覚えたという。その結果、『武士道』を記したほどだ。

日本には国全体の基盤を成す道德の柱がなく、なんとなく民間的な常識や武家の規範といった形で道德が存在した。宗教という柱がないせいか、日本では今でも道德が親による口伝的なもので、学校教育はほとんど意味を成していない。

このシステムだと、未熟な親が増えるたび、子供の徳が下がってしまう。その子供が親になると、さらに次の世代の徳が下がる。こうして現代の暗黒な日本に至るわけだ。

一方アルバザードは道德を重んじ、その普及の方法にアルティス教を選んでいる。これは巧いやり方だと思う。宗教に疎い日本人でも墓石を蹴るのは極めて大きな抵抗がある。それと同じレベルで道德を幼いうちから植えつけておくのは、安定した社会を維持するのに不可欠だ。

そんなことを考えながら階段を下りると、ゲートがあった。ゲートといっても頭上に銀色のアーチがあるだけだ。皆そこをくぐっていく。改札にはなっていない。券を通す場所もない。アンセをかざすこともない。ただアーチの下を通るだけだ。だが、通ることでこのアーチがアンセに乗車情報を送るらしい。私が何月何日何時何分に中央カルテン駅改札に入ったかということが記録されるのだ。

降りる駅でもアーチでデータが記録される。その結果、私がどこからどこに乗っていったのかが分かり、料金が課金されるというシステムだ。切符はおろか **pasmo**すら要らないというシステムに驚かされた。

ホームは日本と似ていた。灰色の無機質なホームだ。ジュースの自動販売機はないが、ベンチは置いてある。そういえばキヨスクもない。

飛び込み防止用なのか、電車が来るまでついたてが立っている。ついたての前に立って電車を待つ。

「あと何分なんだろう……」

きよろきよろするが、電光掲示板はない。それどころか時刻表も見当たらない。レインを見るが、彼女は一向に気にする様子がない。

“Lee lecΛ, > loθ laΛ-δ”

“Ca eΛ Ceμ-ε le <ε cea "CaΛ"δ Ca <ε -θc- leeVloθ loθo μ-J e ΛoJ”

なるほど、「トゥーン」という音の鳴る数で「あと何分で電車が来るか」を教えているのか。2回鳴ればあと2分ということ。でも、10回も鳴ったらうるさくない？

“Ca Ce l-V lel <ε laΛ- μ-J 10 -Jδ”

“θ-Jo, γ μ-J eε -lγ-”

なるほど、最高3回までなのね。それで済んでいるということは、そもそも山手線みたいに本数が多いんでしょうね。あるいはアルバザード人は本数が少なくても気にしないとか。

しばらくすると電車が来た。日本の電車より短い。中は新幹線のように横向きの席になっていた。片側に3人がけの長いす、片側に2人がけの長いすがある。間は廊下になっている。1列につき5人座れる計算だ。

どうして3:2になっているのか考えた。なぜ異世界なのに日本の新幹線と同じ造りなのだろう。それは恐らくグループで座りやすくするためだろう。

2人組みのときは2人がけの席を使えばよい。3人組のときは3人がけを使う。4人の場合は2人がけをふたつ使い、席を回転させて向き合わせる。5人組みのときは1列使って5人にする。6人組のときは3人がけをふたつ使う。

こうしておけば、どういう組み合わせでもグループの中で一人だけ仲間はずれになることがない。実に客に配慮した造りだ。

サービスの向上を考えれば日本でもアルバザードでも同じ結論に辿りつくということだ。かねてより私が主張してきた「異世界は案外地球に似ている」説が、こうしてひとつずつ例証されていく。

始発だからか、電車は空いていた。いや、普通列車でこの席の造りをしている以上、もともとアルバザードの電車はあまり混まないのだろう。

7つ目のコノータ＝メル駅で下車すると、アーチをくぐって階段を上がる。出たところはもうアルナ大の目の前だった。

実はアルナ大というのは日本の東大に当たる名門校だそう。どうりでレインは頭がいいわけだ。

アルナ大は巨大な敷地内に小学校から大学院まですべてが併設されている。レインの通

う前期大学は後期大学の横にある。

構内には変わった建物がいくつか並んでいるが、日本で見られるような変哲のないビルもある。日本の高校のように横に長い建物もちらほらと見られた。

レインのクラスは"-I-J 1"という棟にあるそうだ。日本語でいえば「西 5 号館」といったところか。

日本の高校までと同じで、前期大学まではクラスというものが存在し、皆で同じ授業を受けるらしい。ゼミごとに教室を分ける大学っぽいやり方は後期大学になってからだそうだ。

西 5 号館の入り口にある短い 4 段の茶色い階段を登ると、その先は廊下になっていた。レインは迷うことなく教室へ向かう。今日から新学年なのだが、自分が今年何組になるかは去年の期末試験の成績発表の段階で分かっているという。

1 学年のクラスの数 は 14 と決まっており、日付や道路にも使う I-ACJ の組み数字を使って表すそうだ。

文系理系という単純な 2 分法だけではなく、もっと細かい分け方をするそうだ。どうも組み数字の語源になった I-ACJ という人たちの個性を反映しているのか、番号とクラスの特徴の間に規則性が見られない。

まず、14 クラスある中で最も優秀な人間が集められる特進クラスをリディア組という。リディアというのはアシェットの第一使徒で、ランティスの一番目でもある。つまりリディア組は一組と言い換えることができる。

リディアはかつて世界を悪魔テームスから救った女の人で、この世界の英雄だそうだ。300 年以上前の人だが、なんとアルナ大学の卒業生だったらしい。非常に頭が良く、首席で卒業したそうだ。それに敬意を表して特進クラスには彼女の名が冠されている。

リディア組には文系理系の両方が集まっている。超人集団なので、両方とも学習できるらしい。恐ろしい話だ。

理系クラスで一番優秀なクラスは七組で、メル組という。文系クラスのトップは十四組で、セレン組という。

一風変わっているのが八組で、特殊科と呼ばれているようだ。特殊な技能や才能を持った人間が集まっているとのこと。占い師や巫女や魔導師といった人々が通っているらしい。私的には非常に興味がある。

「で、レインは何組なの？」

彼女は日本語の意味が分かったようだが、苦笑して首を小さく振るだけだった。

ある教室の前でレインは立ち止まる。ここがそうらしい。ドアに書かれたクラス名を見ると、**℞**と書いてあった。

リディア……えっ、特進クラスじゃない！？ちょ……東大の特進ってこと？いや、レインはまだ日本でいうなら高校生だから、開成の特進みたいなものか。いや、女の子だから慶応女子の……。

などと考えていると、レインはすたすた中に入ってしまった。部外者の私が入っていいものだろうか迷いながら付いていく。

教室の造りは日本と大差なかった。違いと言えば、男女で机がペアになって並んでいるということがない点か。机はひとつひとつ碁盤の石のように整然と並んでいる。教室の前にはホワイトボードがある。黒板ではない。塾のようだ。

先ほど通りがけに開いている教室の中が見えたが、そこは円卓になっていた。教室によって造りが違うようだ。

中には既に 10 数名ほどの生徒が集まっていた。去年まで一緒だった者同士が多いのだろう、新学期だというのに早速歓談に興じている。

しかしレインはややうつむき加減で静かに歩き、誰に声をかけるというわけでもなく、席に着いた。多分その席は去年から一緒なのだろう。窓際の後ろから 3 番目の席だ。

レインに気付いた少女が **℞℞℞℞℞** と言う。レインはにこりとして小さく返すが、それで終わりだ。私について聞いてくる人もいない。

なんだか……この子は私に似ているな。

レインは鞆を机に置いて筆記用具などを机の中に入れると、席を立った。私を連れて外に出て行く。そして少し離れた教室に連れて行く。そこは講義のない生徒が本を読んだり歓談したりする部屋のように、レインは私にここで待つようにと言った。

「うん、分かったよ」と返事したとき、突然 **℞℞℞℞℞** というやけに明るい声が私の背中を刺すように響いた。

何事かと思って振り向くと、そこには腰まで届く長い黒髪の女性がいた。肌が真っ白で、同じく透き通るような白いローブを着ている。そのローブは床に届きそうなほど長い。

℞℞℞℞℞、**℞℞℞℞℞**

レインがにこやかに挨拶をすると、アリアというその女性は飛び掛るようにレインに近寄り、^⑥Λσμ Λ-℄ μec- >cl ℄c ℄0- V-μ Λc-Λ el^⑥ と早口で言いながら、ぐしゃぐしゃと彼女の頭を撫でた。もともと天パなレインの髪がアホ毛だらけになる。「にゃー」とか言いながらレインは苦笑して彼女の手を解いた。

私は彼女の迫力に圧倒されて黙って見ていた。彼女はパッと見おしとやかそうに見えるのだが、性格はまったく逆のようだ。

^⑥la℄c- -℄ -γδ^⑥

^⑥℄cΛγ-℄ leΛ le γ-l el ℄-Z - Λσμ ℄ea γaΛγ ℄σ>℄℄^⑥

^⑥-h-h, γa γa℄^⑥

口元に手を当ててくすくす笑うレイン。こんなに打ち解けた様は初めて見た。どうやらこのアリアという子と仲が良いらしい。

彼女は私に気付くと、^⑥℄e>-c> ℄a-Λδ^⑥ と聞いた。レインが^⑥γ-^⑥ と答えると、彼女は一步前に出て、丁寧な口調で握手を求めてきた。

^⑥-℄c-, -℄c- c℄e--℄σ,, el℄ol^⑥

^⑥ΛσΛ el ℄cσΛ, el℄ol^⑥

握手に応じる。欧米人のようにぎゅっと力強くやられるのかと思ったら、案外弱かった。

^⑥℄γa el -℄℄c-Λ ℄el <el℄/eel, ℄e℄eδ γeγγσ - <elγ- leΛ-Λ^⑥

どうも私はアルティア人に見えるらしい。アルティアというのは極東の国で、だいたい地球で言えば日本だから、彼女はけっこう良い勘している。

^⑥γ>....℄γa ℄-Λ el γσγγ℄-c> e lecΛδ^⑥

^⑥℄ee, ΛσΛ el μ-℄laμ-^⑥

特殊クラスか……。するとレインがフォローを入れる。

^⑥la el >ec e μ- e <aal-Λ el℄c,, ℄σ> la ℄ole℄ - μ-℄laμ- ℄c℄℄e^⑥

占い師……。そんなのが本当にいるんだ。そういえば、格好がそれっぽいな。

^⑥<aal-Λ γ-γγδ ℄a el ℄ccγa^⑥

私が驚くと、彼女は不適な笑みを浮かべた。

^⑥℄ee ℄ee, ℄cσ ΛσΛ V-℄℄-℄ ℄a <elγ- γσγγσ <aal σΛ ℄-℄^⑥

しかし私は彼女のネイティブスピードのアルカがよく聞き取れず、首を傾げて日本人スマイルを浮かべてしまう。すると彼女は怪訝そうな顔をして眉を上げる。レインは慌てた顔で^⑥℄e e> μ-Λ-, la el ℄σσ- -℄ -μγ- leΛ-Λ^⑥ とフォローした。

どうもアリアさんは私に冗談を言ったのではないか。私が「はあ？」みたいな顔をしたからレインが慌ててフォローをしたのではないかと思われる。

そのままレインは私を置いてしばらく彼女と話し込むんでいた。やがてチャイムが鳴ると二人は去っていき、私はこの部屋で待つことになった。辞書を取り出す。いまのうちに単語を練習しておこう。

レインが戻ってきたのは案外すぐだった。今日は初日なのでガイダンスがある程度で、授業はないらしい。今日は半ドンで、これで終わりとのこと。日本と同じだな。

ここの学生はお昼は弁当か構内のカフェテラスを利用するらしい。私たちは今日はカフェにするそう。カフェは構内に点在しており、一箇所に固まっていない。大きい学校だからそのほうが合理的なのだろう。

カフェは日本の喫茶店という感じで、私の高校の学食とは随分雰囲気違っていた。行きつけの店なのか、レインは慣れた足取りで入っていく。馴染みの店員らしき人物と少し世間話をしつつ注文を取る。私はトマトソースのパスタを頼んでもらった。レインはカルボナーラにしていた。

こないだアルシェさんを見ていても思ったのだが、アルバザード人は気さくで、よく人に話しかける。ちょっと何かを注文するにも軽く話をしてから頼む。日本だとコンビニで「あつためてください」と言うのも面倒がる人がいるのに、対照的だ。

パスタを待っていると、レインのアンセが光る。電話のようで、レインは指をこめかみに当てる。どうも相手はアリアさんらしい。合流しにくるそう。レインはペペロンチーノとアラビアータをあらかじめ追加注文しておいた。

アリアさんは 2 皿も食べるのだろうかと思って驚いたが、数分後に現れたのは鞆を持ったアリアさんとアルシェさんだった。どうやら彼は共通の友人だったようだ。

彼女は私を見てにこりすると、前の席に座った。アルシェさんはこちらを見て一瞬固まった後、私の横に座ろうとする。するとレインが慌てて手を出して彼を制し、*“Excuse me”* と言って私をひとつ横の席に動かそうとする。

ははあ、席次のマナーか。どうやら私は上座を陣取っていたらしい。ここは年上のアルシェさんの席になるようだ。彼が来た瞬間、私は席を立つ必要があったらしい。レインは地球にも同じマナーがあるはずと思い込んでいたのか、私に事前にマナーを教えなかった。そのせいか、レインはバツの悪そうな顔をしている。

アリアさんは少し驚いた顔で私を見ていた。目が合うと、彼女は気まずそうに下を向いた。なんだか急に重い空気が流れる。恐らく彼女は「どうしてマナーも知らない子がウチの大学に？」と思ったのだろう。

しかしアルシェさんは苦笑すると、私の椅子を指差した。

ⒺcΛ Je μ-Λ lc>el JecΛ, Jcl laaC eC μ-CJμ-CJ,, -Λ e> μcJ μceΛ lcl μec c> h-μC CcJ -Ⓔ

するとアリアさんは納得した顔をして、ⒺJe 9-Λ-Ⓔ と言った。私はアルシェさんの絶妙なフォローに感謝しつつ、レインをチラッと見た。すると、彼女は水を飲むふりをしながら微かに目を下から上に動かした。恐らくこれは「今のうちに立ったほうがいい」というメッセージだろう。私はずっと立ち上がって彼に席を譲った。

Ⓔl4aJJa -μe, C4a JlcCcJ ΛaΛ Je μ-C μ-J,, CcC Ca Jcl eC μ-CJ eΛCp Ca >clJ <cl Je eeel
lcl ΛaΛ Jcμ Λ-Λ CcJJeⒺ

すると彼はにこやかな顔で私にお辞儀をすると、私のいた席に座った。私がアリアさんの前の席に座ると、彼女は私に好意的な視線を向けた。

どうやらこれでアルバザード人とのお付き合いの審査に合格したようだ。彼らと親しくするには知性と品性だけでなく、その上ウィットまで必要なようで、ハードルが高い。私は冷や汗を隠しながら笑顔を見せた。

レインはというと、驚いた顔で私を見ていた。突然ウィットを出せるレベルに達しているとは思ってなかったからだろう。実を言うと、今のセリフは先ほど辞書を使って勉強していたときに覚えた用例を応用したものなのだ。単語だけ覚えても言語はどうにもならないということを改めて痛感した。

食事中、私は周りの人の食べ方をまねるので精一杯だった。アリアさんに異世界人ということがバレないよう、聞き役に徹し、なるべく喋らないようにしていた。

それにしても、どうして私はこんなに胃の痛い思いをしてまで異世界人であることを隠さねばならないのか。レインやアルシェさんのような理解者ばかりではないということか。まるで穢多だ。席次のことでいちいち白眼視されるくらいなら、いっそ自分が日本人であると破戒したくなる。

彼らの会話は早く、語彙も豊富で難しい。私はあまり聞き取ることができなかった。アルバザード人は話し好きなのか、まあよく喋ること喋ること。男性のアルシェさんも非常に流暢だ。

テンションが和やかなのも特徴的だ。これだけカフェの中に人がいるのに騒がしくない。アルカという言語の特性なのか、音域が狭いため、抑揚が小さく、非常になだらかに聞こえる。うるさく聞こえないので、長時間でも耳が疲れない。

会話の細かい部分は聞き取れなかったが、いくつか分かったこともある。まず、アルシェさんはレインの恋人ではないようだ。レインもアリアさんも彼のことを eŋŋo (お兄ちゃん) と呼んでいる。とはいえ苗字も顔も違うので、明らかに親族ではない。どうも親しい年上をそのように呼ぶようだ。アルシェさんのほうもレインやアリアさんを lc>el (妹ちゃん) と呼んでいる。

なお、レインは彼のことを ŋ-l-l (先輩) と呼んだり、-ŋe と呼び捨てにすることもある。eŋŋo, ŋ-l-l, -ŋe を使い分けているということだ。どうも会話の内容によって使い分けている感じがする。

自分と対等な個人と考えているシーンでは -ŋe と呼び、親しい年上としては eŋŋo と呼び、アルナ大の先輩として捉えるときは ŋ-l-l と呼んでいるのではないか。

話を聞くに、アルシェさんはどうやらかつてこの学校の生徒だったらしい。しかし、年がかなり離れているので、同じ時期に通っていなかったはずだ。どうやって知り合ったのだろう。

Ⓔlee lecΛ, lʔaŋŋo -ŋ <el-l e ŋa <elŋ- ŋeŋeŋ ŋeŋ la eŋ h-ŋ> ŋccΛ- ŋol leΛ-, ŋo> eŋ la ŋeŋ-ŋ lclŋŋδⓄ

Ⓔ>...Ⓞ

レインは説明に困った顔をした。するとアルシェさんが私のほうに肩を開きながら説明する。

Ⓔ>-Λ laaŋ eŋ >ec e leΛŋlcc<- ŋcŋee,, ŋcŋ-, -ŋΛ->-Λ- ŋcl ŋ l-l l'eŋ h-ŋ -lŋ- ŋoŋ ŋoŋ,, ŋee ŋ e laaŋ lecŋ lcc< e leΛŋ ŋoŋŋ 1 leŋ h-ŋ -lŋ- ŋcŋ-> ŋoŋ ŋeel ŋa lcc<-,, <e <elŋc< ŋcl leΛŋlcc<-,, ŋ-l lecΛ ŋaŋc- eŋ >ec e leΛŋlcc<-,, ŋ-<- eŋ ŋeel e lcc<-Ⓞ

ふむ、アルナ大のトップ 6 人を集めた知能集団をレンス・リーファというのか。レンス・リーファは各学年に存在し、レインもその一員と。しかも彼女はの中で最も優秀なのか。

ん……待てよ。それって日本でいうと開成で一番頭の良い人ってことにならないか……？

私は目を皿のようにしてレインを見た。レインは気まずそうに斜めを見ている。

——こ、このアホ毛、そんなに頭が良かったのか((; °Д°)

⑥Jee -lc- (-Λ e(- >ec e leΛJlcc<-,, ucΛ), -Λ (-Λ -(- Jc-, 4-Λ -μΛ->-Λ- (-cl -ue <ccΛ-eΛ >ec e leΛJlcc<-,, -ljcΛ -Λ c(-cΛ-(- laaJ (-cJee⑥

彼が言うには、アリアさんもレンス・リーファのメンバーだそうだ。メンバー同士の同好会みたいのがあって、そこで皆互いに知り合ったらしい。きっとアルシェさんは OB だったんだろうな。

⑥h--Λ, -lΛ-(- Jc μ-Λ,, Jeeμe⑥

昼食後、アリアさんは妹さんと約束があるとかで帰っていった。レインは私を買い物に連れて行くといい、アルシェさんも同行することになった。

アルシェさんはレインのお父さんが勤めていた魔法研究所の研究生らしく、レインのお父さんと同じ部署だったそうだ。そういう付き合いもあってレインのことは妹のように可愛がってきたそうだ。

コノーテ＝メル駅から繁華街のカルザス通りまで電車で移動する。ここには巨大なモールがある。今日からお店がオープンなので、モールにはたくさんの人がいた。

まず、レインは服屋に入った。日本と違ってスーパーやデパートは見当たらず、小売店が目立つ。この服屋もそのひとつだ。レインは自分が着ているような服を私に当ててサイズを測った。

⑥(-4a l-(- 0elδ⑥

⑥ΛcΛ eΛ Jcμ 0el e(- l-Z - ΛcΛ,, uc> (-4a μeΛ Scδ <ccΛ- ΛcΛ⑥

⑥-lΛ-⑥

レインが買ったのはレインが着ていたような宗教的な服と、あと普段着であろうスカートやブラウスだった。

日本と違って服のデザインがみんなシンプルで、どれも似たり寄ったりだ。ただ、どれも丈夫そうだ。服に何を求めるかという文化の違いだろうか。あるいは時代がそうしているのかもしれない。

地球でも第二次世界大戦中はいまレインが着ているような実用的な服ばかりだった。西洋では丈夫な革靴が履かれ、デザインはほとんど考慮されなかった。それが戦後になると女の間でお洒落に対する欲求が突如蘇った。

その急速な欲求に答えてのし上がってきたのが例えばクリスチャン＝ディオールだ。コ

ルク製の靴やストッキングに見せかけた黒いラインなどを使って消費者の心を揺さぶり、戦後の暗い雰囲気吹き飛ばした。

アルバザードに戦火の様相は特に見当たらない。とても穏やかだ。機械による大量生産を行っているだろうことは見て取れるし、資本主義なのも見て取れる。なのにこの服のシンプルさといったら……。非常に不思議だ。

服を買くと、レインは試着室で私にラーサとサユとルフィを着せ、店を出た。日本だったらコスプレっぽい格好だが、ここではこれがふつうだ。

服の次は靴だ。靴屋に行き、レインは私に合うサイズの靴を4足買ってくれた。室外履き2足と室内履きのサンダルとスリッパだ。

次に食品を買いに行った。小売店ばかりなので肉、魚、野菜など、それぞれの店を回らなければならない。運動になる。

レインはお店を回りながら名詞をたくさん教えてくれた。使いそうもない名詞が増えていく。

ふと私は人の列に気付いた。カートを手を持った人が数人、道の真ん中に列を作っている。あまりに幅が広い道なので中々気付かなかった。列の先頭にはカウンターがあり、ここでは皆アンセを見せている。

そうか、あそこが会計所なんだ。それにしても、本当にみんな電子マネーを使うのね。技術が進んでるわ。

カートに物を詰めると、レインも皆と同じように中央レジらしきところに並ぶ。清算を済ませると、アルシェさんが荷物を持ってくれた。レインは自分の彼氏でもないのに平然と彼に荷物を持たせ、自分は学校鞆だけ持って気楽に歩き出した。

「もう、レインたらお嬢様なんだから……。アルシェさん、持ちますよ。両手いっぱい流石にきついでしょ」

Ⓔ>δ ∫c ∫a ∫-∫ ∫δ ∫-, ∫c ∫cc ∫-∫ ∫eδ ∫-∫∫c, ∫-∫∫c

しかしアルシェさんは苦笑して首を振るだけだ。この国では大人しく男性に持ってもらうほうが行儀が良いことなのかもしれない。そういえば周りを見てもみんな男性に持ってもらっている。

もうリディア通りまで来ていたので、帰りはこのまま歩いて帰ることにした。リディア

通りを北東に向かって歩いていくと、すぐレインの家に着いた。もう日が暮れてきた。

“-ə, ʌɔʌ eʌ ʃ-aʃ ʒel ʃɔʒʒ

どうやらレインはチーズを買い忘れたらしい。

“ʃɔ> leʌ- ʒɔʒ ʃccʃ >e ʒe-δ

“ʃee, >cl ʃa eʒ Velʃ

“ʒɔʌδ ʃa eʃ ɔʌδ

“ɥ-, cl ʃeʒʒ ʃcʌ <c c> ʃel> ʒ- ʃa ʒ-l ʃea -ʒe-Z-ʒʌ

え、夜間外出禁止なの？なんで？

“>-ʌ V-ʒδ

“h-ʒδ V-ʒδ ʃee,, ʌ-ʌ- <ɔʌʌ ʌcʒeʃ

“h--ʌ

治安維持のために夜間の外出は禁止なのか……。じゃあ随分治安は良いんだろうな。いや待て、あの覆面のこともあるしな……。

“ʃɔ> eʒ ʌc ʃ-ʃ <ɔʌʃ c> >elʒelʒ-δ

“>cl 0-cʌ,, le -ʃ --ʌ

“-ʌʌ-

アトラスに来て一カ月以上が過ぎた。レインが学校のある日は付いていき、アルナ大のキャンパスで辞書を使ってアルカを勉強する毎日を送っていた。

一日 16 時間はアルカを勉強しているので、単語帳の残りだった 2000 語は覚えることができた。しかし、単語をいくら覚えても文と一緒に覚えなければ使えないし聞き取れない。そこで今度は用例を覚えることにし、辞書の用例を暗記していた。

また、アルシェさんからもらったアンセは音楽再生機能も付いているので、外国人向けの音声教材を使ってひたすらディクテーションを繰り返した。音声を聞いて、聞こえた文を紙に書き写すという作業だ。聞き取れるまで何度でも繰り返す。そして最後に答え合わせをし、自分が聞き取れないのはどういう部分かを調べる。

私の聞き取りにくい部分はやはりというか、機能語の類だった。"-Ph-Λ ('-Ph-λ-Λ"の"Λ"の部分聞き取れなかったり、"<cΛ -l -Λ"が"<cΛΛ -l-Λ"と聞こえてしまったりといったミスが多かった。「タルナマナって何だろう」とか「フィッタな人ってなんだろう」などと考えてしまった。しかし、こういうミスは単語力が付くごとに、徐々に減っていった。

ほかにも、"eΛ JeΛ"が"-Λ JeΛ"に聞こえて意味を逆に取ったり、"-ΛeΛ"と"-Λel"を混同したりした。"V-lbΛΛs"は「四十数個」という意味なのに"V-lΛ sΛ Λsδ"と聞こえ、「何について健康ですか？」の意味に取り違えたりと、つまらないミスがなかなか直らなかった。

それでも小指に血豆ができるくらい頑張った結果、私のアルカは一カ月でかなり上達した。レインもだんだん私にゆっくり喋りかけなくなってきた。これはディクテーションのたまものだ。単語の暗記だけではどうにもならなかったはずだ。

アルナ大のキャンパスに座り心地のいい芝生を見つけたので、昼のうちはそこに座って勉強することにした。日本でいえば真冬だが、昼間は案外日光のおかげで暖かい。

芝生でごろごろしながら勉強していたが、だんだん疲れてきたので辞書を閉じて周りの人を観察した。

レインみたいなケープを着た子や、私みたいなセーラー服を着た子が歩いている。レイン曰く、ピンクのケープを着ている子が内部生で、もともとアルナ大の生徒だった子だそう。だからレインはケープを着ている。私みたいなセーラー服を着た子は大体転校生や留学生なんだそうだ。

また、男の子の格好も面白い。もともとアルナ大だった学生はケープだが、ハリーポッターみたいなローブを着た男の子もいるし、なんと新撰組みたいな羽織を着た男の子もいる。しかも腰には刀を差している。どうやらその羽織はルティアからの転校生で、向こうの体育着なんだそうだ。

同じルティア人でも、女の子の場合は合気道のような服を体育着として着るらしい。そういえば、ちらほら歩いている。長い直毛の黒髪をひとつに結わいて歩いている。手には薙刀を持っている。

レインが言うには、あの刀や薙刀はユベールという格闘技の授業で使うものだそうだ。アルバザード人でも授業内容の選択によってはあの格好をするらしい。この国の人は皆ユベールという格闘技の授業が必須科目になっているらしい。

ユベールには空手のような武器を使わない戦闘術と、武器を使った戦闘術があるらしい。レインはどうも格闘とか喧嘩といった類のものはすこぶる苦手だそうで、ユベールの時間はいつもやられっぱなしだそうだ。まあそうだろうなと思いながらも私は黙っていた。

授業が終わったらしく、チャイムが鳴る。しばらくすると生徒がわらわら出てきた。今日はこれで終わりらしい。

私が「うーん！」と伸びをしていると、レインが「しおーん」と言いながらやってきた。手には鞆を持っている。

「おかえり。おつかれ。今日はもうおしまい？」

「うん。Jee leA- 7oP UccC l-AJ7ePA」

「おっけー」

こっちの生活にもすっかり慣れたもので、私はすたすたと駅へ向かって歩き出した。そのまま電車に乗って同じ北区のコノーテ＝ミルフ通りへ行く。

今日はランスケルン美術館というところに案内してくれるそうだ。世界最大の美術館というので楽しみだ。

アルシェと待ち合わせになっており、入り口のところで彼と落ち合った。

ⓄJooAoo

Ⓞoa, Cc J-fceJ l--J- c> <cJ,, Ca ec l-Z Je P-C - Cc, UcoAoo

私はレインに買ってもらった濃い色のラーサを着ていた。

ⓄJeaC-Ac, -Meoo

最近彼は私のことを la- という敬称なしで呼んでくれるようになった。私も彼のことを名前前で呼ぶことにした。アルバザードでは対等な関係として話す場合は年上でも呼び捨てでかまわないらしい。

しかしやはり年上なので場面に応じて -Me Jaa と呼ぶことにしている。向こうも私のことをたまに lca^ lccZ と呼ぶ。lccZ は「ちゃん」に当たる敬称だ。

敬称を付けたり付けなかったりは難しい。「年上のアルシェさん」として話しかける時には lYaJJa と呼び、「親しい年上のアルシェさん」として話しかけるときは eCco と呼び、「対等な友達のアルシェ」として話しかけるときは -Me と呼び分けねばならない。

この使い分けは家族にも及ぶ。例えば相手を父とみなして話すときは a-a- などを使い、一個人として話すときは呼び捨てにする。

もっと複雑な例もある。学校の教師を呼ぶとき、教師という職業を強調するときは し-し-^A といい、自分たちの先生という側面を強調するときは し-^A- といい、年上の男性という側面を強調するときは lYaJJa といい、一個人として話す場合は呼び捨てにする。

会話の内容、それどころか一文ごとの内容のかんがみて呼び方や話し方を変えるという話し方は非常に複雑で難解に感じられた。日本語にはそのような性質がない。先生は常に先生だ。場合によって呼び捨てが許されるということは考えづらい。

また、自分の親を呼び捨てにするなど、恐ろしくて想像だにできない。ウチはお父さんが雄和でお母さんが理沙というが、その名前を意識するのは書類に保護者の名前を書くときだけだ。

ランスケルンには夕方だというのに結構な人だかりがあった。アルバザードには土日という感覚がなく、個々人が勝手に週 2 回休みを取るので、平日という感覚も同様にない。従って、混む日と混まない日という差は存在せず、いつでも適度に混んでいる。

入場口でアンセをかざすと、中に入る。入館料は学生は 50 ソルトだそうだ。ソルトというのはこの国の通貨で、大体私の見た感じ、4 円で 1 ソルトくらいに見える。オレンジジュースが一杯 30 ソルトくらいで、日本だと 100 円ちょっとだから、大体そのくらいだと思う。日本での価格を 4 で割れば、だいたいソルトでの価格が分かる。

ランスケルンはコノーテ＝ミルフ通りをまるまる占有する巨大な美術館だそうだ。地図を見る限り、フランスのルーブルとオルセーを足したくらいの大きさがあるのではないかな。アルバザードにはゲームのような娯楽が少ないので、こうした美術館は娯楽施設として使われているようだ。日本とはえらい違いだ。

ちなみに、ランスケルンの西側にはこれまた大きなカレリア水族館というのがあり、カップルのデートスポットになっているそうだ。反対に、ランスケルンの東側にはフラメル音楽堂という巨大な音楽施設があるらしい。

どうも北区のミルフ通りには文化施設が集中しているようだ。学校のクラス分けと同じく、これには語源となった人物の特性が関与しているらしい。ミルフというのはアシェットの第 11 使徒で、芸術に長けた人物だったらしい。

ランスケルンの建築は非常に芸術的で、心なしかループルに似ていた。長い階段を経て中に入ると、パンフレットが搭載された大判の電子ペーパーを渡された。これは帰るときに返却するらしい。

いよいよホールに入ると、入り口にはアルミヴァの 12 神を象った石造のアーチがあった。壁のアーチから飛び出すように神々が並んでいる。圧巻だ。

神のアーチをくぐると雰囲気が変わった。壁は緑がかった大理石でできていて、非常に豪華な造りになっている。どうやらここは彫刻を集めたホールらしい。パンフレットを見ながらどれが誰というのを確認していく。

像だけで一体いくつあるのだろう。レインは今日はさわりだけと言ってさっさと通り過ぎて行ってしまった。ランスケルンはとても 1 日で見て回れる場所ではないという。

初心者はまず最初にざっとメインホールを歩いてみて建物の位置関係を覚えるのだそうだ。細かな鑑賞は慣れてきてからだという。アルバザード人は年に何度もランスケルンに訪れるが、子供のころから来ているレインでもまだ飽きないそうだ。凄い話だ。

彫刻ホールを過ぎると、壺やら土器やらのホールを飛ばして絵画のホールへ行った。私の最も興味のあるホールだ。ループルと同じく時代別に絵が並べられているが、地球と違って圧倒的に写実的な絵で占められている。

簡単に言えば、ミレーやアングルといった画風がほとんどで、ルソーのような印象派は少ない。また、ピカソのような——キュビズムというのだが——絵はヴェレイという時代に少し見られる程度で、なりを潜めている。なんというか、ほとんど神話的な絵で占められているのだ。なぜだろう。

ふつう、絵の世界にはもっと多様な表現方法があり、日本人が一見「これはヘタでは？」と思うようなピカソのような絵にもきちんとした時代背景や芸術理論がある。あれはあれで凄い作品ではあるのだ。

私は美しい女性の絵をじっと見ていた。アシェットの第 1 使徒リディアを描いた肖像だそう。小柄な美少女は銀色の杖を持って悪魔とおぼしき敵に魔法の炎を放っている。まるで写真のようだ。

私好みの幻想的な絵ね。

別の絵の前に立ち、眺める。『アルデスを追うルフエル』というその作品では、ルフエルという女神が杖を持って飛びながら、アルデスという神を追うシーンが描かれていた。ルフエルは美しいが眉をひそめ、怒っているような顔つきだ。アルデスは飛びながら後ろを振り返り、ルフエルを恐れているようでもある。

別の絵に『ルフエルとエルフレイン』というのがあったので見てみた。こちらは別の画家によるものだ。ルフエルとその従者である 2 人の姉妹が佇んでいる。これを見て私はピンと来た。

——ああそうか、これは本人なんだ……！

思わず大きく頷いた。

2 つの絵の作者は異なっている。にもかかわらず、ルフエルの顔はまったく同じだ。同一人物とすぐ分かる。

そこで地球との違いに気付いた。地球には神がいなし古い時代の写真もない。マリアの写真は残っていないし、ゼウスは始めから存在しない。だから作者によって彼らの顔が変わるのだ。特定の人物を描いても、描いた人によって違う顔で描かれる。

女神もそう。『ビーナスの誕生』と『パリスの審判』を比べると、明らかに女神の体形が違うことに気付く。これはその絵が描かれた当時の美人の条件が異なるためだ。地球には神が実在しないため、絵描きは本物のビーナスをモデルに使えなかった。

しかしこの世界は違う。魔法があるというこの世界には神も恐らく実在し、人間は彼らの顔を知ることができた。だから、時代も国も違う絵描きが描いても、それが写実的であるかぎり、きちんと鑑賞者に神の姿を伝えることができた。

繰り返す——それが写実的である限り

そう、だからこそこの世界の人にとって写実的な絵は重要だったのだ。この世界の芸術は神の存在や神が行った歴史的な出来事を描写するほうに進化していったのだ。地球では古典主義と新古典主義がその役目を買って、写実主義とは一線を画している。だがアトラスでは古典主義と写実主義は同義なのだ。なにせ神が実在するのだから。

産業革命や近代化の波に乗り、人々の暮らしが豊かになるにつれ、地球の人は神を必要としなくなった。ニーチェがツァラトゥストラにかく語らせたころには既に神は死んでいた。しかしこの世界では当然のように神が生き続けている。なにせ実在なのだから。人々の生活の豊かさに関係なく、神は人とともにあった。

だからこそ芸術家は彼らを描写することに命をかけてきた。そのことはランスケルンの構成を見ても分かる。神や偉人を描いた彫刻と絵画で館内のほとんどを占め、建築や土器などといった道具は展示が少ない。絵についても風景画はほとんどない。神が実在するということは、ここまで歴史や芸術に影響を与えるものなのか。

確かに、神が存在するならその存在をなるべくありのままに描くのはもっともだろう。恐らくこの世界において神の絵は肖像画に過ぎないのだ。だからこそ「似させる」ことが重要であり、光をぼかしたり形を単純化したりといった行為は忌避されたのだ。

しかし逆にそのことがこの世界の芸術を——いわば地球の観点でいえば——ある特定の様式に固定し停滞させたともいえる。

私はこの美術館を訪れたことで、この世界には神が実在することを信じるようになった。地球の美術の歴史を知っているからこそ、信じることができたのだ。神の実在しない地球では、神の顔形はまちまちだ。アトラスの神が虚構なら、地球と同じく画家によって姿が異なっていたはずだ。

ということは、ここで描かれている魔法も恐らく実在するのだろう。リディアが杖から炎を出しているのは、恐らく架空ではなく歴史的事実なのだろう。リディアは女神でなく人間だから、人間も魔法を使えたのだ。ということはその子孫であるレインたちも……。

それにしても、これらの絵が創作ではなくいわば歴史写真なのだと思うと、急に胸がわくわくしてくる。

さらにいえば、人間以外の形をした幻獣たちについても、画家は同じような描き方をしていた。竜王ティクノが正体である竜の姿になった絵や、7匹の悪魔ソームの絵など、どれも同じ姿で描かれていた。

そのほかにも、河川を司る龍のように長いアスカ神や、白鯨のレヴァイアタンのモービー＝ディックを髭髯させる巨大な生物など、幻獣は尽きることがなかった。

私をさらにわくわくさせたのは、これらの幻獣がすべて実在するという事実だった。

美術館を出た私は胸が熱くなっていた。冬なのに興奮冷めやらぬ感じだ。レインは私が堪能したのを見て、嬉しそうな顔をしている。アルシェもまんざらではない。

外に出たらもう真っ暗だった。大体ここはこの時期 5 時になると真っ暗だ。通りには街灯がついている。アルバザードはこの時期 7 時までしか外出が認められていないので、そろそろ帰らないといけない。

レインはアルシェをお茶に誘った。まだ 7 時まで時間があるので一休みする分には平気だろう。

帰りがけに出店で夕飯の材料を買うと、私たちは電車に乗った。例によって荷物はアルシェが持ってくれている。

狭い街なので、ランスケルンから家まではすぐの距離だ。自転車でも簡単に行けるくらいだ。電車だとなお早い。

家に着くと中に入って荷物を置き、私はまず手洗いとうがいをした。レインは紅茶の用意をするが、葉が切れたので地下室の倉庫から持ってきてほしいという。

「はいはい」

鼻歌交じりに地下室への階段を下りる。

「暗いなあ……」

パチッと灯りをつけると、ぼんやり地下室が照らされる。

「こーうーちゃーは、どっこかなあ〜」

木箱の中を探す。

「あった ♪」

茶葉を取り出したとき、コトンと小さな物音がした。

「ん？」

無意識に振り返ると、そこには黒い大きな影があった。

「……え」

その影をよく見ると、そこにいたのは人だった。

黒い服を着て覆面をかぶった人影が私を睨み付けてきた。

「——！」

目が合った私は思わず息を呑む。

それはあの覆面の男だった。

うそっ！なんでこんなところに！？

「ひっ」

掠れた悲鳴をあげた瞬間、男は急に走り出した。

「いやっ！」

男はそのまま無言で私に体当たりをしてきた。

「きゃあー！」

とっさのことに対処しきれず、私は吹き飛ばされて壁に背中をぶつけた。一瞬呼吸ができなくなる。

男はそのまま階段を駆け上がっていく。手には棒らしきものを持っている。

「れっ、レイン！*PeΛ eeeelKr*」

とにかく危険を知らせるために私は叫んだ。

私は叫びながら、男を追いかける。

だが階段を上りきったとき、レインの金切り声が聞こえた。

しまった、手遅れだったか！

「レイン！？」

居間では男が棒でレインを後ろから羽交い絞めにしていた。アルシェが苦々しい顔で男を睨み付けている。

「ちょっと、レインを離してください！」

日本語で怒鳴りつけると、男は困惑した声で何か喚く。どうやらレインに傷を付けられなくなれば玄関を通せと脅しているようだ。

しかし私はあえてアルカが分からないふりをした。交渉の余地なしと見せたほうがかえって人質を放棄しやすいはずだ。こないだ戦って分かったが、この男は素人だ。恐らく本気でレインを傷つける勇気はない。

私は人質を無視して近くに置いてあったモップを手取る。

⓪0ecl leμ ʔaʃ ʌoʊ V-ʌʌ ʌa ol ʃc -ʌʔoʌZ - leμʔ⓪

「はあ？何言ってるのかさっぱり分かりませんね。世迷言も大概になさい」

一度私に負けている男はこちらを恐れてか、レインの髪を引っ張って彼女を盾代わりに使う。なんて卑怯な……。

⓪ʌcoʌʀ ʃc >cμ h--ʊ ʌaʀ⓪

緊張した声のアルシェ。

「大丈夫ですよ。ねえレイン、聞いて。わたしは ぼうを ふる とき あなたは じぶ
んを しゃがむ して」

するとレインは唇を引きつらせながら、こくこくと頷く。

⑥Oec, Me ʔoʌZ - leMr⑥

「やあっ！」

叫ぶ男におかまいなしにモップを振り上げる。その瞬間、レインが渾身の力でしゃがみ、
男の右腕を引っ張った。男は利き腕をレインに取られ、なすすべもなく私に面を打たれた。
パシーンと良い音がする。

⑥leor⑥

男は激怒すると、棒を捨てて私にふたたび体当たりしてくる。力で押し切る気か。

私はモップを投げ捨てると、左足を前に出しながら男の左手を右手で掴んだ。左足を前
に出しきって相手の懐に入身するとともに、伸ばした左腕を男の喉元に当てる。そのまま
腕を前に押し出すと、男は地面に倒れていった。合気道の入身投げだ。

バーンと音がして男は肩から床に倒れこんでいった。

「レイン、大丈夫！？」

私はレインに駆け寄り、彼女を抱きしめて保護した。すかさずアルシェが飛び込んでき
て、私たちの前に立つ。

⑥Me ʔooooʌZr⑥

男は懐からナイフを取り出すと、武器ひとつないアルシェに飛び掛った。

しかし彼は長い脚を前に出すと、男の胸を蹴り飛ばした。キックボクシングなどに見ら
れる前蹴りだ。私は思わず目を見開いた。彼も武術ができたとは。

さすが男性というか、私と違ってアルシェは追撃をした。今度は男の腿に強烈なローキ
ックを喰らわせた。ズバンという迫力のある音がする。

男は腿を押さえてよろめく。膝に来たようだ。ほぼ同時にアルシェは一步踏み込むと、
強烈な右ストレートを顔面に浴びせた。男は脳をはげしく揺さぶられたのか、そのまま地
面に倒れこんだ。グローブなしで脳を揺らすには相当なパンチ力があるはずだ。細身の彼
のどこにそんな力があるのだろうと関心してしまう。

激しく攻撃をしたものの、紳士的なアルシェは倒れた相手には攻撃を加えなかった。た
だ、男はあくまで一時的に倒れているだけなので、このままにしておくわけにはいかない。

アルシェは男を羽交い絞めにすると、地面で関節技を極め、動きを完全に制した。

その鮮やかな戦いぶりを見て私は思わず吐息を漏らした。アルシェは血のついた赤い手で黒い髪に手櫛を入れる。私のおへその奥にいるレナール夫人が、才気溢れるジュリアン＝ソレルを前にしてきゅっとなる。

Ⓔμe cΛΛ, eJ Cc laΛ- -CαδⒺ

男はアルシェの問いに沈黙で答えた。しかしアルシェが関節をきつく締め上げると、苦悶の表情で答えた。

Ⓔle ZαΛ....Ⓔ

棒を見るアルシェ。

Ⓔhec....lcΛ-, Cα lcV....Ⓔ

何か気付いたのか、不審な顔つきでアルシェは男の覆面をはぐ。

Ⓔhαμδ Aeεμ-μⒺ

ネブラ？男の名か？どうしてアルシェが名前を知っているの？もしかして知り合いだったのか。

ⒺeC(Cα, Cγα Jeμ laδⒺ

レインが不安そうな顔で尋ねる。

Ⓔγαγl-εeJ -ΛC leⒺ

え、アルシェの同僚だったの？じゃあ魔法研究所の一員ってこと？

アルシェは関節技を外し、ネブラを解放する。彼は観念したのか、大人しく床に座った。

Ⓔz>....-l- Cc Jα Cα -Cα, Aeεμ-, Cc l-Λ-C le ZαΛ CcJδⒺ

Ⓔ-Λ....l-Λ-C le ZαΛ >-Λ....le eC γ-γΛⒺ

Ⓔ-l- Cc γα Cαδ Cα eC γ-γΛδ le eC Ccα <cel e V-μle γαγδⒺ

Ⓔ....Cc lαγc Vcl -Λ Cεμ -Ⓔ

ネブラは不敵な笑みを浮かべた。アルシェに組み伏せられてもなお自分は精神的に勝っているとも思っているかのような傲慢な——まるで阿Qのような嗤いだ。私は見せしめの刑場に向かう愚かな偽革命党員を嘲笑う民衆の目で彼を見下ろした。

アルシェはこほんと喉を鳴らすと、立ち上がって椅子を引く。

ⒺJ--, μeΛ JγcΛ -Cα,, εeΛC-ΛC αΛ -Λ Vcl-C Cc,, C-l J- CαC-l, Cc μe V-ΛC laαJ γαΛγⒺ

ネブラは反省したのか、私たちを見てばつの悪そうな顔で Ⓔ-ΛCεα....Ⓔ と言った。この反

応は私にとっては意外で、肩透かしを食らってしまった。

レインは黙って頷くと、台所に行った。

「レイン、どうしたの？」

「れいんは おちやを つくる です」

「え？……あ、そう……」

私は念のため、ネブラが逃げられないよう入り口付近に立った。

レインが紅茶を持ってくると、ネブラは大人しくお辞儀をして、紅茶を飲んだ。「そこは遠慮なさいよ」と思ったのは日本人の私だけのようだった。

Ⓔ-μe, -λ eλ u-μ c u-μ v-λ -λ, c-l le e c v-μle γ-γ cJeeⒺ

どうやらネブラの盗もうとした棒はただの装飾品ではなく、ヴァルデだと言いたいようだ。ヴァルデというのは神様の武器のひとつで、強力な魔法の杖だと辞書に書いてあった。

いや、ちょっと待った。何大人が集まって急に神話の話を持ち出しているんだ？

しかし、アルシェは驚いた様子で聞いている。まさか……真に受けているんじゃないでしょうね。

Ⓔ>>....c-l....., μeλ μ-λJ VecλⒺ

ⒺJλl- l-> e c J--l cλ c c c<l-c v-μle γ- -μe-Z-μ c> -lcJ cλcⒺ

この世にはエルトとサールという 2 種類の神の一族がいる。どちらもこの星とは違う世界に国を持っている。サールの王様はアルデスという。美術館で見た人ね。そのアルデスの息子に地の龍トゥッティがいる。ネブラが言うには、どうやらそのトゥッティが家宝のヴァルデを去年の秋になくしてしまったらしい。

ⒺJλ l-cZ -μleJ μe c-c -μe- γac cαⒺ

アルデス王はこの国の召喚省アルテアにヴァルデの搜索以来を出した。

Ⓔc-<l e c h-o <eλZel -lJ--l lel -μc-leJ,, l- JλJ-c -λJ γac v-μle γ-v λααμγ- γac c- lel γ--λ lααcⒺ

神の依頼を受け、召喚省長官のフェンゼル＝アルサールは部下たちにヴァルデを探させた。その部下の中にはレインのお父さんのドウルガさんもいたようだ。

Ⓔλααμγ- J-γ-c v-μle, Je<-c J-c cα - <eλZel,, c-l c> cα, u-le c....l- Jeμ-c <eλZel -λJ λJ Je c -μeλ- γλ v-μleⒺ

Ⓔcλ c c γλ cλⒺ

眉を上げるアルシェ。

「え、ちょっと待って、アルテナって誰？」

するとレインが蒼白な顔で ⑥-Jeμ ʼ-μe-Z-μl⑥ と答えた。アルテナさんはこの国の副王だという。確か副王は事実上の最高権力者だとか……。フェンゼルはヴァルデを使ってアルテナさんの暗殺をしようとしていたのか。

……え、じゃあレインのお父さんはヴァルデを見つけた後、フェンゼルに渡しちゃったの？それってまずくない？

⑥-λ eλ Jeμ -le> l--c, ʼ-l l- Vɔμʼ-c cλ, ʃc Jeμ -λɔ e <eλZel⑥

よく分からないけど、ドウルガさんはヴァルデを渡さずに死んじゃったのね。

⑥h-c, eJ ʼc Jeμ lʃaJɔa laaμʃ- J-ʃ-c V-μleδ⑥

⑥cJ-, -λ eʼ Velʃ ʼ-μʼʃaλ<ʃ- -δ c> μaaδ ʃɔʃ, V-μ Zeʃ e VeeμVelʃ, -λ ʃ-l-ʃ laaμʃ- ʃɔʃ ʃ-l -λJe <cλ la Vɔμʼ >ɔ-⑥

それを聞いたレインが耳をピクっとさせる。

⑥c> ʃa <ɔλc, -λ λ-c Z-l ʃcλ,, Jee -λ lɔ-l-ʃ ʃe lel....Jɔʃ l- J-ʃ-c Je μ-ʃl V-μle,, ʃ-l, ɔʃ Jɔ-, Jɔλ -l- eJ l- eλ Je<-ʃ V-μle - <eλZel Jecδ Jɔλ -λ e>-ʃ Z-cλ, ʃ-ʃ-c -λɔ e <eλZel ʃɔλʃ e> ʃɔʃ l- l--ʃeJ⑥

⑥....h-ʃa ʃc Jeμ-ʃ -λɔ e <eλZel, lɔ-l-ʃ—⑥

⑥—laaμʃ- ʃ-l Jeμ-ʃ -λɔ e <eλZel, Je<-ʃ eλ V-μle - l-⑥

⑥h--λ....⑥

アルシエは腕を組んでため息をついた。

⑥ʃa eʼ h-ɔ >-λ lʃaJɔa eʼ <-lcJ ʃcλʃ- ʃɔʃ >cV- l--ʃ⑥

⑥-λ lɔʃ, Vɔlɔʃ laaμʃ- J-ʃ-c V-μle,, ʃ-l l- eλ Je<-ʃ ʃa - <eλZel,, h-ʃa V-μle ʃ-leʃ ʃ- μ- l--ʃ⑥

⑥ʃɔ>....⑥ レインが口を挟む ⑥ʃʃa laλ-ʃ -ʃa l-λ- e<ʃ V-μle....Jeʃe⑥

頷くネブラ。

⑥l-l- eJ ʃʃa eλ ʃ-μʃ-c λɔλδ⑥

⑥>-λ....-λ -λɔʃeJ λɔJ Je< V-λ V-μle - <eλZel l-λ- ʃ-λ- Vecλ⑥

それを聞くとレインは失望した顔で手を額に当てた。だが次の瞬間、彼女は逆に希望に満ちた顔でネブラに問うた。

⑥lccλ, ʃeʃ ʃlɔ- ʃa-λ, ʃ-ʃ- λɔ-λ eλ VɔμʃeJ Jeʃeδ⑥

⑥ʃ->cl....⑥

レインは長いため息をついたかと思うと、突如泣き崩れてしまった。私は彼女の肩を抱いてさすってやる。

「よかったね、レイン。お父さん、生きてるかもしれないね」

その後、アルシェは警察を呼んでネブラを引き渡した。彼は住居不法侵入および傷害未遂で逮捕された。いくら同僚とはいえ、流石にこの事件をもみ消すわけにはいかない。

警察が引き払ったあと、私たちは複雑な心境でテーブルに着いた。

私は紫苑の書に話を整理して書きとめた。

- ・トゥッティ神が去年の秋にアルバザードのどこかでヴァルデという魔法の杖をなくした。
- ・アルデス神はアルバザードの召喚省に搜索依頼を出した。
- ・責任者は長官のフェンゼル。
- ・搜索部隊にはレインのお父さんのドウルガさんがいた。
- ・ドウルガさんが恐らくヴァルデを発見？
- ・一方、フェンゼルはヴァルデを悪用して執政官アルテナの暗殺を計画。
- ・ドウルガさんは恐らくフェンゼルの企みに気づき、逃げた？
- ・ドウルガさんは自分が死亡したものと装った？（フェンゼルの管理下から逃れるため？）
- ・魔法研究所は召喚省の下位機関（レイン曰く）
- ・アルシェ、ネブラ、ドウルガはすべてここの研究員。ドウルガさんのみ召喚省の役人を兼任。
- ・ネブラは経理課に所属。年末の決算処理の際、死亡したはずのドウルガさんのアンセ使用履歴を発見する。
- ・ネブラはドウルガさんが本当は生きているのではと疑い、フェンゼル側にスパイとしてコンタクト。フェンゼルの計画を知る。ドウルガさんがフェンゼルから逃れるために死亡を装ったのではとネブラは疑う。
- ・ネブラは昇進と引き換えにフェンゼルにヴァルデを渡すべく、ヴァルデがあるだろうドウルガの自宅、すなわちレインの家を襲った。

疑問点

- ・ドウルガさんは生きている？

- ・なぜドウルガさんは死亡を装った？本当にフェンゼルの管理下から逃れるためだけ？
- ・アンセの使用履歴を不用意にも出してしまったということは、匿ってくれる味方が周りにいない孤軍奮闘な状態で生き延びているということ？
- ・なぜ大切なヴァルデを持って逃げなかった？

私は紫苑の書を見ながら「うーん」と悩んだ。最後の疑問は比較的たやすいかもしれない。ヴァルデは長い杖で、こんなものを持って歩いていたら目立ちすぎる。だから仕方なく自宅に置いておいたのだろう。恐らく発見した場所から自宅に運ぶので精一杯だったのだろう。

そうこうしているうちに時間は 7 時を過ぎてしまった。みんな気付いていなかったようで、アルシェは参ったという顔をした。

どうも年頃の娘が若い男性と夜遅くに二人きりでいるのを近所の人に知られると、その娘は噂が立ってもう結婚できないそう。ネブラのせいで警察沙汰になったので、近所の人にはアルシェが来ていることに気付いている。

とはいえ、7 時を過ぎたら絶対に外出できないかという、そういうわけでもなさそう。成人男性はやむをえない場合は外出が許可されている。

もともと防犯のために作られた法律なので、加害者となる無法者が街でたむろしたり、被害者となる女性が遅くに歩いたりしなければあまり問題がないらしい。狭い街なので警官も近所の人やっているから、職務質問をされても清廉潔白で事情があればだいたいどうにかなるらしい。

アルシェは取り急ぎ、今後の方針を話した。ネブラの言うことが本当なら、この家の地下室にあった棒は本物のヴァルデということになる。

現在、神はアルバザードの召喚省にヴァルデの搜索依頼を出している。しかし責任者のフェンゼルには渡せない。為政者アルテナの暗殺を企てているからだ。

ネブラにヴァルデの情報が漏れたということは、フェンゼル側の人間がネブラの逮捕を訝ってヴァルデの存在に気付くやもしれない。そういう意味ではネブラを警察に突き出したのはマイナスだったが、かといってネブラを野放しにしておくわけにもいかない。

もしフェンゼル側がヴァルデの存在に気付いたら、きっとこの家は彼の手下に襲われるだろう。そうなる前に、私たちはヴァルデを持って逃げねばならない。しかし、どこへ？

……待てよ、そもそもフェンゼルを通さずにヴァルデを神に返せば一件落着ではないの

か？私はレインにこう聞いた。

“lee, leλ- Je< -λ V-μle -l -μleJ J'clCδ -lKc, eλ V-μ <eλZelε

“ol Jo-, <eλZel JeC <-λ leλ- γ-V λaaμλ- Je Cee-ε

“-μleJ eλ V-λo -μCeλ- Jc<δε

“Jo elK, λcλ- Jo λcλ >cl J--μ e> λcλ ol - VelJ C'-Ccl-J Veccl eμC λ- So - J--μ eλCλ V-J JoVeλ J-μC Jcl Joλε

もしフェンゼルを通さずに神にヴァルデを返したら、アルテナ暗殺は防がれるかもしれないが、今度はフェンゼルの恨みを買って私たちが報復されてしまう。なるほど、それもそうだ。なら私たちはフェンゼルを倒しつつヴァルデを返さねばならないということになる。

ではいっそのこと神に頼んでフェンゼルを殺してもらえばいいと提案したが、サールの一族であるアルデス神がアルバザードの政治に関与すると、サールと対立していたエルトの一族との間に暗雲が立ち込めるらしい。

もともとエルトとサールはこの星で領土争いをしており、今はあくまで和睦をしているだけの状態なのだそう。サール界がアトラスの政治に口を挟む行為は、エルト界からすれば宗主国気取りの内政干渉と解釈されるらしい。もちろん逆も然りだ。そういった政治的な理由で神がアトラスのことに直接手を出すのは難しいという。

じゃあ人間は何のために神を崇めるのだろうと思ったが、それはこの世界の長い長い歴史があつてのことだそうで、今の私には理解できることではない。前にアルティス教について聞いたときも、レインは「自分が崇めているのはアルテであつてサルトではない」だなんだと訳の分からないことを言っていたが、さっぱり理解できなかった。とにかく、今分かったのは、神はフェンゼルを倒してくれないということだ。

結局、今分かっていることは、ヴァルデをフェンゼルから守らねばならないということと、生きているかもしれないドゥルガさんを探すことの2点だけだ。

彼が何のために逃亡生活をしているのかは分からないが、信用できるのはレインの父であるこの人しかいない。しかし、肝心の居場所が分からない。

時間はもう8時を回っていた。アルシェは流石に焦りだしたか、とりあえず今日は帰って、明日アリアさんを交えて学校で相談しようということになった。アリアは有名な占い師の家系というし、魔法が実在する世の中なら確かに彼女を交えて相談したほうが良さそ

うだ。

ネブラは先ほど逮捕されたばかりなので、フェンゼル側もネブラとユティア家のつながりにはまだ気付いていない。とりあえず今夜急に襲われる心配はない。

アルシェはわざと大きな音を立てて帰っていった。近所へのアピールのようで、レインを気遣ったことだ。私は念のため、鍵を厳重にかけておいた。

残った私たちは暗い顔で、会話もろくにないまま夕飯を食べた。レインの気持ちを察すると何も言えなかった。なんだか厄介な事件に巻き込まれてしまったという恐怖と、ドゥルガさんが実は生きているかもしれないという期待とで、相当なストレスになっていることだろう。

ふだんにこやかで穏やかなレインだが、今日ばかりはピリピリした空気を醸し出していた。ヘタなことを言ったら怒られかねないと思った私は、できるだけ彼女を刺激しないよう、黙ってご飯を食べていた。

夕飯が済むと、レインは黙ってカモミールティーを入れてくれた。お風呂に入る気力もないのか、物憂げな顔でじっとカップを見つめている。私は結局一言も声をかけることができなかった。

今日はレインと一緒に寝ることにした。ネブラの件もあったし、一人では心細い。それに、もし万一のことがあったら私がレインとヴァルデを守らなければならない。それには一緒に寝たほうがよい。

私は不安そうな顔のレインとヴァルデを抱きしめながら眠りについた。

4 ~

ネブラの一件で交感神経が緊張してしまい、昨日は寝つきが悪かった。その上、朝 4 時には目が覚めてしまい、眠れなくなってしまった。レインを抱きしめながら寝ていたので寝づらかったというのもあるかもしれない。

レインの寝顔を見る。すやすやと寝息を立てるたびに亜麻色の髪が微かに上下動する。桃色の唇をわずかに開けて、ときおり寝言を囁く。

それにしても……可愛いなあ。お人形が寝てるみたい。

私は小指の先をレインの唇に当て、優しく撫でる。くすぐったいのか、レインは「うう」と寝言を言う。色白な頬に手を当てると、思った以上に暖かい。

人って寝てる時は体温が高いのね……。

私は首を前に出して、レインの鎖骨の辺りに顔をうずめる。パジャマの感触が柔らかく、暖かで、いいにおいがする。昨日はお風呂に入らなかったのに甘く柔らかな芳香がする。

あまりいたずらしたら起きちゃうかなと思い、私は静かに顔を離してベッドから出た。もう寝付けそうにないし、諦めてアルカの早朝訓練することにした。

辞書を持って居間に下りる。しかし、冬の早朝の寒いこと寒いこと。

まったく、どこが「冬はつとめて」よ。

お湯を沸かして白湯を飲むと、少し体が温まる。

辞書を開き、神話や歴史について調べた。この世界に神がいることも魔法があることも既に了解していたが、だからといって自分の身に突然ファンタジックな出来事が振るのかかとは思っていなかったの、神話や歴史についてはそんなに勉強していなかった。

でもまあ考えてみればあの金髪の悪魔メルティアが私をここに連れてきた時点で既にファンタジックだったんだよな……。

歴史には流れというものがあるので、面倒ではあるが小出しにするよりは一度に覚えたほうが勉強しやすい。寝ぼけ眼をゴシゴシこすると、私は「よしっ」と気合を入れた。

まず、この世界にはヴィードというエネルギーが存在する。ヴィードは 4 種類ある。ユノ、ヴィル、ノアという 3 種類と、それらを合成したトリニティとしてのアルマだ。いずれもファンタジー小説に出てきそうなエネルギーだ。

ユノは簡単に言うとドラゴンボールの「かめはめ波」みたいな光線を出すためのエネルギー

ギーらしい。ヴィルは魔法を使うのに必要なエネルギーで、ファイナルファンタジーの MP みたいなものだ。ノアは人の運動神経を向上させ、常人でも簡単に中国雑技団みたいな運動をできるようにするエネルギーのことだ。

それら 3 つを合わせるとアルマというエネルギーになる。アルマは白い光で、至高のエネルギーだそうだ。

この世界が始まったとき、世界にはそのアルマが集まっていたそうだ。世界はアルマの増加によってどんどん膨張していた。しかし世界が大きくなりすぎたため、爆発の危険性が生まれた。そこで世界の爆発を防ぐために、相反する力を持った elC と J--I という男女の神が生まれた。

ロマンチックなことに、彼らは互いに愛し合ったそうだ。彼らは等しい量の力を持ち、互いの力を相殺することで世界の爆発を食い止めた。ポイントは、彼らが等しい力を持ち合っていたことだ。

ところがあるときサールは子を望まないエルトを騙し、ユーマという娘を孕む。出産をすれば女性のほうが大変なので、多くのエネルギーを失う。サールの力はエルトの力より弱くなり、バランスが取れなくなってしまった。その結果世界はひずみ、その歪みから悪魔テーマスが生まれた。

怒ったエルトはサールを捨て、傷心のサールは山から投身自殺をする。その千切れた体からアルミヴァの 12 神のうちの 6 人が生まれた。

一方、エルトはサールの死を知り、ショックを受ける。そして塔を築いて頂上で孤独に死ぬ。それをアルミヴァのヴァルゾンが千切り、そこから残りの 6 人のアルミヴァが生まれた。

彼ら 12 神は 6 柱ずつ ePC, J--P という一族名を名乗った。カタカナにすると神の名前も神の一族名も同様にエルトとサールなので注意がいる。

こうして神はエルトとサールの 2 派ができたが、一方の悪魔テーマスは悪魔の母としてどんどん強力な悪魔を産んでいった。

あるとき、悪魔たちは神を滅ぼそうとして戦争をしかけた。神々は悪魔テーマスを滅ぼすために共闘した。これがヴァステという戦いだそうだ。

ヴァステは神々の勝利によって幕を閉じる。その後、反目しあったエルトとサールの一族は互いに戦争を始める。これがラヴァスというそうだ。

エルトの女王はルフェルといい、サールの王はアルデスという。今回ヴァルデをなくし

た地の龍トゥッティのお父さんだ。

ラヴァスの後、神々はアトラスを去り、独自の世界を天界と地界に作った。これにより、アトラスは神の歴史から人類の歴史に変わっていく。

神々は自らの世界を作り出してそこに移り住んだものの、それはまったくの異世界ではなかった。神の世界はカルテの中にある礼拝堂のカルテンと空間的に繋がった場所に存在しているからだ。言い換えれば、カルテンは神の世界への入り口でもある。

カルテンは世界中にあり、アルバザードだけでも何箇所もある。例えばアルナのカルテンは神の世界で言えばサールの王アルデスの領土に繋がっている。換言すれば、アルナのカルテンはアルデス王の領土に入るための入り口なのだ。

神は住み慣れたアトラスに模して世界を作ったため、神の世界はアトラスのミニチュアに過ぎない。従ってアトラス上の国境線と同じ国境線を持っている。ゆえにアトラスの領土問題と神の世界の領土問題は不可分である。

神のかけた創世の魔法はアトラスの環境を自動で模写するため、例えばアルバザードが隣国ケートイアを支配すると、神の世界の国境線も創世の魔法によって勝手に変更されてしまう。

人類がアトラスを開拓しだしたアズゲルとカコまでは神も目を瞑っていたが、カコで国境線の変更が相次いだため、神々は各国の召喚士たちに国境線の変更禁止を言い渡した。それゆえ、アトラスの地図はカコ以降 2000 年間も変わっていない。

さて、アズゲルやカコで活躍した人類だが、これは生き残ったユーマの子孫だそうだ。ユーマは子を産み、子は近親婚を繰り返し、徐々にヴィードを失っていった。これがユーマの一族で、レインやアルシェをはじめ、今の人類なのだそうです。

ユーマの一族は力が弱かったため、神に魔力ヴィルを提供することで神の力を借りた。彼らは召喚士と呼ばれ、実権を握っていった。

召喚士はやがて王になると、エルト派とサール派に分かれて戦った。これをカコという。この戦いはやがてアルシェという団体とソーンという団体の戦いになっていった。

それから長い年月が経ち、封印されていた悪魔テームスが復活した。そのテームスを倒すべく立ち上がったのがアルシェの末裔とソーンの末裔だった。

彼らは互いに争ったが、テームスを倒すのが先決ということで合併し、アシェットというたった 28 人からなる選りすぐりの戦闘集団を作り上げた。共闘の結果、アシェットはテ

ームスを倒すことに成功し、世に平和が訪れた。彼らの名は現在でもカレンダーに使用されている。

その後、神と人間の交流はほとんどなくなった。しかしそれから月日が流れ、私と同じ名前のシオン＝アマンゼという少女がアルティス教を興し、神と人間の架け橋になった。アルティス教は随分迫害されたが、長い年月をかけて広まっていった。

その後大航海時代が起きたり共産圏が出現したりと、だんだん雰囲気は現代っぽくなってくる。

一方、アルバザードではテームスを倒した後、魔法の衰退とともに産業革命が起こり、科学の発展も起こった。今から何十年か前のアルバザードは現代の日本のように色々と荒んでいたそう。

この頃アルバザードは王政を敷いており、アルバ王家が実験を握っていた。ところがメル 300 年にアルファウスという男がアルバ 17 世に無血開城をさせ、王制を事実上廃止した。王は形だけとなり、実権は副王であるアルファウスが握った。

アルファウスの下で民主主義・資本主義の社会が栄えた。しかしまあ、やはりというか実体のないマネー経済の崩壊による世界恐慌や格差社会などといった問題が山積みとなり、今の地球と同じような悩みを抱えていたそう。

そんな社会を根本から革命したのがミロク＝ユティアという青年だった。長い長いアトラスの歴史の中で、最大の英雄とされる人物だ。そういえばレインと同じ苗字だ。

ミロクはイルミロクという政党のリーダーをしていた。イルミロクは野党であったが、与党の腐敗をきっかけに選挙で大勝利。ミロクは即日革命を起こし、軍事力と自らの強大な魔力をもって独裁政治を開始し、副王となる。

この出来事はミロク革命と呼ばれ、メル 320 年に起こった。その後は革命の血の歴史で、ようやく落ち着いたのが 350 年のアルテナの治世からだそう。ミロク革命は、それはそれは凄い革命だったそう。

ミロクという人は『君主論』のチェーザレ公とか、『わが闘争』のヒトラーとか、徹底的な強硬派の人物だったようだ。究極のタカ派といっても差し障りないだろう。アルティス教という宗教を押し出していた点ではむしろキリストや法王に近い存在だ。

彼が率いるイルミロクはアルティス教の政党だったため、アルティス教はこれをきっかけに世界全土に根強く広まった。

ミロクはまだ亡くなっていないが、為政者は娘のアルテナに移っているらしい。アルテナが副王に就任したのはメル 350 年のことだそうで、そのときアルテナはわずか 10 歳だったという。彼女の治世になってからもう 17 年だ。

၆၆၁, ၇၄၈ ခု အထိ

64-, 101 7-10¹⁰ 10-1-10

⁶ ၂၁- ၈၈ -၇၇၈, ၂၈၈ ၁၁၁ ၁-၂ ၁-၁ ၁-၁-၆၆

$$\mathbb{G}_m, \Lambda \otimes \Lambda \rightarrow \mathbb{G}_m \quad \text{by } \lambda \otimes \mu \mapsto \lambda \mu$$
⁶ $\Lambda_{ee}, |\epsilon\Lambda - \partial_{\text{CO}} - \mathcal{L} V - \mu\lambda_e - \langle e|\gamma - \delta_{\mathbb{G}}$

၆၄-၊ ဂျာမဏီ သို့မဟုတ် ဂျာမဏီ ဝန်ထမ်း - နယ်လ်

$\phi_{\text{rel}} \dots c_l < c_l e_k |e_A - e_Y \delta_\phi$

「ほわぁ～、しおん、かっこいい！」

レインは間の抜けた声を出す。でも、この"h0-"というのはアルカで「わー！」とか「わーい」に当たるオノマトペなのだ。

「えへ、似合ってる？」

「うん。すてき です」

レインもだいぶ日本語に慣れてきたようね。とはいえ、私が作った人工言語としての日本語だけど。

そうそう、人工言語といえば、やはりアルカは人工言語らしい。アルカはアシェットが神と人間を繋ぐために作った言語だそうだ。

もともと神々が使っていた古アルカという言語を元に、アシェットのセレンという人が新しいアルカを作り、神々の協力を得てその新生アルカを世界中に広めたいらしい。今から300年ほど前のことだそうだ。

アルティス教ではアルカは神の母語とされる。ただ、アルカとアルティス教が世界全土に完全に根付いたのはつい最近のことで、メル 330 年のことだそうだ。ミロクが敵対勢力であるイグレスタという共産圏を滅亡させ、南半球の第三国を押さえたのがこの 330 年という年だそうで、このころをもってアルカとアルティス教の普及完了としているようだ。

流石に合気道の格好だと外は寒すぎるので、私はその上に厚い羽織をまとった。日本人の私にはピッタリな服だ。

私はすっかり侍気分になって、肩で風を切りながら外へ出た。レインはくすくすと笑いながら付いてきた。

この格好は別に珍しくないようで、誰にもじろじろ見られることなく学校まで行くことができた。日本なら「ええっ？」と言われる格好なのに。いや、むしろ「萌ええ」か？

文化の違いって不思議だなあ。

南門を通過して西 5 号館へ行くと、レインは教室へと去っていった。私は入り口で彼女を見送ると、キャンパスに出た。今日も一日アルナ大探索をしつつアルカの勉強だ。

今日はどこに行こうかな。夕方まで時間あるしなあ。まずは池でも行ってみようかな。

キャンパスには池や川があり、木立もあって自然が豊かだ。私は最近よく池で辞書を読んでいる。空気が綺麗だし人も少なくて落ち着くからだ。だが、冬なので日中以外は寒くて座ってられない。

猫が縄張りを巡回するように、私は池に行った。ぶらーっと歩き回るが、特に昨日と変

わったところはない。よし、異状なし。

お昼まではそこで辞書を読んでいた。お昼になってレインからアンセに連絡が入り、カフェで待ち合わせになった。お昼はいつもレインとアリアと食べることにしている。しかしアルバザード人には土日がないので、曜日によってはレインの出席する日とアリアの休日がかぶることがある。今日はアリアがお休みなので、私はレインと2人でお昼を食べた。

お昼を食べ終わると、レインの午後の授業が終わるまで自習だ。私はぶらぶらキャンパスを歩き、図書館の前に来た。

図書館……入りたいなあ。

しかし入り口にはゲートがあり、アルナ大の学生以外は入れない。私のアンセには当然ここの学生証が登録されていないので、入ることはできない。残念だ。

勉強にも飽きてきたのでぶらぶら歩いていると、小等部の学生が列をなしてやってきた。アルナ大は小学校から大学院まであり、一番下の小学校は日本でいう幼稚園よりも年下だ。流石に3歳くらいの子供には親が付いているが、5歳くらいになればけっこう親なしで歩いている。

子供は背が低いので、大きな目のケープが上半身の半分を覆っていて可愛い。アヒルの行進みたいだなと思っていると、小さな女の子が私にぶつかってきた。友達と話していて気付かなかったようだ。

5歳くらいだろうか、濃いピンクのラーサが愛らしい子だ。彼女は私を見上げると、ちっちゃなスカートをくいと持ち上げて“*deAR-AR, la-6*”と言った。私はにこりとして道を空けた。

アルバザード人はあんなにちっちゃいころからいっちょまえなのねえ。この教育もミロクって人が推進したものなのか。本当に凄い人なんだな。

私は小等部の校舎に行くと、ベンチに座って眼前の子供たちを眺めた。子供たちは芝生の上で遊んでいる。無邪気なものだ。

よし、今日は勉強はやめ。久々に絵を描こう。

私は鉛筆を取り出すと、子供たちをスケッチしだした。

ああ、こういうのどかな日常も悪くないなあ。

夕方になり、レインから連絡が来る。西5号館に戻り、入り口のところでレインと合流する。アルシェはもう駅に来ているそうだ。私たちは駅で彼と合流した。

コノーテ＝メル駅からポエン＝メル駅まで地下鉄で移動する。アルナには 12 本のアルミヴァ通りを走る地下鉄だけでなく、同心円状のランティス通りについてもメル、セレン、エケトネ、クミール通りの地下に環状線が走っている。

アリアの家はポエン＝フルミネアにあるので、ポエン＝メルで乗り換えてポエン＝フルミネアまで乗り継いでいく。既に彼女には会いに行く話しが通っているようだ。

ポエン＝フルミネア駅で降りて少し歩くと、大きな豪邸が建っていた。

「うわ……けっこうな豪邸ですこと」

豪華絢爛という造りではないものの、大きさはレインの家の 3 倍くらいある。アルバザードは所得格差が少ないので、東区のお金持ちといえど西区の人たちよりそこまで良い暮らしをしているわけではない。それを考えると、なんだか納得がいかない。

レインのお父さんだって召喚省の役人なのに、そんなに大きな家には住んでいない。日本の私の家と同じくらいだ。私の家はごくごくふつうの分譲住宅だから、レインがお嬢様だというのは正直実感が湧かない。

なのにどうしてアリアの家はこんなに大きいのか。レインに聞いたら、単に大家族で住んでいるからだという。なんと 9 人家族だという。それを聞いて私は納得した。やはりどんなお金持ちにもミロクさんは贅沢を許さないようだ。

アルバザードには収入制限があり、日本でいう 1000 万以上の収入はすべて税金となり、貧しい者に喜捨される。資本主義ではあるが、セーフティネットがしっかりしているので犯罪も少ない。

賃金は日本ほど高くないが、大家族で住んでいてみんなが適度にアルバイトなどをしてるので、案外豊かだ。仕事がなくてあぶれたり、経営者に足元を見られて劣悪なチーズ工場で働かされるという資本論の世界ではない。

門を通過して玄関ドアに近付く。レインの家もそうだが、玄関にはチャイムというものが存在しない。鉄でできたドアノッカーがあるだけだ。ドアノッカーというのは、よく西洋に見られるライオンの顔をした鉄のわっかで、ゴンゴンとドアを叩くあれだ。

ただ、アルバザードのドアノッカーは本当にただの鉄で、ドアも木のような質感の材質でできている。

ゴンゴンとドアを叩きながら、レインは “JooAoyaaaA,, -lc---, Ca eC lecA --,, ㊄” と言う。まるで日本人の子供が「アーリアちゃん、あーそーぼっ」と言っているかのようなノリだ。

なぜメールで呼ばないのかと考えたが、恐らくレインからすれば「現地に来ているのになぜメールをする必要がある？」ということなのだろうな。アルバザード人は一般に機械が嫌いで、アンセや家事の道具以外はあまり利用しないようだ。

少しするとガチャっとドアが開き、金髪のふわふわした髪の子が出てきた。縁のある眼鏡をかけていて、不思議な雰囲気の子だ。

⑥-, h-r lecΛ eC-, JooΛoYaaΛ,, -lc- JeCeδ MeΛ l-r - 9oC6

どうやらアリアの妹らしい。長い黒髪のアリアの妹とは思えない見た目だ。

⑥ΛoΛ eC ΛcoΛ,, ΛoΛ Λ- Maa< >cl Λ-Λ laΛ-7 M- e <aaI-Λ eJcC6

私が挨拶すると、彼女はにこりとした。

⑥eJccl,, CeC ΛoΛ eC Cco VeMθel C'cle--Cco CcJJe, >cl
ΛoΛ Ce -Λ-7 - <aaI6

彼女が手を差し出してきたので、私は笑顔で手を伸ばした。

⑥JooΛoYaaΛ, VeMθel lccZ6

その瞬間、後ろで聞いていたレインがお化けみたいな顔をして私の口を手で塞いだ。比喻ではなく、本当に手で口を塞がれた。



「もっ、もが！」

⑥la -ΛCeo, la -ΛCeor la eC >eΛ7-Λ le JeM Yaa CcJJer6

レインはひたすらヴェルペッドちゃんに謝る。いったい私が何をしたというのだ。

真っ青な顔のレインと対照的に、妹さんはくすくす笑うだけだった。

⑥leeV, lclCJ cl6

彼女は私たちを中に招き入れると、客間へ通した。客間は10畳ほどだろうか、かなり広く感じた。革のソファに座る。ふかふかだ。妹さんはにこにこして去っていった。

「ねえレイン、さっきのなんだったの？」

しかし彼女はムスッとした顔で何も答えない。

「ねえ、聞いているの？」

「れいんは おこっています！」

アルシェに助け舟を求めるが、彼は困った顔で苦笑するだけだった。

「なによ……ヘンなの……」

口を尖らせながら、辞書で *Veμθel* を引く。

——そして私は声を失った。

顔から湯気を出しながらアリアを待っていると、彼女はいつものローブに身を包んでやってきた。

ⓂⓂIV-ℓ, ℓℓℓℓ ℓℓ

ⓂⓂⓂⓂ, -ℓℓ-

Ⓜ--, (0- (ℓ-ℓ) ℓ-ℓ ℓℓ - ℓⓂℓ ℓℓℓ

Ⓜℓℓℓ, ℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ- ℓℓ ℓℓ

Ⓜℓ>, ℓℓℓ ℓℓℓℓ ℓ-ℓ ℓℓℓ <ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ

言いながら、アリアは私に目をやる。

Ⓜℓℓℓ ℓ>ℓℓ ℓ,, ℓ-ℓ ℓ V-ℓ-ℓ

一瞬、珍しいレインってどんなレインかと思ってしまった。

Ⓜ-ℓ-ℓ....

苦笑する私。アルシェはこほんと喉を鳴らし、昨日起こった出来事を包み隠さずアリアに話した。

置時計の針がカチカチと時を刻む。アルミヴァは今クレーヴェルを回ったところだった。

話を聞いたアリアは、袋から出したヴァルデを真剣な顔で見つめていた。

Ⓜℓ....ℓℓ V-ℓℓℓ ℓ-ℓℓ ℓℓℓ

Ⓜℓℓ ℓ-ℓ ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓ-ℓℓ -ℓ

アリアはふうとため息をつく、ヴァルデを手にとって何やら調べだした。

そのとき客間のドアがノックされ、先ほど玄関で会った妹さんが紅茶とお茶菓子を持ってきてくれた。私は気まずさで冷や汗をかいた。

妹さんはヴァルデを不思議そうに見つめると、興味を持ったのか、部屋を出ずにその場に残った。

アリアは杖を色んな角度で見たり触ったりしていたが、やがて首を振ってヴァルデをテーブルに置いた。

Ⓜℓ ℓℓ ℓ-ℓ,, ℓℓℓ ℓℓ ℓ- Vℓℓ ℓℓℓℓ- ℓ ℓℓ

それは拍子抜けする答えだった。この杖は偽物。単なるレプリカ。

なあんだ、やっぱりネブラの狂言だったのか。

いや待て。だとすると、逆にネブラの動機が分からなくなる。目的はほかにあったのか？

レインは複雑な表情を浮かべるも、残るひとつの質問をした。

Ⓜh-c, la Aeεμ- μeΛJ-ε θ-θ- λcel lKcJ λ-l,, ol Jo-....λo> la λ- ->δⓂ

Ⓜθ-JJo, λYaJJoa λaaμλ- JeεεⓂ

するとアリアは透明な水晶玉を出し、両手をかざした。

うわ、これぞ占い師って感じだわ。こっちでも占い師って水晶玉なのね。

Ⓜz>>....la eε....εo....δ eμⓂ

ⓂeμδεelKεδⓂ

Ⓜ>>....εee....la....εceμδⓂ

Ⓜεceμ....ε-εeeδδⓂ

Ⓜλ-leε....., Jee....λe-....λe-....la eε -λe- -δⓂ

Ⓜ-λe-....e ε-εeeδ eYλδⓂ

ⓂJee λoλ cλJ....λe....λc->....., la eε....Ⓜ

そのときアルシェが Ⓜ--rⓂ と言って人差し指を振った。

Ⓜε-εeeδ, -λe-, λc->,, Joλ la eε >cclY- λ-rⓂ

ⓂJeλε-λε, eεεoε Y-, la eε >cλθ-λe- cλ,, lecλ, -la <o εcλl - εO-δⓂ

Ⓜ-lεμ- μ-λεε λ- <μe> lYa εcJJe,, h--λ, λ-leε, θ-θ- eJ Aeεε -la λ-Ⓜ

Ⓜεeε, cλε- le λoλ cλoμ eε cλε- εaμ J'eλ -laaε εcJJe,, -lKc, λYaJJoa λaaμλ- λcel >c ε-εeeδ
c> εaμ eⓂ

レインは黙って俯いた。

なるほど、どうやらドゥルガさんは別荘があるカテゴリーに隠れている可能性があるようね。ただし、アリアの占った映像は今現在のものとは限らないから、今もドゥルガさんがいるかどうかは分からないようね。

私は紅茶のカップを置く。周りから見えないように脚をもじもじさせる。実は先ほどから脚が冷えていて、お手洗いを借りたいのだ。

Ⓜz>....λclλoλ, λoλ Yol l-λ λeμγ-Ⓜ

するとアリアは妹さんに私を案内するように命じた。やや気まずい思いを感じながら、私は妹さんに連れられて廊下へ出る。

ⓂJ--....-λεeo oλ λoλ -λλ-ε εYa leλ....z>Ⓜ

「——え？」

心臓を鷲掴みにされた気分だった。

この子、私の正体を知ってる——！？

「ど……どうして」

ⒺΛαΛ μeℓ <-Λ ℓe - ℓʹa, -lʹ-ℓcʹⒺ

すみれの香りのする吐息で私の鼻をくすぐる少女。

私はすっかり気味が悪くなってしまい、彼女の手を振り解いた。彼女は一步後ろに下がると、手を後ろ手に組んでくすくすと笑った。

Ⓔle V-μℓe eℓ ʹ-ʹℓ ℓcʹℓe,, ℓcʹ, le >elℓe le ℓ- Zʹʹ eℓ <cel ℓeelⒺ

Ⓔl-l-....l-l- eℓ ℓʹa Scℓℓ ℓeℓ ℓaδⒺ

Ⓔℓ--, >cl ΛαΛ eℓ <aal-Λ ʹ-ʹℓδⒺ

Ⓔℓeℓ....ℓʹa μeℓℓ-ℓ Λ-Λ ℓe -ℓʹ) - <aal ℓeℓeδⒺ

Ⓔ-ℓ, ΛαΛ ℓe <aal-Λ μ-ℓ, >cl ΛαΛ ℓ-μ el ->cʹ ℓcℓ <aal ℓcʹ ℓe μ-ʹ,, <ʹʹ, ℓel ->el, ΛαΛ ℓʹℓℓ μcʹ eeℓ- Λ- -ℓcℓ ℓℓ <aal,, ℓʹ> ΛαΛ ℓʹℓ-ℓ Vcl ℓa ʹ- -ℓc- eℓℓ-Ⓔ

Ⓔℓʹa....., eℓ ℓʹa e>cʹʹ μ-Λ- ℓe μʹ>δⒺ

Ⓔ>cl el ℓcʹμ <aal c> hʹℓ >eℓ- eℓ VʹℓℓⒺ

彼女はすうっと目を細めた。笑顔が消え、眼鏡の奥の眼光が鋭くなる。

これが……この子の本当の顔……。恐らくアリアも知らないこの子の……。

Ⓔℓaaμʻ- ʹaℓc- eℓ Vʹʹℓeℓ,, l- eℓ ℓeʹℓ l-Λ- ℓeℓ ℓcl <eℓZel,, ΛαΛ ℓccℓ- -l-ℓ le ℓʹaℓℓʹa >cʹʹʹ l-l-ℓ, h-ʹa ΛαΛ l-ℓ ℓʹa V-Λʹ <c- ℓeℓ-Λ, -lʹ-ℓcʹ cℓeℓ ʹa>-Λ-Ⓔ

彼女の言葉は先ほどまでとは打って変わってハッキリしており、一語一語しっかりと発音された。その声は低く鋭く、蛇の舌の動きのように耳に残る声だった。

Ⓔ-....-lℓ-Ⓔ

気迫に圧倒されて私がおずおず頷くと、彼女は急に元の表情に戻った。

Ⓔℓcʹℓ eℓℓ-, >ca ℓeʹℓ ℓa ℓʹʹʹ cℓ cl, μeℓⒺ

くすくすと笑うと、彼女は来た道とは違う方へ去っていった。

私はなかば青ざめた顔で客間に戻った。レインたちは深刻な顔で何かを話している。

ヴァルデは机の上に置いてあった。アリアは偽物だと言ったが、妹さんが言うには偽物なのはてっぺんの玉飾りだけで、棒の部分は本物のようだ。

アリアが正しく占えなかったのは、恐らくヴァルデから魔力を感じられなかったからだろう。無理もない。球がすげかえられているのならこのヴァルデは不完全なのだから、魔力を感じる由もない。しかし、妹さんの言ったことは本当なのだろうか。

私は無言でヴァルデを掴む。レインは私を横目にしながらアリアと話を続けている。

うーん……ネブラがあれだけ欲しがったんだから、完全に偽物とも思えないんだけどなあ。それに妹さんのこともあるし。でもアリアは偽物っていうんだよな……。

私は球を右手で捻ると、くいと捻った。するとその瞬間、ポンッという景気の良い音がして、球がポロッと外れた。

レインは音に気付いて私に目をやると、取れた球を見て口を(°д°)ポカンと開けた。

皆の視線が一気に私に集まる。一瞬、沈黙が訪れる。

「……え、えへへ……取れちゃった(;´▽`)」

怒り狂うレインを止めたのはアリアだった。私は部屋の柱時計の隅に隠れ、子猫のようにぷるぷるしていた。どうにかアリアが荒ぶるレイン神を鎮めると、私はおそるおそる席に戻った。

ⓈV-ΛC-ΛC, Cα eC Jαl- e>C CcJJeⓈ

ⓈCγa Jα <-Λ Cα ol Cα eC γ-γCⓈ

そうだよな……。レインが怒るのも無理はない。これが本物だったら神の家宝を壊してしまったことになる。そんなことになったらどう責任を取ればいいのか分からない。

ところが、さすが男性というか年上というか、アルシェはわりと冷静で、取れた球をまじまじと見ると、アリアに差し出した。

ⓈAee, el Jcl JeΛ Cα Je Jα< Jα-δ -Λ Λ- Cα eC Cc >elC e lc-lⓈ

するとアリアが首をあげる。

Ⓢlc-lδh33, Cα eC JeΛC-ΛⓈ

ⓈJαΛ -ΛJ μCδ V-Λ Cα Je >cJγδ ol Cα Jcl μCδ, Cα eC γ->cl lc-lⓈ

アルシェの提案にレインは首を振る。どうやら冷静に戻ったようだ。

ⓈΛαΛ C-> Vcl Cα,, γ--C V-μC -C l-l c> V-JC γaC J--l CγΛα,, c> le>el, J-μC JecΛ JcC lc-l, h-γa le -C l-l γαγγα <lc- eⓈ

Ⓢh3>, JαΛ -γ el ScΛJ Cα >elC le <lc- -ZδⓈ

⑥<lc- c>eΛ le>el eγγ <lc- l-lī hoC, -μe,, Jee <lc- l-lī -laaC Ccl μoεc la <cε

レインは緑の球を手にとって見つめる。

⑥ΛoΛ <cΛ-C -Λ oΛ Ca Je V-l <ecΛ -, lclCγ cl, Ca >elΛe Ce <lc- l-lī olC- -VeΛ,, -lJoΛ Ca eγγ
Ca V-μle Ce γ-γΛε

静かに宣言すると、レインはヴァルデに球をはめた。

そうか、これはやはり偽物なのか。本物なら球は天然の水晶でできているのだそうだ。
天然の水晶なら不純物が混ざっていて、完全に曇りなく透き通ることはない。よってこれ
は確実に偽物らしい。

どうやら妹さんは正しかったようだ。しかし妹さんが言っていたのは、棒は本物という
ことで、その検証はまだ行われていない。

それにしても、どうして昔の人は水晶を使っていたのだろう。

⑥Λee, h-c eγ l--γ γol-C <lc- c> V-γCeδε

⑥>cl <lc- V-eΛ Vcμ - Λ-Λ -C c lc, μ-<- el μCγ JeΛ Vcμ Je <μe</CccΛ- c Ca,, -lC, <lc- eC el<e
e Vcμ CcγJeε

なるほどね。水晶は魔力を貯めたり一度に放出するのに向いていたからか。

⑥JoΛ, eγ el γol-C <μe- - ZoΛδε

アリアは手を開きながら答える。

⑥γ--C, Ca Ce <μe- CeC eμ<c CcγJe,, eμ<c oγC Vcμ Je <μe< eε

銀は魔力の伝達効率がいいから棒に使われているらしい。ずいぶん高価な杖だな。

⑥h--Λ, Jee Ca eC eμ<c γ-γΛδε

するとアリアは一瞬沈黙し、うーんと唸った。そして何か思いついたのか、立ち上がっ
て部屋を出て行った。数分して戻ってきた彼女は、銀食器の鍍取りクリームを持ってきた。
なるほど、これで銀かどうか判断するようだ。

クリームを塗ると付けたところの鍍が取れ、銀の輝かしい光沢が顕わになった。どうや
ら柄の部分は銀のようだ。

しかし、もしこれが偽物だとしたら、どうしてガラス球ではケチったのに、柄には高価
な銀を使ったのだろうかという疑問が湧く。もしかして妹さんの言うように、柄は本物な
のではないか。

⑥lee, Λcel....Λcel....Ca V-cγ e ZoΛ hoC eC....γ-γΛ eγbδε

アリアも同じ疑問を持ったのか、⑥JeΛΛ-Λεと言ってアルシェを見た。

「<カ、セル リヤルバ ラアム、 アニカ<カ<カ>エ、」

彼女の言葉に頷くアルシェ。

「-> カ、 ー 3カカ Vcl V-ム、 ヽカ cカ V-ム、 ー 3カカ>エ、」

「cl> <elZel ヽ< ヽカ カ ヽ- ヽ- ア、 ー- ヽ eカ cl>カ V-ム、」

レインもその説に納得したようだ。

「カ>, リヤルバ ラアム、 cl カ>エ、」

私の言葉に頷く一同。アルシェが時計を見る。もう 5 時半だ。

「->, ccc cl, カ eカ Vcl V-ム eカ -ム-Z-ム、」

「...Jee leカ- ヽcl カ、」

「ec,, cl カ V-ム、」

「-ム-カ...」

そう、ヴァルデがあるだけでフェンゼルに勝てるならドウルガさんがとつくに倒しているはずだ。召喚省のアルタレスともなれば、恐らくかなりの魔導師なのだろう。ドウルガさんに会ってヴァルデを完成させるだけじゃだめなんだ。それを使いこなせる魔導師がいないと……。

私は顔色を落としたが、アルシェには考えがあるようだった。

「cl>- ヽカ -ム-カ, カカ, ヽ>cl, ヽ--カ -カ leカ h-カ -カ> V-ム、」

ハインさんという、私にアンセを発行してくれた人か。アルシェのお父さんで、召喚省のお役人らしい。

「clカ, リヤルバ ラアム、 eカ、」

「-> カ, eカ>」

彼の提案にレインも賛同したようだった。

話し合いの結果、私たちはカテゴリーに行くことになった。今日はもう遅いので、夜間外出禁止令が出ているアルバザードでは移動できない。

仕方がないので明日出発することにした。レインは受験生な上にレンス・リーファの首席でもあるから学校を休みたくないところだろうが、事件の重大性を考えるとそうも言っ

ていられない。

アルシェも役所の仕事が忙しいらしいが、明日からインフルエンザということにして休みを取るという。私はもともとフリーだからいい。アリアにはアルナに残ってもらうことにした。何かアルナで動きがあったらアンセで教えてもらえるようにだ。

アリアの家を出た私は妹さんのことを思い出していた。どうやら彼女の言っていたことは正しかったようだ。

そういえば彼女に名前を聞くのを忘れてしまった。レインは知っているだろうが、別に大したことでもないし、まあいいかと捨て置いた。それにしても不思議な少女だった。

起きたら雨が降っていた。今日はカテゴリーへ行くというのに天気が悪い。だが、雨の好きな私は雫に濡れた町を窓から眺めていた。

いつものように朝食を取ると、制服に着替える。なんだかんだ言ってこの格好が一番動きやすい。ヴァルデを剣道袋の中に入れて運ぶから合気道の服のほうが怪しまれないと思うが、どうせ昨日か今日あたりにフェンゼルはネブラ逮捕を知るだろう。そうしたらネブラがどこに忍び込んだかも調べ上げるだろうから、もはやこそこそする必要はない。

レインは今日は白っぽい民族衣装のようなものを着ていた。アルセリアという宗教服らしい。アルティス教の宣教師が極方という寒い地域に布教をしにいったときに開発した服だそうで、とても暖かそうだ。なんだかアイヌ人やフィンランドのラップランドの民族衣装に似ている。

遠出するのに必要な荷物をあれこれ持ち、ヴァルデを入れた袋をしっかりと肩で結わくと、私たちは傘を持って家を出た。

傘はレインが買ってくれた水色のものだ。面白いことに、アルバザードでは傘を共有しないらしい。箸のように一人一人自分の傘があるのだそうだ。

アルバザードでは室内外に関わらず、家族とは物を共有しないようだ。例えば皿やスプーンやフォークも自分専用のものを使う。日本ではあまり考えられない。

日本では洗ってしまえば禊をしたことになり、穢れはリセットされたことになる。水に流すという言葉はその感覚を表わしている。

ところがアルバザードでは水で洗ってもリセットされないようだ。区別のつかない同じ皿でも、洗っておけば次回は何れを使っても同じという気分にはならないようだ。同じ種類の皿が家族分あるのではなく、違う種類の皿が家族分あるのだ。

日本人には信じがたい習慣だが、日本人も箸は個別な家庭が多い。それが皿にまで波及していると考えればいい。無論コップも同様だ。なお、フライパンなどの調理具は合理性の問題からか、流石に共有するようだ。

ちなみに私の皿はレインのお母さんのものだそうだ。

面白いのは共有しない理由だ。他人の食器を汚いと思っているわけではないそうだ。大皿に乗せた料理は皆で取り分けるし、レインは私の食べかけを平気で食べる。穢れとは思っていないようだ。単に個人の物は個人の物という考えが強いのだろう。

カルテに向かって歩き出すが、実を言うと今日は体調がちと優れない。昨日の夜、調子に乗ってワインを飲みすぎたからだ。

レインはお父さんが生きている可能性が高いということでかなり機嫌がよくなっていて、珍しくお酒を飲もうと言ってきた。

ワインはルージュだった。とびきり美味しかった。この時期はワインができたてなのでなおさらだ。ワインはこの地方の名産のようで、日本のコンビニにあるような安ワインとは比べ物にならなかった。

私は下戸ではないがうわばみでもない。それに未成年なのでお酒の経験もほとんどない。だから酒量が分からず、すっかり酔ってしまったというわけだ。レインはそんなに強くないのを自覚していたようで、少し飲んだだけだった。

ところで、この国は酒についての法律はないのだろうか。聞くと、どうやら 20 になってからというようなことはないそうだ。驚くべきことに子供のころから平気で酒を飲むらしい。

飲まれるのは主にワインとビールだそうだ。特にビールは弱いものを暖めて、薬として子供に与えることもあるそうだ。アルバザードの人間に下戸はまずいないそうだが、歴史的に混血が進んでいくうちに下戸が増えてきたそうだ。

うー、そんなことより、気持ちが悪い……。

「しおん、さむい ですか？」

私の顔色が悪いからだろうか、レインが気遣ってくれる。

「ううん、大丈夫よ。貸してくれたコートがあるから。それよりごめんね、私のせいで色々お金がかかっちゃって」

「ん？ どういう意味ですか」

⑥-Kc, ΛσΛ Λ-λ Λ-Λ (αμ UeC σΛ Ycl U-IC C'Ya,, Uσ> ΛσΛ θεΛC C'Ya.....⑥

レインは微笑むと、首を振った。

⑥C'Ya (e Jo- Je >eμ e,, UclΛ) JoI ΛσΛ -I) Ya C'Ya,, ΛσΛ eΛ (αμ μec- >cl C'Ya, UcoΛ⑥

鞆で顔を半分隠すと、レインは恥ずかしそうに笑った。

⑥lecΛ.....⑥

⑥Uσ>, (e leeV ΛσΛ⑥

ててっと走っていくレイン。私は彼女の背中を見ながら呟いた。

「……何があっても私が守ってあげるからね」

こんな事件に巻き込まれてしまったけど、私はレインと出会えてよかったと思っている。彼女もそう思ってくれているようだ。

こないだもレインはこの生活が幸せだと言っていた。私がいないと家事が困るのだとわざと大げさに言うのだ。異世界の人間の優しさや気遣いのしかたがだんだん分かってきた。

紫苑の書にはたくさんの情報が書き込まれた。始めはアルカの授業のノートでしかなかったが、徐々に日記になってきた。日記の間違ひはレインに直してもらう。まだ間違えるところは多い。文法自体は単純なのでまず間違えないが、語法をよく間違える。

日本語で「大きな失敗」というところをアルカでは *Meŋ ʔ-c* とはいえず、*Meŋ ʔcʌ* という。この *ʔcʌ* という強調は極めてよく使われる。日本語や英語だと何らかの具体的な形容詞を使って **big mistake** などというが、アルカの場合、程度が甚大であるという *ʔcʌ* を頻繁に使う。

自然言語では「大きい」のような基本語は多義語で、様々な意味に使われる。辞書の記述も長く、1語で1ページにも及ぶのが普通だ。ところがアルカの場合、基本語の使用範囲が狭く、コロケーションが少ない。*ʔ-c* は純粋にサイズの大きさを示し、それ以外の用法は少ないのだ。

抽象度が高い語を表現する際はふつう感覚的で分かりやすい具体的な形容詞を用いる。「大きなミス」もその例だ。ところがアルカはそれをしない。まるで機械のような言語だ。

ただ、メタファーがないわけではない。例えば「大きい声」は *ʃcV ʔ-c* という。これは大きい動物のほう大きい声を出すことが多いということから来ているメタファーのようだ。あくまでメタファーは少ないというだけだ。

また、句動詞の類がなく、*get up* のように簡単な語を組み合わせで難しい語を表現することが少ない。

abandon は *give up* と言い換えられるが、アルカでは *Vcʌ-* といい、句動詞にはしない。*get off*, *get away*, *get on*, *get along with* など、アルカではすべて別々の1語で表わす。

get on, *get off* だけを取っても *ʔc-*, *ʔeʌʌ* を使う。そしてこれらには「乗せる」「降ろす」以外の意味はない。なんて語彙が豊富な言語だろうと皮肉りたくもなる。

要するに、1語1意なのだ。問題は1語1意の1意が日本語の対訳と重ならないことだ。例えば *ʔaa*くのように、「乱雑した状態」とか「興奮した状態」などという長い定義をしな

ければ言い表せないものもある。だが、面白いことに *Ṁaa* 自体は *Ṁaa* の意味 1 つしか持たず、多義にはならない。多義だとすれば日本語に訳したときに多義的に見えるだけだ。

もっとも、副詞を使ってより細かく表現することはできるようだ。例えば「切る」は *ʔcl* しかないものの、「切り倒す」「切り離す」「切り落とす」などは副詞を使って結果や方向を指示することで細かく表わす。この点は英語と似ているといえる。しかしあくまで様態としての副詞を付けただけであり、そこから別の意味の句動詞として独立することはない。

英語の *put back* は「元のところへ置く」という原義からして、「元へ返す」とか「後退させる」という意味を持つ。この時点では *back* は副詞として機能しているといって良いだろう。だが、口語の「酒を浴びるように飲む」という意味になると、飛躍している。こういう飛躍がアルカにはほとんど見られない。

また、1 語の担う意味が狭いのも特徴的だ。元へ返すは *ʔe* というが、後退するは *ʔ-ʔ* といい、別の語だ。

とはいえ単語だけを覚えればそれでアルカの学習は済むかといえそうでもなく、熟語的な成句も覚えなければならない点はほかのあらゆる言語と同じだ。

歩道をてくてくと歩く。日本と違って車道がない。そういえば車はここに来てから一度も見たことがない。どの家にもガレージ 1 つさえない。どうなっているのだろう。道路を走る乗り物といえば自転車と人力車。地球より発達したアンセを持ちながら人力車が走ってるのだ、街中を。

自転車は異様に多い。中国かと思うほど。道は広く、歩道と自転車道に分かれている。左右の端が歩行者用だ。間は日本だと車が走るが、ここでは自転車だけだ。端と端の行き来には歩道橋を使う。歩道橋は一定の間隔で置かれている。何個かに 1 個はエレベーター付きだ。

歩道に電柱は見当たらない。地下ケーブルのようだ。発電はどうしているのかと聞いたら、非常に興味深い答えが返ってきた。できるだけ自然の力を利用しているらしい。アルバザードは日本より風が強いので風力発電ができる。また、太陽発電もできる。そして人間にも発電させているそうだ。実は私も発電に貢献しているという。

電気というのはそもそも水車でも風力でも何でもいいが、何らかの力を電気に変えるシステムを作ってしまうえば生み出すことができる。運動エネルギーや熱エネルギーがあれば転用して電気を作れる。

なんとアルバザードの道の下には発電機があるらしく、その上を人が通ることによって発電するそうだ。通勤や通学で人が多く通る道に発電機を仕掛けておく。結果、たくさんのエネルギーが得られる。それをアルバザードは電力に変えているというのだ。

カルテに着くと、ベンチのところでアルシェが待っていた。そういえば彼はいつも約束より早く来る。きっと紳士的な彼のことから、女の子を寒い中待たせるのは悪いと思っているのだろうな。

 $\odot \Lambda \cdots \odot$

၆၂၁၁၄၃၁, -မူ၆

挨拶をすませると駅の改札へ降りていく。今日、初めてアルナの外に出る。カテゴリーというのもアルナと同じ円形都市らしい。だから道に迷うことはなさそうだ。私は今のうちに円形都市についておさらいしておいた。

アルミヴァ通りは一本が余りに長いので、それぞれを横に結ぶ小道がある。小道といっても国道より広いのだが。この小道は2つのアルミヴァ通りの間に28本あり、ランティス通りと呼ばれている。カルテに近いほうからリディア通りと言われる。そしてこういった造りはカテゴリーでも同じなのだろう。

意識がない。アンセというのははなはだ便利な代物だ。

アンセはIDも兼ねている。生まれると国からアンセ受給の権利が与えられ、電機屋で好きなタイプのアンセを買う。人気なのは腕時計のように手首につけるタイプだが、懐中式もあるし、首輪型もあるし、ボール型もあるらしい。

ボール型なんて誰が買うんだと首を捻っていたが、案外アルバザード人というのはリベラルなところがあるようで、そういう穿った物が好きな人間を寛容するらしい。

アルバザードには戸籍があるそうだ。日本にも戸籍はあるので一見当たり前に見えるが、実は世界的に見れば戸籍がある国は珍しい。かつて日本は大陸を参考に庚午年籍を作った。これが歴史的な戸籍の始まりだ。その習慣が未だに続いている。だが、世界的に見れば珍しいことに変わりはない。だからアルバザードに戸籍があったのは驚きだった。

電車に乗る。アルナからカテゴリーまで走る特急イスカルだ。青と白で、ツバメを彷彿させる流線形だ。途中止まる駅はルークス・イルケア・ワッカのみ。特急とはいえ、ここからカテゴリーは南仏からイタリアに行くようなものだから、長旅になりそうだ。

私は席に着くと、本を取り出して読み出す。読んでいるのは -ccclc という聖書。私は『幻想話集アティーリ』と名付けている。神話であると同時にアトラスの歴史書でもあるらしい。

アトラスの文化であるアンティスは『幻想話集アティーリ』の影響を多大に受けている。また、アルカはアンティスの影響を受けている。従って、『幻想話集アティーリ』を読むことによってアルカの知識と理解が深まる。

区切りのいいところまで読むと、私は本を閉じた。時計がコノーテを指している。

もう昼か……。お昼ごはんにしようかしら。

アルバザードは飽食を嫌うらしいが、それでも世界的に見れば様々な食材が集まる国だそう。だがそれはレストランなどの話であって、一般家庭では日本ほどたくさんの種類を食べないらしい。

そういえば日本は和洋中と何でも食べる。輸入に頼りきっているとはいえ、かなり幸せな食生活といえるだろう。輸入という観点ではアルバザードもそうで、近郊農業で自給している物以外は輸入に頼っているらしい。

お弁当を鞆から取り出す。今日はサンドイッチだ。レインは私が読書をしている間、一生懸命受験勉強をしていた。アルシェというレンス・リーファの強力なOBがいるので、随

分良い環境だなと思う。こんなときでもきちんと勉強して成績を維持しようとしているようだ。私は全然受験勉強なんてやる気がないので対照的だ。

前にも述べたとおり、この国で使われるメル暦はグレゴリオ暦と違って平日と休日の区別がない。祭日はもちろんあるが、特定の曜日が休みということがない。

いつも平日で、各個人は好きな曜日を休みにするそう。学生であろうと社会人であろうと1週間のうち、どこか2日を休みにする。

例えばヴェルムとエルヴァと休みを決めると、その周期で暫くは動くそう。レインも無論、例外ではない。

面白いことに、共通の休みがないので、自分が休んでいる間も仕事や授業は進むそう。日本では考えられないことだが、優等生も勤勉な学生も休み、その間に授業が進むことは気にしないそう。休んで自分の時間を得るほうが大事だそうで、遅れた分は後日学校の端末からアンセにデータをダウンロードして済ますそう。

会社員も仕事がどんなに忙しかろうが休みは取るし、休日に仕事はしない。休日に仕事をさせることは法律で禁じられているそう。夜間外出禁止なので会社員の朝は早く、夕方には帰る。夜明けに起きて夕方には帰る生活だ。サービス残業も手当て付きの残業もない。

例外はメルセルと、その約半年後のディアセルという祭日の前後だけだそう。この時期は夜間外出禁止が解かれるので、一気に仕事や勉強をするそう。

この国には平日という概念がないので、毎日誰かしらが休みなわけだ。だからモールはいつも老若男女問わずたくさんの人が見られる。特に夜間外出禁止のアルバザードでは昼の時間帯はとて混む。今も車内はそこそこ混んでいる。

混雑具合を見るためにきょろきょろしていたら、中年の男性と目が合った。すると彼はにこっとした。私も反射的に微笑む。

アルバザード人は愛想がよく礼儀正しいので、目が合えば笑顔を見せるのが常識になっている。それが礼儀と知らないうちは、おじさんが私を見てデレデレしているのかと思って、正直少し気味が悪かった。もしかして黄色人種の私が珍しいのかとも思った。しかし、私みたいな肌の人はけっこういるので、そういうことではないと気付いた。

アルバザードはそもそも人種のるつぼだ。世界最強の国だから世界中から人が集まる。歴史的に見て白人と黄色人種、およびそれらの混血が多い。だから私は別段珍しくない。

アルシェはサンドイッチを食べながらレインに参考書の問題を解説している。食べながら本を読むのはアルバザードではいけないことになっているので、先ほど扱った問題について口頭で解説しているようだ。

彼はアルナ大を出て、魔法研究所に入ったそうだ。魔法にはアルカが使われる。呪文というやつだ。その関係で彼は言語学者でもあるそうだ。この世界にはアルカしかないので、日本だったら方言学者とでもいうべき存在が言語学者と言われるのだなと思った。

彼はレインに優しい表情で話しかけている。彼はふつうの日本人男性と違って会話が途切れない。自分のことを適度に話し、相手に当たり障りのないことを聞いてくる。興味深く聞き、こちらの顔を常に見てくる。感情も豊かで、身振りも多い。話していて飽きない。

アルシェには人を惹きつける魅力がある。単にイケメンというのものもあるが、屈託のない笑顔や打算のない態度もいい。それでいて時折見せる見透かしたような言葉も素敵だ。そんなことを考えていたら、だんだん頬が赤くなってきた。

カラマーゾフの兄弟に……似てるかな。ネブラを倒したような豪胆さは長男のドミートリイに、冷静に分析するところは次男のイヴァンに、そして優しく紳士的なところは三男のアレクセイに似ている。まるで3人の良いところを混ぜたような男性だ。

そういえば、兄弟はいるのだろうか。女の扱いが巧いから、妹がいるのかもしれない。

私は水を一口飲む。フランスと違ってアルバザードの水は軟水が多い。しかも豊富だ。飲食店でも水はタダで出てくる。

軟水が多いので、料理も西洋料理とはところどころで異なる。うどんやそばなんかもあるのだ。

私は暇をもてあまし、ぼーっとヴァルデの入った袋を見やる。

こんな杖が神の武器だったなんてねえ。竜王ティクノの家宝であるとともに、アルディアの時代には悪魔テームスを倒した偉大な魔導師リディアに貸与された。その後また神の手に戻ったが、神側の不祥事により紛失。そして今現在は私の手に。不思議な話ね。

それにしても、いいんだろうか。だってほら、私かつてあれでネブラに刺し面しちやったのよ？ 小手も打っちゃったわよ！ 神話のアイテムを竹刀代わりにしちやった……。

窓の外を見る。地下を走るのは都市部だけなので、田舎だと電車は地上を走る。田園風景が視界に広がっている。

カテゴリーってどんなところなんだろう。ドゥルガさんとは会えるのだろうか。彼は魔

法をどの程度使えるのだろうか。ドゥルガさんは表向きは魔法研究所の研究員だが、実際にはその上層部である召喚省の役人だそうだ。アルシェのお父さんのハインさんほどではないにせよ、魔法が使えるはずだ。

見てみたいなあ……魔法。

それにしても、どうしてドゥルガさんは一人娘のレインに危険を伝えなかったのだろう。死んだ振りして逃げたって、もしフェンゼルに気付かれればレインだって危ないじゃないか。父親なら娘を逃がすはずだ。まして一度ヴァルデを置きにアルナに帰って来ているではないか。そのときなぜ危険を伝えなかったのか。

レインがそのときいなければ書置きなりして逃げればいいし、アンセで通信すればいい。……いや、アンセはダメか。傍受の危険性がある。

じゃあ書置きは？紙だと人に見られるかもしれないからダメとか？でも、他人に読まれる危険を冒してでもそれくらいするべきよ。

直接口で言わなかったのは分かる。言えばレインは父の出発を止めていたはず。だからって、何かしら娘の安否を気遣ってもいいのではないか。ウチの親でもメールくらいは入れるはず。

レインは最後にドゥルガさんに会ったのは私に会う少し前だと言っていた。そのときには娘の命が危なくなるのは分かっていたはずではないのか。私がああ金髪のメルティアに召喚されなかったらどうなっていたというのだ。

手持ち無沙汰にしていると、アルシェは私を気遣ってくれたのか、隣に座って話しかけてきてくれた。

ウェイトレスを呼んで暖かい紅茶を頼んでくれる。本当に気遣いの上手な人だなあ。でも、それって本心からの優しさなのだろうか。単に礼儀としてやっているだけなのではないか。私は彼を横目で見た。

ℓccλ ℘λee, ℓʒa eℓ λccℓ - λccλ ℓeℓeδ℘

-ℓℓe ℘>>δ℘

℘>ca ccℓ -δ- e le-/ℓaℓℓ-℘

℘>>....le- eℓ ℓ0 ccℓℓℓ-ℓ℘

℘....ℓcc- -℘

そう……だよ。

私はちょっとがっかりした。するとアルシェは見透かしたように微笑んだ。

“4-1 1211- eC 1f0 5778-1 1-6

“r.....75-, -6

なによ……。からかってさ。

私は赤くなって窓の外へ目をやった。紅茶が熱いせいだ。

南仏のような穏やかな景色が見える。カテゴリーは大陸の南端にあるからアルナより随分暑いのだろうか。ヴァカンス地として有名らしい。夏は海で遊び、冬は暖を取るそうだ。

今はルークスを過ぎてイルケアにさしかかるところだ。南アルナを抜けると完全にアルナ地方を抜ける。アルナの南がルークスだ。昔はアルバザード屈指の商業地区だったらしく、人口が多いことからこの名が付いたそうだ。

ルークスに入る前に電車はまた地下へ潜っていった。円形都市のような主要都市はすべて地下鉄だからだ。

ルークスの次がイルケアで、アルナやカテゴリーやその他の都市に繋がる交通要所を昔から務めてきた地方だ。「すべて行く」という語源から来ているそうだ。といってもルークスとあまり変わり映えがないように思える。

レイン曰く、300年以上前のアルディアの時代には地方独特の色が残っていたが、その後のレイユの時代に起こった近代化の中で都市固有の特色というものはどんどん失われていったそうだ。

そういえば日本もそうね。京都はテレビで見る限り古都のイメージだけど、新幹線で駅に降りると東京と何が違うのって疑問に思うくらいだから。

しかもミロク革命の都市計画で建造物などが壊されたり輸送されたりして、都市の特色はさらに失われてしまったそうだ。ただ、ミロクさんはできるだけ都市の特色も残したかったようで、都市計画を全うした後は、都市の特色の保持に力を入れたという。

これは興味深い二重性だ。古都と近代化が作った文化を破壊しながらも、古都の特色だけは最低限生き残らせようとしたわけだから。

日本でいうなら、京都の街を整然とした碁盤の目に戻すために、偶々邪魔だった歴史的な建物を壊した上で、平安京を復元するようなものだ。破壊と新古典主義的な再生を持つタイプのルネサンスと言い換えることができるだろう。

イルケアの次はワッカという丘陵都市に入った。日本と比べれば微弱なものの、この地域には地震があるらしく、火山が噴くこともあるらしい。また、火山灰で出来た地層があ

り、アルナと比べて平地が少なく、全体的にアルナより円形都市にしづらい土地だそうだ。ミロクさんもこの都市計画には苦労したという。

アルシェはレインの横に戻って、歓談している。勉強を教えていたはずだが、二人は相性がいいのか、楽しそうに話している。彼らの使うジョークやユーモアは私にとっては高度すぎてまだ理解できないので、会話に付いていくことができない。

一人会話に入れない自分がみじめだと思ったが、そう見られたくないので、本に目を落とすことで自己防衛をした。

目を上げてレインをじっと見る。

なんか……私といるときよりかわいこぶっているような……。

思わずハッとした。

ダメよ、そんな卑屈な考え。紫苑、あなたそんなだから友達ができないのよ！

ああ、しかし本の内容が頭に入ってこない。二人が仲良くしているのを見ると焦燥感を覚える。こころが痛い。私の中の先生が、目の前の友人に黒い疑惑を投げかける。

ワッカを抜けるとようやくカテゴリーに入った。特急イスカルが中央カテゴリー市のカルテン駅で止まる。ここが終点だ。

ここからは赤い急行電車に乗り換え、南カテゴリー市のカルザス＝クミール駅まで行く。そこからはレインの案内になる。この先にもう円形都市はない。南カテゴリーを抜けると辺りは田園が広がるだけだ。ここからは電車では行けない。

アリアが占った >cŭŋ-le- というのはアルディアのころにできた地名で、私は籠女海岸と訳した。アルディアの英雄リディアの妹のミルフが籠にパンを入れて戦災を被った人に配給をしていたことから付いた名前だそうだ。彼女の石像が置かれているのでそのように呼ばれているらしい。

籠女海岸はクミール駅から南に 2 キロ半ほど歩いたところだが、そこは観光地になっていて騒がしいので、レインの別荘は少し離れたところにある。

円形都市内では決まった場所しか車が走れないが、こういう田舎道は好き勝手に走れる。なのでレンタカーを借りてもいいのだが、私たちは自転車で行くことにした。

駅周辺には市営の駐輪場があり、無料で自転車を借りることができる。アンセをかざせば鍵が外れ、使うことができる。誰が使ったかはアンセを通したときに記録されるため、

悪いことをすればすぐにバレるという安全なシステムだ。

記録は自転車に記載されるのではなく、錠の代わりをしている銀色のバーを通じて役所に送信されるので、自転車を破壊しても記録を隠蔽することはできない。

田園風景を背景にしながら別荘へと漕いでいった。海が近くまた南の地域なので、アルナより暖かく潮風がぬくい。日本と違って冬の海の風が暖かいようだ。

小一時間ほど漕いだところに、その別荘はあった。少し突き出た岬の近くにひっそりと建っていた。

自転車を停めて玄関に近寄る。当然、鍵がかかっている。アルナの家と違って小さく、入り口は1つしかない。別荘というよりは小屋だ。

鍵は例のアンセによる認証キーで、レインがアンセをかざすと簡単に開いた。ドアを開くレイン。

“leeV, lclcl”

レインが私たちを招き入れようとした瞬間、“>alof”という男の声が聞こえた。

突然の大声に驚いて振り返ると、そこには3人の男がいた。

「え……だれ？」

それは知らない男たちだった。彼らは黒いスーツとコートを纏っていた。彼らの横には黒い車が置かれている。

体格のいい男と、長髪の男と、短髪の男の計3人だ。

“lecΛ qalc- 7o7”

大柄な男が声を荒げる。しかしレインは驚いて何も答えない。これはどう見ても友好的な態度ではない。そして今現在私たちに友好的でない態度を取るとしたら、その候補はひとつしか思いつかない。

「フェンゼルの手の者か……」

思わず唇をかみ締める。思ったより向こうの動きが早かった。いや、それ以前に付けられているとは思わなかった。こちらの予想よりずっと早くフェンゼルは動いていたということになる。

……しまった、甘かったわね。

ネブラを警察に突き出したのが一昨日の夕方。夜間は外出できないので、その日は動くことができない。その翌日にアリアに相談。この日に計画を立てたが、立て終わったら夕

方になっていたのだからやはりカテゴリーには来れなかった。そして動いたのが今日。

私としてはこれが最速の工程だったと思う。アリアの占いがなければ未だにカテゴリーに行く計画すら立っていない可能性がある。

にもかかわらず、フェンゼルは手下を放ってきた。向こうも同様に最速で駒を進めたということか。思った以上にフェンゼルは強敵のようだ。

⑥-♪ V-Λ >e, Cc eC lecΛ YaC- 7o7δ⑥

男は問うと同時に胸のポケットから黒い鉄の塊を取り出した。丸太のような腕を伸ばすと、その口を私たちに向ける。

——銃だった。

反射的に固まる私。横目でアルシェとレインを見る。どちらも想定外という顔だ。

短髪がアンセで連絡を取る。こちらを捕まえたと言っている。私たちをマークしたままなので、手をこめかみに当てない姿勢でも話せるよう、拡声モードで話している。そのため、話し相手の声が聞こえてくる。

lecΛ ⑥Ca eC....r⑥

-Mue ⑥4-, <eΛZel Ceu Ca ucV CeM⑥

そうか、この声がフェンゼルなのか。私はその低く地鳴りするような声に耳を傾ける。

⑥} 1-Λ u-, 1 eC lecΛ YaC- 7o7,, Jee <clΛ eC Aeδ⑥

<eΛΛc- ⑥-ΛJ eΛ JeM laaJ / eC Ae,, Jle- eC -laaC lecΛ YaC-, lecΛ YaC-, C-1 -ΛJ eΛ JeM
ke/e-/CMe- eC Ae⑥

⑥....Me bo⑥

⑥--....7->cl, laaJ eC ue oAeΛ laaM- YaC-, -ΛJ Co <-1 laaJ Vcδ⑥

<eΛZel ⑥Ca eC / V-JCMc- hoC uel -Λ ucM⑥

背筋が凍りつくのを覚えた。地鳴りのような声は私たちを消すように命じたのだ。

そんな……私たちが何をしたいというのよ。

私は怯えた視線で男の銃に目を戻す。

だが、フェンゼルの命に驚いたのは私たちだけではなかった。敵側の 3 人もそれを聞いて驚いたようだった。もしかして、彼らは単に脅すための武器として銃を持っていたのだろうか。

男はアンセを切ると、互いに顔を見合わせ何かを相談しはじめた。

——チャンスだ。

私は咄嗟にレインとアルシェを家の中に突き飛ばし、中に入ってドアを閉めた。

ドアから離れ、ノブに手を伸ばして鍵をかける。

その刹那、パンという銃声が響いた。

「きゃあ！」

思わず手で耳を覆う。

銃声など初めて聞いた。映画のようなドーンという音ではない。もっと乾いたパーンという音だった。弾が数発ドアにめりこんでいる。

レインを見ると、青ざめた顔でぶるぶる震えている。アルバザードでは銃が禁止なので、2人も初めて聞いたに違いない。

⑥lecΛ, <c V-γ し- -cα -δ⑥

⑥V-γ) (e, (eo e(cγ, Jo- (cγ >c -cα (cγJer (e(c l-l- eJ)⑥

⑥cα e(c h-γ, >-Λ -Λ V-γ <-l l--J⑥

するとレインはアルシェの腕にしがみついた。

⑥ceor l--J (cl γel -J ΛoΛoγ⑥

⑥cαμ, le <γ e γel JoγJcγ -Λ し-μcγ cα e(c V-μle γ-γし, <γ) <eΛZel -Λoγ Λoγ Je(c V-Λ la- -μceΛ-γoΛ cα JcΛ,, lecΛ, cα e(c <c-Λ-, -ΛJ Je(c γa ol V-γ eK l--J⑥

アルシェはレインの肩を押さえて宥めるが、レインはその場にへたり込んで泣き出してしまった。突然の事態に頭が付いていかないようだ。

まいったな。向こうは3人。こっちも3人だけど、レインは戦闘要員になりそうもない。

銃声が止んだ。ドアを叩く音がする。そして怒号。

どうも彼らはアサシンではなく、単なる素人のようだ。恐らくフェンゼルの部下の役人なのだろう。アルバザードでは銃は禁止されている。所詮役人が銃を与えられたところでろくに使えはしまい。

だが、ネブラよりはずっと手ごわいだろう。何せ相手は銃だ。だが、あの驚いた様子だと、できれば人を殺すことまではしたくないようだ。所詮勉強しかできない木っ端役人といったところか。

ドアを蹴る音が聞こえる。じきに突破されるだろう。まずいな、こっちには武器もない。せめて刃物くらいはほしいところだ。

私は奥に行くと、台所を探した。包丁くらいはあるはずだ。案の定、大き目の包丁が一本あったので、それを取って居間に戻った。

⑥-μe, leΛ- ʧol ʌccʃ ʃa eleΛ leʌ ʌclʋoΛe

分厚い木のテーブルを指差すと、アルシェは頷いた。

「ほら、レインも手伝って」

テーブルの端を持ちながらレインに言うが、彼女は下を向いて泣いている。

「あのね……怖いのは分かるんだけど、今動かないと大変なことになるの」

するとレインは赤い眼を向けてすまなそうに首を振る。一生懸命立ち上がろうとするが、腰が動かない。彼女は眼に涙を浮かべながら「ごめんなさい……」と言う。

「ああ……腰が抜けちゃったのね。かわいそうに。じゃあ、そこにいて」

アルシェと力を合わせ、テーブルを引っくり返す。かなり重い。テーブルをドアの前に押すと、即席の堤防を作った。

⑥lecΛ, ʃa μ- ʃcl leʃʃʌʌʃδe

⑥ʧ-, ʋo lce μ-e

⑥μeΛ seʃ,, -μe, ʃʧa >cμ eʋo -ʃaʃe

アルシェに包丁を手渡す。

⑥ʌcʧa, lee>eʃe

彼はテーブルに体重をかけ、敵の侵入を阻止する。

レインは私の手を引いて奥にある裏道を案内する。ここから外に出られるようだ。

⑥ʧ-ʋʋo, ʋoΛ ʃʧa μeΛ leʃʃ ʌ-ʌ - ʋ- ʋcʌʌe

⑥-ʌʃ....ʃeʃ lclʌʋʋe

⑥leΛ- eʃ ʋ-ʌo-ʌ ʃa-ʌ, lecΛe

私はレインを軽く突き飛ばし、玄関へ戻る。

さて……ここが頑張りどころだぞ、私。

緊張した面持ちでアルシェに近寄る。ドアの壁はそんなに厚くない。大声で作戦を言っ
ては聞こえてしまう。私はアルシェの肩に手を置いてひょいっと浮かび上がり、耳元で囁
いた。

⑥c ʃaμ, ʌoΛ μʃʃ c ʃa μ- ʋ-μ leʃʃʌʌʃ lce,, ʋee ʌoΛ ʋ-ʌʌ ʋcl l--ʋ μʃʃ S-ʌ,, -ʌc, ʌoΛ -μ <-ʌ
>cʌʌʋ-ʌʌ,, ʋoΛ ʃʧa >cμ ho> o>c c> ʌoΛ ʋ-ʌʌ l--ʋ, >cμ ʋ-ʌʌ ʃcʃ l--ʋ, ʧ-ʋʋoʋe

アルシェは眉をひそめる。

『戦争と平和』のナターシャのように天真爛漫な私に翻弄された彼は苦笑して答えた。

私は妄想ドレスの端っこをくると風に靡かせて小さく舞うと、
『戦争と平和』のナターシャのように天真爛漫な私に翻弄された彼は苦笑して答えた。

私は妄想ドレスの端っこをくると風に靡かせて小さく舞うと、

『戦争と平和』のナターシャのように天真爛漫な私に翻弄された彼は苦笑して答えた。
私は妄想ドレスの端っこをくると風に靡かせて小さく舞うと、
するとアンドレイはふっと笑った。

私は走って裏道を抜け、家の裏手へ回る。壁伝いに歩いて玄関へ回る。男たち 3 人が玄関を突破しようとしている。体格のいい男がドアを蹴っているが、業を煮やしたか、銃を長髪に渡すと体当たりを始めた。突破は時間の問題だ。

ここからでは奇襲は難しい。だが、別の手段もちゃんと考えてある。

ずっと屋根を見上げた。柱を伝っていけば屋根に上れそう。そこから何か重いものを落として攻撃すれば、最低でも一人は倒せそう。

私はいったん家の中に戻ると、レインの隠れている部屋に入り、辺りを物色した。本がたくさんあるが、本では攻撃力がない。花瓶もあったが、音が派手なわりに攻撃力は低そう。

ベッドに乗かって見回していたら、棚の上に石が並べてあるのに気付いた。どうやら海岸で拾った綺麗な石をドゥルガさんが収集していたようだ。これは使える。

私は大きめの石を取ったが、思ったより重い。これを持って屋上まで上がれるだろうか。しかしやるしかない。念のため、手で掴める程度のやや細長い石を別にと、スカートのポケットに入れた。大きいほうの石が外れたときのための保険だ。

「しおん……だいじょうぶ ですか……」

不安そうな顔のレイン。

「大丈夫よ。あなたのことは私が守るから、心配しないで」

レインをぎゅっと抱きしめる。彼女はものすごく震えていた。

こんなに怖い思いをしたのは初めてなんだろうな。まあ、私だって初めてなんだけど。

もう一度外に出る。2 階のベランダを支える柱に手をかける。柱によじ登り、ベランダまで上がる。

こんなの小学校のときの登り棒以来だわ。いや、前に本屋で熱中しすぎて10時過ぎまで帰らなかったとき、さも部屋で勉強してましたって見せかけるためにウチのベランダから忍び込んだことがあったな。じゃああのとき以来か。

屋根の上に着くと、音を立てないように男の頭上に行く。どうにか石を持ってくることにできた。肩と腕が非常に痛い。

さて、実質的なチャンスは1回だ。これでダメならかなり危うい。

男たちは頭上の私には気付いていない。狙うべきは銃を持っている長髪だ。私は彼の頭上に狙いをつけ、タイミングを見計らう。

赤ん坊の頭くらいある石だ。直撃すれば最悪……。だが、そのことにためらいや罪悪感を抱く必要があるだろうか。

羅生門の醜い老婆は生き抜くために死人の髪を抜いた。そしてその業がゆえに若人の追ひ剥ぎに遭ってしまった。自分が生きるためという老婆の自己中な言い訳を聞いた下人は、かえって老婆を襲うことにためらいを感じなくなったのだ。

今の私はまさに下人の気分だ。相手が私を撃つまでフェンゼルの命を成し遂げようというのなら、私もためらいなく彼らを攻撃できる。

心の中で「えい」と声を上げ、手から石を離れた。石はあっという間に重力に引っ張られていき、男の頭上に落ちた。悲鳴を上げる間もなく崩れる男。

——よし、あと2人！

隣の男は何が起こったのか分からないようで、周りを見回した。そして石に気付くと、ハッとして屋根を見上げた。

男と目が合う。その瞬間、私は声を張り上げた。

⑥-Mer 7e(-----r⑥

その刹那、アルシェがドアから飛び出てきて、短髪に回し蹴りを加えた。

彼のキック力は女の私とは比べ物にならず、男は踏ん張る間もなく吹っ飛んでいった。

アルシェは即座に倒れこむ短髪に追い討ちをかけ、右手を踏み潰した。長髪の銃を拾って使えないようにするためだろう。

⑥Oecr⑥

怒声とともに体格のいい男がアルシェを掴む。彼はとっさにストレートを放つが、体を掴まれ足を踏ん張ることができなかったため、威力が半減してしまった。男はアルシェの

突きなど物ともしない表情で、力任せに彼を地面に投げ飛ばした。

「アルシェ！」

私は咄嗟に屋根から飛び降りた。男の背後に飛び降りると、背中を思い切り蹴飛ばした。
ところが所詮女の力ではビクともしなかった。

ⒺⒸⒶ >ⒸⒺ-ⒶⒺ

男は私を力いっぱい突き飛ばしてきた。

「きゃあ！」

ふわっと浮く感じがして、私は数mも吹き飛ばされてしまった。なんて力だ。

「いったあ……」

背中をさすりながら立ち上がる。

男は失神した長髪から銃を取ると、私に銃を向けた。

まずい……体格差がありすぎる。その上向こうには銃がある。

ⒺⒻⒺⒸ - Ⓐ-ⒸⒸ-, >ⒸⒺ-Ⓔ

男が引き金を引く。私は恐怖で目を瞑る。

パーンと音がした。

するとその瞬間、突如風が巻き起こり、私のスカートが舞い上がった。

反射的に手でスカートを押さえると、スカートが緑の光を放っているのに気付いた。

「——えっ!？」

緑の光はスカートのポケットから放たれていた。さっきポケットに入れた石だ。石を取り出すと、石は輝かしい光を放っていた。その光は私の周りに球体を作っていて、その壁面には銃弾が突き刺さっていた。

「まさか……これが守ってくれたの？」

そのまさかだった。私は光のヴェールに守られていた。

ⒺⒺⒸⒻ ⒸⒸ ⒸⒸ ⒸⒸ -ⒸⒸ -Ⓐ- ⒺⒸ ⒸⒸ ⒺⒸ ⒸⒸⒸⒸⒸⒸⒸⒸ

混乱した男が喚き散らす、そんな私のほうが知りたい。

私と男はバカみたいにぼーっと突っ立っていた。

そのとき、銃声を聞きつけたレインが奥からヴァルデを持って飛び出してきた。

「しおんっ！」

「レイン……？だっ、だめよ、あなたは隠れてなさい！」

会話を聞いた男は更に困惑した顔になると、私とレインを交互に見た。

そうか、聞きなれない外国語に驚いているのか。これはチャンスね。

私は大きく息を吸うと、大声で叫んだ。

「レイン、つえを わたしに なげる しろ！」

それを聞いたレインは困惑する男を尻目にヴァルデを放り投げた。

⑥0e, ʃʊʃ⑥

男はレインの予想外の行動に素っ頓狂な声を上げるだけだった。

私はヴァルデをしっかりとキャッチすると、竹刀のように構えた。

⑥0ec, ʃe ʃe< ʃa -l -ʃr⑥

「いやです！ヴァルデは絶対に渡しません！」

⑥ʃeo, ʃa eʃ -ʃʃeʃr ʃe ʃe<r⑥

男が再度銃を放つが、緑の光がまたもや守ってくれる。

私は地面を蹴ると、竹刀を振り上げながら男に飛び掛る。

「やああっ！」

気合を入れて、彼の頭をパーンと打った。体格が大きい相手なので、容赦なく打たせてもらった。

しかし男の体力はすさまじく、それだけでは失神しなかった。

「覚悟なさい！」

続けざまに足に力を込めると、腕を伸ばして喉元に突きを入れた。

⑥-ʃ--ʃr⑥

これには流石に参ったようで、男は喉を押さえて地面に倒れこんだ。突きを食らっただけでも大したものだと思いますが、私は切っ先を下げた。

アルシェは倒れた男から銃を奪う。銃を構えたままレインに縄を取りに行かせる。レインが縄を持ってくると、彼は私に銃を渡し、威嚇するように言った。アルシェは 3 人を居間に連れて行き、柱に彼らを縛り付けた。

「これで……安心ね」

ため息をついて椅子に銃を置く。倒したテーブルを 2 人で立て直すと、席に着く。

私が石を落とした長髪は頭から出血しており、かなり具合が悪いようだ。

「レイン、救急箱もってきてくれる？」

「きゅーきゅーばこ？」

⑥-Kc, ΛoΛ 7e- 1-Λ la Vc7⑥

「うん、わかった」

レインはとてとてと走っていく。私は長髪に近寄ると、髪をかき分けて出血している箇所を見た。

「……あれ？」

そのとき私はあることに気付いた。

「あなた……女だったんですか？」

3 人とも男だという先入観があったが、頭から血を流しているのは女だった。よく見ると胸もあり、ご丁寧に化粧までしている。美人で、しかも若い。髪は黒く、東洋的な顔をしている。なのでまだ 10 代に見えてしまうが、役人である以上、そんなに若くはないはずだ。

「あなたたちの身分を改めさせてもらいますね」

短髪の男のポケットに手を入れ、中のものを調べた。ポケットには護身用の小さなナイフがある程度に過ぎなかった。本当にただの木っ端役人だったようだ。

女のほうも手帳やらハンカチやらしか出てこず、防弾チョッキも着込んでいなかった。ほとんど武装とは呼べない状態だ。女の手帳の中からは写真が出てきた。茶色い髪をした若い男の写真だ。恋人だろう。

手帳を見ると、25 歳の召喚省の役人であることが分かった。アーディン＝ユピトールというようだ。

レインが救急箱を持ってきて、アーディンに応急処置をした。頭というのは少しの傷でも派手に出血するもので、傷自体は思ったより浅かった。頭の場合、逆に血が出ないほうが怖いものだ。私は安堵のため息をついた。

アルシェは咳払いをすると、冷たい表情で彼らを見下ろした。

⑥J-- , 7e cΛΛ -1 -Λ,, o> (ccJ 1-Λ-7 7c7 -ΛJδ⑥

⑥....⑥

⑥ol 7c 7-1 Jee7, JoΛ -Λ VcΛ 7eel (ccJ cl 7oΛ <7o7,, -Λ -J> >e,, o>7⑥

すると彼らはビクッとして、ぼそぼそ話し始めた。

⑥c> 7oΛel⑥

“V-l Je lɔɔl -, V-ʝ leδδ

“leʃʝ- ʃɔaɔl-δ

“le ʃ-ʌʃ-ʃ ʃccʝ -ʃaδδ

“ʃccʝ-....<eʌZel -lʝ--lδ

“l- Vceʝ-ʃ ʃɔ - ʃccʝδδ

矢継ぎ早に尋問を続けるアルシェ。私たちにはふだん見せない冷たい顔をしている。

“l- l-ʃ-ʃ -ʌʝ Vecʃ le Zɔʌ, V-ʝle, <ɔʝ V-ʝʃʃc- -lʃδ

“-lʃδ ʃa eʃ ʃɔδδ

“ʃɔlʃe,, h-c, ʃc eʌ ʝeʝ-ʃ <c ɔʌ ʃaδ ʝɔʌ leʃʝ- eʌ ʝeʝ-ʃ ʝ-ʝʃ ʃcʌʃ-ʃ ʃɔlʃe ʃ-ʌ, -ʌ lɔδ

ドルテ？それはヴァルデと同じ神のアイテムのことか？神はヴァルデのほかにもなくしていたというのか？

私は鞆から辞書を取り出すと、ドルテについて調べる。やはりヴァルデと同じくヴァストリアのようで、敵の力を吸い取ったり、吸い取った力を利用したりできる魔石のことらしい。

——ん？ちょっと待って。

私は机に置いた石を恐る恐る見た。

「ねえレイン……まさかあの石が」

彼女は神妙に頷いた。どうやらドルテもドゥルガさんが発見していたようだ。

——それにしても、なんという奇跡！

私は思わず天を仰いだ。

あのとき私は部屋にたくさん置いてあった石の中からたまたまドルテを掴んだということか。もしただの石を掴んでいたら、私は先ほどの凶弾に倒されていたところだ。

しかし、木の葉を隠すなら森というが、まさにその通りだ。あれではただの石にしか見えない。まさかヴァストリアだとは夢にも思わない。仮にドルテがあるということを知ってここに来たとしても、どれがドルテか調べるのに時間がかかる。ドゥルガさんもうまいこと隠したものだ。

ドゥルガさんといえば、先ほど見た感じではこの家には誰もいないようだった。

私は 3 人の見張りをアルシェに頼むと、家の中を探した。しかし私たちのほかには誰もいなかった。

だがここにドルテがあった以上、彼は間違いなくここに来ていたということになる。アリアの占いは正しかったようだ。

私たちは同時にヴァルデの先端の宝玉も探したが、見当たらなかった。机の引き出しや納戸まで細かく調べたが、それっぽい緑の球は出てこなかった。

ドウルガさんは向学心がよほど強かったようで、ここにも蔵書や書類がたくさんあった。物が多いおかげで家捜しに数時間もかかってしまった。だが結局宝玉は見つからなかった。「恐らく、ヴァルデの球はドウルガさんが肌身離さず持っているんじゃないかしら」

レインは私の言葉に頷く。

「としたら、問題は彼が今どこにいるかよね」

「む？きこえない　です。しおん、もういちど」

“4eC <cLΛ eC (a leU lYaaJJa U- (aP -> Λ-ΛΛ-δ”

“4-,., aΛ (a, leΛ- (-P) -U -lc- Λ-”

“JaC> aΛ -lc-, leΛ- el- -U JaJ c>eΛ (aP - l-”

“4-, Uc Y-lC”

居間に戻ると、アルシェが首を持ち上げて “Jδ” と聞いてきた。

“Cee, l- >c -(a cΛ,, <J)....3>....”

私は3人の視線を感じ、彼に耳打ちした。

“....le >elUe (-Λ”

“h--Λ....”

アルシェは体格のいい男に近寄ると、アンセを奪う。なにやらいじりだすと、フェンゼルにメールを書き出した。

「ヴァルデ確保。3人は射殺。負傷したため、2人のアンセが故障した。これからドルテ捜索を行い、翌日の早朝出立する。怪しまれるので援護は不要。ヴァルデの画像を送る」という内容だった。

アルシェは男を立たせてヴァルデを持たせ、写真を取って画像を添付してメールを送った。すぐにフェンゼルから「了解。なるべく早く帰還せよ。ご苦労」という旨のメールが来た。

はあとため息を付き、アンセを胸にしまうアルシェ。これで時間稼ぎができそうだ。

“-J> VeeP, eJ <eΛZel UcP V-Pleδ l- e> l-U -J(eP J->δ”

すると具合の悪そうな声でアーディンが答える。

“‘‘‘‘-!- Vcl leJ l‘‘aJ‘‘a <eAZel lcl‘‘, l- ‘e ‘--leJ ‘c‘‘

“h3Λ, lccΛ -Λ ‘‘Λ- Vcl ‘elJ”

“‘elJ’”

アーディンは顔を赤くして顔を上げた。

“‘‘a Je‘ ‘aa, -‘e -l‘ee>J,, h3‘, ‘-J‘‘, J‘Λ Λ‘Λ ‘‘‘ <-Λ ‘e - ‘‘a le‘ Λ-Λ -‘ ‘l-Λ l'cl ‘-J
e”

アルシェはピクッと眉を上げる。

アーディンは元奴隷だということのか？そんな人がどうして役人として働いているのだろう。そうそう、本で読んだが、アルバザードは奴隷制をもちろん廃止しているものの、実際には3Kの仕事をさせられる奴隷と呼ばれる層が存在するそう。ただ、国はその事実を好ましく思っておらず、なるべく減らそうと努力しているらしい。

“l‘aJ‘‘a ‘cl l-Λ- ‘‘-Λ eΛ‘‘ lcl‘‘ -!- Vcl e”

“‘a ‘a, l- e‘ ‘c‘ ‘e‘‘- ‘elJ,, ‘e- l- ‘cl >-Λ <c‘, J‘Λ l- eΛ Vce‘-‘ ‘ccJ Je‘ -ΛJ,, ‘c-δ”

するとアーディンは黙って下を向いた。私も小さく頷いた。

フェンゼルにどんな野望があるのかは知らない。アルタレスになるくらいだから極めて優秀な人物には違いないだろう。だが天才だからといって罪と罰が許されるわけではない。彼はしょせんラスコリニコフ病に罹っているに過ぎない。

ソーニャのような毅然とした顔を保ったまま彼女が一方的に水掛け論に終止符を打つと、アルシェはポルフィーリのような猜疑心溢れる顔で椅子を引いて静かに座った。

私は息を吞んで彼らを見張ったが、それきりふたりは一言も発しなかった。

しばらくしてアルシェは立ち上がると、台所に行った。何をしにいったのだろうと思っていると、お盆に乾パンや水を載せて戻ってきた。

“> e la‘e‘, ‘ccJ cl,, cΛ, >el‘ ‘a‘ V-‘Z‘Λ”

そうか、もうそんな時間か。

基本的に缶詰の非常食だ。アルシェは皿やボウルに食事をよそり、全員に配った。アーディンは貧血でふらふらするのか、あまり食欲がないようだった。

見ると、アルシェの分だけ妙に少ない。

‘ccΛ “-‘e, ‘a-Λ e‘ ‘l-‘ -l’- cΛ,, ‘‘a Jc ‘acΛ-δ”

レインが高い声を張り上げたとき、眠気で重くなっていた私の瞼がパチッと開いた。時計を見るともう 2 時を回っていた。

「lee, ʔa -ʔlec c>eʌ ʌɔʌ -ʔ ʊ-ʔʔ ʔ,, ʃee ʔa ʔeʌʊ ʔ- ʔ-aʔ 1 ʔ- ʔ-eʌ -ʔʊc-ʔ

「どれどれ。……ほんとだ。アルシアに家を買ったって書いてあるね。レイン、知ってた？」

「ʔee, ʃeʔcʔ ʃe ʔ-> e,, ʔ-ʌ ʔ-ʔ- ʔaʌ eʔ....ʊɔ- cʌʔ

レインは日記に書かれた住所を指す。アンセを開いて地図で確認すると、どうやらアルシアの郊外のようなのだ。

アルシアというのはアルバザード北西部の都市で、アルナと同じように円形都市になっているそうだ。その円形都市の郊外に、ドゥルガさんは家を買ったという。しかしそれは娘のレインも知らない家だという。となると、ここを隠れ家として購入したという線が濃厚だ。

居間に戻ると、アルシェはランプの弱い灯りの中、ぼつんと座っていた。眼はアーディンたちをしっかりと見据えている。少しも眠そうな様子はない。

すごい精神力だなあ……。

当のアーディンたちは気楽なもので、すやすやと眠っていた。どうやら彼らの眠りを妨げないように、電灯を消してあげたようだ。

彼らを起こさないよう静かに耳打ちすると、アルシェはにこりとして頷いた。

その後は交代制で監視することにした。アルシェにも睡眠を取ってもらわないといけな

い。最初にレインを寝かせ、次に私。そしてアルシェの順だ。アルシェが寝ているときは一番恐怖を感じた。目の前の 3 人が行動するならそのときだからだ。こういうとき、やはり女は弱い存在だと思う。

監視をしていると、傷が痛むのか、たまにアーディンが唸る。私は胸が苦しくなった。異世界が剣と魔法の世界であることを期待していたくせに、私にはどれだけの覚悟があったのだろう。

ただ勉強して訓練して、心のどこかでは来るはずもないと思っていた不安を掻き消すために精進して……。そして……ただひたすらに意味もなく異世界を願った。何で願ったんだろう。何も目的なんてなかったくせに。

人よりちょっと頭が良くて可愛いから、それで疎外されて迫害された。そんな子供時代を送った。お母さんたちは忙しくて兄弟もいなかった。

でも、いつまで待っても異世界には行けなかった。だから私は毎年毎年、誕生日を迎えるたびに、悲しくて一人で泣いていた。まるで生まれたときのように——そう、この茶番の世界に。リア王も巧いことを言う。私は小さな声で呟いた。

私の声はいつの間にか泣き声になっていた。するとレインが眼を覚まし、すすり泣く私に気付いた。彼女はすべてを察したかのような顔になると、肩を寄せて抱きしめてきた。オーディンのことが気になっていることが伝わったらしい。

私はレインに抱かれながら泣いた。

8時になった。アルシェが起きると、私は監視を頼んで朝ごはんを作りにいった。といっても缶詰や乾パンしかないが。

食事を終えると、アーディンたちがトイレに行きたいと言った。昨日の夕飯の後に行かせたきりだった。一人ずつ縄を解き、アルシェが連れて行く。もし暴れられても取り押さえられるようにだ。

トイレに行かせると、アルシェは食料と水を彼らの前に置いた。遅くとも今日フェンゼルが私たちの計画に気付くので、今日の遅くには救助が来るはずだ。1日分食料があれば足りるはずだ。

私はアーディンの前に座ると、「ごめんなさいね」と言った。彼女はうつむいたまま黙っていた。

家を出ると、急に爽やかな潮風が吹いた。そうか、ここは海辺の別荘だった。本来なら海を見てゆったりしたいところだが、そう言ってはいられない。置いておいた自転車に乗る。彼らの車も置いてあるが、駅まではわざわざ車を奪う距離でもない。

“lee -M_e, C4a C_eC-C J_e M-A C_a Vec> - l4aJJa h-cAδ”

“4-, >o-”

“o>δ”

“7- AeCμ-, M-J lc”

“Ja l4aJJa C_eC-C J_e de< - C4aδ”

“J--....Aec”

アルシェは父であるハインさんに経緯をメールで報告したらしい。隠れ家で何度も。しかしまだ返事が返ってこないというのだ。私の胸に不安がよぎる。

南カテゴリー駅に着くが、まだハインさんからの連絡はない。アルシェはなにやら焦った顔つきで電話をかける。ところが出ない。

しょうがないからとアーチをくぐろうとしたとき、レインが “cAr” と叫んで近くの狭い通路に私たちを引っ張っていった。

見ると、通路に置かれたディスプレイにニュースが映っていた。なんとそこには召喚省の役人であるハイン＝アルテームスがクーデター計画の容疑で逮捕されたと書いてある。

-μe 6VclU-Λr fεoƒ le <ɔɔcɔ h-cΛ >-Λ lcz <ce e>cƒ6

珍しく怒鳴るアルシェ。無理もない。クーデターを企てているのはむしろフェンゼルのほうではないか。

どうやらフェンゼルはハインさんの裏切りに気付いたようだ。ドウルガ→レイン→アルシェ→ハインというルートか、あるいはドウルガ→ハインというルートで気付いたのだろうか。恐らく前者だろう。

後者の場合、ハインさんがドウルガさんの上司だという繋がりしかない。これだけではハインさんを逮捕するのは早計だ。となると、前者のルートで気付いたと考えられる。

昨日、アーディンたちがレインのほかに男女がいることをフェンゼルに伝えていた。恐らくフェンゼルはそこから男性がアルシェであることに気付いたのだろう。

しかし、どうやっても私の正体は知られまい。私の存在はフェンゼルにとって不確定要素になっており、プレッシャーを与えているはずだ。

今の私はジェイ＝ギャツビーのように数々の憶測をもってフェンゼルの葛藤を向けられていることだろう。仮にフェンゼルがニック＝キャラウェイの証券業由来の計算高さと観察眼を凌駕していたとしても、私が異世界人であるなどという事実は弾き出せないだろう。

とはいえ、ハインさんが捕まったのは痛い。ドウルガさんではヴァルデがあってもフェンゼルの倒せない。ハインさんは魔導師として必要なのだ。

ucɔΛ 6μeΛ μe< Λ-Λ, -μe,, ɔɔΛ ƒaμ, leΛ- ɔ-> <-l -Λɔ6

-μe 6ɔ-, ƒaμ h-cΛ <ɔɔcɔ ɔa,, ɔ-Λ μeɔ e <eΛZel ɔɔμ ɔcƒ ɔeɔcl - leɔƒμ- e ɔ-ƒeeɔ6

lecΛ 6ɔɔΛ ɔɔΛ eΛ hɔƒ ƒeƒ ƒɔa ƒ-Λ e>cɔ l-Λ- e <eΛZel ɔeƒe, eƒƒɔ6

-μe 6ɔ-, ƒcɔ ucɔΛ le laΛ-ƒ c <c- -lƒ6

ucɔΛ 6ɔlƒ- -veΛ, leΛ- ɔɔμ -ɔ -lɔc- ɔe v-ɔ Λ-6

lecΛ 6lee, ƒa eɔɔ <eΛZel ɔɔl ɔeΛ Λ-cΛ ɔel ɔɔaɔɔa h-cΛ <ɔɔ-ƒ ɔa6

ハッとした。そうだ。ハインさんが逮捕されたということは、フェンゼルは既に警察を手中に収めたということだ。

それは言い換えると、レインとアルシェにも嘘の容疑で指名手配がかかる可能性があるということだ。

6ɔ>, leΛ- -ɔeɔ ɔcμ Λ-ΛΛ- Λ-ΛΛ-δ6

レインは変装を提案した。賛成だ。そのほうが安心できる。

私たちはいったん駅を出てモールへ行くと、変装に必要な服やらを買い込んだ。アルシェの顔を隠せる帽子を買い、レインの顔を変えるための化粧を買った。

その後、私たちは帰りの特急イスカルに乗ると、来た道に戻っていった。

電車の中で化粧をするレイン。かなり厚くしたのでパッと見たら誰だか分からない。心配なのはむしろアルシェのほうだ。

ᄒᄒᄒᄒ, ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ

頬紅を差して口紅を真っ赤に塗ったレインが口を開く。正直、レインはすっぴんのほうが可愛いと思う。

それにしても、化粧だけで変装といえるものか。私は髪型も変えたらどうだと言って持っていた髪紐——といっても、もともとレインの家の物を拝借したのだが——を渡そうとした。だが、レインはゴムならあると言ってさっさと結わいた。

夕方前にアルナに着く。電車を乗り換えてアルシアに向かう。ぎりぎり夜までにはアルシアに着きそうだ。

電車の中でニュースをずっと見ていた。すると遂にニュースでレインとアルシェと謎の少女、つまり自分が指名手配されたと知った。容疑は召喚省の役人 3 名の拉致監禁および傷害致傷だ。

2 人の画像が出ているが、アンセに登録されたものなので、現在の姿とはあまり似ていない。パスポートの写真のようだと理解すれば分かりやすいだろう。

よし、これなら化粧でも十分ごまかせるわね。ただ、指名手配された以上、ここから先はアンセが使えなくなりそうだ。

中央アルシアに着いたときは既に暗くなっていた。もう 6 時を回っている。最終的には北西アルシア市のネブラークミール駅まで行かねばならない。移動だけで 1 日が終わってしまう。特急を使ったわりにはずいぶん時間がかかってしまった。アルバザードは思ったより広い国だ。

ぼーっと窓の外を眺める。指名手配という言葉が重くのしかかってくる。まさかこんなことになるとは。それにはたしてドウルガさんには会えるのだろうか。ここまで来て会えなかったらもうお手上げだ。

円形都市に入ったので、窓の外は地下の暗闇だ。どのみち地上に出たとしても真っ暗だろうが。

これからのことを考えると不安になってきた。中央アルシアを出てからずいぶん時間が経った気がする。まだ着かないのだろうか。

この電車は本当に北西アルシアに向かっているのだろうか。もしかしたら私は銀河鉄道に乗ってしまったのではないか。あいにく、私の手にジョバンニの切符はない。思わず不安になってレインを見た。彼女はアルシェの肩に頭を乗せ、すやすやと寝ていた。

……よかった、カムパネルラはまだいたのね。

脚と腰が長時間の乗車で悲鳴を上げたころ、ようやく北西アルシアに着いた。

駅を出る。そろそろ外出禁止になる時間なので、ここで宿を取りたいところだ。しかし指名手配をされている手前、アンセは使えない。ということは買い物もできないし、泊まることもできない。車も借りられないし、それどころか自転車も使えない。

7 時以降にブラブラしていたらたちまち捕まってしまう。かといって泊まる場所もない。逆転の発想で、私たちは円形都市を出ることにした。街から出たしまえば警察の巡回もないから、夜間外出禁止など知ったことではない。

しかし、ここから隠れ家まではかなりの距離がある。しかも、ここからはレインと 2 人きりになる。誰か 1 人が街に残ってハインさんの裁判がいつ行われるかを調査しなければならないからだ。

その役はアルシェにお願いすることにした。彼自身、自分の父親のことだから気になってしかたがないだろう。

それにしても、ここから隠れ家まで歩いていくのは大変だ。レインの話だと車でも 30 分はかかるという。アンセがあれば地図が見れるので徒歩での最短距離が分かるのだが、アンセを使おうものならすぐに GPS 経由で居場所がばれてしまう。

警察を手中に収めた今のフェンゼルは、アンセを通して私たちの居場所を簡単に知ることができる。ここからはアンセは使えない。もうアンセの電源は 3 つとも落としてある。

食糧に関してはカテゴリーで買い込んだ分が持つかどうかの持久戦だ。

しかし歩くとなると、どれくらいかかるのだろうか。車で郊外を時速 60km で走ったとして、30km くらいか。歩いていくには厳しい。時速 5km で歩いたとしても 6 時間はかかる。

まいったな……徒歩じゃとても無理だわ。

私が頭を抱えていると、ちょうど日本でいう高校生くらいの少女が 2 人通りかかった。

そして一時的に自転車を道に停め、駅近くの売店に入ってしまった。

-M_e 6>>6

これは使えそうだという顔のアルシェ。レインは困った顔で彼の袖をくいくいと引っ張る。

lecΛ 60ecΛ, -M_e6

-M_e 6C-I C_a eC VclC_oAl6

lecΛ 6JeΛC_oAlr6

思わず私はふっと笑ってしまった。

間髪いれず、じろっと見てくるレイン。

……ごめん。

-M_e 6-Λ eΛ Λ-l_u C_oΛ C-I C_c >-Λ C_c eC <c>, 4aΛr6

レインはうっと唸って黙った。言い返せないようだ。

アルシェは慣れた手つきで自転車のカギを壊した。データ上はまだ今いた女の子たちが自転車を使っていることになっている。私たちが盗んでも、彼女たちが借りたということしか国は把握できない。

lecΛ 6I-I- eJ C₄ JeM M_cY_o> e Y->eY lec>, Y->e eY M_cY ol el M_cY 7a7c,, C-I...eJ C_a C_e M_cYδ6

-M_e 6-Λ lo C_c -J> <C_oAl C_a, lecΛ,, Y-, 7eC_c-,, 0ec, C_oΛ, C_c C-Λ,, V-l, 4aΛr6

C_oΛ/lecΛ 6-, -lr6

私とレインは自転車に跨ると、文字通り逃げ去っていった。自転車で滑走して外へ出る。振り返るとアルシェの姿は既になかった。逃げ足が速いなあ。でもこれで助かった。自転車だと体力が消耗しづらい。

円形都市を抜けると急に郊外になった。郊外に住む人もいたので、かろうじてまだ道が舗装されている。

アルシアは森と泉の地方だ。歴史的に有名な場所で、カコ時代にはアルシアの11魔将という魔法に長けた将軍が集まり、独立勢力を築いた。彼らはそれまで散在していた魔法を体系付けたことでも有名だ。

流石に当時と違って今では森は切り開かれ、道ができている。自転車がパンクせずに通れる道だ。レインの案内に従ってひたすら休みなく自転車を漕ぐ。

レインの体力を見ながらペースを変えつつ進んでいった。生きるということは大変なこ

とだと改めて実感した。

辺りはとっくに暗く、7時以降は街灯も消えるため、自転車のライトが唯一の灯りだ。暗くて仕方がない。

林道に入るとますます暗くなった。街灯もなく舗装もない暗い道をひたすら走る。夜の林道というのはこんなに暗いものか。まるで『夜間飛行』のペルランの気分だ。夜闇の中を行くのがいかに恐ろしいか、小説を読んだだけでは実感できない。これで雨でも降れば、即座にこの自転車をファビアン機と名付けよう。

昼に雨が降っていたのだろうか、舗装のない地面はいまだに湿っていた。まずい、これ以上無理に進めば転倒して怪我をするかもしれない。そうしたらかえって時間がかかる。かといってこんな林の中で野宿などできようか。

隠れ家はもう 20 分ほどだと言う。あまりに暗いので自転車から降りて歩くことにした。——敗北の不時着。リヴィエール支配人にどやされるところだ。

カラカラと車輪の音が響く。木々のざわめきが不気味に聞こえる。道なりに進んでいるので辛うじて迷わないですんでいるが、ここで迷えば終わりだ。なにせアンセが使えない。

降りて 1 時間ほど歩くと、ようやく隠れ家に着いた。カテゴリーで買ったライトを持って近寄る。

そこは小さなコテージだった。入り口には当然鍵がかかっている。レインはアンセをいま使えない。が、ここは小さなコテージなので、アンセによる認証キーを採用していない。ふつうの鍵だ。

窓の中を覗くが、灯りはついていない。誰もいないようだ。ドゥルガさんはここでもないというのか……？

胸が不安でざわついたとき、後ろのほうから急に明かりを当てられた。

驚いて振り向くと、そこには一人の男性が立っていた。が、驚いたのはむしろ彼のほうだったようだ。

lec^δ

彼はレインを見ると、わなわなと震えた。

q-q-r

彼が視界に入るや否や、レインは飛びかかるように抱きついた。

それは以前写真で見せてもらったドゥルガさんだった。渋い中年男性で、レインの親だ

けあってイケメンだ。しかも品も良さそうだ。もっとも、潜伏生活のせいでひげもじゃだが。

「やった……ようやく会えた」

私は安堵のため息をついた。

⑥ ㊄-㊄----㊄⑥

一方、レインは緊張の糸が切れたのか、真っ赤になって大声で泣き喚いた。まるでジャン＝バルジャンに泣きつくコゼットのようだ。もっとも、ドゥルガさんは細身で美しい顔をしているが。

よかったね、レイン。

私は自分のお父さんのことを思い出していた。私もお父さんに抱きつきたくなった。ウチのお父さんは背が高く、カッコよくて、とても紳士的で優しい。理想なお父さんだが、ちょっと病的なくらいお母さんにべったりで、娘の私のことはあまり構ってくれない人だ。

だから私はいつも寂しい思いをしていて、今もレインがちょっと羨ましく思えた。お父さんは今頃心配しているだろう。もう 1 カ月以上経ってしまった。私は地球に帰れるのだろうか。

⑥ h-c, la e③....⑥

彼はこちらに目を向ける。私はお行儀よくスカートをくいと持ち上げて挨拶をした。

⑥ h-l-r③-, lʔaʔʔa laaʔʔ-, ʔʔʔ e③ ʔcʔʔ h-Zʔc le laʔ-③ c③ -lʔ<c- l-ʔ- V-ʔʔ >cV- ʔa-ʔ⑥

⑥ʔ-ʔʔeδ⑥

あまりの言葉にドゥルガさんはポカーンとした表情を返しただけだった。

⑥ ㊄-㊄-, la ʔeʔʔcʔ ʔʔʔ e,, ʔee la e③ ʔe>-c> ʔʔ-ʔ,, ʔʔʔ ʔ-ʔʔ <-ʔ cl c ʔaʔ⑥

⑥ ʔ-, ʔʔʔ - ʔʔʔ⑥

ドゥルガさんは鍵を開けると、私たちを家の中に招いた。ちょうど彼も今帰ってきたところだったようだ。

中は映画に出てくるような山小屋といった感じだった。暖炉があり、テーブルがあり、木の椅子があり、といった感じだ。調度品はなく、家具が最低限あるだけだ。

ドゥルガさんはおなかがすいたろうと言って夕食を用意してくれた。本当におなかがすいていたので、私たちは勢いよく食べた。ドゥルガさんはそれを見て苦笑いをしていた。

そりゃそうよね、若い乙女がガツガツとみっともない。でも、おなかがすいたんだもん。

おなかが落ち着くと、レインはこれまでの経緯を説明した。ネブラに襲われたこと、私に助けられたこと、ネブラを捕まえてヴァルデについて知ったこと、アリアに相談してカテージュに行ったこと、そこでフェンゼルの部下に襲われたこと。

ドゥルガさんはレインの話の聞くと、ううむと唸って黙り込んでしまった。

“-l<c, c eΛ c eμ-c eVμeΛJ -Λc γoγδ”

“eVμeΛJδ”

首を傾げるレイン。メッセージなんてあったのか？

“q-, -Λ μcJ-c μeJ e <eΛZel cJ Jcl he> -Λc, JoΛ -Λ leJθ-c μeΛJ - <oΛ ccl”

“<oΛ Λo-Λδ”

“c> h-μθ J- -Λ leeV-c -μΛ-, -l<c c lαμΛe l'-ΛJ -γc-c Je Veeμ c>, -Λ eV-c <oΛ oγeΛ / >elΛe -l eleΛ,, c eΛ c-γl-cδ”

レインは「ああ」という顔をする。

“q-, ΛoΛ >-leJ cα,, Jee c e >-J μeΛJ-c le e c c-Λc cΛeΛ cγα”

“-Λ leJθ-c μeΛJ - cα,, c e- c eV-c cα - Λc-, JoΛ c c eμ eVμeΛJ -Λc V-μ -μc”

“l-l-r”

口を押さえるレイン。

“θ-θ-, c> le Jel, ΛoΛ γoμ-c J-Jμ-c e eΛc c ccl >cγα Λc- <eΛ”

襟元に手を入れて髪を見せるレイン。

“c> ΛoΛ eV-c le <oΛ - γ--VeZ,, Jee....”

突如彼女はハッとして私を見る。

まさか……。

私は髪を結わいていたゴムをしゅるっと外す。レインの家の地下室にあったもので、ずっと借りていた。ふだんはストレートにしているが、結わくときは最近これを使っていた。

レインにゴムを渡す。彼女は少女のように、頭のとっぺんに近いところで右側だけちょこんと髪を結わいた。

彼女は眼を瞑り、じっと耳を澄ます。

しばらくして彼女は神妙に頷くと、髪ゴムを私に返した。

“cα e c -μc <ccΛ-eΛ c h c,, JoΛ c cα lccZ c eμ-c Vcl -Λc”

……まさかこんなオチだったとはねえ。

私はがっかりした。今までの苦労は何だったのだろう。ドゥルガさんはきちんとレイン

に危険を知らせ、この件に関する情報を伝え、彼女に指示を出していたのだ。

レインは私にメッセージの内容を伝えた。私はその話と今までの流れを合わせて、紫苑の書にまとめた。

まず去年の秋、ドウルガさんはヴァルデを見つけたが、フェンゼルの計画を知って渡すのを止めた。自分が見つけたことを気付かれないよう、死亡を装って潜伏することにした。

潜伏したのはフェンゼルの管理下から逃れるためと、時間稼ぎのため。時間稼ぎとは、もうひとつのヴァストリアであるドルテを探すこと。

ヴァルデとドルテを見つけたら、ハインさんに頼んでフェンゼルを倒してもらう計画だった。それでその間の期間、潜伏することにしたのだ。

ところがアルナを出る際、ヴァルデを持ち運ぶと目立ちすぎると思い、家に置いておいた。しかし万一フェンゼルが自分の裏切りに気付いたときのために、緑の宝玉は挿げ替えておいた。

アルナを出たときは既に死亡届を偽装した後だったそう。顔見知りだらけのアルナには長くいられない。家に帰って一人娘に事情を説明しようとしたものの、娘は出かけていない。

ところが特急イスカルの出発時刻が迫っている。これ以降はアンセを使えないので、切符を予め買っておいた。だからこそ時刻は変更できない。業を煮やしたドウルガさんは書き置きを残そうとしたが、万全を期して魔法でメッセージを髪ゴムに吹き込んでおいた。しかしこれがあまりに巧妙すぎたため、かえって娘が気付かず、仇となってしまった。

ドウルガさんはレインがアルシェに相談してハインさんの協力を得るようにとメッセージの中で頼んでいた。が、結局レインはその指示を聞かなかったため、話しがややこしくなったわけだ。最終的にはアルシェを通してハインさんに話が行ったからいいものの、複雑な伝言ゲームになってしまった。

イスカルに乗ってカテゴリーへ行ったドウルガさんはドルテを首尾よく見つけた。

本来ならこのときまでにレインがハインさんに話をつけ、ヴァルデとハインさんを連れてカテゴリーで落ち合うはずだった。しかし何日待ってもレインは来ない。かといってアンセを使うと偽装した死亡がバレる。

だが彼も人の親。ついレインが心配で年末にアンセを使って電話をかけてしまう。だが

そのときレインは圏外にいたようだ。レインのアンセには着信履歴が入らなかった。他方、ドゥルガさんのアンセには送信履歴が残る。

その結果、ネブラがドゥルガさんの死亡偽装を疑うことになり、年末にレインを襲うことになる。恐らく、そのイレギュラーな出来事からレインを守るため、私はメルティアに召喚されたのだろう。

一方、ドゥルガさんはこう考えていた。もしかして娘はアルシアの隠れ家について知っていて、カテージュではなくそちらへ向かったのではないかと。

そこで彼はドルテを別荘に置いてカテージュを去った。万一自分が捕まったときにすべてを失わないため、バラけさせておいたようだ。

ところがアルシアにも娘は来ていなかった。アンセも使えず、アルナにも戻れぬ日々。レインに電話をかけても繋がらなかったのも、ドゥルガさんはアンセに使用履歴が発生するとは思わなかったようだ。だからまだ自分が死亡を装えているものと信じ、アンセを使わないでいたらしい。皮肉なものだ。

彼にとってせめてもの救いだったのは、自分がヴァルデの宝玉を肌身離さず持つことで、アルテナ暗殺の凶行を阻止しているということだけだった。最悪自分がこれを隠し通せば、少なくとも暗殺は防がれる。それが自分に残された任務だと考えた。

しかし今日、彼は幸運にも娘に会うことができた。これで風向きが完全に変わった。

③>....lYajJoa, AaA -J> I-A Ue⑥

私は気になっていたことを聞いた。

⑥Y@a eC -M-C-A 7-7Uδ⑥

するとドゥルガさんは渋い微笑みを返してきた。

⑥Y-, <cA -A Ae)C-(eJ (a c >cV-⑥

③>....UcA), <c- Aa-A Jc -M-C δ>cM> eA) AaA cA I-A -M-C M-J 1⑥

⑥UcA lccZ, el Yal UcA -M-C I-A- JcA J AaJ eC -M-C-A 7-7U (cJee,, (I (a eC --I >-A (c eC -I<c-A, <a) (c V-AaC >cV- -A C JccA-⑥

彼は私に指先を向けると、小さな声で ⑥laCe⑥ と言った。

その瞬間、足元がふわっとする感じになって、椅子に座っていた私が浮き上がった。

「え——？」

足を動かしてみる。……床につかない。

「私……浮いてる！？」

突如、私の全身が総毛立った。

ぞわーっとする感動が足の先から頭のとっぺんまで走る。

「ま……魔法だ！本当にあったんだ！凄い……凄いです！」

ところが驚いたのは私だけではない。レインも興奮で顔を赤くさせると、
「-Λ, - ΛΛ (-ΛΛ)ε」と言ってぴょんぴょん跳ねた。

ドウルガさんに魔法をかけてもらおうと、レインは床から数 10cm のところでぷかぷか浮いた。どうやらドウルガさんが魔法を使ったのを初めて見たらしい。

「-Λ-- lecΛ, (-Λ -Λ lecΛ -ε

喜ぶレインを見てドウルガさんは苦笑していた。

11 時を回った。私たちは奥の部屋で寝ることにした。

コテージのベッドで私とレインは寄り添うようにして寝転んだ。ベッドの中で、私は彼女の頭を撫でた。するとレインは今まで張り詰めていた糸が切れてしまったようで、泣きじゃくってしまった。ドウルガさんが見つかって安心したのだろう。

「lecΛ, ΛΛ >e-(-(- >cl (-Λ,, (-Λ la(-Λ ΛΛ lecΛ-, (-Λ e(-Λ>eΛ ΛΛ-Λ eε

私はレインが愛おしくなって抱きしめた。自転車で走って汗をかいただろうに、太陽の匂いと乳臭い匂いの混じった甘い香りがする。

「ΛΛ ---(-Λ, lecΛ ε

私たちはアルシアで朝を迎えた。レインを連れて近くの泉で顔を洗い、水を汲む。昨日は暗かったのでよく分からなかったが、アルシアの森は幻想的で美しい。

朝食を済ませる。また保存食だ。カテゴリーに入って以降ずっとこうだ。毎日同じようなものばかりで栄養の偏りが気になるが仕方がない。小麦粉原料のことが多いのだが、小麦粉は必須アミノ酸のリジンが少ない。リジンは魚や大豆で補給できるのだが、そんなものはない。

けどまあ、フェンゼルを倒すまでの辛抱だわ。

そう思いながら身支度を済ませる。

まずは市内に戻ってアルシェと合流する必要がある。そしたらアルナに戻ってどうにかハインさんを救出しなければならない。

ハインさんは魔導師だ。フェンゼルもアルテナさんも魔導師だ。彼らは魔法の能力を持っているという。無論アルディアの時代ほど強力ではないそうだが、それでも現代に残る希少な魔導師らしい。ドウルガさんもその一人だ。ということは、恐らくレインにもその血が流れているのだろう。

ヴァルデは確かに強力なヴァストリアだが、魔導師でなければ使いこなせない。ただ持っているだけでは意味がないのだ。

アルシェは残念ながら父から魔法の力を遺伝しなかったという。運が悪かったといっていた。となるとヴァルデを渡す相手はハインさんしかいない。

厳密に言えばアルテナさんにヴァルデを渡しても良いのだが、為政者である彼女にアルタレスであるフェンゼル抜きで接近するのは事実上不可能だ。だったらハインさんに渡すほうがよっぽど可能性がある。

しかしチャンスは一瞬。護送中のハインさんの車を襲い、彼にヴァルデを渡す。そして彼の魔法の力で周りを蹴散らし、その勢いでフェンゼルを叩くという計画だ。ヴァルデもドルテもこちらの手にある。あと必要なのは強力かつ協力的な魔導師、これだけだ。

部屋を片付け、家に鍵をかけて出た。盗んだ自転車に乗ろうとしたところ、ドウルガさんが制止してくる。

67e 5ccf 75A ->96

⑥->δδ ςΨα ςcl ->δ >c-Λδ δΨαδδδδδ

⑥l-Λ- ςe -lδc- c ς-ςeeδ, -Λ e<ς-ς ->δδ

⑥e<ςδδ

レインが眉をひそめる。

⑥ςα -ς δ-c-, lecΛ,, -Λ Ψcl-ς Vcl -ΛΨe,, δδΛ -Λ ςδ-ς Vcl - lδδδ

ドゥルガさんは娘の背中をぽんぽんと撫でると、倉庫の扉を開けた。そこはガレージになっており、中には車が入っていた。これは助かる。また自転車で市内に戻るのは大変だ。

ところが、車に乗り込んだ後もレインは白い眼を父に向けていた。

⑥Oeec >cV-, ςe cΛ -Λ Ψe δδ-δ

⑥ςee δΛ eΛ ςα,, ςα eς δ-c- δel ςΨα e<ς-ς ςα,, ςeς....l-l- eδ ςΨα Ψeμ μcδδ> e ςαδcδδ

⑥-h-h, -Λ Aeδς V-Λ ςα ςδΛς δδδδ -μςe-δ

⑥δδδδδδδ

セキュリティが高い社会とはいえ、どうやら政府高官は色々な抜け道を知っているようだ。まあ、それが今回のような緊急事態に役立っているのだから、一方的に悪いとも決め付けられないだろう。

アルシアに入ると、駅周辺でアルシェを待つ。ドゥルガさんに会えても会えなくても今日の10時に待ち合わせの約束だ。

彼はまだ来ていなかった。こちらが車で来たため、時間が余ってしまった。私たちは指名手配をされているので、変装して目立たないところで待つ。

しばらくするとアルシェが来た。彼はこちらに気付くと手招きした。手の平を上に向けて指をくいくいと手前に小刻みに曲げる動作で、日本のジェスチャーとは異なる。

⑥δα, δcδΛδ

彼さんは私を見てにこりとするが、ドゥルガさんと目が合うと今度は嬉しそうな顔をした。

⑥<cc>-, δΨαδδδα,, -Λ Λ-δ Λ-l >-Λ cΛς ςc >eδ

⑥<cc>-, -μςe,, -Λ ΨeΛς ςcΛ ςc >-Λ ςc V-Λδς >cV- -Λςδ

アルシェを連れて車を置いてあるところへ戻りだす。

⑥eδδ ςcςδ ⑥

レインが手の平を上にして雨だという。フランスっぽい風土のわりに、フランス人と違

アルシアには雨が多い。昨日の夜も降っていた。といっても日本のような大降りではなく、しとしとと長く暖かい雨が降るのが特徴だ。この特徴はアルバザードの大部分で同じだそうだ。

ଲେଖକ

停車したところへ着くと、アルシェは車を見て盗む手間が省けたと言って笑った。

レインはアルシェの帽子を借りて歩いた。中央アルナだと地元なので、いつどこで人に見つかるか分からない。レインによると、ほぼ確実に誰かしらに見つかるだろうとのこと。

ドゥルガさんは ⑥㇗㇚㇚-, ㇚㇚ ㇚㇚㇚㇚ と言ってフェンゼル通りまで案内した。西区の中でも北区寄りの場所だ。高層ビルが立ち並んでいる。初めてこちら側に来た。彼は 1 軒の高層ビルに歩み寄る。どうやらそこはマンションのようだ。

彼はレインを無視して中に入る。入り口には自動ドアがあるが、認証がないと中にさえない。今はアンセを使えないので、ドゥルガさんは旧式の方法を利用した。すなわち鍵だ。鍵を差し込んで捻ると自動ドアがスーッと開いた。

そのまま彼に案内され、中に入る。エレベータを使い、上へ上がる。7階で降り、一室に案内される。

どうやらここも彼の隠れ家のような。いや、いまやアジトというべきか。

しかしなぜ市内に別宅を持っているのだろう。

密かにレインの顔を見る。彼女は何かを考えているようで、複雑な表情をしていた。

私と思うに……男の人が別宅を構えるということは……つまり、そういうことだよな。

「あの……さ」

⑥>δ⑥

「その……再婚の話とか、聞いてた？」

「……そういうこと　ちがう　おもう　です」

レインはあっさり否定した。だが、部屋は 2LDK で、明らかに一人で住む場所ではない。

まあ、確かに女物の品物は置いてないし、レインの言うことももっともかもしれない。

それに、いずれにせよ私にとっては人の家のことだ。これ以上は詮索すまい。

私とレインは洗面所で手や顔を洗い、ドライヤーで髪を整えてから戻った。アルシェと
ドゥルガさんは窓の外を見ていた。

⑥|clcl ㄥㄣδ⑥

⑥cΛㄣ<ㄣㄣ,, ->ㄣ ㄣㄣΛ h-cΛ ㄣ-ㄣ ㄣcl le <ㄣㄣㄣ

⑥- h-cㄣ- ㄣㄣㄣ,, ㄣㄣ, cΛ ㄣㄣㄣ (ㄣ ->ㄣ cㄣ -ㄣㄣδ⑥

ㄣㄣㄣㄣ- ⑥-ㄣㄣ lecl,, ㄣㄣΛ -Λ cΛ ㄣcl ㄣ- Zㄣ,, ㄣccㄣ >cㄣ V-ㄣ ->ㄣ ㄣ- le <ㄣㄣㄣ, c> -Λ cΛㄣㄣㄣ (ㄣ ->ㄣ,

ㄣㄣΛ -Λ -ㄣ <cΛㄣ ㄣㄣㄣ δ-Λ⑥

-ㄣㄣㄣ ⑥ㄣ-δ (ㄣ eㄣ -ㄣ-ㄣㄣ

ㄣccΛ ⑥-Λㄣ-⑥

その後、私とレインはソファで雑魚寝の状態で仮眠を取った。アルシェはヴァルデを持ちながらドゥルガさんと何か話していた。これからの計画のことを話しているのだろう。2人とも表情が頑なで、しかも若干不安げだった。

起きたのは夕方だった。アルシェが行くぞと言って私たちを起こした。真剣な面持ちだ。緊張しているらしい。こちらも甘えてはいられない。負担になってはいけない。

いや、負担にならないのはレインの目指すところだ。私はむしろ戦士として戦わなければならない。アルシェは優しい声でレインを起こしたが、私については戦友を叩き起こすように肩を叩いた。戦力として期待されているということだろう。

……少しは女として扱ってほしいんですけど。へこむんですが。

彼は詳しい説明をしてきた。これはハンドガンとしては最強クラスのものだとか、どこそこの軍隊が実際に採用しているだとか、本当はスナイパーライフルが良かったが接近するので仕方がないとか。また、反動が大きいので女じゃ手首をおかしくするとか……。

銃に興味のない私にはよく分からないけど、こういうのが好きっていうのを聞くと、やっぱり彼も男の子なんだなって思う。

そうして待つこと 1 時間強。遂に花火の音が上がった。

ヒュー、ドーンという大きな音が起こると、通りにいた人たちが一斉に空を見上げる。この花火は周りの注意を引く合図にもなっている。

花火の音は 4 発だった。これは 4 台目の車がターゲットだという合図だ。

私は目の前の道を睨みつける。

最初に来たのは護衛車だった。護送車を先導しているようだ。

lecΛ ⑥ laΛ-?....⑥

-Me ⑥ -le....⑥

微かにアルシェの声が震えている。ここからの行動には自分の父親とこの国の命運がかかっている。彼のストレスは私以上だろう。

もう一台車が通る。

lecΛ ⑥ <le-....⑥

自分の声も震えている。

また一台。

lecΛ ⑥ -leΛ....⑥

そして最後の一台が来た。

-Me ⑥ q-Λ, leΛr ⑥ eΛ-Λr⑥

アルシェはツバメのように飛び出した。

私とレインも後に続く。私はヴァルデをぎゅっと握り締めた。

走りながら銃を構えると、アルシェは狙いを定めて 4 台目の車を撃った。それは明らかに他の車とは違う護送車だった。

右前輪を撃たれて護送車がバランスを崩す。凄い腕前だ。

彼は走りながら立て続けに撃つ。

次々とタイヤはパンクしていき、護送車は急ブレーキをかけた。

-μe ⑥-ur Veeμ e⑦ ɔθΛ-Λr -ΛJ ʃ-Λl V-Λ ->ɔ, V-J⑦ V-Λ l-r⑥

アルシェは運転席に乗り込もうと走りこむ。

私は護送車の後ろに周り、金属製のバーを上には押し上げ、鍵を外す。問型の棒を上には押し上げるとくるっと棒が回転して鍵が外れるあのタイプだ。

ucɔΛ ⑥h-cΛ lʃaJɔar⑥

ドアを引き開けると、中にはアルシェの面影のある 50 がらみの男性がいた。ひげを生やし、やつれてはいるものの、目には力がある。

——まちがいない、この人だ。

⑥lʃaJɔar ΛɔΛ Je< laΛ- V-μle - ⑦ʃa⑦

大声で怒鳴ったとき、ふいに突き飛ばされ、視界から驚いた顔のハインさんが消えた。

「きゃあ！」

横転しながら叫ぶ。何かと思ったらレインだった。レインが抱きついてきたのだ。そしてそれに前後して聞こえる銃声。

そうか、撃たれたのか。ハインさんを護送していた警官が私に発砲したのだ。

一瞬痛みがあるのかないのか分からなかった。撃たれたかもしれないという認識のほうがかかった。地面を転がって少ししてから無傷であることを知る。危なかった。

⑥ucɔΛ, -⑦a e⑦ l->ɔr⑥

ここには後ろの護衛車に撃たれる。レインは私を通りに引っ張っていった。

なるほど、通りには通行人がいる。皆何事かと歩みを止めている。こちらに行けば警察としては銃は撃てまい。

レインの判断通り、警察は発砲を止めた。アルシェもこちらに合流する。

⑥ucɔΛr Je<c⑦ V-μle - h-cΛʃ⑥

⑥V-Λ⑦r ΛɔΛ μe⑦c⑦ >-Λ l-cΛ ʃel leΛ-, ⑦-l lʃaJɔa -laa⑦ ⑦- le ->ɔr ΛɔΛ cΛ-⑦, ΛɔΛ cΛ-⑦ l- Je μ-Λ ⑦ɔ⑦ɔ ⑦a⑦a cΛJr ④-Λ V-μle, ΛɔΛ ⑦cleJ ⑦-l Je μ-Λr⑥

lecΛ ⑥⑦a e⑦ ④e⑦....⑥

ふいに苦い声で呟くレイン。

えっと振り向くと、辺りには警察官ではない人間が長い銃を構えて集まってきた。

これは……。

-Mue 6VclU-A, eA A-cA C-I V--Ar6

lecA 6VclU-Ar6

-Mue 6Fee, Ca eC 7e9I e <eAZel U-r I- 9oMoc -Ao -AeUAr6

アルシェは地団駄を踏んだ。

軍隊はじりじりと銃を構えて私たちを囲む。通りにいた人間は蜘蛛の子を散らすように逃げていってしまった。

万事休す。計画はすべて読まれていた。これは……罠だったのだ。

兵士がハインさんを車から引きずり出す。もうこの車は動けない。他の車に乗せるのだろう。

そう思ったとき、テーベという白い法衣を着た男が、護送車の後ろにあった車から出てきた。

男はひげをはやし、金色のくせっ毛をしていた。目は青く、背が高く、細い。年齢はハインさんと同じくらいだろうか。こいつが恐らく……。

6<eAZelr6

アルシェが憎々しげに言い放った。やはりそうか。

フェンゼルはふんと鼻で笑うと、兵士をかいくぐって近寄ってきた。

<eAZel 6lecA 4ac-/ -Mue -Ifee>J/I-Z 7AooJ 7o76

間違いない。カテージュで聞いたあの声だ。

UcoA 6eA I-Z, >-A-r6

-Mue 6Feeolr Ca eC VcAr6

フェンゼルは鼻で笑う。

6-A JeM I-U eJc Ccl,, -, Fee, J- Ca, -A 9oMoc Ca <ccA- Cc...UcoA8 Cc-86

——この悪霊め。お前はニコライだ。いや、それにも劣る。組織をかさに暴力を振るうお前はピョートルで十分だ。

<eAZel 6-A eA JeM Cc IaA-J c Oel 7-l,, -A eA A- Ibl - Cc C-I Ca ZoA hoC,, 7eCC-, Me Je< Ca -I -Mee-6

lecA 6-I eA -Mee- C-I C4aA-A I-A- Mc8 Ca 7-l96

レインが大声で叫ぶ。フェンゼルは笑って首を振る。

6-I- Cc 7aM C38 4aA7,, --, -Mee6

ふん、誰が信用するもんか。

しかし、ここまで表立って動けばアルテナの目が行かないはずがない。フェンゼルにとってもここが勝負時なのだ。

「ccΛ ⑥--し-r⑥

⑥J-c-, JαΛ -Λ ③< V-Λ ③ Λc -Λ JαJ laαJ Je③ ③ccJ⑥

フェンゼルは手を上げる。私は目を瞑った。

ここまでだ。私はこんなところで死んでしまうのか。私だけではない。レインもアルシェも。せつかくヴァストリアを集めたというのに。ハインさんもすぐそこにいるというのに。

なんてこと……レインを守れなかったなんて……何のために私は異世界からやってきたのよ。レインを守るためでしょ……。

そうよ、レインを守ってヴァルデを守ってヴァストリアを見つけてハインさんに渡してフェンゼルを倒してもらい、アルテナさんを助けてアルバザードを救う。そのために来たんじゃないの！？

「っ冗談じゃないわっ！こんなところで死んでたまるもんですか！」

いきなりの異言語にフェンゼルを含めた全員がピタッと止まる。

⑥③c....-l- elλ ③ccl e③ ③α -δ⑥

⑥ΛαΛ e③ ΛcαΛr ΛαΛ laΛ-J -③α c③ -l③<c- l-Λ- V-Λα ③α <c-r⑥

私はヴァルデを地面に突き刺し、怒鳴りつけた。

その刹那、フェンゼルは ⑥③e③③-r⑥ と叫んだ。

おびただしい量の銃声が響く。3人どころかその百倍も殺せそうなほどの弾雨が降り注ぐ。

5秒ほど撃ち続けて銃声が止んだとき、私たち3人は地面に立ったままだった。

私は……立ったまま死んだのか……？

そんな考えが頭に浮かぶということは、少なくとも弾は脳を貫通しなかったらしい。と思ったが、よくよく感じてみると、体のどこも痛くない。死ぬということはこんなに容易いのかと一瞬期待してしまったほどだ。

目を開けると、怯えた顔の兵士がそこにいた。

フェンゼルまで驚いた顔でこちらを見ている。

分からないのはこちらのほうだ。なぜ自分たちは死ななかったのか。

私はふと手に持ったヴァルデが赤い光を発しているのに気付いた。

lecΛ ⑥ucol ⑥ leΛ-....>eJeJ ④a <-μ h-μ l'eC....Λol lo....Vcμ⑥

ucol ⑥h3μ⑥

<eΛZel:>cZ ⑥eJ ⑥ ④a eC VclΛ-Λr ⑦eC-, CccJ, ⑧el, ⑧elr⑥

ふたたび銃声が響く。

しかし、いくら撃とうと弾雨は赤い光を通過できない。

<eΛZel ⑥VclΛ-Λ,, -μC-Λ h3C ④ol JeΛ V-μlel ④cl Jol Cc eC ④al Ae⑥

フェンゼルは後ずさる。

「だから言ってるでしょう。異世界から来た紫苑だって！」

⑥C3 ⑥ -d- Cc ⑦aμ C3 ellr ④a eC <c -μCeΛ⑥

⑥Λol eC ucol,, Λol μeΛJ >c- ④a - ④a, <eΛZel⑥

⑥ucol....c <c- -lC ⑥ Jol Jol Cc eC ④al ucol ->-ΛZe⑥

シオン＝アマンゼ……また神話上の人物と誤解された。でも今回は無理もないか。

フェンゼルは ⑥e3cl⑥ と怒鳴ると、胸の前で印を組んだ。

ぶわっと彼のテーベが舞い上がり、私と同じように赤い光が煙のように立ち込める。

<eΛZel ⑥Aee>e AeJ le V-leC al3 <cΛ Ccl Vcμ CcΛ⑦-, le Ccl ->cμ Ccc- lel l-cZ cc<- 3 Λ3c l-cC

lel l-cZ >eCe,, Cc μe <cC Ve Vcμ e Λ3J -l -Λ....⑥

ucol ⑥lecΛ, l- ⑦aμ C3⑥

lecΛ ⑥-μCeΛ....le eC -μCeΛ l-Λ- -μ -μC,, ④-Λ ④a eC -μCeΛ e....⑥

フェンゼルの禍々しい声とともに、辺り一体の地面が慟哭を始めた。

地面が割れ、真紅の光が漏れ出る。

まるで大震災のような振動だ。なんだこれは。フェンゼルはどんな魔法を唱えようというのだ。

h-cΛ ⑥ucol ->-ΛZel⑥

護送車からハインさんが身を乗り出し、私に大声で語りかけてくる。

⑥μe -μC ⑦ol leμC >c⑦- 3 V-μlel⑥

「ええっ！？わっ、私に魔法を撃てって言うんですかっ！？」

⑥ucol ->-ΛZe, μe l-l V-Λ3e-l Vecl d3a3ccCe -l3aC Λ-⑧ V-Λ CccJ clr⑥

「そんな、無理ですよ！バリア張れっていわれても！」

Ⓢ-Λ∪ ∫c >elfⓈ

「でも私、呪文も知らないんですよ！？そもそも魔法使いでさえないんですよ！？」

もはやアルカを脳内で組み立てる余裕もなく、日本語で喚き散らした。

地面はどんどん赤みを増し、今にも張り裂けそうだ。もうハインさんにヴァストリアを渡しにいく余裕はない。

「ああ、もうっ！」

私はダンと地面を踏みつけた。くるっと振り向き、フェンゼルを睨みつける。

——やるしかない。

私がみんなを守るしかない！

「レイン、私にしっかりつかまって！」

必死の形相でヴァルデを掲げる。

Ⓢ∫a ∫e ∅∫∫ -∫∫eΛ e ∨-Λ∅é-l, ∫c∫a∅Ⓢ

亜麻色の髪を舞わせながら、彼女は力強く頷いた。そして桃色の唇から言葉を紡ぎ出す。私は彼女の言葉を自分の唇に這わせた。

<-∫ e e∫∫a∅,

<col e <e∫leΛ,

é-l e e∫c-,,

私たちの周りを徐々に青白い光が覆っていく。

これが……魔法の壁……。私にも……魔法が……。

こないだカテージュの別荘でドウルガさんの魔法学者としての論文を読んだ。それによると、魔法は言葉によって増幅させることができるという。仮に口が動かずアルカで唱えられない場合は、心で思っても効果があるという。

言葉は魔法なのだ。

光の壁を見て、私は感動に包まれた。自分も魔導師だったという事実が胸が沸き起こった。

そうか、私は魔導師だったんだ。だからこの世界に呼ばれたんだ。

やっと分かった。どうして今までヴァルデを持っていても魔法が出なかったのか。神の母語で呪文を唱えなかったからだ。アルカを勉強して良かった。

私はレインが唱える呪文を反唱する。そのたびに光の壁は大きくなっていく。

まるで巨大な水鏡の中に入っているかのようだ。

意識をヴァルデに集中させると、私は最後の節を唱えた。

∪ccl ∪el -∪∪,

c∪c∪ca∪

刹那、おびただしい量の光が放たれ、私たちの周りを囲んだ。

「すごい……」

思わずため息が出た。

私が呪文を唱え終わったとき、フェンゼルはすべての魔力を開放する準備を整え、最後の一文を唱えあげた。

Ⓞ∪∪∧ ∪e∪∪-, ∪ee>e e ∪aa∪ ∪el ∪aa∪cc∪e∪Ⓞ

フェンゼルの魔法で地面から真紅の光が噴き溢れ、天にまで昇っていく。

「くっ……」

ものすごい風圧だ。

「負けるもんか……」

私は必死に踏ん張り、この星にしがみつく。

禍々しい光に誘われ、辺りの建物や兵士たちが吸い込まれて天に昇っていく。そして光の中で跡形もなく消えていく。

「仲間を巻き込むなんて……それがアルタレスのすることですか！」

怒りに震える。だがその私も浮きそうになる。

「だめだ……ここで堪えなきゃ」

Ⓞ∪∪∧ ->-∧Ze, ∪c ∪a∧-∪ -∪a ∪-∧- V-∧∪ ∪c∪- e ∧∪∪ ∪∪∪∪ ∪∪ e∪c ∪ccl ∪cl ∪-hc -∪∪- ∪-∪∪Ⓞ

には、ある意味フェンゼルの気持ちも分かってしまったからだ。

しかしレインは目を閉じると、ふたたびフェンゼルに銃を構えた。

“<eΛZel -lJ--l, C4a eC eVcC, eVcC Je >eP”

“C3....δ”

“C4a Ccl lo eVcC 3Λ lcCe,, >3Λ lcCe eC V3lL,, CcC el C4ac lcCe e>3 <-lcJ 33Ce VecC el 4aC-
<-l lcCe VelΛ-μ C-Λ”

“4alc cCeC CcJ 3333μ Le -l -μC-leJ -δ”

“-L, L4aJ33a,, el Lcμ lcCe 33ΛC el C-J lcCe >cL-Z”

“lcCe >cL-Z....L-δ”

“-Lr L4aJ33a >cμ33 l-l-C Je V333 >3> e <-lcJ cJr 4aΛJ lc/lcC el c3l -L μ- e lcCe h-l
>3> e <-lcJ 33Ce,, 33Λ Λ3Λ ScΛJ <-Λ leJ 3eJ <-Λ >3> eleJ leL VelΛ-μ”

撃鉄を起こすレイン。カチャリと無機質な音がする。

“>3Λ C3 <-J l-leJ 4a -ΛVeμ e JeC3l lc,, CcC, 333r 33r leΛ- V-Λ3 L-< C3 -lV-J, <ccΛ- cl,
cl 3-VeΛ JeC3l -Jr <eΛZel, Cc eC JeC-Λ C3,, -l33Λ Λ3Λ leμC, — h-cZeΛr”

ふたたびレインは引き金を引いた。

ドンという音がした。

だがその直前、アルシェがレインを後ろから抱きとめ、腕を空に跳ね上げた。

弾は虚しくルーキーテのほうに放たれていった。

“eC33....eJδ”

“C3 le <-J CccL, lc>el”

アルシェが彼女の手から銃を取るが、そのとき既にハインさんが近くに來ていた。

“-μe....”

威厳のある声で息子を見つめるハインさん。アルシェはゆっくり首を上げる。

“Ce33-....”

ハインさんは静かに手を伸ばした。

“-Λ L-l J-> eΛC3 >c4a JeΛ JeC-, J->-Λ”

アルシェは苦笑すると、銃を手渡した。

散らばった瓦礫の中を歩き、ハインさんはフェンゼルの元へ歩み寄る。

⑥....3eΛC-ΛC, <eΛZel,, C-I -Λ C-Λ C-> I- μec4a -⑥

⑥h-cΛ....⑥

⑥cΛ -Λ, <eΛZel,, -Λ -μ V-Λ aI-ΛJe C-ΛC⑥

⑥Ceo, -Λ f-J Ca CcJ,, >-Λo Cc C-μ VceΛ-le> I--C, JoΛ μe JeC -μC-leJ VelΛ-μ JoΛ V-γ⑥

フェンゼルは渾身の力で上体を起こすと、額を自ら銃口に突きつけた。

⑥-Λ Λc-J V-Λ -μf-Z-μl - Cc, h-cΛ -lCee>J⑥

⑥....-lγ-μf-Z-μl⑥

パンと乾いた音がして、ゆっくりフェンゼルは倒れていった。

後には破壊された街が残った。

ルーキーテの威力は凄まじかった。

中心部は霧散しており、周辺部は瓦礫の山と化している。中心部とて、消えきらなかった瓦礫が天から降ってきて惨憺たる状況になっている。

周辺部の建物はナイフで縦に切られたケーキみたいに綺麗に削られていた。通行人が多かったため、死人や怪我人が多い。霧散した死体まで合わせると一体何人が命を落としたのだろうか。

「フェンゼル……これが革命を起こそうという人間のすることですか……」

私は肩を落とした。ミロクさんの作った平和とは……彼が願った平和とは……なんだっただろう。こんな反乱分子をたやすく産んでしまう程度のものだったのだろうか。

結局フェンゼルの正義とミロクさんの正義は平行線のまま、ミロクの使徒が彼を征する形で幕を閉じてしまった。彼は確かに反乱分子だったかもしれないが、このアルバザードという社会の闇に目を向けた革命家でもあったということを、私は覚えておくことにした。

ミロクさんとフェンゼルのどちらが正しいのか、私は分からない。レインはミロクさんの考えで、彼女の意見もちろん分かる。だが、かといって私はフェンゼルの意見も理解できる。

世の中の根本的な部分、基本的な善悪の定義や倫理観などを画一化し、それ以外の部分にしか多様性を認めないアルバザード。確かに安定した社会は築けるだろうが、その社会に不適切なものは容赦なく切り捨てられる。アルバザードの善に合わない人間は悪で、悪はあまねく死ねばいいという考えだ。

フェンゼルはアルタレスという体制側の勝ち組の立場にいたのに、あえて負け組の牙になろうとしたのだ。彼が単なる悪党だったと誰が言えるだろうか。だがこの国の歴史は彼を単なる悪党とみなすだろう。

やがて救急車や警察の応援が来る。

ドウルガさんが群集を掻き分けてやってくる。アルシエは彼に状況を説明しだした。

そうか、ファンタジーとは違うのか……。ケアルもホイミもないんだな。当たり前か。

いや、魔法でなくとも同じことだ。地球でも日本のような平和ボケした国の外ではこれと同じことが毎日のように行われている。魔法が爆弾になっただけだ。

私はなんて愚かだったんだろう。目の前で惨事を見なければ、人は理解できないのか。

もう……疲れた。

数の問題に置き換えれば、少なくともこれが最小の被害だったのだ。被害ゼロなんてありえない。誰かしらが被害者になる。それなら被害者は少ないほうが良いに決まっている。

レインもショックが大きかったようで、へたり込んで泣き出してしまった。私はレインの背中を撫でる。そして私の背中をアルシェが撫でてくれる。

ꣳlecΛꣳ と呼びかけたとき、目の前がくらっとした。

あれ？と思ったが早いか、私は地面に突っ伏しそうになった。

意識が飛ぶ寸前、咄嗟に抱きかかえてくれる逞しい腕を感じた。

目覚めたときは病院にいた。目を開けるとレインがいた。始めは病院だということが分からなかった。レインがアルシェを呼ぶ。アルシェは紅茶のカップを台に置いて駆け寄ってくる。2人が何か話しかけてくる。

ああ、そうだ。私はアトラスにいて、アルカで話しかけられて……。確か、雨に濡れて……ヴァルデが光って……私が魔導師で……フェンゼルを倒して……。あれ、その後、どうなった？

恐る恐る起き上がる。体に異常はない。どこにも障害を負っていない。

レインが事情を説明してくる。フェンゼルを倒した後、私は倒れたそうだ。そう、そこまでは覚えている。

原因は魔力の使いすぎだそうだ。なんだそりゃと思ったが、どうもそうらしい。魔力の使いすぎで精神が疲労して、意識を失ったらしい。

6lecΛ, <cJ eC Λeδ6

6Z-Λ-6

どうやら昨日の夕方から今まで昏睡していたようだ。気付くと、私は点滴を受けていた。ああ、栄養点滴か。病気で寝込んだとき、何度か日本でも打ったことがあるわね。

体は意外に軽く感じる。ただ、動けばすぐに具合が悪くなるのは目に見えている。

私が寝ている間に世の中は随分動いたそうだ。フェンゼルを倒したハインさんはフェンゼルの計略を公表し、アルテナを救った英雄として次のアルタレスに決まるそうだ。

アルシェは今後召喚省に入り、タレスになるという。レインはハインさんに誘われ、召喚省への内定を早くももらったそうだが、レインは後期大学に行った後、大学院に行きたいと言ったそうだ。

ハインさんとドウルガさんは私のことは口外せず、アルシェとレインも現場にいなかったことにしたらしい。それでいい。歴史の創造は彼らに任せる。

ハインさんにかけてられていた容疑は冤罪と分かったし、私たちの指名手配も解かれた。

今月末にアルタレス就任の儀を行うという。まだ先の話だ。レインは私の具合が回復したらバカンスに行こうと喋ってきた。改めてアルバザードを案内したいという。喜んでOKした。

私はアルナの家にはいた。ここにもすっかり慣れた。

紫苑の書を書き終えると、読み返す。

今月は色々なことがあった。レインたちと行った旅行は神話の軌跡を辿るものだった。

私は目を閉じると、旅行を追想した。

出発したのはルージュの日だった。

ハインさんの力で特急はおろか、空路も海路も自由自在だった。

カテージュまで飛行機で連れて行ってもらい、そこで海鮮料理を楽しんだ。……太った。

そこで 1 泊した後、運転手付きの車でテージュ海まで行った。海から南に船を出してもらった。

あるとき、レインが空を指して、あそこがテージュだと言った。テージュとはヴァステの時代に悪魔たちが降ってきた空のことで、テームスの空というのが原義らしい。空のその部分だけなんだか歪んで黒ずんで見える。目の錯覚だろうか、空間がぼやけて見えるのだ。でも恐らくこれは錯覚ではない。

多分、伝説通り、宇宙にある悪魔の巣へ繋がっているのだろう。また、アルディアではテージュに巨人が降り立ち、アシェットがそれを征伐したそう。

船長が網を引くと、魚介類が上がった。その場で新鮮なまま焼いたりして食べた。潮の香りが新しいそれはカテージュで食べたものよりもおいしかった。

アルシェがふざけて蟹の鉗で私の頬を挟んできた。内陸に住んでいて海が珍しいのか、レインは揚げられた魚介類を物珍しそうに見ていた。

私は蛸を取ると、後ろから近寄ってしげしげ網を見ているレインの眼前に突きつけた。レインはぎゅっと叫びをあげて尻餅をついた。私とアルシェが大笑いすると、レインは貝殻を投げつけてきた。

夜は船の中で寝た。3 人とも酔いがないようで良かった。夜、2 人に連れられて甲板に出て、星空を見た。地球でもこんな綺麗な星はみたことがなかった。住宅地のウチじゃほとんど星なんて見えない。ちらほらだ。

よく「星の数ほど」という慣用句を量の多いことのたとえで使うが、あれは現代人には

分からない感覚ではないか。私はこのとき初めてこのメタファーを実感した。

次の日はミュール大陸の跡を見た。大陸といってもオーストラリアほどもない最小の大陸だそうだが、マダガスカル島よりも大きいので、確かに島というには大きすぎる。

跡だというのは、この大陸がヴァステの戦火で滅ぼされてしまったからだそうだ。神々の戦いはかくも凄いものなのかと感心した。人間のフェンゼルが放った魔法でさえあれだ。確かに頷ける話だ。

ミュールを見た後はヘリコプターでカテゴリーへ帰った。ヘリに乗ったのはもちろん初めてのことだった。お嬢様のレインも、お坊ちゃんのアルシェも初めてだそうだ。思ったよりヘリの乗り心地はよかった。何より上空からの景色が美しかった。

カテゴリーに着くと特急でワッカに行き、そこで 1 泊。翌日は丘陵をハイキングした。私はすっかり元気になっていたが、体力のないレインは一人でバテていた。

日本の山と違って陰しくなく、木々が多くない。日本の山は「青々とした」と表現される。つまり木が多い。ワッカはそうでもなかった。木はもちろん生えているものの、少ない。

上空から見て思ったのだが、アルバザードの山は禿山が多い。試しに子供が山を描くときは何色で塗るかと聞いたら茶色だという。日本だと半分は緑で書くだろうなと思った。

面白いことに、色ネタを聞いてみたところ、太陽は白だそうだ。ちなみに先日飲んだ白ワインは緑と表現されていた。色々な違いがある。もっとも、海が青で土が茶色なのは同じようだが。土が灰色な文化もあるかもしれないななどと考えていた。

ハイキングを終えて帰るとイルケアに行き、良いホテルで 1 泊。翌日はルークスに行き、商業的に歴史のある建造物や旧街区を見て回った。そこで 1 泊して、次は飛行機でアルシアへ向かう。

アルシアの 11 魔将が構えたという独立国を巡礼し、泉の水を飲んだ。魔力が増すという。アルシェはそれであるとき私の魔力が上がったんじゃないかとからかってきた。でもあながち冗談でもないかもとレインが真顔で言った。

翌日はアルカンスへ飛んだ。ここは神々の戦いのラヴァスが起った土地でもあり、そ

の終焉の土地でもある。ここにはアルマが大量に存在するため、ラヴァスの後、3人の人間がこの土地を巡って争ったが、三つ巴になり、いつまでも決着がつかなかったそうだ。

その3人とはスレア、ブレア、トレア。彼らの名前をそれぞれ利用したじゃんけんに当たるアトラス独自の遊びがアルカンスだ。

ルールはじゃんけんと同じ。-ㄗ-ㄢ-ㄢ という掛け声とともに手を出す。-ㄗ で一拍、ㄗ-ㄢ で一拍、-ㄢ で一拍。「じゃん・けん・ぽん」の掛け声と同じだ。

ただ、手の出し方は違う。手を下にして前に突き出す。スレアの手は手を上にひっくり返して向ける。

ブレアの手は出した手を丸めて作る。トレアの手は出した手を下に下げて作る。スレアはブレアに勝ち、ブレアはトレアに勝ち、トレアはブレアに勝つ。上から下にかけて勝っていて、一番下が一番上に勝つ。人間の持つ上下の空間能力を利用した認識しやすいゲームだ。

アルカンスでアルカンスをしようということになり、ラヴァス終焉の地で勝負した。アル・カンス・アントの掛け声とともに勝ったのはレインだった。自分が一番敬虔深いからだと威張っていたのが可愛らしかった。

アルカンスで1泊してから今度は2日かけてサヴィア大陸に行き、その中のルティア国へ行った。ここはアシェットのリディアの故郷だそうで、魔法の国として有名らしかった。

アトラスで有名な大国はアルバザード、ルティア、メティオの3国だ。ルティアもミロク革命の波を受け、アルティス化されていた。都市はやはり円形都市で、カルテを中心とした宗教都市だった。

ルティアは風が異様に強い時期があるそうで、悪魔サティが襲ってくると人々は信じているそうだ。

中央ルティアで降り、電車を使い、ルティア家が住んでいたと言われる城や城跡などを見学した。

ルティア城内の古びた館を通ったとき、この館は改築されたものだと説明を受けた。なんとルティア国のお姫様のリディアが時の女王リーザと喧嘩して、アステル神を召喚したせいで、館が壊れてしまったとのこと。とても信じがたい話だ。

また、ルティアは特に召喚が優位な国だったようで、召喚士が大きな権力を持っていたという。神との繋がりのでかい国で、神を模した偶像が至る所に置いてあった。リディア

が歴史上最強の召喚士であったことも頷ける。

リディアは神々から愛され、エルトもサールも召喚できるたった一人の召喚士ユティアとして君臨した。また、魔法にも長け、その能力は悪魔ヴァルテに匹敵するのではといわれたほどだった。まさに第一使徒の名に恥じない能力を持った、歴史の中心人物である。

中央ルティアの美術館には神々を描いた絵が多数所蔵されていた。面白いことに、ここでもランスケルン美術館と同じく、どれも写実主義や新古典主義のような描き方で描かれていた。

人々は滅多に会えなくてありがたくて、そして決して架空ではない神にあこがれ、その姿をできるだけ忠実に写し取ろうとしたのだ。そこで重視されたのは光の陰影や色彩ではなく、できるだけ緻密な神々の描写だった。

神が神話上の架空の存在ではない彼らにとって、これらの絵は新古典主義ではなく、ロマン主義でもなく、単なる純粋な写実主義だったのだろう。

ルティアにはリディア像が置かれていたが、その子供のような小柄さに驚かされた。ドラクロワの民衆を導く自由の女神のような女性を想像していたからだ。

絵も像と同じだった。リディアの肖像画は幼い子供、せいぜい日本の中学生くらいの容姿で描かれていた。それがとても意外だった。

リディアの肖像画は夫が描いたものだそうだ。彼女は魔法写真を嫌い、自分の顔を絵に残させた。ところが恥ずかしがりだったらしく、愛する夫にしか描かせなかったそうだ。

ルティアの料理はアルバザードのものとは違った。何日も滞在して庶民の味を堪能しないことには詳しく分からないものの、少なくともアルバザードと違うということは分かった。

ホテルでは北東の海で取れたという鮭を中心とした料理が振舞われた。燻製、ムニエル、果ては刺身まで。鮭尽くしだ。鮭の刺身は日本の回転寿司でお馴染みなくらいありふれたものだが、鮮度がまるで違った。寿司は油がよく乗っていた。

ルティアに行くまで、私はすっかりアルカに慣れたと自信を持っていた。アルカは世界中で使われるのだから、もうこれでどこへでも行けると思っていた。

ところがルティアに行った瞬間、私は彼らの話す言葉に付いていけず、愕然としてしま

った。レインたちは学識があるので喋れていたが、私はみじめにアルバザード語を喋っていた。ルティア人はアルバザード語で押し通そうとする私を行儀が悪いと思ってか、あまり歓迎してくれなかった。

畢竟、私は押し黙り、言葉が少なくなった。レインは食事の席で私の体調を心配してきたが、私はしじみをカチカチと手で挟みながら、「私は貝になりたいの」と静かに答えた。

だが、それでも私は諦めずにルティア語を勉強した。その結果、しょせんルティア語がアルカの方言でしかないことに気付いた。

オランダ語を一生懸命勉強したら実は英語がスタンダードだったという事実で落胆した一万円の人を思い出した。学問をすすめた彼は、英語をやってみて案外オランダ語と似ていることに驚いて、ほっとしたそう。まるで今の私のように。

ルティアに4日ほど滞在した後は2日かけてメティオへ飛んだ。ここは少し南国寄りで、暖かかった。早くも夏という感じだ。アシェットのソーンのルシーラを務めたクミールの故郷だそう。

やはりここもアルティス化されており、円形都市になっていた。アルティスは北方より南方から先に広まったため、ここには敬虔深い信者が多い。歴史が違うのだ。

アルバザード以上にルフィやらラーサやらを着ている人間が多い。というか、アルティス教の服以外を着ているとあつという間に浮いてしまうほどだ。

中央メティオで降り、クミールの居城へ向かった。遺跡にはクミールの像があった。ソーンのルシーラを務めた彼女は平生は病弱だったが、戦闘時に覚醒すると驚異的な強さを誇り、双の鎌を軽々と振り回したという。

クミールの想像はもっと巨躯の女だったのだが、それは鎌を持つにはあまりに細い腕だった。また、美人で儂く痩せていて、とても戦士だったとは思えない体をしていた。特に魔法が得意だったとも聞かないため、彼女の強さの秘密が何だったのか、詳しくアティーリを読み返したい欲求に駆られた。

観光を終えると料理になった。メティオの料理は比較的辛い。そして美味しい。香辛料が利いている。たちどころに汗をかいてしまった。

メティオは3国の中で最も米の消費が多く、米を常食としている世帯もあるらしい。米を食べる上に辛い料理なので、インドやら韓国やらを思い出す。

翌日はアリディアというメティオ内に存在する小さな国に行った。イタリアに対するバチカンのような位置関係だ。ここは英雄ソーンを暗殺した少女リディアの功績を称えてアルシェの残党が立てた国だ。

ここにはアルシェとソーンの抗争に関する遺跡と資料がたくさん残されていた。そのほとんどは当時というより、後世になって集められたもののようだ。

メティオに 3 日滞在した後はアルバザードに戻り、サプリの村というところへ行った。ここはリディアの生家があったそうだが、アルディアの時代に焼失してしまったので、跡地しか残っていない。

アシェットのルシーラのセレンが始めに住んでいたのもこの村だ。身寄りのない当時 10 歳のセレンは、養父母を失った当時 7 歳のリディアと二人暮らしをしていたそうだ。

セレンは神話上、異世界の人間だったそうだ。それに対してはアルティス教徒の意見は賛否両論らしい。

そう聞いて私はレインとアルシェの顔を交互に見た。

……まさか、ねえ……？

しかし 2 人は訳知り顔で苦笑するだけだった。

サプリで 1 泊した後、私たちはアシェルフィに向かった。サプリよりアルナ寄りの街だ。アルナのお膝元ともいえる。原義は「月が泉に映る街」だという。

アシェルフィではアシェットが暮らしていたという。一部のランティスが通った学校や、使徒メルが通った幼稚園などが遺跡として残っていた。

また、アシェットのアルシェ側が暮らしていた家や、ソーン側が下宿していたクミールの家も遺跡として残っていた。クミールの家は豪邸だったが、もうすっかり観光地になっていた。アルシェの家も同様だ。

アルシェの家からソーンの家は北西に進めばすぐだが、そこには深い森があり、行く手を遮っている。そこでアルシェの家から出て西に林道を進んで中央の噴水へ行き、そこから北上してカンタルの街に入ってクミールの家に行くという手法を取っていたそうだ。驚いたことにその道は未だに現存していた。

噴水から南西に進むとそこにはセレンらが通った学校があった。歴史的に非常に価値のあるものだ。私たちは彼らが 300 年以上前に通った道を同じように登校してみて、一体感

を感じ、言い知れぬ喜びに包まれた。

アシェルフィでは2泊した。始めはソーンの家泊まり、次にアルシェの家泊まった。非常に光栄なことだと感じている自分がいるのに気付いた。

私が選んだ部屋はリディアの部屋だった。レインと一緒に寝た。入って左手にベッドがあった。2人で寝れる大きさだ。

その後アルナへ帰り、カルテに行った。そもそもアルナのカルテにはかつてアルバ家の城が建っていた。そしてその周りはアルナの城下町だった。その上空にかつて無限空アルテージュが生まれた。

アルディアの時代になるとチームスの封印が解け、空からアデルと呼ばれるモンスターたちが降ってきた。

当時のアルシェはソーンと共闘し、アシェットを作り、アルテージュを通してチームスの元へ行き、これを倒したという。

見上げると、空にテージュと同じくぼんやり霞んでいるところが見える。

あれがそうなのか……。

その後、一旦アルナの家へ帰った。一休みしてから、今度はアルナの街区をそれぞれ案内してもらった。

東西南北の街区すべてに行ってみたが、全部の道を行ってはいないから、名所と呼ばれるところだけを見て回った。一人でカルテと商業区の一部を覗いていただけの私にとっては気付かないことだらけだった。

こうしてアルバザード、いやアトラス周遊は終わった。紫苑の書は思い出でいっぱいになった。

3人でアルナの家居間にいた。レインのアンセで報道を見ている。今日がハインさんのアルタレス就任だ。儀が執り行われるという。

歴史の裏で暗躍した私たちは表舞台に立つことなく、多くの国民と同じ手法でこの報道を見ていた。ドゥルガさんは儀式に出席しているので、ここにはいない。

儀式が昼過ぎに始まった。北区にあるアルバ家の新王宮で儀式は執り行われた。宮殿の前には絨毯が敷かれ、その上を男性と若い女性が歩くのが見える。

男のほうがアルバ王だそう。そして女のほうの時のアステル、アルテナだという。この人が……。話には何度も出てきたけど、見るのは初めて。なんとなく感動。そうか、私たち、この人を守ったんだ。今更実感が湧いてきた。

アルテナはまだ 27 歳ほどだという。若い。実質的な最高権力者にしてはあまりに若い。しかも彼女はあのルーキーテを撃ったフェンゼルが恐れた人物だという。

ただ、アルテナがこれまでに魔法を使った記録はないそう。同様にフェンゼルも。だから国民は魔法と言われてもピンと来ないらしい。それどころかその能力を疑う者さえいるようだ。

だが、数々の遺跡が魔法の存在を肯定するため、魔法そのものの存在を心底疑う者はほとんどいないそう。まったく、凄い世界だ。

若きアルテナはそれは美しかった。白人の血が強いのか、肌は白い。髪は茶色で目も茶色だ。鼻が高く細くて顔が日本人より長い。背が高く細身。顔は驚くほど美しく、思わず目を見張ってしまった。

権力者でこんな女優みたいに綺麗なんて不公平だと思ったら、なんと本物の女優なのだろう。アルバザードというのは面白い国で、最高権力者がふつうに女優を兼任しているのだ。しかも彼女は女優としてもアイドル並みに人気があるらしい。

ハインさんはナーシャをして跪き、アルテナに魔杖ヴァルデを献上した。遠くから見ている群衆のざわめきがマイクに入ってくるが、すぐに静まった。

アルテナはヴァルデを受け取る。

ⒺⒻⒼⒽ, h-cΛ -lℓee>J le V-Jℓ-ℓ <eΛZel -lJ--l, l- ℓel-ΛⒺ

そう言うと、アルテナは恭しくルーフをしてアルバ王の前に跪き、同じようにヴァルデ

を献上した。

だが、ヴァルデの神への返還は当然召喚省の役目。これは形だけだ。

アルバ王は事前の段取りどおりアルテナを制した。

Ⓔc eC l- < -l CaaI, -JCeM -MceA-,, 4-A -A lel l-cZ -Me- VceM h-cA -lCee>J e> -Ml-leJ J->Ⓔ

ハインさんは凛々しく Ⓔ- VbMcrⒺ と答えた。群集から歓声が起こった。

やっと終わった。長かった……。

レインを救い、フェンゼルを倒し、ハインさんをアルタレスにし、アルテナを守り、アルバザードの政治を守り、ひいてはアトラスを守った。

儀式もやがて終わり、私たちは、ふうとため息をついた。レインがアンセを消す。安堵というか疲労というか、なんだか色んなものが交じり合った複雑な気持ちだ。日本語でもアルカでも表わせまい。

私の役目は恐らくもう終わったんだと思う。メルティアはこの先私をどうするつもりなのだろう。地球に返すのかこのまま放置するのか、どちらにせよ一長一短だ。

レインは気を利かせてそのことをアルシェに相談したそう。レインは私にアトラスに残ってほしいらしい。アルシェがハインさんに相談すると、彼は歓迎だったそう。ドゥルガさんも早速私のことを養女にするといって張り切っているらしい。

ただ、一生地球に帰らないのも親が心配だ。そして……何をどう言おうと私はやはり異世界の人間だ。ここで生きて死ぬるものなのだろうか。

その後、私はレインと図書館に行った。

魔法の本を読み漁る。レインはいつものように日向に出て好きな本を読んでいる。この時間がレインには至福の時らしい。

ヴァルデを使えた以上、自分が魔導師だということは分かった。でもどうすればヴァルデ無しでもフェンゼルやハインさんのように魔法が撃てるのだろうか。

調べたところによると、魔法の素質は先天的なものらしい。簡単にいうと、瓶の大きさが人によって違うらしい。一滴も水が入らない瓶や一口分しか入らない瓶もあれば、タンクのような瓶や底なしかと思うほどの瓶があるらしい。

ただそれは瓶の容積の問題で、実際に水、つまり魔力を入れないと意味がないそう。そりゃそうだ、いくら大きな水筒でも水が入ってなきゃ何も飲めない。

瓶に入っている水の量も生まれた時点で異なるそう。一般に瓶の大きさに比例するそうだが、生まれたとき全然水が入っていないのに思春期ごろに爆発的に増える人間もいるという。また、何かのきっかけで水がたくさん入る人間もいるという。

基本的に魔力は筋肉と同じで、使うほど疲労するが、休息後に超回復するものだという。そして逆も然り。怠けると萎える。つまり、一流の魔導師は常に修行を怠らないわけで、勉強して習得した外国語などと同じようなものだ。

魔力を鍛えるには魔法を使うほかに、神に祈る、呪文を唱えるなどがあるそう。呪文の効果はルーキーで検証済みだ。そこで私は最近図書館に入り浸って効果的な呪文の作成に熱中している。

魔法の本に載っているやり方で何度か魔法を試してみた。が、出ない。当たり前といえば当たり前なのだが、やはりヴァルデで増幅しないと魔法を使うまではいかないのか。

レインはそんな私を見てにこりとした。はじめレインは私が魔法を使おうとすると怖がって机の下に隠れた。猫みたいで可愛いなと思った。が、余りに出ないので最近ではすっかり笑いの対象だ。

おかしいなあ。見舞いに来てくれたとき、ハインさん、自分がヴァルデを使ってもあそこまで使いこなせなかったはずだって言ってくれたのに。アルバザード人は人の良いところを素直に褒めるけど、その反面リップサービスはしないっていうから、ただのお世辞っことはなさそうなんだけどな。呪文が違うのかな？

私はひたすら呪文を唱えては魔法を使おうとした。でも、ちっとも光は出やしない。そんな平和な昼下がりだった。

家に帰って紫苑の書を書いていたら、レインが慌てて部屋のドアを叩いた。どうしたのかとドアを開けると、アンセを開いたまま左腕を突き出してきた。そこにはハインさんの映像付のメッセージが書かれていた。

"c> <cJ, -A 3e< V-Mle - l-cZ -MleJ o l-cZ lKeJ,, JoA CccJ MeA <-7C -l -MceJ MeC"

ScA 6h3d leL-l....6

6AaA C-A A-C Jo-r Ca eC V-MC M-7C6

ScV 7-c 6leA- -7C Jcl >cM776

4aA VeLl 64-----r6

両手を一杯に広げるレイン。画像がぶれて空中を飛んでいく。

それにしても、神を召喚するから付き合ってくれって……なんてメールなの……。

“-Mue, I- Jem oA Caδ”

“h-o, I- laA- >o- -Ca”

すると後ろからアルシェがひょこっと顔を出してきた。

“JooAo, LooA”

“JooAo, Aoc C'-M'-leJ

“-A eC -Muef” と笑うアルシェ。

召喚は夜8時に行われるというので私たちはそれまで遊びに出ることにした。

……誰も言わなかったが、これが別れになるかもしれないと皆感じていた。

アリアも交えてカルザスマールで遊んだ後、私たちは気になってフェンゼルが破壊した道に行ってみた。そこは華やかに飾られており、慰霊碑が置かれていた。

事件当日、アリアは占いで不吉な相に気付き、ティクノ通りにいる人たちを避難させようと奔走したらしい。ところが時既に遅しで、間に合わなかったそうだ。アリアは占い師としての自分の能力が未熟だったと言って、慰霊碑に涙を零していた。

私は知っている。世の中には彼女より有能な占い師がいることを。だが私は知っている。アリアが人の痛みの分かる優しい占い師だということを。

その後、一旦家に戻って食事を取った。

アルシェは私に新しいラーサとルフィを新調してプレゼントしてくれた。多分、これが最後の晩餐だというのが分かっているのだ。

レインは泣きそうな顔をしながら私に手編みのマフラーをくれた。ここ一月編んでいたようだ。まだ寒いのでありがたい。

アリアは占いに使うカードを一組くれた。タロットカードのようなものだ。イネアート家御用達の、魔力の籠った超一級品だそうだ。

“JeaC-Ac, -lc-, >....LcA) AoA Ccl ue leL A-A o)C <-I - C4a,, AoA L-M C4a A- Ac) - Ca, CeC
AoA laA-C -Ca c <c- -IC CcJJe”

するとアリアは口の端をかすかに上げた。

“-c, C4a <coAc) Ca c A-A e”

“eθ....δ Ca eJ....”

ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ

私は一瞬呆けた後、思わず笑ってしまった。

まったく、かなわないな、アリアには。

私は皆のプレゼントに感謝したが、お金のない私は何も返すことができない。みんなはそれでいいと言ってくれたが、それでは私の気がすまない。

考えこんだ結果、紫苑の書をあげることにした。ここにはレインと過ごした思い出が詰まっている。品物ではなく、思い出だ。これを代表としてレインに受け取ってほしいと願い出た。

ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ

レインは紫苑の書が自分たちにとってどれだけ重要か知っていた。紫苑の書は写真のないアルバムだ。それだけに、彼女は喜んでくれたようだった。

ささやかなパーティの後、私たちは荷物の整理をし、礼服に着替えてからカルテへ向かった。すっかり召喚は北区にある召喚省で行うものだと思っていたら、カルテということで意外だった。カルテは召喚省の名の下に一時貸切となった。

アリアとは駅のところでお別れをした。泣くまいと思っていたけど、やっぱり無理だった。アリアに抱きついて、彼女の白い綺麗な法衣を涙で濡らしてしまった。

ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ, ᄒᄒᄒᄒᄒ, ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ

彼女は私の肩をぽんぽんと叩くと、占い師に似つかわしい不思議な微笑えみを浮かべて地下鉄のホームに去っていった。

カルテンの入り口でハインさんとドゥルガさんに会う。カルテに入ると、新しいアルタレスはテーベの中からヴァルデを取り出した。

そりゃそうよね、持って歩いたら目立ちすぎるわ。

そのままカルテンの中に入る。5人だと少し狭い。

ハインさんが祈りを唱える。呪文だ。神を召喚しているらしい。ヴァルデが赤く光る。来る……。私は直感した。すると石段サリュの上に白い光が現れた。

ᄒᄒᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ

ぼそっと呟くレイン。私は光を見つめながらも"ᄒᄒᄒ ᄒᄒ ᄒᄒᄒ - ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ"が正しいのではないかと思い、そして次の瞬間には ᄒᄒᄒ が格詞になっているので良いのだと気付い

光が止むと、そこに男女が立っていた。凛々しい顔立ちの若い男性と美しい若い女性だ。これがアルデス神とルフェル神、サールの王とエルトの女王か。

ルフェルは白人の色が強いようで、ふわふわの金髪で白い肌、青い目をしていた。白い
 テーベとの調和が美しい。透き通る女神のようだ。いや、そうなのだ、実際彼女は女神な
 のだ。

$$h\text{-c}\Lambda^{\otimes 6-\ell}, \ell\text{-c}Z_6$$

そして一人ひとりを見る女王ルフェル。

$$h-c\Lambda^6\Lambda-Ve\rangle, l-cZ_6$$
$$-\mu_{\text{e}} \otimes -\mathbb{L}, \mathbb{L} - \text{cZ}_{\mathbb{G}}$$

lecA⁶-L, l-cZ, >cJ_eΛC-ΛC₆

$$l_{22}\mu\gamma - \epsilon \Lambda - V_e\rangle, l - cZ\epsilon$$

-μ_{leJ}⁶⁴-, le -C Jcc⁴²⁶

269

皆震えて声が掠れる。中でも私は声が出なかった。意外と自分は臆病だと知った。もしアルカの不手際で失礼なことを言ったらどうなるかと考えただけでも恐ろしい。まして相手は神だ。失礼云々以前に、恐れ多すぎる。

-μleJ ⑥Oec, fccJ leA A- AaJ,, -A uoJ μcJ >eJ- AaJ⑥

アルデス王は笑う。随分と豪胆な人物だ。そしてアルバザード人の凄いところはそれを真に受けてちゃんと適度に緊張を解くところだ。自分には真似しがたい。

ハインさんはヴァルデをアルデス王に渡す。アルデス王は礼を言って受け取る。

神が人間に礼を言うのか……。

人類の祖先が神と同じと考えると、神はそう遠くない存在なのかもしれない。

⑥-AJ lel l-cZ e J-μC l-l fccJ lel eμA e Ya>- l-l -μCcJc >cJ-⑥

⑥Caμ, leA- JcJc -μCc,, JooV-, JolUe JecA⑥

そう言い残すと神々は光の中に去っていった。

彼らが去ると、代わりに光の中から1人の男が出てきた。

美しい姿をしている。中性的で性別が分からない。だが私にはハッキリと見覚えがある。

私をアトラスに連れてきたあの金髪、悪魔メルティアだ。

⑥Ya....lee> >elCc-⑥

⑥<cc>-, >-A- C'-lCc-⑥

⑥leA Jol Ya >elJ-c AaA -l -CcJ-J JecA⑥

⑥Y-, Cc eJ -lJ CcA)- -l -μJ- Cμ⑥

⑥JcJc l-A- Cδ⑥

⑥Cc Jμ,, l-A- JolJ Cc V-Aa -CcJ-J⑥

⑥<ceA Ya eC lee>δ <J> JcJc V-JCμC- Cea V-J l'-UeC YcJ-c l-A- V-JC lee>δ⑥

⑥Y-, >-A -A V-Aa l-< leJ-c⑥

⑥h--A, -c, AaA -lA-J a A-JcJc JcJc Ca-A⑥

⑥h-c....⑥

メルティアはそこで言葉を止めた。

私は無言で頷く。レインとアルシェの表情が暗くなる。

⑥AaA <-JcJc A-A aA le Vec> JecA,, Jol -CcJ-J eA lCμ >cYa AaA c> Caμ JecA⑥

⁶ᐅᑕᓴᓂ,, -ᐱ ᓄᑕᐱ- ᐱᓚᑦ ᐱ-ᓄᐱ ᑖᑕ, ᐅᑕᓚᐱᓐ

するとメルティアは光を放った。

赤い光だ。そう、一番最初に見た光。あれは魔力のヴィルの光だったのだ。

そして次の瞬間、私は眩しい白い光に包まれていた。

レインが咄嗟に手を伸ばす。アルシェはレインを抱きとめて離さない。

$-\mu_e \otimes_{\mathbb{C}[\Lambda]} -\Lambda \vee -\mathbb{C} \vee -\Lambda \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{C}$

lecA 6LccAr lccV- - >elJel 7eJr6

レインの手が離れる。白くて柔らかくて暖かくて小さな……頼りない手だった。私がい
ないとどうにかなってしまいそうなほど。

そしてまた闇が訪れた。闇の中を魂だけがさまよい、光に向かう。

光のドアをくぐると……私は目を開けた。

そこは自宅の自室だった。

私は机の椅子に座っていた。ドアのほうを向いている。

振り返るとカーテンの開けられた窓がある。

夜だ……。

いや、これはアルバザードの夜ではなく、あの連れていかれたときの夜なのではないか？

とっさに時計を見る。変な文字が書いてある。……いや、何も変ではない。ただのアラビア数字だ。

8時過ぎか。確か私が連れてこられたのはこのくらいだったような……。

あのとき確か私は下で牛乳を飲んで……日記を……紫苑の書を書いて……泣いて……。夢なはず……ない。だって口の中は牛乳の味がしない。さっきレインの家で食べたアルバザードの料理の味しかない。

私は制服を着ていた。さっきはルフィとラーサを着ていたのに……。

紫苑の書は……ない。探したが、どこにもない。

机の上にはケータイが置いてある。開いて日時をしてみる。間違いない、11月30日の夜だ。メルティアの言葉どおり、あのときのままだ。何一つ変わっていない。

ただ、変わったといえば私の体だ。一度も散髪をしなかったので髪が少し伸びている。若干年も取っているはずだ。小学生の体ではないからもう気付きはしないが。

親は髪が伸びたことに気付くだろうか。もともと長かったから、気付かないかもしれない。

第一、突っ込まれたところで「前からこうよ」と言えば親はそれ以上突っ込みはしまい。髪が急に伸びるはずがないのだから。異世界に行っていたなんて嫌疑をかけられることはありえない。

突然ケータイが鳴った。びっくりした。こんな音だったっけ。操作に一瞬戸惑う。母親からのメールだった。

「ごめん、今日は紫苑の誕生日だったね。できるだけ早く帰るからお祝いしようね」

不思議なもので、日本語はすぐに思い出せた。いや、思い出すというより空気を吸うような当たり前の感覚だった。

一階に下りる。家に鍵をかけて外に出る。空気がアルバザードと違う。排気が多い。星が少ない。車が怖い。

気をつけて歩く。この国は夜、外に出ても良い。駅まで歩いてみる。すべてが久しぶりに見える。当たり前だ。でも、この世界の人間にとって私は少しも久しぶりな存在ではない。

駅をぐるっとするとまた歩いて帰った。コンビニに寄って久々に自分で何か買おうと思ったが、鞆がないので財布がない。

そうか、ここじゃアンセもないんだっけ。お財布を持って歩かなきゃいけないなんて怖いわ……。

ふうとため息をついて家に入る。久々の故郷だった。

家に帰ると、部屋へ戻った。

「お祝い」ねえ……もうお腹いっぱいなんだけどな。

さて、また明日から学校か……。これからの人生どうしよう。もう異世界旅行は叶っちゃったし、今までの人生目標を塗り替えないと。

思えば、これまでの私は異世界に逃げることにばかり考えていた気がする。行ってみて思ったけど、やはり異世界は大変だった。あそこでの苦労を思えば、地球でもどうにか頑張っていける気がする。

異世界に逃げるのはもう止めよう。私の世界はやっぱりここだから。

「私も友達くらい作らなきゃな。異世界の学校でアリアとだって友達になれたんだから、日本人の友達くらいすぐできるわ。それに、受験も頑張らないと」

うーんと伸びをする。

「それと、恋愛も頑張っちゃおうかな……？」

ふと松本君のことを思い出す。

そういえば、私のこと好きだって言ってくれたのよね。もうずいぶん古い記憶だけど、向こうにしてみれば今日振られたばかりなのよね。

「けど私はやっぱり……」

私の頭の中にはアルシェが浮かんでいた。

「アルシェは……私のことどう思ってるのかな」

やっぱりレインみたいに妹なのかな。ちょっと悔しい……と正直に認めよう。

私は多分……彼のことが好き。8つ上だけど全然平気。そんなの好きになったら関係ない。

でも、異世界じゃねえ……遠距離恋愛すぎるわ。彼にも可哀想だしね。やっぱり彼にはレインみたいな子のほうが合ってるのかな。

遠距離……そう、あまりに遠距離すぎる。なにせ地球と異世界だ。舞姫のような日本とドイツという気軽な距離ではない。よしんば結ばれたとて、いつしか私はエリスのように捨てられてしまうかもしれない。

だけど、今のこの気持ちに嘘はないと思う。彼のことを思い出すと胸がドキドキする。

——よし決めた！もし来年アトラスに行ってみて彼がレインと付き合っていなかったら、アルシェに好きだと告白しよう。遠距離でもかまわない。この恋が続く限り。

決意すると、今日のことを紫苑の書に書こうとする。

——あ、そうだ。レインにあげちゃったんだ。

いいや、明日またあの店に行って、同じ本を買おう。そしたらレインと少しでも繋がってられる気がするから。

⑥lcoV-, lecΛ....-Mue....- >elJel....r⑥

私はレインからもらった髪ゴムを解いて、机の中に閉まった。

手を離すと、髪は指を通して砂のように流れ、黒い滝を作った。

——終

あとがき

本書は2006年に書かれた『紫苑の書』を大幅に改訂したものです。物語の大筋は同じですが、3年間の読者の反応を踏まえて様々な点が変更されました。

ネット小説というのはありがたいもので、地位やお金がなくても公開することができます。世の中には面白い小説がたくさんあると思いますが、出版社も売れないと出せないの、ある程度売れそうな本しか出せません。その影に隠れてしまった名作はきっとたくさんあると思います。

本書は迷作かもしれませんが、読者の方のアドバイスや協力を得て、旧版よりずいぶん成長することができたと思います。

苦行にも近い旧版を、辞書もろくに整っていない時代に解説した Kakis さん。ここからすべてが始まりました。彼が解説をしたおかげで、アルカを読めない読者も理解することができるようになりました。ただそれよりも、ハードユーザーがいるという事実が他のユーザーを惹きつけたということのほうが大きいかもしれません。

その後、旧版を7回も読んだ nias さんが出てきて、主にイラスト関係で協力をしてくれるようになりました。新版の表紙や口絵のイラストも彼によるものです。本書がぐっと本物のラノベに近くなったのは、ひとえに氏の力があったからです。

今回の改訂は魚楠さんによって発案されました。はじめてのアルカだけでは物足りない、アルカの登竜門は紫苑の書だと。それを受けて私は内容を見直すことにし、よりアルカのチュートリアル小説としてふさわしいものにしようと考え、大幅な改訂を決定しました。

また、氏には改訂初期の段階で原稿を見ていただき、仔細にわたるコメントとアドバイスをいただきました。

旧来の仲であるリディア嬢とメル嬢からも引き続きアドバイスと活力をいただきました。

旧版は続編がありましたが、新版はこれ一冊で閉じた世界にしました。『紫苑の書』はこれだけがいいと思います。

末筆ながら、最後まで読んでくださった読者の皆様にも感謝いたします。

セレン＝アルバザード

冒頭について

異世界小説なのに異世界に行くまでに時間がかかるので、どうにか冒頭に掴みを入れようと思いました。そこでレインとの出会いのシーンを最初に入れることにしました。

ところが、そうすると最初が戦闘シーンになってしまいます。しかも主人公の紫苑自身が状況を把握していない戦闘です。これをそのまま書くと「いきなり感」が強すぎ、読者にとって違和感が大きいのが難点です。

そこでクッションとしてメルティアの視点を入れました。彼はキーパーソンなのに出番が少ないので、ちょうどいいと思います。

冒頭は印象的にするためにあえて詩的にしていますが、アルバザード史における本書の位置付けに関するメッセージも含んでいます。

「朔夜の月」には2つの意味があります。紫苑が召喚された日が偶然にも朔であること。そして朔の夜に月は見えないこと。

「朔夜の月」という表現は矛盾的で、「朔の夜に現れた存在しえないもの」＝「異世界人の紫苑」を指します。

また、「魔導書」は「紫苑の書」を意味します。これも同様に空想ですね。これらと並行していることを根拠に、最後の「少女」が空想であることを導きます。

初月紫苑は空想の存在ですが、それを冒頭に入れたのはこの話がアルバザードの正史ではないという断りを散文的に行うためです。歴史の作り手であるリディア嬢の許可なくこちらでフェンゼルの征伐者を決められないためです。

さて、メルティアは2人の人間を召喚したと言っています。これは紫苑とレインではありません。レインはアルバザード人ですからね。

黒髪の乙女が紫苑であるのは明らかとして、実は後者は読者を示します。メルティアは一時的に語り部になってもらったというわけです。ここが分かりにくいので、説明を入れました。

ちなみに、初月家以外の日本人名はすべてセレンの好む言語学者です。気付いた方はおられましたでしょうか。